
異界の旅路

Posuto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界の旅路

【コード】

N0872F

【作者名】

Posuto

【あらすじ】

身気術と大気術という魔法によって戦う世界。違う世界から来た少年と、違う世界の少女の旅と戦いの記録。

登場人物などなど

登場人物紹介

・ユウ キリシマ

僕。普通の男子高校生。特技趣味なし。15歳。

(第5話以降)

17歳。ガウスの弟子。アルベイン流戦闘術を使うファイター氣闘士。いつのまにか、すっかり師匠のエロさが伝染しているが、自覚がない。

(第33話以降)

『イヴの眷属』と呼ばれる、異世界からの刺客。

・セラ

龍族の女の子。人型時は、銀髪碧眼の美人さん。

背が僕と同じくらいで、髪が腰辺りまでである。

男言葉を使うクールな人。怪力。すぐ僕を殴ります。エロい話が苦手。

趣味は日記を書くこと。

(第12話以降)

龍族と人のハーフ。15歳。最近クールさが減少中。

本名、セラ S・D・ライノス

(第40話以降)

銀龍宗家ライノス家の姫。

・ガウス ランドール

僕を拾ってくれたおっさん。白髪混じりの黒髪を後ろで束ねている。

べらぼうに強い。そしてエロい。

(第5話以降)

現在、行方不明。

(第24話以降)

ガウス ランドールは偽名。前大戦の英雄。現在、共和国に出張中。

(第33話以降)

本名、竜宮凶一郎^{たつみやきよついちろう}。大戦時の異名は『技喰らい』。

・チコ ラクロック

ドワーフ族の女の子。20歳だが、見た目は小学生ぐらい。実際、精神年齢も小学生並。

茶色い髪のおかっぱと、いつも作業着を着ているのが特徴。優秀な魔法技師^{クリエーター}。

魔道具マニアで、たまに暴走する。鬼族フリーク。

・アルフレッド クロストラフ

人間の男。18歳。ヘタレ系イケメン^{キャラクター}詠唱師。治癒系の大気術を得意とするが、ここぞという時にビビる、ヘタレ。

そのため、カスロア騎士団入団試験に三回も落ちている。実家は飛空挺貿易を生業とする金持ち。現在、ニート。

通称、雑用アル。僕たちの金づる。

二重詠唱^{シンキャスト}と呼ばれる高等技術を使いこなす。

・ルーリア ハルギート

人間の女の子。17歳。帝国騎士の名門ハルギート家、長女。金髪縦ロール。碧い瞳と気の強そうな目元がセラによく似ている。

斧槍^{ハルバード}を扱う高機動空戦騎士^{エリアルナイト}。

(第33話以降)

セラとは従姉妹同士という関係。元帝国騎士団空挺連隊『大鷹隊^{イーグル}』副隊長。

亡霊騎士団所属。

・ユウラ

セラが働く、酒場『ニニギ亭』の店長。黒髪のお姉さん。とてもがめつい。とても怖い。

(23話以降)

本名、虎島優羅^{ヒシメ}。ヤマト出身。ヤマトの守護四神武家の一つ、虎島家、息女。『神殺拳』の異名を持つ。

現在は亡霊騎士団の連絡員。

・ミリス F・D・ガイエン

セラの元世話係。炎龍の女性。セラの龍式拳殺術の師であるジヨフの娘。

人型時は赤毛にいつもメイド服。冷静沈着。父親嫌い。

・コウ シュラー

砂狼族^{サンドウルフス}の男性。筋肉質で大柄な体。性格は大雑把。ザガルバフの首領^{ドン}の息子。

・ノーラ ローラン

白い翼を持つ有翼人^{エンジェル}の女性。空中戦を得意とする空戦詠唱師^{ダイブキャスター}。性格はいたってのんき。超絶ナイスボディをもつ。おっぱい女王。

・いや、神だ!!

恋バナ大好き。前大戦では『空の女王』と呼ばれ、恐れられていた

・イヴ

僕の夢に出てきた、白い少女。正体不明。神様っぽいもの。自称、管理者。

・竜宮天次郎^{たつみや てんじろう}

現ラファエロ機関、機関長。前大戦を引き起こした張本人。『悟

り』の天次郎。

竜宮凶一郎の双子の弟。

・ローグ

本名、ローグ S・D・ハインル。銀龍の分家、ハインル家所属。
銀龍の中でも屈指の力を持つ。

・デュラハン ノルドラ

『五連魔剣』を扱う、帝国騎士団特務戦術部『ハウンド獵犬隊』隊長。

・セリア ランドグリフ

セラの母。現在、行方不明。

~~~~~

設定資料的な何か

・エーテル

人間の体内や動植物、大気中にも存在している力の流れ。魔力のようなもの。これを操作することで、魔法が使用できる。

濃度が高くなると、視覚でとらえることが可能。薄い緑色をしている。

この世界の上空には、レイラインと呼ばれる、特にエーテルの濃度が高い所があり、薄緑色の川のように見える。

・アーツ身氣術

主に体内エーテルを操作することで使用できる魔法。身氣術を使う者をファイター氣闘士と呼ぶ。

・大氣術スベル

キャストスタッフ

詠唱杖を使用することで、体内エーテルを術式に変換し、大気エーテルに作用することで発動する魔法。大氣術を使う者を詠唱師キャストと呼ぶ。

・フェイタル語

大陸公用語。英語に非常によく似た言語。

・ヤマト語

東方の島国、ヤマトにおいて使用される言語。ほぼ日本語と同じ。

・亡靈騎士団ファントムナイツ

前大戦時に戦争終結を目的として創設された組織。共和国、帝国、その他さまざまの国の人間によって成る。

記録上では戦死したと思われる人々によって創設されたため、亡靈騎士団の名がついた。

・龍族

きわめて排他的な一族で、どこに住んでいるのか分かっていない。特徴として人型と龍の姿を使い分けることが可能。エーテル共鳴声帯という独自の器官を持つ。

一説では300年前に突如この世界に現れたとされている。

・三大龍族

龍族を統治する金龍、銀龍、黒龍を指す。

・龍魔法ドラグラフ

龍族が持つエーテル共鳴声帯を用いることで、大気エーテルを大氣術のようにコントロールする龍声ドラゴンヴォイス。この龍声で歌を謡うことで一

定のパターンを作り出し、重複共鳴現象を引き起こす。そうして発動するのが龍魔法である。

その威力、効果範囲は、技の範疇とは言えず、むしろ兵器である。そのため、帝国や共和国は、この龍魔法についての研究に多くの予算をつぎ込んでいる。

## 第1話：世界を渡った日

目を覚ましてみると、視界の中には一面の緑の葉と、木漏れ日の光があった。

（えっ！？）

自分の部屋と違う景色に驚き、飛び起きた。

どうやら僕は、大きな木の下で寝ていたようだ。

僕は生粋の都会っ子なので外で居眠りなどしたことがない。

周りを見渡すと、大きな木が並んでいる。

深い森の中のようだ。

（あれえ〜〜？）

自分の家の近辺にこんな森はないはずだ。

まだ寝ぼけているのかと思ったが、雰囲気からして違つようだ。

高校の制服を着ているので、登校しようとか家を出るところまでは思い出した。

しかし、その先があいまいなのだ。

しばらくぼーっとしていたが、当然何も起きないので歩くことにした。

（アー疲れたー！）

結構歩いたつもりなのだが、森を一向に出ることができない。

「なんとかなるだろー」と楽観的に考えていた僕もさすがに危機感を感じ始めていた。

「おーい！だれかいませんかー！」

ダメもとで大声を出してみる。すると、

ガサツガサツ

という物音が近くの草むらの向こうから聞こえた。

(やった！だれがいる！)

そう思っ、急いで草むらをかき分けて向こう側に出た。

そこには白い巨大な何かがあった。

よく見ると動物だ。猪だ。バカでかい。トラックぐらいの。

「あつ・・・えつ・・・？」

あまりのショックに思考が飛び、固まってしまった。猪と目が合った。

(やばい！！！)

さっき通ってきた道を全速力で戻った。

バキツバキツ

という木をへし折るような音が後ろから聞こえてくる。

「ひいっ...」

あまりの恐さに後ろを振り向かず、走り続けた。

「はあっ・・・はあっ・・・」  
疲れてきた。

できるだけ木が密集している所を走る。

猪は、木が邪魔になるので減速する。

うまくいっ・・・

「あっ・・・」

一瞬の無重力の後、僕は地面にたたきつけられた。

(こけたっ!?)

どうやら木の根につまずいてしまったようだ。  
後ろを見る。

もう10メートル先までイノシシが来ていた。

(ああああ!)

もうだめだ・・・

次の瞬間、吹き飛ばされた。

猪が

真横に

## 第2話：おっさん登場！！

ドゴンー！

という肉を打つ音。

その音とともに、こちらに向かってきていた猪は左のほうに木をなぎ倒しつつ、吹っ飛んで行った。

そして、先ほどまでイノシシがいた地点には人が立っていた。

白髪混じりの髪を後ろでまとめた、50代ぐらいの男だ。

僕の目がおかしくなっていなければ・・・

さきほど、この男が猪に向かって飛び蹴りをかましたように見えた。

(人間技じゃないぞっ！おいっ！)

とビビっていると、男がこちらを向て声をかけてきた。

「\*\*\*\*\*?」

(え・・・英語か？何語だ?)

かなり混乱した。僕は英語が苦手だ。

かなり。とても。すっごい。

だから、何語なのかさっぱりだ。

「ありがとうございます。助けてくれて・・・」

聞き直って日本語で言ってみた。すると、

「なんだ兄ちゃん、ヤマトの出身か？」

「へっ・・・？」

言葉が理解できた。僕が超人的能力を発揮したのでは当然なく、男の人が日本語を話したのだ。

「日本語喋れるんですか!？」

驚いて聞いた。

「ニホンゴってよくわからんが、言葉わかるだろ？」

と親指をグツとたてた。

(助かったのか?)

ホッとしたような、しないような・・・

落ち着いてから自己紹介をした。

「俺は、ガウス・ランドールだ。52歳。恋人募集中だ!

君に母、姉、妹がいればぜひ紹介してくれ!」

「・・・・・・・・・・」

さっきまで自分の心の中での評価は、「頼れる男」だったが「おっさん」に改めよ・・・ていうか母までかよっ!

「ジョーダンじゃないかー。そんな顔するなよ。」

とヘラヘラ笑いながら、おっさんは言った。

僕は相当、微妙な顔をしていたようだ。

「僕は、キリシマ・ユウと言います。」

「ユウか。よろしくな。」

自己紹介を終えて、僕は自分の状況を話した。

目が覚めたら森にいたこと、記憶があいまいなことなど……

話しているうちに、おっさんの顔は真剣になり

「頭でもうった？」

と聞いてきた。

やっぱり信用されないかー

ですよー電波入ってますよー

「うそぞそ。信用するってー。」

そんなヘラヘラ顔で言われてもねー

と思ったら、急に真面目な顔をして

「君は、異界人だね。」

「イカイジン？」

聞いたことのない言葉だ。

「言葉どーりだよ。異なる世界の人。」

「ああー。異界人ね・・・はあ？」

何言ってるんだこの人。頭でも打ったか？

「なんだ、その蔑むような眼は！

じゃあ質問するけど、君はここがどこだと思っ？」

「外国のどこか・・・かなあ？」

おっさんが最初話しかけた時、外国語をはなしていたことあと、森の雰囲気から何となくそう感じた。

「じゃあ君は何で外国にいるの？」

おっさんは、次々質問してくる。

「えっと・・・拉致されたとか・・・？」

「拉致されるような身分なの？」

ぼくは、何も言い返せなくなった。

家は普通の家庭だ。金持ちじゃない。

自分でも、あり得ないことを言っているのは分かっていた。

「俺はね、君のような異界人に会うのは、初めてじゃないんだよ・

「・

おっさんは、悲しむような、懐かしむような顔をした・・・が、  
一瞬で元のへらへら顔に戻った。

「そう・・・なんですか？」  
驚いた。

「ああ！だから、君のような人を納得させる方法を知ってる。」  
何やら自慢げに胸を張って、言った。

「空を見る。」

### 第3話：身氣術と大氣術

僕は、上を見上げた。

ここは、ちょうど葉に隠されずに空が見える位置だった。

「え・・・？」

僕の世界には、無かったものがある。

空には、3種類の色があった。

青い空、白い雲、そして薄い緑の帯状の何か・・・

「すごい・・・」

それは、とても美しかった。

オーロラのように輝きながら、川のように流れているようだ。

「あれは・・・なんですか？」

目を離さずに聞いた。

「レイラインと呼ばれてる。この星のエーテルの流れだ。」

「えーてる？」

やっと目をおろし、おっさんと向き合った。

おっさんは、「どうだオレの言ったとおりだろ！へへん！」

みたいな顔をしている。なんかムカツク

「エーテルとは、力の流れ、生命の力の流れだ。大気中にもあり、

人の体の中にも存在する。これを利用することで、魔法の行使が可能となる。」

と、生徒にものを教える教師のように話した。

ところで、一つ気になる言葉があった。

「まほー？」

「おいおい・・・ここまできて信じないのかよー  
俺がビッグボア蹴り飛ばしたの見たるー」

ビッグボアってあの猪のことか・・・  
まあ普通あんなことできないしなあ

「じゃあ、もう一度見せてやろう。

魔法つてのは、大体二つに分類される。

身<sup>アーツ</sup>氣術と大氣<sup>スベル</sup>術に分けられる。

今から見せるのは、身<sup>アーツ</sup>氣術のほうだ。」

そう言うと、おっさんは少し離れた場所にあった、岩の前に立った。  
岩からは10メートルほど離れた位置だ。

あの位置からどうするんだ？

「いくぞー。」

おっさんは少し腰を落とし、左を前にして構えた。

次の瞬間、おっさんの右手が霞んだように見えた。  
と同時に

ドカンッ

という何かが爆発したような、音と振動を感じた。いつの間にか、腰の位置にあった、おっさんの右の拳が前に突き出されている。

岩のほうを見ると・・・

「ええええー！！！」

岩は、大きな穴を開けていた。

衝撃は貫通して、岩の後ろにあった大木もなぎ倒していた。

「今のは、東方の国で言うところの>発剽<というやつだ。

どうだ？すごいだろー、感心しただろー、敬つてくれてイイぜ」

後半の言葉で敬う気持ちが、いつきに少なくなったが

やはりこの人は、すごいのだと感じた。

そして、僕が違つ世界にいることを確信させた。

#### 第4話：学ぶべきこと

おっさんの家は、森の入口付近にあった。

木でできた、割としつかりした家だ。

家に入れてもらい、今後のことを話した。

少し疑問に思うことがある。

「おっさんは、なんでこんなに世話してくれるの？」

さつき話してた、前に出会った異界人の人のことが関係してる  
とか・・・？」

「おっさんって呼ぶんだ・・・まあいいけど・・・

君の言ったことは、大体あってるよ。

あいつを助けてやれなかった、罪滅ぼしてやつかな・・・」

おっさんは真面目な顔で言った。

「助けてやれなかったって・・・その人は、元の世界に帰れなかつたんですか？」

なんとかしたら帰れるのでは、と小さく考えていた僕にとって

その言葉はショックだった。

「ああ・・・こつちじゃあ、10年ほど前に大きな戦争があつてな

あいつは、それに参加して死んじゃった・・・

自分には関係のない戦争だつてのに、恩があるから、とか言つて・・・

バカな奴だったよ・・・」

おっさんは、いつもと違う悲しげな顔をしていが、すぐに元気を取り戻し、

「まあ理由は、そんなとこだ！」

これから俺が、この世界の常識と生き方をおしえてやるう！

楽しみにしておけ！！！」

と言った。

その言葉は、この世界で何も持たない僕にとって、とても頼もしい言葉だった。

こうして、僕はおっさんの世話になることになった。

4月2日（異界人1日目）

今日から日記を書くことにする。

僕は、運悪くこの世界にきたが、運よく親切な人と出会えた。明日からは、いろいろ学ばなければ。がんばろう！

4月3日（異界人2日目）

いきなり壁にぶつかった・・・

言語の壁である。僕は、英語がものすごく苦手だ！

この大陸での公用語は、フェイタル語といわれる言語だ。

これを学ばねば、生きてはいけないだろう。

仕方なく頑張る・・・

4月6日（異界人5日目）

今日のおっさんは、妙に楽しそうだ・・・キモイ

「近くにある、ホルスって村で買い物をする。」

僕の会話の練習も兼ねているそうさ。

村の人とおっさんは、顔見知りらしく自己紹介をさせられた。  
その後に、買い物として雑貨屋に寄った。

衝撃を受けた！！！！

店に立っているお姉さんには、頭に耳があった！！ネコミミだー！！

おっさんの真の目的は、お姉さんに会うことらしく  
顔が、デレデレだ。

まあ実は、僕も

(わるくないなあ〜ネコミミ)

とか思っていた。

後で聞いたことだが、この世界には、人種がかなり多いらしい。

ウエアキャットサルフォン  
猫人、人狼、ドワーフ、エルフ、ドラゴニン龍、などなど

かなりの人種がいるそうさ・・・すごい！

4月7日(異世界人6日目)

今日から、おっさんがエーテルの使い方について教えてくれるそうさ。

おっさんが、木刀二本と日本刀を持って家から出てきた。

「それ本物？」

と、僕は思わず聞いてしまった。

「当たり前だろー」

そう言つて、おっさんは刀を抜いて見せてくれた。鞘から抜かれた刃には、本物の威圧感があった。

「剣術を教えてくださいの？」

「いいや。厳密に言つと違うな。」

僕の質問に、おっさんはすぐに答えた。じゃあ何のための木刀なんだろ？

おっさんは、偉そうな態度で解説をはじめた。

「俺の修めている流派は、アルベイン流という。

アルベイン流は、剣術だけでなく、あらゆるものを使う。

刀剣、拳、脚、から始まり、水や葉などの自然のもの、

その辺に落ちている石ころすら武器とする。

生きるためになら、何でも使つて流派だ。」

説明を聞いてみると、圧倒されてしまったが、質問してみる。

「水とか石ころって、どうやって武器にするの？」

「ありえんだろー」

おっさんは、地面に落ちていた石ころを拾い、近くの木に向かって軽く投げた。

「バシッ！」

という音とともに、石は木を貫通した。

「エーテルを徹すことができれば、あらゆるものが武器になる。

まずは、エーテルを感じ取れるようになるー」

ぼくは、なんだかワクワクしてしまっていた。

それを感じ取ったおっさんは、苦笑しつつ言った。

「よし始めるか！」

訓練中は、先生と呼べ！

わかったか！？ユウ！」

「よろしくおねがいします！先生！」

なんか、体育会系のノリになってしまっていた。

4月14日（異世界人13日目）

自分の体内のエーテルを感じることができた！

おっさんは、少し驚いていたが、なんだったんだろー？

5月2日（異世界人1ヶ月目）

言葉の壁をぶちぬいたぜー！

もう大体、会話はできるようになった。

やっぱり必要に迫られる状況だと、語学がダメな僕でもできるようになるようだ。

もう、雑貨屋のネコミミお姉さんこと、ララさんとの会話も完璧だぜ

3月2日（異世界人11ヶ月目）

朝食のあと、おっさんにいきなり当て身をいれられた！

気づいた時には、森の奥に捨てられていた。

自力で帰って来い、ということらしい……

訓練の一環だそうだ……キレていいよね、キレます！！

2月2日（異世界人1年9ヶ月目）

おっさんとの組み手で、10本中2本取れるようになった。

まあ、おっさんは手を抜いてるんだが……

うれしことはうれしいな。

3月2日（異世界人1年11ヶ月目）

もうすぐ2年になるな……

## 第5話：別れと旅立ち

「ユウ！サントールの町まで行って、エロ本買って来い！」

ぼくは、朝食のパンを切っていたナイフに、一瞬でエーテルを徹し、投げた。

「ひいっ！！」

おっさんは、飛びのいて避けた・・・チツ！

「あぶないだろっ！」

よけたナイフは、後ろの壁に根元まで突き刺さっていた。

「あんたが変なこと言うからだろー。」

で、何買ってきてくればいいのか？」

サントールという町は、ここから徒歩で往復丸一日かかる距離にある、地方都市だ。

町への買い物は、エーテルによる、身体機能強化と疲労回復促進の訓練に当たる。

具体的に言つと、丸一日かかる距離を、8時間で帰ってくるといふ訓練だ。

かなりしんどいが、今までに何度かしている訓練だ。

おっさんは拗ねた顔をしている。

「冗談だろーが・・・まったく・・・」

買って来てほしいのは、傷薬とかライフリートとか薬品系ね。」

その注文に、かすかな違和感を感じた。  
ライフリーストとは、エーテルを使う者、すなわち魔法使いたちが長  
旅で重宝する  
体内エーテル回復剤だ。

まあ、おっさんが変なのは今に始まったことではないが、  
最近は少し様子がおかしい。おそらく、先日届いた手紙が原因だろ  
う。

手紙を読んだ後のおっさんは、普段見ることのない、深刻な顔をし  
ていた。

「わかった。行ってくるよ。」

まあ考えても仕方がないので、行くことにしよう。

家に着いた時には、すでに夕方になっていた。

「ただいまー」

帰って来た時には、おっさんが夕食の準備をしていた。

「おう！おかえりー」

変だ。  
いつもなら

「エロ本は忘れてないだろうなっ！！ウキィー！！」

とか、言うんだが……

夕食中も、やけにテンションが高い。

人の皿にある、チキンめがけて、フォークを刺そうとしてきた。

「そのチキンは、頂いたー！ー！ー！」

「わたすかつー！！ポケエエー！」

フォークによる、格闘戦が始まった。

今日1日ずっとおかしい、おっさんだった。

次の日、今日は僕が、狩りの当番なので朝から森に出向いた。

（春になって、狩りが楽になったなー）

小型の鳥を、二匹捕まえて帰って来た。

家に入ってみると、朝起きた時と変わらない状況だった。

（あれ？今日は、おっさんが朝食当番のはずだけど……

寝坊でもしてんのか？）

おっさんの部屋をノックしてみるが、返事がない。

扉を開けてみると、あり得ない光景が目の前に広がった。

部屋の中は、きれいに整頓され片づいていた。

おっさんの部屋はいつも、本や服が散乱している。

そのため、一週間に一回僕が掃除していたのだが……

(どういふことだ。これ・・・?)

部屋に入り、ベッドの上を見ると手紙があった。

『我が弟子、ユウ キリシマへ

まずはじめに、黙って出て行くことを謝ろう。  
俺には、やるべきことができた。

君が、これからどうするかは自分で決めてくれ。  
このまま、この家に住み続けてくれてもいい。  
どこか違う場所に行くのもいい。  
自分で決めるんだ。

もし君が、立ち止まることをやめ、歩きだすことを選ぶのなら、力を貸そう。  
ベッドの下に地下室がある。そこを見てみるといい。

君との2年間は、悪くなかった。  
願わくば、君にエーテルの加護があらんことを

ガウス ランドール』

読み終えた後、しばらく放心してしまった。  
そして、置いて行かれたことと、黙って行かれたことに、腹が立  
った。

だが、おっさんの気持ちもわかった。

おっさんはかつて、関係のない戦いによって、異界人を死なせてしまっている。

もし、おっさんがここを出て行くと知れば、僕は付いて行こうとしたらろう。

そうすると、僕を巻き込むことになるため、黙って出て行ったのだらう。

丸一日なにもせず、考えた。

決めた！

僕は、元の世界に帰る方法を探す！

留まることをやめ、歩きだすことを選ぶ！

まずは旅の支度だ。

ホルスの村に行き、雑貨屋で保存食を買い込んだ。

ついでに、世話になった村のみんなと、お別れをした。

雑貨屋の猫人お姉さん、ウエアラキヤットララさんに別れをつけると、

「まあ、君みたいな若い子が、あんな隠居生活するのは不自然だったからね」

餞別にこれをあげよう」

本を渡された。

「ネコミミパラダイスって……エロ本じゃねえか！！いらないよ！！」

なんでこんなの持ってんだよ……

「ジヨウダンなのにく〜く。まあ気をつけてね。いつでも帰ってきていいからね。

いってらっしやい。」

「……………いってきます。」

泣きそうになったのは、ナイシヨだ。

おっさんのベッドをずらしてみると、地下室への扉があった。地下室の中で、エーテルライト反応灯つけ、周りを照らしてみた。

そこには、大量の武器と薬品などの、旅に必要なもののほとんどがあった。

武器、防具はどれも古そうなものばかりだ。

そんな中、奥に吊ってある黒いコートは真新しく見える。

コートには、手紙がくっついていた。

『これを見ているということは、歩きだすことを決めたんだな。

このコートは、特注でつくらせたものだ。エーテルの徹りがよく、ファイールド徹すことで防御用の場が、一時的に展開する。並の鎧より数段頑丈だ。

感謝しろよ！

もし、君が帰る方法を探そうとしたなら、まずはカスリアの首都ペルートに行け。

学術都市として栄えている。そこで異界人について調べるといい。

君は、まだ若い。立ち止まらず、進み続けるよ!」

なんか、おっさんに、思考をすべて読まれている気がするな・・・  
この前の、薬品の買い物もこのためか・・・  
感謝しつつ、地下室にあった大きめのリュックに用意したものを詰める。

武器は、おっさんにもらった、日本刀『銀月華』と、予備にエーテルの徹しやすい大型ナイフを一本、  
あとは投擲用のダガーを数本持った。

後は、食糧や調理道具、薬品、衣類を最小限詰め完成だ。

リュックを背負い、家を出て、気合いを入れる。

「うおっし!!行くか!!」

カスリアは、僕が今いるクランド王国の隣国に当たる。  
目的地はきまった。

カスリア 首都ペルトへ

僕の旅だったその日は、偶然にも、この世界にに来てちょうど二年目にあたる日だった。

## 第6話：銀龍の龍魔法

目的地である、カスリアの首都ペルートに向かう前に、この世界の地理について、少し思い出してみる。

この世界は、大きな一つの大陸からなっている。

この大陸には、三つの大国が存在する。

大陸北の大国、エルフの国    ルーンラルド

大陸西の大国、共和制国家    スルグス共和国

大陸東の大国、帝政国家    シグルド帝国

この共和国と帝国の仲が悪いらしい。何度も戦争をしているそうだ。

そして、この三国によって、大陸の中央で囲まれている国が、

クランド、フェブトプ、カスロアである。

僕が拾われたのは、このクランド王国と北のルーンラルドの国境付近の森だ。

なので僕は、クランドにいることになる。

この囲まれた三国にも、特徴があり、

クランドは、共和国に接していて、その属国である

フェブトプは、帝国に接していて、その属国である

カスロアは、帝国と共和国のどちらにも接していて、中立を貫いてるそうだ。

僕が向かうカスリアの首都ペルートは、中立であるがゆえに、二大国から人が集まり、

学術都市として栄えているそうだ。

帝国からさらに東には、島国ヤマトがあり、この言語の、ヤマト語は日本語によく似ているそうだ。興味があつたのだが、おっさんが、詳しく教えてくれなかった。

僕が知っているのは、これぐらいの情報だけだ。

もつといろいろ知っておきたかつたのだが、おっさんの地理の授業はいつも脱線して

！  
「この地方の特産品の、カルムの実は、メチャクチャうめえぞ！」

とか

「この町であつた、カリーナちゃんは、かわいかつたな〜」

とか、話し出すので、ウザ過ぎてあまり聞いていなかった。まあ、仕方ないだろうー

家を出て5日、僕はようやく国境を越え、カスロアに入った。

今日は、朝から雨だ。コートについているフードをかぶり、歩く。エーテルによる身体機能強化と疲労回復促進効果により、あまり疲れを感じず

速いペースで旅を進められている。

首都に続く街道を歩いていたが、地図によると、近くの森を抜ければショートカットできそうだ。

(あんまり疲れてないし、森を抜けていこかなー?)

そう考えて、森の中を進んでいった。

しばらく進んでから、リュックを木の根もとに下ろし、小休止をとった。

(雨やまないなー……ん?)

微かな大気エーテルの乱れを感じた。  
戦闘の余波のような……

ドゴンッ!!

爆発音と振動が来た。

「なんだ!?!」

微かだったエーテルの乱れは、今では大規模戦闘が行われているかのような状況になっている。  
状況を把握するため、近くにある木に登った。

木のとっぺんまで登ると、驚きの光景があった。

「龍だ……銀色の……」

500メートルほど先の上空に、美しい銀色の鱗を持つ龍が翼を広げ、浮かんでいた。

地面に敵意を向けていることから、何かと闘っているようだ。

銀龍が口を開いた。すると、歌のような綺麗な旋律が聞こえてきた。

(歌・・・?まさか、ドラグラーフ龍魔法!!)

おっさんの一般常識授業によると、龍族には、謎が多く、排他的な一族であり、あまり他種族に干渉しようとする傾向がある。

そのため、どこに住んでいるのかも知られていない。

しかし、龍族のみが使う秘術、ドラグラーフ龍魔法については有名である。

人間やほかの種族がスベル大気術を使う場合、キャストスタッフ詠唱杖と呼ばれる、魔道具が必要となる。

キャストスタッフ詠唱杖は、体内エーテルを術式に変換し、増幅してスベル大気エーテルに伝え、魔法が発動させる。

これなしに、スベル大気術を使うことは、キャストかなり高位の詠唱師でなければ無理だ。

だが、龍族は、何も使うことなく、強力な魔法を使うことが可能である。

その秘密は、龍族特有の声帯と歌であると言われているが、詳しいことは分かっていないそうだ。

(この歌がそうなのか・・・?とても心地良い歌なのに・・・)

と、思っていると、銀龍の周りに巨大な魔法陣が発生した。

それと同時に、龍の視線の先、半径100メートルほどの地域が黒い光に包まれた。

眩しさに目をそむけた。気付いた時には、黒い光が輝いた地域の木々はほとんどが無くなっていた。

「これほどの威力なのか……」

驚いて放心していると、銀龍がこちらを見た。

目が合った。

龍の眼は碧く、敵意に満ちていた。

しかし、僕は恐怖を全く感じず、なぜか目が離せなかった。

しばらく見つめあっていると、龍の眼から敵意が消えた……

ヒュンッ!!

という、空気を切り裂く音と共に、銀龍の浮かんでいた、下の森から赤く輝く鎖が、一本飛び出してきた。

その鎖が、龍の首に巻きつくと、下から次々と鎖が現れ、翼や体に巻きつき、龍を地面に引きづりおろした。

ドスンッ!!

(落とされた!?)

なぜか、僕の心の中に怒りがわいた。

僕は、木のでっぺんから飛び、身体強化によって地面を踏み抜きつつ、着地。

脚力強化による、高速移動で銀龍の落ちた方向に急いだ。

落ちた地点の近づいてみると、何人かの人の気配があることに気づいた。

脚力強化をやめ、気付かれないように、静かに近づいた。

そこには、無数の死体があった。どの死体も、黒く炭化している。  
ドラッグラフ  
龍魔法の直撃を受けたのだろう。

そして銀龍は、鎖によって地面に縫いとめられていた。

その銀龍の周りを囲むようにして、五人の詠唱師が魔法陣を展開している。  
キャスター

おそらく、あの鎖は、特殊な大気術スベルなのだろう。

倒れた龍の前に、リーダー格であろう詠唱師キャスターが立っている。

そのリーダーを守るように、生き残りの三人の兵士がいる。  
ファイター  
身気術を使う、氣闘士だろう。

( 妙だな…… )

どの詠唱師、氣闘士を見ても黒い装備で、国を特定できる紋章などが見られない。

リーダー格の男と、詠唱師の会話が聞こえてきた。

「\*\*\*\*\*?」

「\*\*\*\*\*」

理解できない言語だ。これは……  
そこで思い当たった。

( 暗号言語!?!?じゃあ、こいつらは、どこかの国の特殊部隊か! )

？)

おっさんに聞いたことがある。

暗号言語とは、特殊部隊など隠密任務を行う者たちが用いる、その部隊のみでしか通じない、人造言語だ。

(さすがに特殊部隊に喧嘩は売れないな・・・あれ?)

倒れていた龍の体が輝きだした。

そして、大気エーテルが龍に向かって流れ込み、ポンツ！という音と共に小さく爆発した。

(なんだ、なんだ!?)

龍はいなくなっていた。その代わりに鎖には、銀髪の女の子が捕まっていた。

素っ裸で・・・

(えええー!あ、そうか。人型になれるんだっけ。

なんで素っ裸?・・・って見ちゃいかん、見ちゃいかん)

まあ、見てるけど・・・

しかし、どうすべきか?

おそらく彼女は、生け捕りにされるのだろう。

腹が立つ。なぜかわからないが、腹が立つ。

そもそも、彼女が捕まったのは、僕に注意を向けていたからだろう。僕が原因だ。でも・・・

(特殊部隊相手に何ができる……)

逃げたほうがいい。見なかったことにすれば……

僕は周りを見た。

雨はやんでいない。地面はぬかるんでいる。少しだが霧もでてきた。やつらは、龍との戦闘で疲弊している。

僕は、覚悟を決めた。

## 第7話：特殊部隊との死闘

ラファエロ機関所属の龍魔法研究者アーノルド ドラゴラフ ノイマンの心は、喜びにあふれていた。

待ち望んでいた、龍族の生きたサンプルを入手できたのだ。

龍族は死ぬと灰になってしまったため、研究にはどうしても、生け捕りにする必要があった。

捕獲に協力した特殊部隊『毒蛇』は、ほぼ壊滅状態だが、それに見合うだけの収穫が得られた。

龍族の中で、最も力を持つ三大龍の一つである銀龍の血族を、捕えることができたのだから。

奴からの情報は正しかったようだ。

(これで、龍魔法についての研究が格段に進むぞ!!)

後ろのほうに、気配を感じた。

護衛の『毒蛇』の生き残りも、すでに後ろを振り返っていた。

「ひいひいひい!!」

黒いコートを着て、フードをかぶった男が、炭化した死体を見て腰を抜かしている。

そして、すぐに立ち上がり、森の中に逃げて行った。

(チッ！目撃者を出すわけにはいかん!!)

護衛の三人の兵に、始末するように命令した。

銀龍の少女のほうを振り返ってみると、先ほどのフードの男が逃げた方向を見ている。

「他人を心配している場合かな？」

「なっ……!!」

少女が驚いた顔をしている。

当然か。私が口にした言葉は、彼女の故郷のみで使われる言語なのだ。

「貴様、なぜ龍言語を話せる!？」

「龍族にも、いろいろいる、ということだよ。」

この銀龍の情報をよこした男も、龍族だが、なぜ同胞を売るような情報をよこしたのかは知らない。

龍族も、一枚岩ではないのだろう。

「わたしを、どうするつもりだ?」

「当然研究に使わせてもらおうよ。君のおかげで、大氣術スベルの技術は格段に進歩するだろう。」

これから研究することで、得られるデータのことを考えると、楽しくて仕方がない。

ふと、銀龍の少女を見ると、私の後ろに視線を送り、驚いた顔をしている。

後ろを振り向くと、何かの輝きが目に入った……

そして、意識がブラックアウトした。

さっきの演技は、うまくいっただろうか？  
死体におびえる一般人に見えただろうか？

予想どおり、三人のファイター氣闘士が追いかけてきた。  
奴らは、脚力強化による高速移動、『F・M・《ファストムーブ》』  
で追いかけてくる。

僕は一般人と思われなければならないので、身体機能強化を行わず、  
逃げる。

草むらを抜け、木の少ない広い空間に出た。

(ここで仕留める!!)

僕は、自分ができる最大の身体機能強化を実行。  
走っていた体に急ブレーキを掛け、後ろを振り向く。

左腰に差してある、刀『銀月華』に手を置き、抜刀。それと同時に、  
エーテルを最大限、武器に徹す。  
完全に油断している、追手の一人目は無防備に草むらから飛び出し  
てきた。

ザンッ!!

その一人目の首を、居合抜きの要領で斬り飛ばした。

二人目は、草むらから出てきて、首のない死体を見て異変に気づいた。

だが、僕はすでに敵の武器、ブロードソードの間合いの内側にいる。左手の拳で、顎を打ち上げた。

無防備になったボディに、左肩を接触させる。

アルベイン流格闘術 六式 『剛竜烈震功』

踏み込みの力と、接触した左肩から直接叩きつけるエーテルの力で、相手を吹き飛ばした。

(二人目っ！！次で最後だっ！！)

三人目は、完全にこちらを、力を持つ敵だと認識している！

(上っ！！)

視界に影がさしたと思った瞬間、前方に身を投げた。

ドスンッ！！

上から、兜割を仕掛けてきたようだ。

僕は、受け身を取って転がり、立ち上がった。

もう向こうは、油断することなく、本気で来るだろう。

(ここからだ・・・大変なのは・・・)

先に仕掛ける！

アルベイン流戦刀術 一ノ太刀 『天衝破』

刀に徹したエーテルを、斬撃に乗せて飛ばす遠距離攻撃技だ。

だが、飛ばしたエーテルは、相手の剣の一振りで消し飛ばされた。

(やばいつ！接近される！)

一瞬の間に接近され、連続で攻撃される。

帝国軍、軍式剣術の『S・S・《ソードステップ》』という技に、似ている。

ブロードソードの斬撃を、刀で受け、いなす。

(一撃が、重い!?)

敵は、斬撃の勢いを殺すことなく、回し蹴りを仕掛けてきた。

「がつ………!!」

5メートルほど後ろに、吹き飛ばされた。

なんとかガードしたが、衝撃を殺しきれなかった。

(やっぱり、正攻法じゃ勝てない!!)

牽制に、『天衝破』を連続で飛ばす。

相手は、『天衝破』と似た特性の技『I・S・《インパクトシュー  
ト》』によって、叩き落とす。

その間に、雨によって地面にできた、ぬかるみの中にワザと足を突っ込んだ。

（泥にエーテルを徹す！！）

本来、無機物にエーテルを徹すことは、かなり難しい。武器は、エーテルを徹しやすい金属、エレメント鉱石が使われているが、その他の金属は徹しにくいのだ。石、砂なども、徹しにくいものの例によくあげられる。だが、アルベイン流は、これを訓練によって克服し、武器とする流派だ。

アルベイン流秘戦術 二号 『岩徹し』

無機物である、泥にエーテルを徹した。

そして、その場で体を回転させ、脚に泥をまとわせる。

回転の力を利用して蹴りを放ち、泥の塊を、接近してきている相手に飛ばした。

相手は、当然避けようとする。右に体をずらし、泥の塊の横を抜くようとした。その瞬間、

パンッ！！

という音と共に、避けようとした相手に向かって、泥の塊が破裂した。

「なにっ！！！」

さっきまでまったく口を利かなかった相手が、驚きで声を出した。これで視界をつぶした。

(こいつは、視界が利かなくなっても、油断はできない!!!)

アルベイン流奥義 第一天 『飛蝶乱舞』

「うおらあああ……!!!」

斬撃と打撃を連続で繰り出す大技だ。

技は直撃し、体は原形をとどめないほどバラバラになった。

「はぁ……はぁ……ぎりぎりだった……」

やはり、奴らには銀龍との戦闘によるダメージが、残っていたのだらう。

なんとか勝つことができた。

疲れたが、休んでいられない。あの子を助けないと……

すぐにさっきの場所まで戻ってきた。

(まずは、あのリーダー格を潰す!)

脚力強化による高速移動で接近。

僕は、相手の10メートル手前で跳んだ。

奴が後ろに振り向こうとしたが、遅い。  
空中からの兜割で、リーダー格の男を両断した。

鎖で繋がれた少女が驚いた顔をして、口を開いた。

「なぜ……」

今はまだ、彼女と話してられない。

鎖の制御を行っている、5人の詠唱師をどうにかしないと。

5人のうち一人が、鎖の制御から外れ、こちらに攻撃を仕掛けてくるようだ。

僕が接近戦に持ち込もうと、腰を落とした瞬間、目の前に術式の描かれた魔法球が現れた。

(やばいつ!!)

とっさに、横っ飛びで回避した。

ボンッ!!

という音と共に、僕のさっきまでいた場所に爆発が起こった。

ベーシックスベル プレイス 基礎的大気術の『第一爆法』だ。

任意の空間に、魔法球が出現後、爆発を起こす、基礎の大気術だ。基礎であるがゆえに、熟練者になれば、かなりの速度で連射が可能になる。

横っ飛びで回避した場所には、すでに魔法球が発生していた。

(なんつー連射だ!!よけきれないっ!!)

とっさに、コートにエーテルを徹し、防御用フィールドを展開。

爆発。

「ぐあっ……!!」

フィールドで殺しきれなかった、熱と衝撃がきた。

(まずい、まずい、まずい、どうすれば……)

焦りによって、思考がうまくできない。

碧い瞳が、視界に入った。

(そうだっ!!忘れるなっ!!僕の目的は、こいつらを倒すことじゃない!彼女をたすけることだ!!)

僕は、左手でコートの中から、投擲用のダガーを引き抜き、投げた。攻撃を仕掛けてくる詠唱師ではなく、いまだ、鎖のコントロールに集中している詠唱師に向けて。

攻撃中の詠唱師はダガーを、ブレイズによって撃ち落とすが、僕は両手を使い、投げまくる。

撃ち落とせなかったダガーが、詠唱師たちに何発か当たった。

鎖の制御が乱れ、ひびが入りだした。

バキンッ！！

壊した！！と思った時には、すでに銀龍の少女はそこにはいなかった。

銀色の長い髪をなびかせ、一瞬のうちに5人の詠唱師を、殴り倒した。

その動きは、身体機能強化を最大まで行っている、僕の知覚速度でも完全に捉えきれなかった。

（それにしても・・・）

僕には、銀色の髪をひるがえして動き回る姿は、まるで妖精のように見える、見とれてしまっていた。

## 第8話：歌い手とファン

「なぜ、私を助けた!？」

銀髪の少女に近づいてみると、そう言われた。

彼女は、仁王立ちで、こちらにきつい視線を送っている……素っ裸で。

さすがに、顔をそらした。

「なんで顔をそらすっ!聞いているのか!」

どうやら自分の状況をすっかり忘れているようだ。

「えと……君、裸……」

何とか伝えてみる。

「あっ……!」

気づいたようだ。

僕は、自分のコートを脱いで、渡してあげる。

「うっ……すまない……」

コートを着たのを確認すると、僕は彼女を見た。

コートから生足が見える。チラリズムがいいね!!

「ど、どこを見ている!!さっきの質問に答える!!」

なぜ助けたのか、だったか？

正直、自分にもよくわからない。

僕が原因で捕まったことに責任を感じた……だけではない。

いろいろ、ごちゃごちゃした感情があるが、言葉で伝えられる理由は、これだけだ。

「ほら・君、僕のほう見てただろ。その隙を突かれて捕まったみたいだったから、責任感じてね。」

「それだけの理由で、あんな危ないことをしたのか!？」

そう言うと、怒っているようだった少女は、急に声のトーンを落とした。

「助けてもらっても、私は君に何も与えるものがない。私を助けたとしても、不幸になるだけだ……」

なんか急に落ち込んだぞ。

「別に、見返りを望んで助けたわけじゃないよ。助けたいと思っただけから助けたんだ。」

「私は、龍族だぞ!!怖くはないのか!!?」

「もつと怖い人を知ってるよ。」

僕は、ホルス村のララさんを思い出した。あの人は怒るとすごい怖い。おもつきりつねってくるのだ。

あれは痛い!!

「あとほら、君の歌、良かったから。ファンが助けた、という」とだよ。」

「歌？何を言っている！！私の歌は、滅びを呼ぶ歌だぞ！」

「歌ったら絶対に、ドラグラフ龍魔法が発動するの？」

「いや、そういう訳ではないが……」

「じゃあ、今度また聞かせてくれ！そのときにまた評価しよう！」

彼女は口を開け、呆れた顔をしている。そして、小さく笑った。

「君は、変な奴だな……」

初めて笑った顔を見たが、やっぱりかわいいな。

と思っていると、彼女は前のめりになり、倒れかけた。

僕はかるうじて受け止めた。

「大丈夫！？」

「ああ、すまん……」

「雨宿りできる場所まで移動しよう。ここを離れたほうが、良いし……」

彼女をおぶって、移動しようとする。

「待ってくれ。あっちに私の荷物があるんだ。」

近くの木の根元を指さす。

彼女のカバンを回収して、自分のリュックも回収する。

おぶっているの、体の前にリュックを引っかけた。

「重いか？」

「いや、ぜんぜん。」

本当だ。女の人って軽いんだな。

「ありがとう。」

「ん？」

「助けてくれたことも、歌を褒めてくれたことも。父上以外に褒

められたのは、初めてだ……」

そう言つて、寝息を立て始めた。

僕は、できるだけ振動を与えないように注意しつつ、歩きだした。

朝だ。

目を開ける。

昨日はあれから、雨宿りできそうな小さな洞窟を見つけ、そこで  
晩明かした。

彼女はずっと眠ったままだ。疲れていたのだろう。

洞窟の外に出ると、もう雨があがっていた。空のレイラインが、くつきり見える。

僕は近くの川で、顔を洗い、水筒に水を汲んだ。

帰って来てみると、銀髪の少女が、丁度起きてきた。

「おはよう。もう平気？」

「おはよう。もう平気だ。世話になったな。」

汲んできた水を、手持ちの予備のコップに入れ、渡す。

「ありがとう。」

「どういたしまして。」

僕も水を入れて、座る。

しばらく、黙って水を飲んでみると、

「改めて、礼をいう。昨日は、助かった。ありがとう。」

と、彼女は言った。

「うん。あっ・・・自己紹介してなかったよね。僕は、ユウ。ユウ  
キシマ。よろしく！」

「私は、セラだ。ご存知の通り龍族だ。よろしく。」

握手を交わした。

セラに、気になっていたことを聞いてみる。

「結局、あいつらなんだったの？特殊部隊っぽかったけど・・・」

「おそらくは、龍魔法を研究する組織だろう。君が真つ二つにした男が、それらしいことを言っていた。」

あの、リーダー格の男のことか。

(龍魔法を研究する組織か・・・・・・ん?)

セラは、僕のコートを着て、膝を立てて座っている。

彼女は、コートの下に何もつけていない。

僕の位置からは、中が見えそうで見えない。

なんとという素晴らしきアングル!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「ユウ?どうし・・・どこを見てるんだ!!変態!!」

「ゴッフウツ・・・!!」

セラのもっていたコップが、すごいスピードで僕の頬に突きささった。

僕は、体を回転させながら、吹っ飛んだ。

「君は、本当に油断も隙もないな!!」

(あいたたた・・・。なんとという怪力。恐ろしい・・・)

僕は、しばらくして起き上がって聞いた。(ふらついています)

「ふくのかへはないほ？」(「服の替えはないの？」口がうまく動いていない)

「下着はあるが、服はなあ……………」

僕もさすがに服は……………

(あるじゃないか!!あの服が!!)

「これでいいのか?ずいぶん重い服だな?」

彼女に渡した服は、僕がこの世界に来た時に着ていた、高校の制服だ。

故郷のたった一つの思い出の品で、違う世界から来たという、物的証拠だ。

さすがに捨てられず、旅に持ってきていた。

「この首輪みたいなのは何だ?」

僕の高校の制服は、ブレザーにネクタイだ。セラが言っている、首輪というのはネクタイのことだ。

それにしても……………男子生徒の制服を女の子が着ると、なんか、こっ、イイヨネ!!

しかも、銀髪碧眼の美少女!!

「なんだ、その顔は………?」

セラは、呆れ顔で僕を見ている。

そのまなざしに、覚えがあった。

おっさんが変な事をした時の、僕のまなざしそっくりだ。

そのことに気づき、自分がすっかりおっさんに毒されていることがわかり、少しへこんだ。

気を取り直して、セラに聞く。

「セラは、これからどうする？僕は、首都ペルートに行くんだけど………」

「私は、人探しをしているんだ。ユウは、この人を知っているか？」

そう言って、写真を取り出し、僕に見せた。

そこには、豪華な暖炉とその前でイスに座って微笑んでいる、金髪の女性が写っていた。

「いや、知らない。」

「そうか……まあ、そんな簡単に見つかると思ってないしな。」

そう言って、少し悲しさをにじませた顔で、写真を見ている。

「じゃあ、一緒に首都まで行こうよ！首都には人が集まるから、情報は多いだろ？」

セラは驚いている。

「私と一緒にいたら、また危ない目にあうぞ！やめておけ。私は一人でいたほうがいい。」

「ダイジョーブだって！それにほら、歌をまだ聞かせてもらってないし……」

「じゃあこの場で歌う！それでいいな！」

まったく強情だ。それでは奥の手を。

「その服、大事なものなんだけどな〜」

「ぐっ……」

「君にあげるわけにはいかないし、脱いでもらおうかな〜。」

ふっふっふっ。くやしがつてる。くやしがつてる。

「本当にいいのか！？どうなっても責任は取れないぞ……」

「いいよ。これは、僕が自分で決めたことだよ。」

セラは、しばらく僕を睨んでいたが、諦めたようだ。

「首都までだ。首都までだからな。」

「はい、はい。」

こうして、僕に旅の同行者ができた。

## 第9話：男のロマン

朝の光に目が覚める。

僕は、木の根元で、コートを布団の代わりにかぶせ、寝ていた。意識は、もう覚醒しているが、眼は開けない。

セラは、もう起きているようで、近くにいない。朝食の準備をしているようだ。

僕が、寝たふりを、続けていると、

「ユウ。起きろ。いつまで寝ている。」

と言い、セラが近付いてきた。

（これが！！これこそが待ち望んでいたもの！！女の子に朝起こしてもらおうシユチュエーション！！）

僕の体を揺らして起こそうとしている。

「朝食を準備した……ん？……君、起きてるだろ。」

「ハテ？ナンノコトヤラ？」

あっ！？しゃべっちゃった！！

セラは、僕からコートをはぎとり、肩をつかんで持ち上げた。この細い腕のどこに、こんな力があるんだろ？

「あれっ!?!ちよっと、どうするき!?!」

持ち上げられたままの僕は、勢いをつけて投げられた。  
5メートルほど向こうの、木にむかって。

「ぐおっ……!」

僕は、木にぶつかり、地面に落ちた。

倒れたまま顔をあげると、彼女は呆れた顔でこちらを見ていた。

「目は覚めたか?」

「はい!?!ばっちり!?!」

「なら、さっさと起きて、飯を食え。」

「はい。」

セラと旅を初めて、三日。

いろいろと気付くことがあった。

彼女は、ツッコミ体質だ。僕が冗談を言うと、(というか変な事をすると)ちゃんと突っ込んでくれる(というか殴ります)。

そしてクールである。初めて会った時こそ、かなり激しい気性をしていたが、普段の彼女はかなり冷静で、無口だ。

今も、首都に向かう街道を歩いているのだが、僕の前を黙々と歩い

ている。

その格好は、僕の高校の制服という格好だが、意外と似合っている。ブレザーは重いらしく、脱いでいるためワイシャツにズボン姿だ。僕の制服であるのに、長身である彼女は、ズボンのすそをあまり折っていない。

僕より足が長いんだね……べ、べつに悔しくなんてないんだからっ!!

そんな格好のため、後ろから見るとワイシャツが透けて……

「今、変なこと考えてただろう……」

いきなり、セラが振り向いた。  
するどいつ!!

だが、必要なこと以外で、セラが話しかけてきたのは珍しい。この機会に、いろいろ聞いてみよう。

「え〜とっ。セラって、何歳？」

「なんだ急に？」

不思議そうな顔をしてる。

「まあいいから、いいから。」

「15だ。」

「えっ……!?!」

てつきり自分と同じか、上だと思っていた。背が高いうえに、顔も美人で大人っぽいので勝手にそう思っていた。このまま続けて、質問しまくる！

「そういえば、あの時なんで裸だったの？」

「なんでそんなこと今聞くんた……龍化した後なんだから当然だろ。」

少し赤くなつて、セラは言った。

「じゃあ、あの写真の人は誰？お母さんとか？」

「まあ……な……」

おっと、セラのテンションがガタ落ちだ。この話はやめよ。

「初めて話したときさ、すっごい警戒してたけどあれは何で？」

「ああ、あれは私を龍の国から出してくれた人に、人間は信用するな、って教えられていたからだな。」

「なるほど。」

初めて話した時いきなり、なんで助けた！、だったのはそれか。

「じゃあ今は？今でも、人間はみんな信用できないって思ってる？」

彼女はこつちをちらりと見て、顔をそらした。

「自分で見て、考えることにした。」

うーん。今どんな顔をしてるのか見たいなー。

歩いていると、夕方になった。街道には人の気配が少なくなる。するとやばい連中が現れる。

「おい！！その二人、ちょっと待てよ！！！」

後ろから、いかにもガラの悪そうな声が、僕らを呼びとめた。振り返ってみると、声の印象の通りの男が5人ほどいた。

「有り金、全部おいてきな！！それと、その女もだ！！！」

振り返ったセラが、予想以上に美人だったことに、連中は喜んでい

る。僕はこういった連中に絡まれるのは、初めてではない。

パツと見ると、気の弱そうな僕は、カツ上げされやすい顔なんだろう。

どうしようか考えながら、右手は、さりげなく刀の柄にそえておく。

僕が、武器に手をかけていることも知らず、連中はセラに夢中だ。

「おい、ネーチャン！！俺らとイイことしよーぜ！！！」

みみたいな言葉や、完全にピーという効果音が入りそうな言葉を、セラにぶつけている。

(あれ？変だな？セラの性格なら、すぐにこんなやつら、フルボッコにするのに……?)

不思議に思って、セラの顔をのぞいてみた。  
真っ赤だ。

色が白いので、よくわかる。なんか、とても、からかいたい衝動にかられた。

「顔、真っ赤だよ。もしかして、恥ずかしがってる？」

と、僕は声をかけてしまった。その瞬間、セラの右の拳が僕の顔面を捉えた!!!

「ハゴツ……!!」

僕は、街道の横の街路樹をなぎ倒しつつ、吹っ飛んだ。

僕が起き上がって帰って来た時には、連中はとっくに逃げ出していた。

「今のは、君が悪い!!」

セラは、帰ってきた僕に言った。  
いまだに顔が赤いままで、とても可愛かった。  
いいもの見れたなー

夜になってから、セラに事情を聞いてみた。

「私に、ここの言葉を教えてくれたのは、父上の古い友人の方なんだが・・・その・・・性格にちょっと問題があつてな。あの人は私にワザと、あてのヤラシイ言葉を覚えさせようとしてくるんだ！ 恥ずかしがつてる私を見て、楽しんでいたんだろ！！」

後半は怒りだして言った。

まあ、その人の気持ちもわからなくはない。

普段クールを装つてるため、どうにかして恥ずかしがらせたい、という気持ちはよくわかる！！！

僕は、見ず知らずのその人に、大変共感した！！！

「言うておくが、私に変なことを言わそうと考えるなよ。さっきの五倍の力で殴るからな。」

しつかり釘を刺された。

だが僕は、暴力に屈しない！！

あつ、ごめん！うそです！

すごい視線で睨まれた。

そんなこんなで、今日はセラについて、いろいろ知ることができた。



## 第10話：はじめてのお仕事

首都ペルルトへの道の、通過点にある都市、ユードラッドについてだ。

ひさしぶりに、まともな食事と寝床にありつけそうで、テンションが上がる。

しばらく食事は、乾パンばかりだった。

「さて、服を買いに行こうか。」

セラは、機嫌良さそうに言った。  
僕は一つ気になることがあった。

「セラ、お金あるの?」

そう言うと、セラはこちらを見た。

すごい、見てくる。

まだ、見てくる。

「……………ぼくが出すの?」

セラは、下は黒いスパッツ、上に白地の軽装甲服を着て、腕には格闘用のグローブ、足には戦闘用のブーツを履いている。  
制服姿も良かったが、こういう格好も戦う女性という感じで、トテモイイデスネ!!!

それから、この街に来て改めて分かったことだが、セラはこの世界の人たちから見ても、かなりきれいに見えるようで、よく目立つ。いちよう彼女は、狙われている身なので、フード付きの外套を買ってあげた。

フードをかぶれば、ある程度は人の目を避けられるだろう。

「どうだ？」

セラがその場でくると回って、聞いてきた。

「それはもう！！かわいいね！！」

「そんなこと聞いていないっ！！これで目立たないかを聞いたんだ！！君が目立つと言ったから、気にしているんだ！！」

ふっふっふ。うっすら顔が赤くなっていますよ。

ニヤニヤしてたら睨まれた。

服飾店を出ると、

「必ず、お金は返す！！」

セラは、強く僕に言った。

まあ、そんなに気にしなくていいけど……

実際、お金はもうほとんどない。

この大陸の共通通貨の単位は、R<sup>ルクス</sup>xだ。僕の感覚だとほぼ、ドルとかわらない。

今の所持金は、20Rxほど。二人で二食と一泊ぐらいしかできない。

これからの旅の食糧や、この前の戦闘で消費した、ダガーも補充し

ておきたい。

「働くしかないか……」

「働く……まかせる私がやる!!」

「働いたことあるの?」

「……ない。」

前から思っていたのだが、もしかしたらセラは、箱入りお嬢様なんじゃないか?

だが、大丈夫だろう。これぐらいの大きさの都市になら、セラ向きの仕事は多いはず。

ぼくらは、クエストショップ依頼請負屋に向かった。

依頼請負屋とは、簡単に言うとバイト募集所、求人事業所。

つまり、傭兵のたまり場だ。

僕は、おっさんとの訓練中、何度か依頼を受けたことがある。

依頼請負屋に入ると、大きな掲示板と、受付がある。

掲示板に貼り出されている依頼を選んで、受付に申し込むシステムだ。

セラに、システムについて解説すると、熱心に掲示板の依頼を選び始めた。

(これなんて、いいんじゃないかな。)

『クリエイター魔法技師の指示する、材料の調達。』

魔法技師は、エーテルによって動作する道具を作る職人だ。

そのため、様々な材料を必要とする。  
セラと僕なら、そんなに苦労しないだろう。

「ねえ、セラ。これはど………」

「これにしよう!」

僕の言葉にかぶせて、セラは宣言した。  
セラのしている依頼の張り紙を見る。

『魔物討伐!! ユードラッド駐屯騎士団と協力して、キリギスの森の魔物を倒しましょう!! ジャンジャン応募してネ!!』

うわ。やばそうだ。文章のノリと依頼の重さが、全然かみ合っていないんだが……

魔物というのは、この世界の動物を指す言葉ではない。

この世界の生物は、一様に大きく、凶暴ではあるが、それはエーテルの影響だろうと、僕は考えている。

おっさんに聞いた話だが、魔物とは、200年ほど前に現れた、異形の生物らしい。

魔物の異常発生と、魔王と呼ばれる、魔物の親玉が出現したことによって、当時戦争をしていた帝国と共和国は休戦、その後協力し、エルフの支援を受けて戦いを終わらせた。

その時英雄として名を馳せた、フランク ペルトによって、この国カスロアは建国された。だからこそ、今でも中立を守っているのだとか。

こうしたことから、魔物は200年前にほぼ駆逐されている。

しかし、数は少ないが、いまでも生き残りが、たまに現れるそうだ。

魔物相手なんてやばいだろ。」

「ねえ、セラ。もっと安全なのにしなない？」

「いや、私はこれでいい。金額を見る。これぐらい稼がないと、君に借りた金は返せない。それに、助けてもらった恩がある。」

僕が勧めようとした依頼の報酬は、80Rx。だいたい、八千円ぐらいだ。この世界では2Rxぐらいで、普通の昼食が食べられる。そして、セラがやるうとしている依頼の報酬は、1500Rx。じゆうごまんえん……すごい。

いや、惑わされてはいけない！危険だからこそ、この値段！よく見ると、張り紙の端っこのほうにちっちゃく、『死んでも、責任はおいかねます。自己責任でネ！』、って書いてあるぞ……！そもそも、僕がセラの装備に払ったお金は、50Rxぐらいだ。こんな依頼にしなくても……僕が難しい顔をしていると、

「ユウは、どこかで休んでいてくれ。私ひとりでやる。」

と、セラは言う。どうやら何が何でもこの依頼を受けるようだ。うーん。セラが強いのは知っているが、とても心配だ。

それに張り紙にも、『定員十名、あと残り二人……！そのあなたどうですか！？』、とまるで僕にも参加しろという雰囲気だ。

「あ………ぼくもやるよ。」

セラはこちらをちらりと見て、

「別に嫌ならいいぞ。つきあわなくて。」

「セラは、危なっかしくて、見てないところで何かされると、落ち着いて休んでられないよ。それにほら、定員あと二人だし。」

「君はいつから私の保護者になった!? ……まあ、ついてきてくれることには、感謝する。ありがとう。」

セラは、うつすら微笑んだ。

その表情を見ただけで、自分は最良の選択をしたと思えてしまった。

「おいおい、こんな奴らが最後のメンバーかよ。」

受付を済ますと、さっきまで近くのテーブルにいた、ガタイのいい男が、イライラした様子でそう言ってきた。

「ジョーダンじゃねえ! てめえらみたいなのは、足手まといにかならねえよ!! サツサと依頼を取り消せ!!」

テーブルには7人の人がいる。人種は様々だが、みんな腕利きの<sup>フ</sup>闘士<sup>ファイター</sup>や<sup>キヤスター</sup>詠唱師に見える。

今文句を言っているこの人と、テーブルにいる人たちが、この依頼を受ける人たちなのだろう。

「特に男のお前だ!! 女にいいカツコ見せたいからって、身に余る依頼を受けようとするな!! お前なんかいても、そのひよろい体

じゃ盾にもなんねえんだよ!!」

ああーこの状況はまずい。テーブルに座っている人たちも同意見なのか、止めに入ろうとしてくれない。

盾としてがんばります!、とか言っただけにげられないかな、と思っ  
ていると、

「盾になるのは、貴様のほうがお似合いだぞ、デクノ坊。他人の  
技量を測れないようじゃ、貴様の程度も知れるな。」

セラが、怒ったように言った。うあ、売られた喧嘩を買っちゃた!!

「ちよつと、セラ。落ち着いて……」

「君は、侮辱されたんだぞ!!なぜ怒らないんだ!!君はこの、  
肉の壁なんかより数段上のはずだ!!」

セラに火がついた!!それにしても、に、肉の壁……面白いこ  
とやうな。

喧嘩を売って来た男を見ると、額に青筋が現れていた。お、怒って  
るよね。やっぱり。

男は、背中に背負っている大剣に手をかけながら、

「じゃあ、見せてもらおうか!!俺より数段上の力ってやつをな  
!!」

と言ひ、僕の胸倉をつかみ、身体強化された腕力によって、依頼請  
負屋の外に向かって投げ飛ばした。

僕は、扉をぶちぬき、外の道まで転がった。

男が外に出てきた。

僕は、住人の人たちが止めてくれないかなー、とか思っていたのだが、喧嘩か!!!いいぞー!!!やつちまえー!!!、みたいな声が多い。この付近は酒場が多いため、こんな喧嘩はいつものことなのだろう。

立ち上がると、大剣を抜いた男は、もう目の前まで来ていた。

来た!!!

かなりの速さで、大剣がこちらに向かってきた。僕は脚力強化で跳び、男の頭上を跳び越え、着地した。

男が振り向く前に僕は、抜刀し、構える。

どーしょ………カウンターで、投げるか。

男が大剣を振り回し近づいてきた。避けつつ、その動きを観察すると、割とうまい。

大剣を腕力だけで使っているわけではなく、ちゃんと力の向きを操作し、制御している。エーテルの徹りもいい。

剣を刀で受け、反りを使って、いなす。

本来なら、刀はへし折れるところだが、エーテルを徹すことで、斬れ味と、頑丈さは増幅されている。

男がバランスを崩した。その瞬間、刀を地面に刺し、素手で懐に飛び込む。

そのまま、胸倉をつかみ、背負い投げの要領で投げ、男を地面に叩きつけた。

ドスンッ!!!

失神しない程度に加減して投げたので、男は驚いた顔で見開いている。

「え〜と……大丈夫ですか？」

僕は、いちよう聞いてみる。

「チツ……！俺の負けだ!!」

男はそう言い、さつさと立ち去った。

認められたってことでいいのかな？

野次馬の住人に、すごかった!!、おみごと!!、とか言われた。大変な目にあつた。

町の酒場で夕食を終え、宿に泊まった。

お金がないので、二人で一部屋だ。僕は床で寝る。

セラが文句を言ったが、これは譲れない。女の子を床でなんて寝かせられません！

セラと、今日のことを話す。

「もう少し冷静に対処しようよ。」

「あそこは怒るべきところだ。自分が認めている相手を侮辱されて、そのままにしておけるか！」

おっ？僕は認められているのか……そうか、そうか。

「なに、ニヤニヤしてるんだ！い、今の発言は、なしだ！！」

いいこと聞かせていただきました。

魔物退治は、明日行われる。

## 第11話：魔物という名の機械

ユードラッド駐屯騎士団の騎士、レオナルド ルーフは、憂鬱だった。

今回の作戦、魔物を相手にするだけでなく、傭兵どもの指揮も担当しなければならぬ。

傭兵たちには、基本的に自分の仲間以外信じない偏屈が多い。作戦の概要説明の時も、こちらを見下した視線で、見てくるものばかりだ。

（作戦中、指示を聞いてくれるかわからんな……はあ……）

ため息をついてると、その傭兵のうちの二人が近付いてきた。

一人は、黒いコートの気の弱そうな少年だ。この場に似つかわしくない雰囲気を持っている。

もう一人は、外套を着てフードをかぶった女性だ。碧い眼をしており、その顔はとても美しい。連れの少年とは、どうゆう関係なのだろうか。

（この作戦が終わったら、お茶にでも誘ってみようか……）

とか考えていると少年が話しかけてきた。

「あのルーフさん、魔物の等級クラスはどれくらいなんですか？」

「等級クラス？」

「はい。こちらの資料には載ってなかったの。」

自分の資料をよく見てみると、等級クラスについての記述があった。

「ええっと、第二級セカンドクラスって書いてありますね。」

「ありがとうございます。」

そう言うと、少年は離れて行った。傭兵にしては、礼儀正しいな。離れていく少年と女性の話し声が聞こえる。

「ユウ。等級とはなんだ？」

「ああ、等級ってのは……」

レオナルド ルーフはその会話を聞き流しつつ、あの女性を誘うのに成功した時の、デートコースを考え始めた。

僕は、騎士の反応を見て、全体的に緊張感が薄いように思えた。200年も前に、滅ぼされた魔物との戦闘なんてみんな初めてだろう。滅ぼせた過去があるがゆえに、あなどりがあるのかもしれない。今回作戦に参加する人数は、騎士団20名、傭兵10名、でかなり大人数だ。この人数も緊張感をゆるませる原因の一つだろう。緊張感を保ち続けているのは、経験豊富な年配の騎士と傭兵の人たちで、比較的若い騎士の人たちは、のんびりしている。

大丈夫かな？心配になって来た。

「ユウ。等級とはなんだ？」

セラが聞いてきた。

「ああ、等級ってのは、魔物の強さによって分けられた位階のことだよ。第三級<sup>サード</sup>、第二級<sup>セカンド</sup>、第一級<sup>ファースト</sup>の順に強くなる。その第一級の上  
が、魔王と呼ばれてたんだって。」

「へえー。ユウは物知りだな。」

感心したように言う。

実際、僕もおっさんに聞いたただけだ。あの人は見た目に反して、かなり博識だ。

僕はおっさんとの会話を思い出した。

「等級に分かれているのは、わかったけど、それぞれどれくらい強いのか？」

「第三級なら今のユウでも倒せるな。第二級は、一匹なら十人がかりで倒せるかな。第一級になると個人では無理だな。軍隊が必要になる。」

驚いた。軍隊が必要か・・・怖いな。

それにしても、おっさんはやけに詳しい。

「おっさんは、魔物に詳しいけど、戦ったことあるの?」

「あるよ。」

「あんの!？」

なんですと!!!

「前の戦争の時に、一度だけな。第二級を一人で相手にしたな。」

「勝ったの!？」

「勝ったからこうして生きてるんだろ。どうよ、すごいだろ!!  
俺様にかかればその程度簡単よ!!！」

十人がかりで倒すのを、一人で………すごいな。

おっさんは自慢げにしている。イライライライラ………

この時は、必要のない知識だろうと思っていたが、覚えておいてよかった。

思い出したおっさんとの会話を、セラに伝える。

「なるほど。それにしても君の師匠は、すごいな。物知りでかなり強い。」

「まあね。実際は、かなり変な人だよ。エロいし。」

「ふふっ……やはり師匠と弟子は似るのだな。」

セラは、くすくす笑っている。

失敬な!! 僕はあんな変人じゃないし、エロくない!!!

「いつも私に変なことをしていて、自覚がないのか……」

セラは、呆れたように言った。

僕はおっさんよりも、紳士だ!!

騎士団と傭兵たちは、魔物が潜むという、キリギスの森に到着した。事前の作戦説明によると、第二級が二体、森の中心部にある洞窟に潜伏しており、一体を騎士団が、もう一体を傭兵たちが引き受けることになっている。

森の中心部に向かって移動中、セラに小声で注意しておいた。

「セラ。本当に危ないとき以外は、ドラグルフ龍魔法使っちゃダメだよ。」

「わかっている。格闘メインでいくつもりだ。」

「危なかったら、使ってもいいからね。」

セラは強情だから、危なくなっても使わなさそうで、心配だ。

洞窟についた。

まずは騎士団の人たちが一体をおびき出すため、エーテルを徹すこ  
とで爆発する魔道具「感応爆雷ボム」、を洞窟に投げ込む。

ドカッ!!

爆発音の後、煙が上がる。何かが洞窟から出てきた。

クモだ。体は乗用車ぐらいの大きさがあり、脚は人間よりも太く、

とても長い。

体表は、泥やコケに覆われている。

一体目は、騎士団の人達が相手を始める。

二体目が着た。ほぼ一体目と変わらない姿かたち。

先制で、詠唱師キャスターの、中級大気術によって攻撃することになっているのだが……攻撃指示がない。

僕は、指揮する騎士のルーフさんを見る。すると、彼は魔物の大きさに圧倒されているようだった。

「指示はどうした!!」

誰かの厳しい声が聞こえた。

「あ、あ、こ、攻撃開始!!」

そこでようやく、詠唱師による攻撃が始まった。中級大気術の『第一スロジョン』だ。爆発を起こす大気術、『第一ブレイズ』の強化版だ。魔物の足もとに、術式の描かれた魔法陣が浮かび上がる。

ダウンッ!!

爆発。爆煙によって視界が一時利かなくなる。視界が回復するまで待つ。

「チツ……やはり騎士は使えんな……」

と横にいた傭兵の気闘士ファイターが言った。

気闘士たちが、視界回復後の攻撃のため身構える。

クモが見えた。体表にあった、泥やコケはすべて吹き飛ばされていた。

僕は驚いた。クモの体表は驚くほど白いのだ。真っ白だ。そして何か違和感を感じた。なんだろう？この感じ？  
奴の動き方、変な感じがする……

「ユウ！！棒立ちだぞ！！」

セラの怒声が聞こえた。

クモは僕に向かって来ており、脚を振り上げていた。

やばっ！！

アルベイン流秘戦術 一号 『閃光』

瞬間的に脚力を強化。大陸主流の高速移動の身氣術アイツ「F・M・へフアストムーブ」を超える速度で緊急回避。  
この技は、かなりの速度で動けるが、短距離にしか使えない。そのため、回避によく用いる技だ。

何とか回避に成功。あぶない、あぶない。

すでに移動していたセラに、怒られた。

「バカか、君は！！何をぼさつとしているんだ！！」

「ごめん、ごめん。」

先ほど感じた違和感は、心の奥に置いておく。  
僕は、刀を抜かず、両手を構えた。

「セラ、僕が動きを止める。あとよろしく。」

「まかせろ。」

一瞬、碧い瞳と目を合わせる。

いくぞっ！！

アルベイン流格闘術 二式 『発剄・風牙』

普通の「発剄」を、体内エーテルを弾丸とし、腕を銃身とする、拳銃とするなら、『発剄・風牙』は、ショットガンだ。

僕は、構えていた両手を前に突き出す。両手から放たれたエーテル衝撃波は、空中でぶつかり合い、バラバラになりながらクモを襲った。

一つ一つは小さいが、数十発の衝撃が同時に着弾したことで、クモは足を止める。

その瞬間、外套を脱いだセラが、銀の髪を揺らして高速で接敵、クモの体の真下にもぐりこんだ。

そして、クモの体に真下からアップパーをかます。

ポゴンッ！！

クモは空中に浮き上がり、セラの足もとは20センチほど陥没した。浮き上がったクモは、無防備だ。

セラの怪力に啞然としていた傭兵たちだったが、このチャンスを見逃さなかった。

剣を持つ氣闘士は、剣でエーテル衝撃波を放つ「E・S・インパクトシユート」を、詠唱師は基礎的大氣術を連続で放つ。僕も刀を抜き、『天衝破』を放つ。

連続の爆発音の後、脚を何本か吹き飛ばされたクモが、白い体液をまき散らしながら落ちてきた。しばらく待っても動かない。終わったか？

一人が近付いて確かめた。どうやらもう動かないようだ。

セラはすでに僕の横に移動していた。

僕は声をかける。

「御苦労さま。」

「ああ。君もな。」

ふう・・・なんとかなったな。

もう一体のほうも無事倒せたようで、騎士団の人たちがこちらに来ていた。

合流し、お互いの無事を確かめた。

みんな帰ろうと準備をしていた。

セラは、遠くに脱ぎ棄てていた外套を拾い、着込んでいる。そのセラの後ろで異変が起こった。

倒したクモの体の一部が盛り上がり、目玉のような形になった。

そこで僕はその異変に気づいた。クモの体にできた目玉が、一番近くにいるセラを見ていることを。その目玉が、怪しく発光していることを。

「セラッ!?!」

叫びつつ、脚力強化で走る!?!やばい!?!やばい!?!このままだとセラが……

「……………助けてあげて……………」

「は？」

今、女の人の声でした?と思った瞬間、自分の体が急に軽くなり、人生最速の動きでセラに近づいた。

すごいスピードで近付いてきた、僕に対して驚いているセラの腰辺りに跳びついて、押し倒した。

その瞬間、僕の頭の上を光の帯が通過した。

レーザー!?!目玉みたいなのからレーザーを出した!?!?

僕の頭上のほうからセラの声がする

「ユウ!?!ケガはないか!?!くそっ、あいつ生きてるのか!?!」

ケガはないかって、それは僕のセリフだ。

「ユウ、動くな。私がしとめる!?!」

セラが、息を吸い込んだ。

「ラ」

セラは、たった一つの音を発声した。だがその音一つで、大気エーテルが共鳴、大気術とほぼ同じ現象が起こり、クモの残骸が爆散した。

その威力は、先ほどの中級大気術イクスプロジョンを上回るほどだ。  
ドラゴンブレイズ  
『龍声』だ。

その騒ぎを聞きつけ、帰ろうとしていた騎士団が駆けつけてきた。セラが、龍声を使ったのも見られていないようだ  
もう安心だろう。

「ありがとう、助かったよ。……ん？どうした！？ケガでもしたのか！？」

セラがお礼を言ってきた。だが僕は返事が出来ない。あまりの、あまりの、  
やわらかさに！！

僕の今の状況は、セラの腰に跳びついて、押し倒した時のままだ。腰に腕を回していると、必然的に僕の顔は素晴らしい位置にある。セラは着やせするタイプですね！！

「……………このっド変態が！！！！」

僕の頭に高速のげんこつを落とす。

「まったく！！本当に心配したんだぞ！！」

ユードラッドまで帰って来てから、作戦成功のお祝いに騎士団の人たちと酒場で飲んでいた。

僕は、セラに説教されている。もう何時間も……

「助けてくれたことには感謝する！！だがその後の行動は何だ！！」

楽しい気分に合わせてやろうと、飲ませたらこんな状況だ。

セラはかなりお酒が入っているので、いつも以上にエキサイトしている。酒乱だ。

セラをナンパしにきた騎士が何人かいたが、全員一睨みで追い返されていた。

「ごめん、ごめん。ほら楽しく飲みましょ！！」

「ごまかすな！！君は、いつもいつも私に変なことをして、助けてくれて、そのおああ……なんなんだ！！」

だんだん意味のわからないことを言い出した。

これはもう駄目だな……

それから数分後、セラはいびきをかきだした。

セラをおぶって帰り、宿の部屋に寝かす。報酬のおかげで今日から一人一部屋だ。僕も部屋に戻る。

今日の事を振り返ると、不可解なことが二つある。

まず一つは、あのクモだ。あのとき感じた違和感の正体は、奴がレザーみたいなのを出したことで、気付いた。

あのクモは、なぜか僕には、生物に似せた機械に見えた。機械がプログラムに沿って動いているような、そんな雰囲気があった。

もう一つは、あの声だ。セラを助けようとしたときに聞こえた、女の人の声。あの声が聞こえた瞬間、体がウソのように軽くなった。それに、どこかで聞いたことあるような……

と、考えてもしょうがないか。

今日はたくさんお金が入ったので、明日買い物に行こう。そう考えて、僕は眠りについた。

## 第12話：月夜のコンサート

僕とセラはこの前の仕事の報酬で、かなりお金持ちになった。そのため首都への旅を再開することにする。

ユードラッドの街で、割と高めの食料を買い込み、ダガーを補給した。  
準備は完璧。

「セラ、忘れ物はない？」

「ああ。大丈夫。」

よし出発……と行きたいところだが、今回は徒歩ではない。乗り合い獣車というのに乗り、首都を目指す。

乗り合い獣車というのは、バスと大して変わらない。動力がエンジンではなく、この世界の馬であるだけだ。普段ならお金がもったいなくて乗れないが、今は違う。

僕とセラを含めて十五人の乗客が、獣車に乗り込む。中は、割と広く、椅子は普通よりフカフカだ。けっこうな値段がするだけあって、豪華だ。

セラと僕が座席に座ると、すぐに獣車は発進した。

「おお。速い。」

思わず声に出してしまうほど、速かった。これから三日間この獣車で

移動する。

外を眺めるのにも飽き、隣に座るセラに視線を移すと、ノートに何か書いていた。

「それって、いつも夜に書いてるけど、日記か何か？」

「ああ。故郷を出てから毎日書いてる。」

「へ〜。僕も旅に出る前は書いてたけど、今は書いてないな〜。」

めんどくさくなくなってしまったのだ。  
セラがこつちを見る。

「のぞくなよ。」

「そんな失礼なことしません!~!」

「ふーん。君は油断ならぬからな。」

まあ実際ちよつと見たい。僕のこと書いてたりするんだろうか・・・

いつの間にか眠っていた。昼ごろに出発して、もう夕方だ。  
獣車は街道の途中で止まった。

今日の移動はここまでのようだ。

運転手のおじいさんによると、近くに湖があるそうだ。  
水を汲むついでに、セラと見に行ってみる。

獣車の止まっている位置から、林に入り、ちょっと歩くと湖があった。

水面は鏡のようで、夕焼けの空を映していた。

「きれいだなあ……」

「そうだな……」

夕食を食べ終わり、みな眠りに就く。

僕とセラは、外で寝ることにした。獣車の中は息苦しいのだ。

(うっ?)

寝ていると、なぜか目が覚めた。

セラのほうを見る。いつもと違う、かわいらしい寝顔が……  
ない!!!

一瞬で眠気が覚めた。

(セラは!?!まさか奴らに!?!?)

体内エーテルによる知覚強化をすると、何か聞こえてきた。

歌だ……

聞こえる方向は、湖のほうだ。行ってみよう。

林の中から湖のほうを覗くと、セラが歌っていた。

セラの歌は、僕の知らない言葉で歌われている。  
歌の意味はわからないが、心地よい歌だ。

僕はセラの邪魔をしないよう、木の後ろに隠れて歌を聴いていた。  
すると、突然歌が止まった。どうしたのか、と思い、湖のほうに顔を  
出すと誰もいない。

(あれ?どこいった?)

「なにをしている?」

「うおっ!?!」

後ろから声がした。振り向くと、怒った顔のセラが、仁王立ちして  
いた。

いちよう言い訳を……

「目が覚めたら、セラがいなかったから、探してたんだよ。そっ  
ちこそ隠れて歌わないで、聞かせてくれればいいのにー」

「……………練習してから、聞かせてやろうと思ったただけだ  
……………」

「えっ?」

セラが何か言ったようだが、聞こえなかった。

セラは少し赤くなって、

「なんでもない！！そんなに聞きたければ聞かせてやる！！」

おっ！ラッキー聞かせてもらえるのか。

セラが、歌い始めた。

月と星を鏡のように映す湖の水辺で歌う、彼女の姿は一枚の絵のようであった。

歌い終わったセラに、拍手を送った。

「すごい！！やっぱりうまいね！！それはなんて歌なの？」

セラは恥ずかしそうな、うれしそうな顔で答えた。

「ありがとう。歌は、こちらの言葉で訳すと、『故郷の花』かな。

「故郷の花か。ドラグルフ龍魔法の歌とはまた違うね。」

「ああ。私だって龍魔法の歌は、一つしか知らない。そもそも、龍族の中でも龍魔法を使えるのは少数なんだぞ。」

「えっ！？そうなの！？」

初耳だ。龍族はみんな使えるのだと思い込んでいた。

龍魔法が使えるセラは、龍族の中でも高位の存在なんじゃないだろうか？

そこの所の事情を、少し知りたいと思った。

「ねえ、そんなに歌がうまいのなら、故郷の人達は、褒めてくれるんじゃないの？初めて会った時は、お父さん以外に褒められたことがない、って言ってたけど……」

「いや、みな、私の歌を怖がっていたな。そもそも、聞いてくれる相手はいなかったな……」

あら？すごいテンションが落ちた。どーしょ……

「えーと……友達とかは？」

「友達は二人いたが、もう何年も会わせてもらっていない。」

どういうことだ？会わせてもらえない？

セラはこちらをしばらく見つめ、意を決したように言った。

「私は純粋な龍族ではない……人と龍族のハーフなんだ。」

はあ〜そうだったのか。

「じゃあ、あの写真の人がお母さんで人間で、お父さんが龍族なんだ。」

「そうだ。気持ち悪いだろ……」

セラは自虐的に笑った。

気持ち悪い、の意味がわからないんだが……

「えーと……何が？」

「ハーフなんだぞ！！血が混じっているんだ！！……それに、私はハーフであるがゆえに、龍族が持つエーテル共鳴声帯が異常発達している。だから、子供のころ、制御できずに暴走させたことがある。それ以来、私はずっと恐れられてきた……ハーフであること、力が強すぎることで、故郷ではそれが理由でほとんど、外出できなかった。父上が亡くなる前は、多少可能だったけど、亡くなった後からは、もう完全な監禁状態だったんだ……」

僕は驚いた。箱入りお嬢様かと思っていたら、監禁されていたなんて……

ん？なんて答えたらいいものか……

「別にハーフだっていうのが、気持ち悪いと思う理由にはならないし、力が強くて今も制御できるんでしょ？僕は別に気にしないけど……」

「うそだ！！君だって今この話を聞いたら、私と旅するのは嫌になつたはずだ！！」

セラは、怒っている。瞳には、いつもは感じられない、敵意がある。僕は真面目な顔をした。

「本当だよ、セラ。ここは、龍の国じゃない。龍の国の常識がこの世界の常識というわけじゃないよ。この世界には、ハーフだ、という理由で君を嫌う人は、あまりいないと思うよ。」

僕は旅に出る前何度か、ウエアキャット猫人と人の混血を見たことあるが、別に迫害されているわけではなかった。それに僕は、異界人だ。この世界の常識を学んだけど、その常識が身についているわけではない。

「でも、でも私は……」

まだセラは、納得してくれない。  
よし！それなら

「セラが自分の秘密を話してくれたんだから、今度は僕の秘密を話そう。僕はね、この世界の人間じゃないんだ。異界人といわれている。」

「イカイ……ジン？」

「そう。異なる世界の人。」

さっきまで怒っていた顔は、驚きに塗りつぶされている。

「本当なのか？」

「まあこんなこと、いきなり言っても信じないだろうけど。前、セラに貸した服、あれが唯一の証拠かな。」

「あれが……そうか、だから大事にしていたのか……」

セラは、一応信じてくれるのかな？

「それで、僕が言いたいのは、世界にはいろんな人がいる、ということだよ。僕みたいな、変な存在の人もいれば、セラを悪く言う人がいるかもしれない。でも、セラの歌が気にいる人もいるんだよ。僕とか。」

セラは、ぼーっとして僕のことを見ていた。  
まだ、だめか？

「ええっと、だから僕にとって、セラは気持ち悪いと思う対象じゃない。セラは、ちよっと力が強くて・・・ちよっと？あ、いや、ちよっとですよね！！・・・歌がうまい女の子だよ。一緒に旅をしていて、楽しい仲間だ。」

おお！僕、いいこと言った！！でも、よくよく考えると、すごい恥ずかしいことを言っているような・・・  
うあ！顔が熱くなってきた！！

ぼーっと僕を見ていたセラは、くすくす笑い出した。

「かつこいいこと言ったのはいいが、顔が真っ赤だぞ。フフツ」

「ああー！！わかってるよー！！」

あー恥ずかしー！！  
でも、よかった。セラに笑顔が戻った。

「ユウ。ありがとう。君の言葉には、いつも元気づけられるよ。」

そう言い、にっこり笑ったセラの表情は、今まで見た中で一番の笑

顔だと思った。

### 第13話：セラの日記（1）

銀龍のセラ、本名セラ S・D・《シルバードラゴン》ライノスは日記を書いていた。

現在は、旅の仲間であるユウとともに、乗り合い獣車に乗り、首都へと移動中だ。

明日の午後には、首都に着くそうだ。

隣に座るユウは、さっきから、口を開けて寝ている。

（バカな顔してるなー）

彼の顔を見ていると、昨日のでき事を思い出した。

彼は、私のことを仲間だと言ってくれた。

その言葉を聞いた時、私の中にはとても大きな喜びと、よく理解できない温かい感情があった。

そして、しばらくの間、彼の顔から目が離せなかった。心がとても振るえていた。

（私はあの時、感動していたんだろうか？）

よくわからないな。

そこでようやく、自分がユウの寝顔を、じっと見ていることに気づいた。

少し恥ずかしくなって、目をそらした。

暇だし、ユウが寝ているなら、少し自分の日記を読み返してみよう。

大陸暦1999年

3月2日

私が、監禁されてから2年がたった。つまり、父上が亡くなって2年だ。

監禁と言っても、自宅はとても広いうえに、近くの公園程度なら出ていける。

だが、会える人は限られている。

父上の片腕として活躍していた、ノクス S・D・カンドス、

父上の古い友人である、ジョフ F・D・《ファイヤードラゴン》

ガイエン、

世話係でジョフの娘である、ミリス F・D・ガイエンだけだ。

窮屈だが、普通に暮らすだけなら不自由はなかった。

一か月前、父上の遺品の机に、手紙が隠されていることの気づいた。それは、私に宛てた手紙と、母に宛てた手紙だった。

私への手紙には、自分が先に逝くことへの謝罪と、困った時はノクスさんとジョフおじさんを頼れ、というものだった。

もう一つの母への手紙は、開封していない。

私は母にあったことがない。母は、私が生まれてすぐ龍の国を出たらしい。

その母への手紙だ。できれば、会って手渡したいと思った。

私は、龍の国を出ることを考え始めていた。

ノクスさんは、人間嫌いであるため、反対した。

ジョフおじさんは、私の考えに感心して、大陸公用語のフェイタル語を教えてくれた。教え方にとっても問題があったが……

ミリスは何も言わなかった。いつも通りだった。

明日は出発する日だ。

今日ノクスさんは、人間を信用するな、という忠告と、母の写真を手渡してくれた。  
この時初めて、私は母の顔を知った。母の写真はどこにも残っていないかったのだ。

明日に備えて今日は、早く眠ろう。

3月3日

うまく、だれにも見つからず、脱走することができた。  
地上に降りた私は、現在位置を確認した。  
近くの街を回り、情報を集めて行こう。

3月20日

これまでいくつかの街を回ったが、やはり簡単に情報は手に入らない。

写真一つでは、やはり大変だ。  
だが諦めるつもりもない。  
明日もがんばろう。

4月1日

前から感じていたのだが、街にいらるとよく視線を感じる。  
自分はどこがおかしのだろうか？  
やはり、混血である私はどこか違うのだろうか？  
不安を感じる。

4月5日

用意していた、お金が少なくなってきた。  
どうしようか。

最近、妙な気配を感じる。

用心しておこう。

4月8日

昨日、私は襲撃された。

とても練度の高い黒い服装の兵士たちだった。

手強い相手であったため、私は龍化した。服を脱いでいる暇がなかったので、服は駄目になってしまった。

兵士たちを、何とかしのいだ時、私を見る視線に気がついた。

その視線の先には、木のとっぺんに立つ少年がいた。

視線には敵意も、恐れも、嫌悪もなかった。純粹に感動しているよ  
うな眼だ。

その眼を眺めていた私は、油断してしまっていた。

兵士たちの生き残りに、地面に引きずり倒されてしまった。

その後、先ほど見ていた少年が助けに来てくれた。

ノクスさんに、忠告を受けていたため、最初は信用できなかったが、  
話してみると悪い人と感じられなかった。

私の歌を褒めてくれた。とてもうれしかった。

彼の名は、ユウ キリシマというそうだ。不思議な響きの名だ。

彼の言葉に乗せられて、私は一緒に旅をすることになった。

首都まで、という条件付きだ。

実際、それほど嫌ではなかった。

一人でいることが、少しづらかったのだ。

4月10日

ユウと旅を始めて、いろいろ戸惑うことがある。

ユウは少し変だ。いや、かなりか？

私をからかったり、変な行動をしたりする。

故郷のジヨフおじさんに通じる部分がある。

陰湿ではないので、殴って、許してやっている。

こういう旅も面白いと感じている、私がいる。

ユウには、絶対言わない。つけあがりそうなので。

4月20日

ゆっくりしたペースの旅だが、ユードラットについた。

この街で、ユウに服を買ってもらった。

服を買ってもらったのは、初めてで浮かれてしまった。

ユウに、かわいい、と褒めてもらった。

恥ずかしかつたが、こういうので褒められたのは、初めてだったので、内心うれしかつた。

まあ、絶対言わないが……

4月22日

昨日、魔物との戦いで、またユウに助けられた。

助けてくれたことには感謝するが、その後の行動が許せんー！！

人が心配しているのに、私の胸に顔を押し付けてニヤニヤしてやがったー！！

ぼくぼくにしてやった。

その後、酒場で酒を飲んでからの記憶がない。  
ユウは、疲れた顔で、もう飲まないでくれ、と言っていた。  
なにがあつたんだ？

そこで日記を読むのをやめた。  
ユウが目を覚ました。

「おはよー。また日記書いてるんだ？」

ユウが声をかけてきた。

私は、彼に日記を見られないように閉じた。  
見られると恥ずかしい内容が多い。

「もう昼だ。よく寝るな、君は。」

「僕は乗り物に乗ると、すぐ眠くなるタイプなんだ。」

そう言つて、彼は私の日記に目を移した。

「ねえ、その日記ちょっとみ……」

「ダメだ。」

ユウが言い終わる前に言った。  
当然だ。

「シヨボーン……」

何やら意味のわからないことを言って、落ち込んでいる。

さっき日記を読み返してみても、やはり私は変わったのだと思う。

ユウと出会い、旅をすることで、私は変わったのだ。

昔の自分より、今の自分のほうが、少し好きだ。

明日、首都に着く。

その時が、ユウとの別れの時だ。

そう考えると、自分の中の何かが疼く。

（私は狙われている。これ以上、ユウを巻き込みたくはない。）

そう、自分に言い聞かせる。

別れの時は、近づいているのだ

## 第14話：男のロマン、再び

もうすぐ首都に着く。

僕は、獣車の窓から身を乗り出し、首都のほうを見た。首都の上空には、飛空艇が飛んでいる。

飛空艇とは、この世界の航空機だ。

船の形をしており、ボルトノ鉱石というものを動力とし、エーテルを反射することで浮力と推進力を得る。

僕の世界の航空機と違って、スピードはないが、船の形であるため大きく、多くの物が運べる。

カスロア首都ペルトは、広大な湖、フロリア湖に面しており、湖には多くの飛空艇が着水している。

その景色はとても壮大で、しばし見とれてしまった。

獣車が乗り場に到着した。

僕とセラは、獣車を降り、中央通りまで来た。人が多い。さすが首都！

「やっとついたねー」

「……………ああ。」

なんかセラの元気がないような気がする。

さて、僕はこれから国立図書館に行って、異界人について調べてみよう。

セラはどうするのかな？

「セラはこれから……」

「ここでお別れだ、ユウ。そういう約束だったからな。」

「ちよっ、ちよっと待った！そんな急いで別れなくてもいいだろー？」

「首都までと言った。」

なんか拗ねたような口調だ。

相変わらず頑固だ。んーどーしよ。

僕が考え込んでいると、セラはさっさと歩きだした。

あわてて僕はセラに伝えた。

「僕は国立図書館にいるから、何かあったら来てよ！そっちは？それぐらい聞いてもいいだろ？」

「酒場とかで、情報収集。」

セラは歩みを止めることなく、答えた。すぐに人ごみに紛れて見えなくなった。

（せっかちだなー。何か心配だから、後で探しに行こう。）

セラは、外套を着てフードをつけているが、目立つ。探せば見つかるだろう。

そう考え、国立図書館に向かった。

~~~~~

国立図書館は、誰にでも入れられるようになっていた。さすがは学術都市！

中に入ってみると、本の多さに驚いた。

本棚は、どれも僕の身長の上二倍以上ある高さだ。そうした本棚がどこまでも続いている。

「うわ〜……この中からどうやって捜すんだ？」

僕は途方に暮れてしまった。

とにかく、図書館の職員の人に聞いてみることにする。受付みたいな所にいる女の人に聞いてみた。

「あのすいません。異界人についての本を探しているんですが……」

「イカイジンですか？……少々お待ちください。」

そう職員さんが言うと、何かの結晶のようなものを操作した。タッチパネルみたいだが……

僕は思わず聞いてみた。

「それ何なんですか？」

「はい？……ああ、これは記憶結晶メモリーブロックという、ペルード魔法学院で新開発された技術です。情報を記憶させることができます。」

すごいな。僕の世界に負けてないなー、この技術。

それにしても学校か……

僕は何となく自分の通うはずだった、高校を思い出していた。僕が昔を思い出していると、職員さんが本を見つけたようだ。

「ありました。二階、IG列、31番、133-12の本棚に異界人についての本が集められています。」

なんじゃそりゃー！！本棚までたどり着けるのか……？

職員の人に礼を言い、二階に昇る。

30分ぐらい探し回り、ようやく発見した。

(っ、疲れた……)

本の種類は少なく、20冊ぐらいだ。あまりにも大量の本に囲まれているので、20冊程度でも、少なく見える。

正直、僕は本を読むのは嫌いではない。でもこの量は……しよーがないので、一冊手に取ってみる。

『空間転移の可能性』

うわっ！！読む気失せた！！題名からして固い！！

だが我慢だ！

ペラペラめくると、数式みたいのが書いてある。

目次で寝るわ！！

違う本をとる。

『異界人とこの世界の成り立ちについての仮説』

これは大丈夫そう・・・すごい、字ばかりだ・・・言葉を読むとき、読み書きも習っているので読めることは読める。頑張って読むことにした。

『異界人の存在は、はるか昔から確認されている。最近では、20年前の魔物の大量発生によって起きた「魔王戦争」時、数人確認されている。』

また、10年前のシグルド帝国トリスタン皇帝の暴虐によっておこった、「サガルバフ内戦」で一人確認されている。』

へー結構いるんだな、異界人。この10年前に現れたって人が、おっさんがよく話す異界人の人かな？

少し飛ばしながら、読んでいく。

『そこで一つの疑問が出てくる。この異界人という存在は、一体どうしてこの世界に来たのか？自然現象によるものか、それとも何か人為的なものなのか？』

人為的？そんなこと、できるやついるのか？神様とか？そう言えば、僕はこの世界に来ることになった瞬間の記憶がない。

これはどういうことなのか・・・？さっぱりだな。考えてもわからない。つづきを読む。

『この世界には、多種多様な人種がいる。人、エルフ、ドワーフ、等々10種類以上だ。これはおかしくはないだろうか？これほど多種多様な人種が、普通存在するだろうか？』

おかしいのか？よくわからん。

『ここで私は、一つの考えにいたった。この世界の住人の祖先はすべて、もともと異界人であったのではないか。そう考えると、この人種の多さに、納得できる。』

この世界の人たちが、もともと異界人？そんなことありえるのか？

『この仮説を証明する上での証拠として、龍族の存在が挙げられる。』

龍族！？なんで龍族がでてくるんだ！？

『龍族の存在が確認されたのは、300年前。それ以前には、どんな文献を探しても龍族は現れない。つまり、龍族は300年前に、突然この世界に現れたことになる。』

これは、龍族が異界人としてこの世界にきた、という証明にならないだろうか。』

龍族が、セラが、異界人？いや、セラは異界人の末裔ということになるのか？

ホントかよ？この本の著者を見してみる。

シングルド帝国特殊エーテル技術研究機関「ラファエロ機関」異界転送技術研究員 モルドス ライツ

帝国の人か……この人に会えないかな？

次の目的地は、帝国にしようか……

もう昼食の時間だ。

よし！今日はここまでにして、どこかで昼食を食べるついでに、セ

ラを探してみよう。
龍族についても、聞きたいことがある。

僕は中央通りの看板で道を探す。首都だけに広い。
酒場などが多い、歓楽街を探す。アルプス通りという所が、歓楽街
のようだ。

アルプス通りに向かっていく途中、

ドカツ!!

という、爆発音のような、何かを破壊するような音が聞こえた。
何だろ？

近くにいた、若者達の会話が聞こえてきた。

「おい!!^{ファイター}氣闘士同士の喧嘩らしいぜ!!片方はすっぱー美人だ
つてよ!!」

「おもしろそうだな!!見に行こうぜ!!」

片方が美人・・・氣闘士同士の喧嘩・・・
ああ・・・すっごい嫌な予感がする・・・
僕はさきほどの破壊音のほうに急いだ。

~~~~~

そこは、酒場だった。昼は定食屋で、夜は酒場としている店のよう  
だ。

店の名前は『二二ギ亭』というようだ。  
その店には、いくつか穴があいている。ちょうど人が通れそうなくらいの大きさだ。

店の前の通りに、一人、男が倒れている。店の中から、ぶっ飛ばされたんだろ。かわいいそー。

僕は、野次馬をかき分け店の中に入る。

そこには予想とは違う光景があった。

店の中はぐちゃぐちゃで、壁にめり込んで、気を失っている男が二人。ここまでは予想通りだ。

予想外なのは、セラのことだ。いや、ここにいることは予想の範囲内なんだが……

セラは、店の真ん中で正座させられ、店長と思しき黒髪のお姉さんから、説教を受けていた。

「あんた、この状況どうしてくれんの？」

「いや、その、申し訳ありません……」

「まあ、あんたに絡んできた男どもが、しつこかったのはわかるわ。だけどやりすぎじゃないか？」

それはそうだ。セラにしては、この状況は少しやりすぎな気がする。セラは冷静なほうだ。

「それはその……少し気が立っていて……」

「ふん。それは、なんで？」

「えと、その、さっき仲間と別れて・・・本当は別れたくはなかったけど、そうしないと・・・」

ん？僕のこと？もしかしてセラは、あのまま僕と合わないつもりだったのか？

「それ、男？」

「え、は、はい。」

「恋人？」

「ち、違います!!」

そこまで強く否定しなくても・・・男の子は繊細なんだぞー。

「その仲間ってのは、そこで隠れている男のことかい？」

お姉さん、こっちに気づいてたのか！

セラも僕がいることに気づいた。うわ！こわっ!!めっちゃ怒ってる!!

しよすがなく、僕は二人の前に出て行った。セラがすごい低い声で声をかけた。

「いつからいた？」

「さ、さっき来たところです!!」

「本当か？」

「本当です!!」

顔は怒っているけど、すごい赤い。ふふふ、かわいいですよー

「で、この状況、あんたが何とかしてくれんのかい？」

店長のお姉さんが聞いてきた。

「あ、はい。弁償します。」

「いくら持つてるんだ？」

「2000R×ぐらいです。」

この前の依頼で、僕とセラが得たお金の残りだ。

「へえ、結構持つてるんだねえ。じゃあそれで許してやろう。」

「ちょ、ちょっと待った!何で君が払うんだ!?私がやったことだ!私が払う!」

「あなたは、黙ってなさい。」

「うつ……」

セラが割り込んできたが、店長さんが速攻で黙らせた。すげー

「セラ。これは君の分のお金も入ってるんだからいいだろう?」

「うっー」

持っていたお金を渡す。

「はい。確かに受け取った。でも、このままだと君たち困るんじゃないのか？」

まあ、確かに困る。クエストショップ依頼請負屋でも探すしかない………ん！？

そこで僕の眼に、この店のウエイトレスの人が入った。メイド服！！しかもスカートみじかつ！！すばらしい！！ここで僕がすべきことは――――

「セラ！ここで働かせてもらったらどうかな！！」

「な、何だ急に？」

「どうですか、店長さん！！」

「ん？ああ、なるほど……まあ、いいんじゃないか。こんな美人がいたら、うちも繁盛するねえ」

僕の真意を瞬時に理解した店長のお姉さんは、同意してくれた。グツジョブ、お姉さん！！

「あ、はい！そちらがよろしければ、お願いします！」

よし！セラも了解した！

「じゃあ、明日から働いてもらつよ！私はこの店長をやってる、ユウラだ。よろしくな。」

僕とセラは、自己紹介した。従業員は住み込みで働かせてくれるので、セラはこのまま『ニニギ亭』に泊めてもらえるそうだった。その後、店の片付けを手伝った。

もう夕方だ。

僕は宿を探しに、店を出た。宿に泊まれる分のお金は返してもらった。ユウラさんは、結構いい人だ。

それにしても、ん〜セラのメイド服姿が楽しみですなー

「ユウ、待ってくれ！」

店からセラが追ってきた。

「すまない……また君に迷惑をかけた。もう会わないつもりだったのに……」

「この前言っただろー。僕はセラのこと仲間だと思ってるって。気にしなくていい。それから、もう会わないって、なんで？」

「もう、巻き込みたくなかったんだ……」

「セラは気にしすぎなんだよ。もしかしたら、もう狙われてないかもしれないだろ。」

「でも……」

セラは、泣きそうな顔だ。

「じゃあ、首都にいる間は、気にしないことにしよう！ねっ！」

「ん。わかった。ありがとう。」

鼻をぐずぐずいわせながら、セラが言った。

うん、うん。素直なセラも、かわいらしいね！！

そのまま、宿を探すためセラと別れた。

こうして、セラは酒場『ニニギ亭』で働くことになった。

僕は、依頼請負屋で依頼を受けてお金を稼ぎ、図書館でもう少し異界人について調べようと思う。

第15話…ドワーフのチロ（前書き）

## 第15話：ドワーフのチ

白い空間だ。

僕は今、真っ白な空間に立っている。

(これは、夢か?)

夢にしては、はっきりしすぎているような気がする。

僕がキヨロキヨロと見回しているよ、

「こんにちは。」

後ろから声がした。

振り向くと、真っ白な少女がいた。

髪も、肌も、着ているドレスのような服も、すべて白い。

だが、瞳だけは血のように赤い。

「あー……っ、こんにちは。」

とりあえず挨拶を返す。

夢なのに知らない子が出てきたぞ。

しかし、この声どこかで……

「ひさしぶり。こうして顔を合わせるのは、二年ぶりになるわね。」

「二年ぶり？す、すみません。どこかで会いましたか？」

全く覚えがない。こんなきれいな子、会っていたら忘れないはずだ

が………  
二年前………二年前!?

「まさか、僕がこの世界に来た時に、会ったんですか!？」

「そうよ。あなたは、まだ思い出せていないのね……。大丈夫、もうすぐ思い出すわ。」

「僕はなぜこの世界に来ることになったんですか!? 教えてください!?!」

「それは、また今度ね。あまり長くは話せないの。今回は顔を見に来ただけだから。私は、イヴ。覚えておいて。」

イヴ………やっぱり知らない。  
この人が僕をこの世界に連れてきたのか?

「あなたとの線が構築できたのは、つい最近だから、まだ安定してないの。それに長居していると気づかれる可能性が高いの。」

少女は少し焦っているようだ。

「もっと強くなって、ユウ。そうすればこの前の戦いときみたいに、私が助けてあげられし、線が安定する……。あーまずい!?!  
やあね!?!」

そう言うと、少女は次第に薄くなり消えた。  
そして、僕の意識は急速に覚醒した。

目を開けると、天井が見える。

僕が泊まった宿の天井だ。

夢の内容は、覚えている。どうやら僕は過去に、あの子に会っているらしい。

覚えてないな……あっ!!

「そうか!あの子の声、どっかで聞いたと思ったら、魔物の時の!!」

セラが魔物に狙われて、助けに入ろうとした時に聞こえた声、あれはあの子の声だったような気がする……

まあ、あんまり覚えてないから、何となくそう思う。もしかしたら違うかも……

それにしても、あの子の言った言葉の意味はよくわからない。うーん……

(はっ!!そんなことよりも今日は、セラが働き始める日ですよ!!すぐに見に行かねば!!)

というわけで、身支度を整え、セラの働く『ニギ亭』に向かう。

生きててよかったー!!

セラは、メイド服だ。

それも、スカートがとても短い。生足グッド!!

普段から軽装であるセラだが、スカートからのぞく足は、また別の素晴らしさがある!!

ほー眼福である。

「この店で働くことを勧める理由はこれだな、ユウー!!」

セラは顔を赤くして、照れている。  
ほー眼福。

「なんとか言え!それから、その不気味な顔をやめろ!!」

不気味とは失礼な!だが許す!

眼福じゃ!!

僕とセラがじゃれていると、『ニニギ亭』店長のユウラさんが声をかけてきた。

「まあ、落ち着きなよ。ユウ君、朝食、食っていくかい?」

「はい。いただきます。」

朝食をいただく。運んでくれるのは、セラだ。

ぶつ飛ばす、とか、あとで覚えている、とかつぶやいているが、聞かなかつたことにする。

さて、僕はこのあと依頼請負所<sup>クエストショップ</sup>で、仕事を探す。

現在、僕は一文なしだ。この食事もツケだ。

これぐらいおごってください、ユウラさん。

朝食後、

「じゃあ、僕は依頼請負所<sup>クエストショップ</sup>いつてくるね。セラもがんばって。お客さん殴らないよーに。」

「君に言われなくても、しっかりやる。そっちこそへマをするな

よ。」

さて、行こう。

依頼請負所についた。首都にあるだけあって、大きい建物だ。中に入る。まだ、あまり人は来ていない。掲示板に貼られている依頼の数も多い。

（どの依頼にしようかなー。できれば高額なのが・・・でも危ないのはなー・・・）

そうして、依頼を選んでいると、大きな声が聞こえてきた。どうやら受付のほうだ。

視線を向けると、受付の台の前で飛び跳ねている子供がいる。その子供は、体格とは合わない、大きなリュックを背負っており、リュックからは槍か何かの柄が飛び出している。受付のおじさんと会話しているようだ。

「まだ、依頼を受けてくれる人は、いないんです!?!」

「ああ。そんな報酬で受けられる、人のいい奴は滅多にあらんからな。」

どうやらあの子供は、依頼主で依頼を受けてくれる人がいないようだ。あんな子供でも依頼を出せるんだー、と感心していると、その子の大きな瞳がこつちを向いた。

なんかやばい気がする。すごい期待に満ちた目でこっちを見ている。すぐに視線を外し、掲示板で依頼を探す。

「お兄さん！この依頼なんてどうでしょうか？」

さっきの子供が、僕の後ろに来て言った。しょうがなく振り向く。近くで見ると、かわいらしい顔をしている。

栗色の髪をおかっぱにしており、瞳は髪と同じ色をしている。女の子だな。

「えーと・・・僕に言ってるのかな？」

「はいです！！いかがです？」

少女の持っていた依頼書を受け取り、中身を確認してみる。

依頼は「プラスドッグの牙を8本採取」。

報酬は・・・・・・・・・・20RX・・・・やすっ！！

プラスドッグというのは、大型の犬だ。大きさは僕の世界の犬なんかより断然でかく、凶暴だ。群れで行動し、群れのボスクラスは乗用車並みにでかい。

結構危険な相手だ。それを、この報酬の少なさじゃ誰も受けないだろう。

「悪いけど・・・この安さはな〜・・・そもそも君みたいな子供が、なんでこんなもの必要なの？」

「こ、こ、子供じゃないです！！背が低いのはドワーフだからです！！もう20歳になった大人の女性でしゅ！！」

少女は顔を真っ赤にして、まくし立てた。  
でしゅ、って怒りで最後のほうは囁んでる。

「ああ、ごめんなさい。ドワーフ族の人でしたか。」

ドワーフ族とは、エルフの国ルーナルドに多く住む、優秀な魔法クリエ技師イタ一族だ。ドワーフの特徴は、背が低いことと、力が強いことがあげられる。

「もういいです。依頼は受けてくれま……うおおお!!」

び、びっくりした！いきなり少女が、先ほどまでの声よりも低い声を出して、叫んだ。

そして僕の着ている黒いコートを凝視した。  
何なんだこの子？

「お、お兄さん。そのコートどこで手に入れましたか!!」

「ああ……僕の先生が特注で作ってくれたらしいけど……  
何かあるの?」

「これは私の兄の作品です!!相変わらず素晴らしい技術です!  
!おおーエルメト銀系で防御術式が織り込んであります!!」

少女は興奮した様子で、僕の周りをぐるぐる回り、コートを眺めている。

どうやらこの子も、魔法技師のようだ。

「ええっと……落ち着け。」

少女の頭を軽く殴った。

「はうっ！はっ、すみません！取り乱しました！兄は行方不明でして、心配してたんです。でも、こうして魔道具を作り続けているのを知れて、うれしいです。ありがとうございますです。」

「はあ、どういたしまして。」

「ところで、依頼受けてくれませんか？」

んーさすがにこの報酬じゃあなー……………  
あ、そうだ！この子が魔法技師なら……………

「ねえ、その報酬に上乘せとして、魔道具作ってくれないかな？」

「えっと、例えばどんなものがいいです？」

「そーだなー……………ライトスタッフ簡易詠唱杖とかつくれる？」

簡易詠唱杖というのは、その名の通り詠唱師達キャスターが使う詠唱杖の簡易版だ。

杖という名前だが、杖の形ではなく、手のひらに乗るぐらいの大きさである。

スベル大気術を使うことはできないが、体内エーテルを炎や、雷撃に変換することができるため、武器に仕込んだりするものが多い。

「はい！材料はあるので、できます！作ったら、やってくれます？？」

「うん。じゃあ、受けようかな。」

「ありがとうございます！やたー！」

少女が飛び跳ねて喜んでいる。

これで、20歳なのだから驚きだ。

「私、チコって言います。よろしくお願いしますです！」

「僕は、ユウ。よろしくー。」

かわいらしので、頭をなでてみた。

「ふお！な、なんで頭なでてるんです！？子供扱いしないでくださいっ！！」

ほー、こーゆうのもなかなか。

こうして僕は、チコの依頼を受けることになった。

「いつまでなでてるんです！！」

怒られた。

## 第16話：あっちいけわんわん！！

首都ペルルト近郊には、森がある。

フロリア森林地帯と呼ばれている。動植物が豊富な広大な森だ。  
クリエイク魔法技師達にとってこの森は、魔道具の材料の宝庫である。

「ほんとに一緒に来るの？」

「はい！報酬少ない分お手伝いしますです！そのコートの性能を見てみたいですし！」

フロリア森林地帯の入口についた。

依頼主のチコがついてきている。ついてくるぐらいなら自分で探しに来ればいいのに・・・  
手伝いより、コートの性能見るのが目的だな。

「危ないかもしれないよ？」

「こーみえても、今まで長いこと旅してきました！ドワーフの秘伝で、ばっちりお助けするです！」

「自分で採りにきたらいいのに・・・」

「さすがに、一人でブラストッグを相手にするのは怖いんですぅ」  
「」。

まあ、確かに。依頼は、牙を8本採取だ。一匹に牙2本だから、少なくとも4匹と戦わなくてはならない。

しかも、ブラストッグは群れで活動するため、運が悪いと4匹以上

と戦わなくてはならなくなる。  
僕も少々不安だ。

「じゃあ、手伝いよろしくね。危なくなったら逃げていいからね。」

「はい！おまかせください……うおおおおー！」

ひいつー！またかー！

どうやらチコは魔道具に目がないらしく、たまに暴走する。  
さっきはコートだったが、今回は僕の左腰に差してある刀に目がいっている。

「ゆ、ユウさん！どこで！その刀！」

文章が無茶苦茶ですよ。

「これも先生からもらったものだけど……」

「ユウさんの先生はふとっばらですね！これは、鬼族の作品です！銘はなんですか？」

「ええつと『銀月華』だけど……」

「銀つ……！？す、すげえ……」

な、なんかキャラが変わってるよ……

鬼族というのは、東方の国ヤマトに住む種族だ。ドワーフと同じく優秀な魔法技師クリエーター一族として知られている。

魔法技師といえば、西のドワーフ族、東の鬼族、とよく言われる。

「そんなすごいもの、これ？まあ、確かに使いやすけれど……」

「すごいってもんじゃないです！『銀』が銘についているということは、鬼族の名工、村井 銀次郎の作です！名作中の名作ですよ……」

「へ、へ……」

すごいのか？そもそも、これをくれたおっさんは、何者なんだ？自分の師匠ながら、よくわからない所が多い。

「ユウさんはすごいですね。」

「なにが？」

「貴重で、すごい作品ばかり持ってます！兄はあまり多く魔道具を作るタイプじゃなくて、すごい作品を一つずつ作るタイプですし、鬼族の魔道具はあまり西側には流通しません。しかも、名工の作品です……いいな……いいな……」

いいな……って、かわいらしいな……うんうん。

それにしても、自分持っているものは、以外とイイものだったんだな……。

森の中を進む。

僕は、なんとというか、ピクニックに来た子供の保護者の気分を味わっていた。

僕の前を歩くチコは、スキップしている。たまに走り出して、自生している薬草を摘んで、背負っているバカでかいリュックに入れる。結構、凶暴な動物がいたりする地域なので、勝手に走りだされるとハラハラする。

「おおーい、チコ。あまり先に行くと危ないよ。」

「はーい!!」

僕は完全に保護者ですね。

ん……？なんか大気エーテルが少し乱れているか……？

「やばいつ!! 囲まれたっ!!」

瞬間的に体内エーテルを操作、身体機能を強化する。

高速移動で、チコがしゃがんで薬草を取っているところまで移動。

「ふぁ？ユウさん、どうか……わっ!？」

チコを抱えた瞬間、前後左右の草むらから黒い影が飛び出してきた。

脚力強化による高速移動で、地面を這うような低い姿勢で回避。

さっきまでチコがいた場所には、5匹の黒い獣が降り立った。

獣の瞳には、強い殺意があり、体毛は黒く、口には長い牙が2本ある。

ブラストッグだ。

5匹か。どうにかなるか……？

片腕で抱えたままのチコに声をかける。

「チコ、平気？」

「は、はい！降ろしてくれていいです！私のことは気にせず、がんばってください！お手伝いしますでふ！か、かんだ！」

「ん。ありがとう。」

5匹が連続で攻撃してくると厄介だ。先制で数を減らす！！  
抜刀、刀にエーテルを徹し、斬れ味と頑丈さを増幅。

アルベイン流 戦刀術 ニノ太刀 『天衝烈破』

一ノ太刀『天衝破』は斬撃によってエーテル衝撃波を飛ばす。  
ニノ太刀はこの技の強化版で、衝撃波を同時に3発放つ。

ドカツ！！

衝撃波がブラストダッグがいた地面をえぐり、爆発した。

2匹巻き込んだが、3匹は分散するように動き、回避した。

「ちっ！！」

一匹が右から跳びかかって来た。チコが近くにいるから、回避できない。

チコを目標にされるとまずい。

跳びかかって来た瞬間に、ブラストダッグの下にもぐりこみ、腹を蹴り飛ばす。

キャウンッ！！

よしっ！

だが、たたみかけるように、2匹目と3匹目が来た。

「ほいつ！！」

なんか気の抜ける声を、チコが出した。

チコのほうを見ると、いつの間にか、手にすぐくでかいハンマーを待っている。

チコの体とほぼ同じ大きさだ。

リユックから飛び出していた、槍の柄みたいなのはハンマーだったのか！！

チコのフルスイングのハンマーが直撃した。

ポゴンッ！！

肉を打つ音と共に、プラスドッグが回転しながら飛んで行った。

そーいえばドワーフ族は、腕力がすごい強いんだっけ……

跳びかかって来たもう一匹には、僕がカウンターで顔面に左フックをいれ、失神させた。

ふうー、なんとかなったー。ちょっと危なかった……

「チコ、お手伝いありがとう。すごいね、そのハンマー。それが、ドワーフの秘伝ってやつ？」

「はい！！ドワーフ秘伝のひとつ、撲殺術ハンマーアーツです！！それにしても、  
ユウさん以外と強いんですね。驚きました・・・はっ、すいませ  
ん！！以外とは失礼でした！しゅいません！！」

「いいよ、別に。まあ強そうに見えないのは、自覚あるからねー。」

「むしろ弱そうに見えたほうが、油断してくれるので、都合がいい。  
まあ、それは置いて、」

「チコ、牙の採取は？」

「あっ！そうでした！」

チコは倒れているブラスドッグから、牙を採取し始めた。  
ブラスドッグが復活した時のために、抜刀状態のまま警戒を怠らな  
いようにする。

「採取おわりましたー！」

「よーし！じゃあ帰ろうか！家に帰るまでが遠足ですよ」

「はっい・・・ってなんで遠足なんですか！？」

さて帰ろう、と思い、刀を納刀しようとした時、大きな大気エーテ  
ルの乱れを感じた。  
何かでかいやつが来る！！

僕とチコの位置から10メートルほど前方に、木をなぎ倒しつつ、

大きな物体が現れた。  
ブラスドッグだ。でかい！！乗用車ぐらいの大きさをしている。  
さっき倒した奴らのボスか！！

「やばい……」

「わ、わ、わわわ……」

これはまずい。ボスクラスになると、僕とチコだけだと危険だ。  
無理すれば勝てるかもしれないが、今無理したところでメリツがない。

「チコ。僕が仕掛けたと同時に、町まで逃げて。」

「そ、そんな！！ユウさんはどうするんですか！？」

「いいから！君のことを気にしながら戦っていられる相手じゃない！！」

「で、でも……」

「行けっ！！」

ボス犬がこっちを見た。獲物として認識されたようだ。

グルルル……

チコを標的から外さない！！

僕はチョコと離れるように走り出し、左手でコートの中からダガーを二本取り出す。

エーテルを徹して、二本同時に投擲。

風を切り裂くような音を出しながら、ダガーは直撃した。

キキンッ！！

、という金属がぶつかり合うような音がした。

「なにっ！？」

体毛にはじかれたようだ。

僕の投げたダガーは、エーテルを徹してあるうえに、身体強化した腕力で投擲されている。

岩盤に突き刺さるぐらいの威力はある。

それをはじいたのか！？なんて硬い体毛だ！

今の攻撃でボス犬は僕に狙いを定めた。

巨体に似合わぬスピードでこちらに接近、前足を振り上げて、跳びかかって来た。

僕は強化された知覚によって、紙一重で見切り、体をずらした。

すさまじい速さで、僕の目の前をボス犬の前足が通りすぎた。

ドガンッ！！

という音と共に、地面にボス犬の前足が突き刺さった。

その無防備な前足を斬りおとす！！

刀に限界までエーテルを徹し、無防備な前足に向かって振り下ろした。

「ぶっつっ!!」

ギンツッ!!

これでも刃が通らない!?

ボス犬は、突き刺さっていない方の前足を振り上げている。

すかさず、バックステップで距離を稼ぐ。

ボス犬の攻撃をかすめ、髪の毛が数本吹き飛ばされた。

あぶない……

刀では無理だな……体毛が硬すぎる。

打撃で勝負するしかない。

衝撃を体内に浸透させる内部破壊か、脳を打撃で揺らして失神させるか……

どちらにしてもかなり接近しなくてはならない。

さっきはうまく避けれたが、次もうまくいくとは限らない。

多少のケガは覚悟しなくては!

そう考え、ボス犬に接近しようとした瞬間

「ユウさん!!そいつの動きを止めてください!!」

「チコ!?何で逃げてないのっ!?!」

「いいからっ!!そいつの動きを止めてください!!私が何とか

します！！」

あー言い合っけていてもしょうがない！  
動きを止めればいいんだな！

ボス犬が再び跳びかかって来た。今度は避けない。  
直撃の瞬間を見極める！！

アルベイン流 格闘術 五式 『剛体陣』

体内エーテルを全身から瞬間的に放出することで、敵の攻撃をはじく技だ。

バアンツ！！

振り下ろされたボス犬の前足をはじいた。  
その際に、発砲によってボス犬の顔面に向かってエーテルを射出。  
効きはしないだろうが、動きは止められる！！

キャウンツ！！

ボス犬がひるんだ！

「止めたぞっ！！」

「了解でふっ！！ほいつ！！」

掛け声とともにチコはガラス瓶のようなものをボス犬に向かって投げた

噛んでるし、気合いの抜ける掛け声だが……

チコの投げたガラス瓶は、ボス犬の鼻先にあたり、割れた。何か液体のようなものが飛び散った。

キュウウン……………

さっきまで凶暴だったボス犬が犬っぽい声を出して、のたうちまわっている。

「ユウさん！！今のうちに逃げますよっ！！」

「あ、ああ。」

僕たちは、森の出口まで走った。

森林地帯を抜け、首都に続く街道まで帰って来た。

「ふうー……………助かった……………」

「ふぁー……………助かったですうー」

チコも僕もクタクタだ。

息を整えてから、聞いてみる。

「チコが投げたあの瓶何だったの？」

「あれもドワーフの秘伝です。犬系の動物が苦手な匂いを濃縮し

た液体で、『あっちいけわんわん!!』という薬品です。」

「あ、あっちいけわんわん……?」

「はい!」あっちいけわんわん!!」です!かわいい名前ですよ  
ねー」

もうちょっといい名前なかったのか?

薬品の効果の割に気の抜ける名前だ……

「ユウさん。気を抜いちゃだめですよ。帰るまでが遠足です!」

「はい。」

というわけで依頼は何とか達成。  
首都に向かう。

つ、つかれたー

## 第17話：セラの接客訓練

首都まで帰って来た。

朝早くに出たのに、もう昼過ぎだ。

中央広場まできて、チコがこちらに手渡してきた。

「ユウさん。ありがとうございます！これ報酬の20RXです  
！」

「おー、ありがとうー。」

報酬を受け取る。

「それから簡易詠唱杖ライトスタッフなのですが……。」

「ああ……まあ、いつでもいいよ。急いでたんじゃないの？」

チコはこの依頼を受ける人を探すとき、急いでいるように見えた。

「ああつ！！そーでした！納品期日が今日までなんで、急いでたんです！これから採取した牙を調合しないといけません！」

「じゃあ、簡易詠唱杖は今度でいいよ。僕はいつも夕食時はアルプス通りの『ニニギ亭』にいるはずだから、完成したら持ってきてくれればいいよ。」

「ありがとうございます！ちゃんと作って持ってきます！今日はありがとうございますー！」

チコはそう言って、大きなリュックを揺らして、トテトテ走って行った。

ふうー、これで依頼は終了。

次は図書館行って、調べものか。

近くの店で軽い昼食をとり、図書館に向かう。

また、図書館の中で迷った……

目的の本を二冊ほど持って、備え付けのイスに座り、読む。

2分後には夢の中だった。

~~~~~

昼は定食屋、夜は酒場の『ニニギ亭』は、多くの客でにぎわっていた。

中はカウンター席とテーブル席があり、そこに座るのはほとんどが男性客だ。

セラは接客というものに苦労していた。

もともと、監禁生活が長いため人との対話が得意とは言えない。しかも、ひらひらして心もとない衣装を身につけている。

朝にはあまり客が来なかったが、昼になると急に客が増えた。今は少し落ち着いているが、それでも満席だ。

「セラちゃん、聞いてます〜?」

「あっ! すいません! なんですか?」

話しかけてきたのは、この店で働く猫人のミスカさんだ。
ウエアキャット

この店には、私を除き6人の従業員がいる。

厨房には店長のユウラさんと調理担当が2人。

後の、3人はウエイトレスだ。

ミスカさんは、私の教育係だ。基本的な接客について教えてもらった。

「もちよっと、にこやかにできない?」

「これが限界です。」

愛想笑いなんてしたことないのだ。
いきなりできません。

「もーしよがないなー。今日はセラちゃんのおかげでお客様が多いから、注意してね。」

「はい……私ののおかげ、って私は何もしてませんよ?」

「ふふっ……セラちゃんきれいから、みんなセラちゃん見に来てるのよ。」

「はあ……」

自分は目立つ容姿であることは、自覚している。

だが、きれい？珍しいもの見たさじゃないのか？
そう考えていると、

「セラちゃん！注文とってー！」

という、男の声が聞こえた。

客だ。客だが、むかつく。なれなれしすぎるだろ。

「お客さんに失礼なことしちゃだめよ」

「わかってます。」

テーブルに座る三人組のほうに行く。

傭兵のようだ。みな武器をテーブルに立てかけている。

「はい、ご注文は何でしょう？」

「そんなことよりさー。これから俺たちと遊ばない？」

またか……。

こんな奴らが朝から後を絶たない。
怒りを押し隠しつつ聞く。

「ご注文は？」

「だからさあ……」

「ご・注・文・は？」

「そんな怒らないでよ。」

と言いつつ、こちらを触るつとしてくる。

(見つからないように一発入れてやるか。)

そう考えた時、

「セラ。ちょっと来な！」

カウンターの向こうからユウラさんが呼んだ。

「はい！ご注文が決まりましたら、またお呼びください。」

客には教えられた通りの言葉を言い、ユウラさんのもとに向かう。

「なんですか？」

「あんだ、今なんかしようとしただろ。視線に殺気が混じってたぞ。」

まさか気付かれているとは・・・

前から思っていたのだが、ユウラさんはファイター気闘士としてかなりの実力者であるように思う。逆らったら怖いし、なぜか勝てる気がしないのだ。

「すみません。」

「まあ、我慢してたみたいだからいいけど。あんだのキャラなら多少、愛想が悪くても別にいい。そのキャラにも需要があるからな。それから、触られそうになったら避ける。殴ろうとするな。あんだ、

氣闘士なんたる。攻撃よければなら、あんなやつのおさわりぐらい、さりげなく避けて見せる。あと、周りの奴らの動きを見る。ミスカとかな。あいつは避けるのがうまい。」

「はあ・・・わかりました。」

キャラがどうこの意味がよくわからないが、なるほど。

あれが攻撃だと思えばいいのか。うん、そう考えるとやりやすい。

ミスカさんの動きをしばらく観察する。

なるほど、位置取りがうまいのか。触れるには近くなく、注文するには遠くない。

私がこうしている間もユウは頑張っているだろう。

よし！がんばろう！

~~~~~

アーよく寝た！！

図書館を出ると、もう夜になっていた。

本を開けてからすぐ寝てしまった。結局今日は何も調べていない。まあ、いつか。

夕食は『ニニギ亭』で食うか。セラの様子見ときたいし。アルプス通りに向かう。

『二二ギ亭』の扉を開けると、席はほぼ満席だった。カウンター席が、ちらほら空いている。

「いらしゃいませー……ってユウか。おかえり。どうだった？」

「まあ、そこそこ。さあ、座席にご案内したまえ！」

「なんで偉そうなんだ？……まあいい。こっちだ。」

うん？案内されて席につくまでの間、殺気のこめられた視線がいくつも飛んできた。

なんでだ？……ああ、セラと仲良くしてるからか。

こんなに客がいるのも、セラ効果か。

ふっふっふ、優越感ですね。

カウンター席に着くと、カウンターの向こうにはユウラさんがいた。満面の笑顔だ。

「おう、帰って来たのか。あんたのお姫様は、すばらしね。こんだけ客が入ったのは、ひさしぶりだよ。」

「うんうん。感謝してください。」

「おい！否定すべきところがあるだろ！いつから私は、ユウのお姫様になった！？」

「まあまあ、気にしない、気にしない。ユウラさん、焼肉定食ください！」

「あいよー。」

額に青筋立っているセラをほっといて、注文する。  
お客が多いので、忙しそうだ。  
お客が注文を待っているようだ。

「セラ、お客さん呼んでるよー」

「アトデオボエテオケ……」

ひいつー！

こ、怖くなんかないもんねー！

ほ、ほんとですよ……

~~~~~

焼肉定食を食いつつ、セラをはじめとするミニスカメイド姿のウエイトレスさんを観察する。

(すばらしい……)

「おい。顔がゆるんでるぞ。」

カウンターの向こうのユウラさんだ。

客も減って来たようで、少し暇になって来たのだろう。
セラの事が少し心配だったので聞いてみる。

「セラはちゃんとやれてますか？」

「まあね。心配？」

ユウラさんは、ニヤニヤしている。

「そりゃまあ、僕が勧めたことですから・・・」

「安心しな。そんなに悪くない。少し人と会話することに慣れていないような気もするが、そのうち物になるさ。あんた達がいつまでここにいるか知らないけど・・・」

いつまでか・・・

僕もセラも次に向かうべき道筋がまだ見えてきていない。

セラもお母さんに関する情報を、まだ見つけていないだろう。

僕はセラが異界人の末裔かもしれないことは分かったが、まだセラにこのことについて話していない。

まだしばらくは、ここにすることになるだろう。

「しばらくはここに滞在するので、セラのことよろしくおねがいします。」

「はい、まかされました。ところで・・・」

ユウラさんは僕の横を指さした。

「その子はユウ君の知り合いか？」

「ん？」

横を見ても、何も無い。

「ユウさん、こんばんわ！」

何も無い所から声がする。

「下です！視線を下げてください！」

視線を下げると、小さな女の子と大きなリュックが目に入った。
チコだ。

「ありゃ？チコ、どうしたの？」

「ユウさんに簡易詠唱杖をお持ちしましたです！」

「もうできたの？今日じゃなくてもよかったのに……」

「ユウさんにはお世話になったので、がんばってみました。」

ほー、よくできたお子さんだ！

感動した！いい子、いい子。

「ちょ、ユウさん！？頭をなでるのは、やめてください！！」

~~~~~

ユウラさんに、チコのことを紹介し、チコも一緒に食事をするこ

になった。

チコは僕の隣で、お子様ランチみたいなのおいしそうに食べている。これで子供扱いを嫌がる所が謎だ。

ユウラさんとチコがしゃべっている。

「ドワーフか・・・ファミリーネームは？」

「ラクロックです。うまうま。おいしー」

「ラクロックって言えば、まさかワイザー　ラクロックの・・・」

「おじいちゃんです！よく知ってますね。うまうま。」

「10年前の戦争でちょっとね・・・」

ユウラさんも、戦争を知ってるのか・・・っていうかユウラさんって何歳なんだ？

見た目は20代後半なんだが、実際どうなんだろ？怖くて聞けないが・・・

「うまうま、ごちそうさまですー！おいしかったですー！」

「ありがとう。」

ユウラさんはうれしそうに笑い、食器を下げた。僕の方も食べ終わっていたので、持って行った。

水を飲んで一息つくと、チコがリュックから何か取り出した。

グローブだ。

左手は格闘用のもので、がっしりした造りだ。

右手は左手とは違い、スマートな印象を受ける。

どちらのグローブも甲の部分に、簡易詠唱杖の装置が取り付けてある。

「ユウさんは、左手で格闘、右手で刀を使う変則的な戦闘スタイルなので、左手は格闘用のグローブにして、右手は剣術用のすべり止めグローブにして、そこに簡易詠唱杖ライトスタッフをつけてみました。どうです？」

驚いた。

チコが僕の戦っている姿を見たのは、先の依頼の時だけだ。

それだけで僕の戦闘スタイルを見極めたことになる。チコは僕が思っている以上に、優秀な魔法技師クリエーターなのかもしれない。

僕はもともと右利きだったが、おっさんとの訓練を始めてから利き手が無くなった。

でも、昔の名残なのか、刀は右で振ることが多い。左腰に刀を差しているのもそのためだ。

グローブを手に取り、つけてみる。

しっくりくる。実際使ってみないと細かいところはわからないが、とてもいい感じだ。

「いいかんじ。チコはいい仕事するねえー」

「ありがとうございます。注意点ですが、ユウさんも知っていると思いますが、簡易詠唱杖は詠唱杖キャストスタッフよりも体内エーテルの術式変換効率が高いです。多用すると、体内エーテル欠乏症になる危険があ

ります。くれぐれも使いすぎには注意してください！」

「はい。」

簡易詠唱杖は、体内エーテルを炎や雷撃に変換する。当然体内エーテルを消費することになる。

あまりに体内エーテルを消費すると、体内エーテル欠乏症という貧血に近い状態になる。

「不具合とかあったら言ってください。私はクロック通りの工房街で、工房をレンタルしてるんで、来てくれたらいつでも直しますです。」

「うん、ありがとう。」

チコは椅子から立ち上がって、床に置いていたリュックを背負った。

「それじゃあ、私は帰ります。お金は……」

「ああ、いいよ。僕が払っとくから。こんないい物、作ってもらったんだからそれぐらいするよ。」

「ありがとうございます！ユウさん、ふとっばらです！それじゃあ、また！」

「うん。またねー」

こちらにパタパタ手を振りながら、店から出て行った。

~~~~~

ユウラさんとしやべったり、酒を飲んだりしながらセラの仕事が終わるのを待った。

酔っ払ったおっさんに、

「おい、おまえ・・・セラちゃんとはどんな関係だ？あんな、なれなれしくしやがってよ・・・ウツプ」

とか言われ、絡まれまくった。

つらかったー

すこし眠気を感じ、うつらうつらしていると閉店時間になった。
みな閉店作業をしている。

セラが後片付けを終え、こちらにきた。

僕はあくびをしつつ迎える。

「ふぁ〜・・・もう仕事終り？」

「ああ。わざわざ待っていたようだが、何かあるのか？まあ私も話したいことがあるしな。ここじゃなんだから、私の部屋に來い。」

「セラの部屋？」

「普段はミスカさんとの2人部屋なんだが、今日は彼氏の家に泊まるそうだから迷惑はかからん。」

ほー・・・

セラの部屋か・・・

女の子の部屋か・・・

ドキドキワクワクがとまらねえー!!!

というわけで、セラの部屋に向かうことになった。

第18話：文化遺産的な何か

セラをはじめとする、住み込みの従業員たちの部屋は、『二二ギ亭』の二階にある。

セラに連れられて、ぎしぎし鳴る階段を昇る。

階段を上った先には、廊下があり、左右に二つずつ扉がある。

セラは右の奥の部屋に入った。僕もそれに続く。

部屋中には、二つのベッドとタンスなどの家具が少しあるだけだ。

「さつきから言おうと思ってたんだが……」

部屋に入ってから振り向いたセラが言った。

「なんでそんな歩き方なんだ？右手右足が同時に出てるぞ。」

なんと!?

緊張しすぎて、いつの間にかロボット歩きになっている!!

「いや、ほら……女の子の部屋に入るのって緊張するんだよ。」

セラは怪訝な顔をしている。

「なにをいまさら……君は私と同じ部屋で寝たこともあるだろっ?」

そういえば前にお金がなくて、二人で一部屋に泊まったことがある。

「わからないかなー、この気持ち。そーいうこととは違うんだよ。なんというか、ドキドキワクワク？」

「私に聞くな！あいかわらず君は変態だな！」

「失礼な！僕は普通です……よね？」

何となく自信がなくなって来た。

「言っておくが、私に変なことしようと思えるなよ変態……」

しません。そんな勇気ないです。

このままではちよつと癪なので、反撃してみる。

「変なことつて、例えば？例えば？」

「ぬ、それは、なんというか、君がいつも私にするようなことだ

！！」

セラの顔がどんどん赤くなる。

よいものですな。

「えー？僕、セラに何してたっけ？おしえてー。」

とぼけるように言う。

「う、う、う、う……」

「さあ、さあ、具体的に、細かく、しっかりと、説明したまえ！

「！」

調子に乗ってたたみかけるように言ってみた。

セラは真っ赤な顔を隠すようにうつむいてしまった。

その顔を覗き込もうとした瞬間、セラの手のひらが僕の顔面をわしづかみにした。

いわゆるアイアンクローの状態だ。

セラの顔がマジだ・・・まずい・・・

「シネ・・・」

「え、ちょっと！まっ・・・イダダダダ！！ゴ、ゴメンナサーイ！！」

~~~~~

僕とセラはベッドに座っている。他に座る所がないのだ。

普段ならドキドキするほどの近さだが、今は顔面が痛い。とつても

なんか自分の顔が縮んでしまったような気がする。

さすがセラ。すごい握力。

「いたたた・・・ひどいめにあつた。」

「まったく！次はないからな！！」

怒ってはいるが、微妙に恥ずかしさが残っているようで怒っている姿もかわいらしい！

やめられませんなー・・・セラが恥ずかしがってる姿は、文化遺産

ですよ！！

さて、冗談はここまでにして真面目な話に入る。

「さて、真面目モードで話そうか。」

「最初からそうできないのか……？」

呆れられてしまった。最初から……無理だな。うん。

「えーと、セラは今日どうだった？」

「母についての情報はさっぱりだ。従業員みんなには聞いたが、さすがに接客中に客とは話せないからな。仕事自体は大変だったが、なんとかあった。鬱陶しい客が多かったがな。」

ほー鬱陶しい客か。絶対ナンパ目的の客だな。今度見つけたらぶちのめしてやるぜー

「で、ユウのほうは？そういうえば聞こうと思ってたんだが、夕食と一緒に食べていた女の子は誰だ？君、ホントに仕事してたのか？まさか、遊んでたんじゃないだろうな……？」

あれ？なんか、セラの機嫌が悪い？

なんか、まずい雰囲気だ。

仕事をしたこと、チコのことを話した。図書館で寝ていたことは伏せておこう。なんか怒られそうで怖い。

「ふーん。そうか。あの女の子は依頼主か。」

なんか機嫌直った？助かった……  
そうだ！龍族のことで聞きたいことがあったんだ！

「あのさ、セラ。図書館の本に書いてあったことなんだけど、龍族自体が異界人だって本当？」

「どういうことだ？」

僕は図書館で読んだ本の内容を伝えた。

「なるほど。私は知らないが、古い世代の人に聞けばわかるかもしれないな。」

やっぱりそんなうまいこと情報が入るわけないか……  
しかたがない。

「じゃあお互い何の進展もなしか……やっぱり、しばらくはここに滞在することになりそうだね。」

「そうだな。あまり一か所にいることが、周りの迷惑にならないと良いが……」

セラは、自分を捕まえようとした集団によって周りに迷惑をかけないか、不安に思っているようだ。

「セラは心配しすぎだよ。奴らは目立った行動ができる立場の間じゃないと思うよ。君が襲われたところは、滅多に人が通らない森だったし、それに目撃者の僕を排除しにかかった行動から考えて、人目に付く行動はしれないと思うよ。」

「そう……かな？」

「そうだよ。今はお店の仕事に集中していたらいい。何かあったら助けるよ。」

「ん……ありがとう。」

セラは少しは安心してくれたようだ。  
うんうん、不安そうな顔は似合いませんよ！

他に話すことは……  
あ、そうだ！

「あのさ、セラのお母さんの写真あるだろ？あれ僕に預けとかな  
い？セラは仕事でなかなか情報集められないだろ。僕でよければ  
いろいろ聞いといてあげるけど？」

「いいのか？君だって他にやることあるだろう？」

「へいき、へいき。そんな苦労してるわけじゃないし。」

セラはしばらく考え込んだ後、写真を手渡してきた。

「すまない。無理しなくていいからな。」

「まかせなさい！」

写真を受け取り、コートの内ポケットに大事にしまつ。  
セラのお母さんの唯一の手掛かりだ。大事に扱う。

さてそろそろ宿に戻ろうか……  
と、思った時、気づいてしまった!!

セラはミニスカメイド服のままだ。  
そしてベッドの僕の隣に座っている。  
必然的にセラの美しい長い脚がよく見える。

なんか……近くで見ると、いつもよりさらにエロい。  
ほー、へー、合格だ!! (意味不明)

「ユウ。ぼーっとしてどうかし……またかつ! 君はそれば  
っかりだな!!」

セラは立ち上がって構えた。  
やっべ!!

「一度生まれ変わって、やり直してこい!!」

「ぶっ……!!!!」

セラの高速の拳が僕の顔面に突き刺さった。意識がぶっ飛んだ。

一時間後、僕は『ニニギ亭』の前の道で意識を取り戻した。  
セラさん、おきっぱなしはひどいっ

しばらくはこんな毎日が続きそうだ。

## 第19話：残念なイケメン

僕とセラが首都に来てから、一週間がたった。

セラの『ニニギ亭』の仕事もだいぶ板についてきたように思う。

僕はこの一週間、飛空艇への荷物の積み込みといった重労働から、魔道具作りの材料調達といった使いツパシリなど、様々な仕事をした。お金も少し余裕が出てきた。

今日、クエストショップ依頼請負屋で受けた依頼の依頼主はチコだ。

僕が依頼請負屋の掲示板でいつものように依頼書を眺めていると、子供らしい、丸みのある大きな字の依頼書が目についた。

依頼内容は以前と同じく、材料調達。マルポ力草の採取だ。

報酬は、これも以前と同じく少ない30R x。

僕もいつもならこんな依頼スルーだが、チコの依頼だ。

お金にはだいぶ余裕が出てきたし、ライトスタッフ簡易詠唱杖のこともあるので、できるだけ協力してあげたい。

というわけで、依頼を受けることにした。

~~~~~

僕は首都の西側に位置する、クロツク通りに来た。

クロツク通りはクリエーター魔法技師の工房が立ち並ぶ、工房街だ。

魔法技師の商品を買いにきた商人や傭兵の姿があり、賑わっている。立ち並ぶ工房らしき建物からは煙突が立ち、煙を上げている。

通りを歩いていると、赤や黄色といったヤバイ色の煙が出ている煙突が何本かあったりするし、妙なにおいが漂う場所がたまにある。そんな場所ではあるが、人は多く、活気がある。

依頼書に書かれてあったチコの住所は、このクロック通りのレンタル工房の一つのようだ。

（そういえば、以前別れる時にレンタル工房にいるって言ってたっけ……）

レンタル工房とは、その名の通り使用料を払うことでレンタルできる個人用の工房だ。

旅をする魔法技師たちが重宝している。

住所の場所までやって来た。

通りから少し路地に入った場所だ。ドアの横にあるネームプレートにはチコ　ラクロックとある。

ノックをしようと、ドアの前に立った。

いきなりすさまじいスピードでドアが開いた。

ゴンッ！！

「ぐおっ!？」

ドアは外開きだったようで、ドアは前に立っていた僕の額に直撃した。

「ありゃ？何かいい音がしたような……」

そう言いつつドアの向こうから現れたチコは、痛さにうずくまっている僕を視界に入れた。

「わ!?!ご、ごめんなさいです!!人がいるとは思わなくて・・・」

「ああ痛い・・・。チコ、君はドアを開けるときは、いつもぶち壊すつもりであけるのか?」

僕は額をさすりつつ立ち上がった。

「あれ?ユウさん、どうしたんですか?もしかして簡易詠唱杖のことですか?すいません、今急いでて・・・」

「ちがう、ちがう。チコ、依頼出しただろ?」

「はい。今から依頼請負屋に行つて、急ぐようお願いするつもりでした・・・ってあれ?何で知ってるんです?」

チコは首をかしげている。その仕草は子供らしい、つい頭をなでたくなるようなかわいらしものだ。実際は20歳なんだが・・・

「僕が依頼受けて来たんだよ。」

「わあ!ほんとですか!?ありがとうございます!あ、どうぞ、入ってください。お茶出します。」

そう言つて、僕を部屋の中に招いた。

部屋の中は、雑然としていた。いろいろな物がある。

金属加工するための炉や、何かわからない薬品が置かれている棚、部屋の中心にある机の上には大陸公用語のフェイタル語ではない言葉で、何か書かれた紙が散乱している。チコがいつも着てる作業着は、この風景によく合っていると思うが、汚いな……。

「さあ、どうぞ、どうぞ。」

そう言っただけでチコは僕に椅子をすすめた。チコは机の上にあった紙を乱雑に集め、部屋の端にあるベッドの上に置いた。

「そんな、無茶苦茶に置いていいの？」

「はい。どこに何があるかは大体分かるんで、大丈夫ですよー。」

そう言いつつ、チコはポットを火にかけ、お茶の用意をしている。しばらくするとチコがコップを二つ机の上に置いた。

お茶は一般的なクイール茶だ。味は、僕の世界の紅茶のようなものだ。

お茶を飲みつつ、チコに聞く。

「よく考えたら、急いでたんじゃないの？お茶なんか飲んでるけど……」

「だいじょぶです。商品の納期は明後日なので。依頼を受けてくれる人が今日見つからないとまずいな〜と思って急いでただけなので。それよりユウさん！！簡易詠唱杖はどうですか？感想が聞きたいです！！」

魔道具の話になって急にテンションが上がった。いつもどおりですね。

「あー・・・実はまだ戦闘では使ってないんだ。この一週間は、戦うような仕事はあまり受けなかったからね。」

「そーですか・・・じゃあ今回の依頼もついていきます！簡易詠唱杖の動きを見ておきたいです！」

ここで断つてもどうせついてくるだろうから、僕は了承した。

~~~~~

お茶を飲んでから、チコを連れて出かける。

「チコ、寄り道していい？」

「はい、どうぞ。どこです？」

「この前会った店『ニニギ亭』があるだろ。あそこ。仲間が働いてるんだ。」

「仲間ですか？」

「うん、一緒に旅してる人なんだけど・・・あの店のウエイトレスに銀髪の女の子がいたの覚えてる？」

「はい！あのとつても綺麗な人ですね！」

というわけで、まずはセラのいる『ニニギ亭』に向かう。

セラは今日の昼から仕事が休みなので、どうするのか聞いておきたい。

都合がよければ、ついてきてもらいたい。セラがいるとだいぶ楽だ。

『ニニギ亭』があるアルプス通りは首都の東側、クロック通りから中央通りをはさんで、ちょうど反対側にある。

歓楽街であるアルプス通りには、店が数多く立ち並んでいる。

『ニニギ亭』に入る。

「いらっしゃ……なんだユウか。」

ちゃんといらっしゃいませって言って!!、と言いたいが、まあいい。

今日のセラはいつも通りミニスカメイド服姿だが髪形が違う。

いわゆるポニーテールだ。

「いいものだなー……」

「はあ？」

セラは首をかしげている。その仕草で髪の毛がしっぽみたいに揺れる。

そこでセラはチョコに気がついた。チョコは、ぼーっとセラを見ている。

「君はたしか……ユウが前、世話になったドワーフの人だな。はじめまして、私はセラ。」

「ふあ！？いえいえ！お世話になったのは私のほうです！ーわ、わちしは、チコです。はじめまして！！」

チコの様子が変。なんだかいつもよりぼーっとしてるし、噛みすぎ。

「まずは席に着くと良い。こっちだ。」

セラの案内で店の隅のテーブル席に案内される。少し早い昼食になった。

セラは僕とチコの注文を聞いて、離れて行った。

どうもチコの様子が変なので、聞いてみる。

「チコ、さっきから変だよ。」

「え、そりゃあ、あんな綺麗な人始めてで、見惚れてましたー」

そういえば、そうか。セラはとても美人だ。しかしチコはビビりすぎだ。

セラが注文の品を持ってきた。パスタっぽい麺料理だ。

「で？どうしたんだ？」

セラは皿を置いたあと、聞いてきた。

「うん。セラは昼から仕事休みだよ。どーするのかなーって思ってたね。」

「ふーん。特に予定はないが・・・情報集めは君のほうでやってくれてるんだろ？」

「うん。今は連絡待ち。」

情報というのは、セラのお母さんについてだ。

闇雲に探しても見つからないだろうと思いい、情報屋に頼んだのだ。結構お金がかかったが・・・

現在は連絡待ちだ。

「君はどうするんだ？」

「僕はこの後、チコの依頼でマルカポ草を採取しに行くから、フロリア森林地帯に向かうことになるね。」

「そうか・・・じゃあ私も・・・」

「セラちゃんは、今日俺とデートの約束があるぜ!!」

セラの言葉を遮って、座っている僕の後ろから男の声が聞こえた。振り向くとそこには、赤毛の青年が立っていた。

髪はサラサラで、顔はさわやかな雰囲気醸し出している。いわゆるイケメンだ。

服装はキャスト詠唱師達がよく着るローブで、手には豪華なキャストスタッフ詠唱杖を持っている。

「誰だ？」

「・・・セラ、知り合い？」

セラは嫌そうな顔をして言った。

「知り合いじゃない。この店の常連だ。おい、お前、私はそんな

約束した覚えはないぞ。」

「セラちゃんが今日は休みだと聞いてたからさ、待ってたんだよ。今日は一緒に遊ぼうよ！」

「悪いが私はこれから行く所ができた。そもそも何で私の休みを知ってるんだ……」

「ユウラさんに聞いたら教えてくれたぜ。行く所ってどこ？どうせそこにいる、その他大勢顔の奴の誘いなんだろ？俺と一緒にのほろが楽しいよー。」

その他大勢顔って僕のことか……。まあ自分の顔がたいして特徴がないことは、自覚している。

でも他人に面と向かって言われると多少傷つくね。

僕の横でチョコはもぐもぐパスタを食べている。食べることに夢中だ。セラはため息をついている。

「はぁ……。そもそも、私は名前も知らない輩と関わるつもりはない。」

「ええっ！？この前、名前教えてたろう？アルフレッドだよ！アルフレッド クロストラフ！」

な、名前忘れられてる……ぷぷぷ

「お、おい！！てめえ、今笑っただろ！」

こっちを睨んでくる。さっきのその他大勢顔と、今までの言動から多少イライラしていたので、視線に若干殺気を入れて睨みかえして

みた。すると、目に見えてうるたえた。

「ひいっ!!くっ、お、おまえなんかに負けはしない!お、おれはクロストラフなんだぞ!」

言葉の意味がわからん。

僕が首をかしげていると、さっきまでもぐもぐ食べていたチョコが説明してくれた。

「クロストラフ家は、この国で飛空艇貿易を営んでいる大金持ちです。」

ほーつまりはいいところのお坊ちゃんか。

「へー」

「へー、ってそれだけか!?くっ、この俺を怒らせてしまったようだな!!俺はペルルト魔法学院でトップの成績だった男だ!勝負したら、当然俺が勝つ!」

「じゃあ表出てやる?」

「い、いや、今日はこれから用があった。助かったな、その他大勢顔の男!じゃあね、セラちゃん。デートはまたの機会に。」

そう言ってサラサラの赤毛をかきあげ、セラに流し目をして、店を出て行った。

正直、かっこつけた態度はさまになっている。セラにそういう態度が通用しないと思うが……  
なんとなく情けないキャラを持つ奴だ。

いろいろ言われたがあまり嫌いにはなれないタイプだ。

「ユウ、冷めてるぞ。」

セラにそう言われて気がついたが、僕は運ばれてきた Pasta にまだ口をつけていなかった。

ああ、もったいない。

~~~~~

結局セラはついてくるらしい。

「着替えるの?」

「あたりまえだろ!店の制服だぞ!」

ですよー。でもなー、戦うメイドも見てみたかった。

しばらくしてセラが店から出てきた。普段通りの白い軽装甲服に外套姿だ。髪の毛もいつも通りおろしている。

残念!!

「なんだその顔は?」

はっ!!気持ち顔に!!
顔を引き締める。

「セラは休まなくていいの?せっかくの休みなのに。」

「セラさん無理しなくていいですよ？」

チコも少し気にしている。

「いや、大丈夫だ。むしろこの一週間ストレスがたまっただけで、たまっただけで少し暴れたんだ。」

なんてことだ。今のセラの言葉は、今日出会う敵に対する死の宣告だ！！

みんな逃げろー！

第20話：抜き足差し足忍び足

フロリア森林地帯、内部。

チコはスキップしつつ、歌を歌って僕の前を歩いている。

「ハンマーばこぼこ撲殺だ〜強いぞドワ〜フ力持ち〜」

テンポはとても楽しそうな歌だが、歌詞が凶悪だな……。

前回と変わらず保護者的な気分で歩く。
僕の横を歩くセラを見ると、なんか子を見る親のような穏やかな表情をしている。

「セラ、なんか楽しそうな顔だね。」

「そうか？まあチコを見てると、何となく穏やかな気分になるな。」

「実はチコは僕たちより年上だ。20歳だって。」

「は……？冗談か？」

驚いている。僕も今でも信じられないよ。

「いや、ほんと。」

「そ、そうか。完全に年下の子供を相手にするように会話していたんだが……彼女、怒ってないかな？敬語を使うべきか？」

「大丈夫だろ？僕も年下を相手にしてる感覚でしゃべってるけど、

怒られてないし。今さら敬語をいだいしても、気味悪がられるだけだと思う。」

子供扱いすると怒るが……

「それもそうだな……。ところで、気づいてるか？」

「ん？まあ……」

セラはこちらにちらりと視線を送る。

下だ。地面の下に何かいる。

「チコー、こっちおいでー。」

チコを手招き。おいでおいで。

プンプンという擬音がつきそつな怒り方でチコはこちらに来た。

「な、なんです！その子供を呼ぶような感じの言葉は！わ、わ、なんです！？」

近づいてきたチコを抱える。

「セラ、先制攻撃よろしく。」

「まかせろ！跳べっ！」

体内エーテル操作による、身体機能強化。

僕はセラに言われたとおり、チコを抱えたまま真上に跳んだ。

その瞬間セラは右の拳を地面に叩きつけた。

ボゴンッ！！

龍族生来の圧倒的な膂力によって、砲弾が直撃したよう音と共に地面が陥没した。

そして、地面を伝播した衝撃波は、地面の下にいた者達を地上に弾き飛ばした。

跳び出てきたのは、緑色の物体。

トカゲだ。二足歩行しているので、恐竜のようにも見える。

グロウリザードと呼ばれる、爬虫類型の生物だ。

体は小柄な人間程度の大きさ、爪はナイフのように鋭い。皮膚はとげのついた丈夫な外殻だ。

こいつらは、意外と賢い。今も地面の下から奇襲をかけようとしていた。

四匹。セラの一撃で混乱している。

僕が地面に着地した時には、セラはもういない。

すでにトカゲに接敵している。

移動のスピードそのままに拳を叩きつける。

ボグッ！！

肉を打つ音。グロウリザードは吹っ飛び、近くの木に激突、絶命した。

セラの背後にもう一匹のトカゲが飛びかかる。

セラはまるで後ろに目がついてるかのように、振り向きざまに裏拳。

叩き落とした。

そのまま叩き落としたトカゲに足を引っかけ、もう一匹に蹴り飛ばす。

三匹目は飛んできた仲間と、背後にあった木に挟まれ押しつぶされた。

三匹、これを一瞬でセラは無力化した。強い。やはり、僕とは比べ物にならない。

「ユウ！ いったぞ！」

「あいよっ！！」

最後の一匹はこちらに来た。

僕はチコを抱えたまま高速移動。飛びかかってくるタイミングで、後ろに回りこんだ。

背後からトカゲの頭部をつかむ。

バチィッ！！

雷撃。

グローブに取り付けられた簡易詠唱杖ライトスタッフによって、体内エーテルを雷撃変換。

スタンガンのように相手に直接電撃を流し込んだ。

トカゲは体をぶるっと震わせると、動かなくなった。

ふー……終了。

チコを地面に下ろす。

「ユウさん、セラさん、すごいです！ぱっ、ぱっ、って倒しちやいました！！それに、二人とも息がぴったりです！！」

チコがびよんぴよんはねながら、拍手している。

「ユウさんが強いのは知ってましたけど、セラさんもすごいんですね！！すごいバカ力です！あっ、バカは失礼でふた！？えーと・・かしこい力ですね！！」

かしこい力って・・・あ、セラ、微妙にへこんでる。

~~~~~

森はどんどん深くなる。木々は巨大で威圧感がある。

マルカポ草は結構貴重らしく、森の深い位置にしかないそうだ。

「それで、それで、簡易詠唱杖はどうでしたか！？」

森の奥に進みながら、チコが興奮気味に聞いてきた。

「便利だね。でも、んー、やっぱり変換効率が悪いから、使うとちよっと疲れるかなー・・・」

「そうですねー、もともと簡易詠唱杖の使用は、エーテル供給の調整が難しいですから。でも、ユウさんエーテルの操作がうまいですね。普通慣れてない簡易詠唱杖を使うときは、エーテルを徹しす

ぎて、オーバーヒートさせたりする人が多いんですよ。」

たしかに、使うとき神経を使う。

この扱いにくさが、簡易詠唱杖があまり多くの人には使われない理由だろう。

「私にも使えるかな？」

セラも興味をひかれたようで、聞いてきた。

「無理じゃないか？」

「無理だと思っです。」

僕とチコは同時に言った。

セラはすこし不服そうだ。

「な、なんだ、2人そろって……。やってみないとわからん  
だろう？」

「いやー……セラのエネルギー操作は豪快だからね……  
それに案外不器用だし。」

セラの体内エネルギー操作は腕力強化に特化しているため、基本的に  
豪快なのだ。

簡易詠唱杖を使わせたら、十中八九オーバーヒートさせるだろう。

「ゆ、ユウさん、不器用は言いすぎですよ。」

「そう？実際セラは基本的になんでも力任せの、筋肉魔人だから。」

すぐ僕のこと殴るし……え、あ、うそ、うそです!!」

からかうつもりで言葉をつづけていたのだが、いつの間にかセラはニコニコ笑っていることに気づいた。

目が笑ってない。

怒るとる!!

「あれか、君は私に喧嘩売ってるんだろ？」

「ま、まさか、そんなことしませんとも!!冗談っす!!」

セラは僕の両肩をつかんで、その怪力で固定した。う、うごけない。

セラのひざ蹴りが僕の腹に直撃した。連続で。

「うっ、ごっ、がっ、いつ、やめっ、ごふう……」

六発入れられた。僕は崩れ落ちた。

「ふー、すつきりした。ユウを殴るとストレス発散できるな。」

そんなストレス発散法を発見しないでくれ……

~~~~~

マルカポ草発見。

発見したのだが、とれない。
なぜかと言つと……

「あれは、やばい。」

「だな。あれを相手にするのは面倒だ。」

「こ、こわいですうー」

マルカポ草の群生地帯があつたのだが、その前に大きな生物が丸まって寝ている。

このフロリア森林地帯に生息する生物の中で一番危険度の高い相手だ。

コツホラゴーと呼ばれる、類人猿だ。

見た目はゴリラのようだが、毛は赤く、体は立ち上がったら5メートルぐらいはあるだろう。

トラックでも投げ飛ばせそうだ。
気性は荒く、凶暴なんだそうだ。

「チコ、前みたいに薬でどうにかできない？」

「ん……効きそうなのはあるんですが、実際に試してみたら利かない可能性もあります……」

「そっか、どうするかな」

僕たちは離れた位置から、隠れて様子を見ている。

チコの薬が効いた場合はいいが、効かなければおそろく戦闘になる。正直がんばれば勝てるだろうと思つている。

だが、戦う必要もない。
よし!!

「僕が行ってくるよ。」

「おい、ユウ。戦うなら私が……」

「戦わないよ。こっそり行って、取ってくるだけ。」

僕を止めようとする、セラに言った。

「で、でも、あの生物は敏感です。気づかれちゃいますよ。」

「まあ、なんとかなるよ。セラもチコも僕が気付いたら、動いてくれ。それまでじっとしててくれ。」

そう言うと、セラはしばらく考え込んでからしぶしぶ頷いた。

「む……わかった。気をつけるよ。」

「が、がんばってくださいです！もし気づかれたらこの薬をぶつけてください。効くかはわかりませんが、足止めにはなるはずですよ！」

そう言ってチコは僕に瓶に入った薬を渡した。

行くか……

これは、体内エーテル操作によって体から発せられる気配、匂い、音を消し、存在を薄くする移動術だ。

暗殺者が使う技術の一種だが、アルベイン流に存在する技だ。

おっさんに教えてもらった時は、まさか暗殺術まで教えられるとは思っていなかったので驚かされた。

正直得意な技じゃない、がそんなこと言ってられない。

ゆっくり進む。

歩くことで生み出される空気の流れを極力小さくし、近づいて行く。

緊張。

コッホラゴーの巨体の横を通り抜け、マルカポ草の前まで来た。

慎重に採取。

油断するな。帰りにある。

横を通り抜けた。

よし、あと少し。

「おい！！セラちゃんじゃないか！！何してるんだ？僕に会いに来てくれたー？」

ば、ばかやろー！！！！

突然の大声、その声は先ほど会ったイケメン野郎の声だ。

セラ達のほうを見ると、見慣れない人が4人。

例のイケメンのパティーなのか？

セラはイケメンに拳を一発入っている。

ガウウウウ

僕の横にいる生物から不吉な唸り声が……

コッホラゴーがゆっくり起き上がり、あたりを見回す。僕と目があつた。

ガアアアアア！！！！

ひいっ！！

チコに渡された瓶を投げた。

瓶は顔面に当たり、われた。

コッホラゴーは、顔をかきむしるようにして苦しんだ。効いた！？と思ったら、こちらを怒り狂った目で見た。逆効果！？完全に怒らせたようだ。

なんて運が悪いんだ……

第21話：森林内激闘（一）

セラはユウがコッホラゴーに近づいて行くのを見ていた。

ユウは、目を離すと、どこにいるのかわからなくなるほど存在が希薄になっている。

なにか特殊な身気術^{アーツ}を使っているのだろう。

以前から思っていたことだが、ユウのエーテル操作はすごい。

身体機能強化なら私は負けないだろうが、あの器用さは真似できない。

そう感心しつつ、目を離さない。

少しでも危なくなたら飛び出そう……。

「おい！！セラちゃんじゃないか！！何してるんだ？僕に会いに来てくれたー？」

なにっ！？

ユウのほうに集中していたため、後ろから誰か来ていたことに気づかなかった。

後ろを振り向くと、4人の人影。

一人は知っている。

店の常連だ。赤毛の詠唱師の男。名前は……忘れた。

他の人は、みな傭兵のようだ。

どうやら、集団^{パーティ}のようだ。

いきなり大きな声を出されたので、とっさに大声を出した赤毛の腹に拳を入れた。

「がふう……なんで？」

そう言っつて赤毛の男はうずくまった。
やばい！！ユウが気付かれた！？

「お、おい、あれ、コッホラゴージャ……」

「やべえ……逃げるぞ！！」

後の三人は、事態の深刻さに気づいたようで、さっさと逃げていった。

うずくまっている赤毛を放置して……

「おゝい……おいてかないでくれ」

赤毛の男はまだ立ち上がれず、情けない声を出した。

（こいつはもういい！！ユウは？）

ユウはすでに戦闘を始めている。
助けなければ！！

「チコ、私は行ってくる！！」

「は、はい！！邪魔にならないように遠くから援護しますです！！」

チコは大きなリュックから、どでかいハンマーを取り出し、ぐつと
気合いを入れている。

チコは自分が足手まといに成りかねないことを自覚しているようだ。

戦闘を見極める目を持っている。
こついう所は年上であると思えるな。

よし、行くぞ!!

~~~~~

先手必勝!!

アルベイン流 戦刀術 五ノ太刀 『桜花連刃』

舞い散る桜の花びらの如く、一瞬のうちに六つの斬撃を放つ高速剣術だ。

僕は限界で六つしか放てないが、おっさんは一瞬で二十発ほど放っていた。

つまりは、熟練者ほど強くなる技だ。

まあ、おっさんは異常だが……

コッホラゴーの胴体にすべての斬撃が直撃した。

(な!?!何だこの手応え!?)

斬れていない。すべて筋肉の鎧によって阻まれている。

コッホラゴーは、両手を組み叩きつけてきた。

右に転がって、回避。

ドゴオオン！！

僕がいた場所は陥没しえぐられている。

一発でもまともに食らうと終わりだ。

回避した動作そのままに、ゴリラの脇腹に左で拳を三発ほど入れる。それを牽制として、身体強化した脚力でバックステップ。距離をとる。

(な………!?)

距離をとったつもりが、もう目の前にいる。

でかいくせに速い！！

コツホラゴーはもうすでに右腕を振りかぶっている。

やばい、直撃コースだ！！

回避が間に合わない！！

ボゴツ！！

セラの飛び蹴りが、コツホラゴーの側頭部に直撃した。

ゴリラは20メートルほど吹っ飛んだが、転がって受け身とるようにしてすぐに立ち上がった。

おいおい……セラの蹴りをまともに受けてそれか……

「ユウ、すまん。遅れた。」

「いやいや、いいタイミング。助かったよ。」

コッホラゴのほうは、立ち上がったのはいいが、さすがに少しふらついている。

このすきに逃げる選択肢を考えたが、無理そうだ。先ほどのスピードでは到底逃げきれない。

コッホラゴから目を離さず僕たちは会話する。

「セラ、あの赤毛のアルフレッドだっけ……どうなった？」

「一発入れてやった。まったく……奴のせいだ!!」

怒ってる、怒ってる。こわいな……

チコのほうに視線をやると、なにやら薬品を取り出して混ぜたりしている。

その横には、この状況の原因であるヘタレイケメンが座り込んでいる。

セラの与えたダメージなのか、腰でも抜かしているのか、立ち上がれないでいる。

奴を困にする……とか考えたが、やめた。

まあ、怒るのはあとだ。今はこいつをどうにかしないと……

「セラ、さっきの蹴りどれくらい？」

「7割程度の力だ。人型状態ならあれが精一杯だな。龍声ドラゴンヴォイスを使うか？」

「ああ……まだ、だめ。ホントにやばくなったら。」

正直セラに龍声を使わせたくはない。

見ている人がいる

チコは信用できるが、あの赤毛は信用できない。

セラが龍族であることを知られるのはまずい。

まあ、これは建前で、実際は僕が個人的に使わせたくないだけだ。セラは昔の龍の力を暴走させた記憶から、龍の力に対して嫌悪感に近いものを感じている節がある。だから、できるだけ使わせたくはない。

「セラって殴る以外に、浸透打撃とか使えないの？打撃を内部に伝える技。」

「使えることは、使えるが、苦手なんだ。失敗するかもしれん。」

まあ、何となくわかる。不器用だもんね。

ゴリラはもう戦闘態勢を整え、こちらに向かってこようしている。よし！！

「目を狙う。目から刀を突き刺し、脳を破壊する。」

「わかった。なら、陽動は私が受け持つ！！」

どんなに筋肉で体が守られていても、目は守られてはいない。そこを狙う！！

コッホラゴーが突進してきた。その大きさから、まるで大型トラックが正面から接近してくるようですさまじい圧力だ。

その圧力を振り払い、僕は脚力強化による高速移動で正面から突進する。

ちょうどぶつかりそうになった瞬間、スライディング。

股の下を抜け、後ろに回り込む。

コッホラゴ―は標的をセラに変更して、マンホールの蓋ぐらいの大きさの拳を振り上げた。

セラは正面から迎え撃った。

右の拳を握り、突き出す！！

コッホラゴ―の拳とセラの拳が真正面からぶつかり合った。

ドゴンッ！！

激突の衝撃ですさまじい風が巻き上がり、セラの足もとは陥没した。だが、拮抗している。

どちらも動けないでいる。

今だ！！

後方に回り込んでいた僕は、いつきにコッホラゴ―の背中を駆け上がった。

コッホラゴ―の肩の位置に来て、刀を逆手に持ちかえ、目に突き刺すべく振り上げた。

そこで予想外のことが起こった。

コッホラゴ―が飛びあがって回転したのだ。

ちょうど前方宙返り見たいな感じで……

コッホラゴ―の肩にいた僕は、振り落とされた。

なんとか空中で体勢を立て直し、着地。

コッホラゴ―は少し離れた位置に轟音をたてて、着地。

そしてこちらに向かってくるのかと思ったのだが、様子が変わった。こちらを向いて、口を開けている。

はあ？

と思ったのは束の間、セラが大声を出した。

「避けろっ！！」

とつさに横っ飛びで移動した。

ガアアアツア！！

コッホラゴーの口から圧縮されたエーテルの塊が射出された。僕の真横をエーテルの砲弾が通り過ぎた。

こ、こいつエーテル操作ができるのか！？

エーテル操作が可能な生物は、人間だけではない。だが、こいつができるとは知らなかった。

エーテルの砲弾は僕の後方で地面に着弾、爆発した。

ドンッ！！

うわぁ・・・やべえ・・・

爆発地点は半径10メートルの範囲が消し飛んでいる。

この威力は危険だが、連射はできんだろう。

さて、目を狙う作戦は失敗だ。もう通用しないだろう。

どうしよ……

コツホラゴーは完全に僕に対して怒っている。さっきの目を狙う行動で頭に来たようだ。

「げえ……なんて運がないんだ……」

接近してくる。

~~~~~

チコは大きなリユックから手持ちの薬品を取り出し、調合を始めた。調合しつつ、戦いを観察する。

ユウとセラは、コンビネーション攻撃が破られたので、正攻法で戦っている。

コツホラゴーの攻撃は大ぶりでなかなか当たらない。だが当たれば、大ダメージだ。

ユウとセラの攻撃は確実にあたり、ダメージを入れている。

この戦いは持久戦だ。

（あの二人を少しでも助けるために、私が何とかしなくては！！）

チコは薬品を混ぜ、体内エーテル操作。エーテルを薬品に流し込む。

クリエイト
錬成と呼ばれる、魔法技師特有の技術だ。

エーテルを流し込まれた薬品は変異し、特殊な効果が付与される。

「よしっ!!」

「お、おい・・・ちびっ子。なにやってんだ？そんなことより逃げないのかよ？」

チコが気合いを入れていると、近くで腰を抜かしている赤毛の男、アルフレッド クロストラフが声をかけてきた。

「あなたも、あの二人を助けようと思わないんです？この状況を作り出したのはあなただというのに・・・」

「お、おれは知らなかったし・・・俺の力なんて・・・」

はぁー・・・

チコは呆れてしまった。

「あなたは、なぜあの二人が逃げないのかわかりますか？」

「なぜって・・・逃げきれないからじゃないのか・・・？」

「私たちがいるから、厳密に言うとあなたがいるからですよ。」

「は・・・ど、どういうことだよ。」

アルフレッドは意味がわからないようで、首をかしげている。

「あなたも二人の戦いを見ていたはずですよ。あんな戦いができる

二人が逃げきれないはずがないでしょう。私を連れていたとしても、ユウさんかセラさんに抱えてもらえば逃げられます。あなたがいるから、あの二人は逃げられないんですよ。」

「そ、そんなわけ……」

「そうなんですよ。セラさんは戦闘中は、ユウさんの言葉に従います。つまりは、ユウさんがあなたを殺さないようにしているんですよ。」

「なんで……なんだ？」

「さあ……？ユウさんがどう考えているのかはわかりません。とにかく、私はユウさんが戦うというなら、それを手伝います。それじゃあ。」

戸惑っているアルフレッドをおいて、チコはハンマーと錬成で作った薬品の瓶を持ち、立ち上がった。

助けます!!

~~~~~

「ユウさん!!爆発します!!」

チコの声だ。

爆発?

チコは瓶をコツホラゴーに投げ飛ばした。  
うーん、見事な遠投ですな・・・

コツホラゴーは自分に対して投げられた瓶に気づき、左手で叩き落とした。

瞬間

ドゴンッ！！！！

爆発。

チコの投げた瓶は割れた瞬間、大爆発をおこした。  
コツホラゴーの左手は赤くただれている。  
あの小さな瓶にこの爆発力はすごい。

コツホラゴーはひるんでいる。

ナイス、チコ！！

接近、刀を納刀する。

「ふっ・・・！！！」

アルベイン流 戦刀術 四ノ太刀 『斬鉄閃』

斬鉄の理をもって相手を切り裂く、居合だ。

納刀した刀を構え、片膝をたて、腰を浮かす。

抜刀。

抜刀する腕の振りの力、エーテルが徹された鞘と刀を操作すること  
で発生させた反発力、踏み込み、あらゆる力の流れを合成し、一刀

に込める。

ズンツッ!!

コッホラゴーの脇腹から刀が入りこみ、筋肉の鎧をぶちぬき、内臓まで達した。が、止まった。刀は腹の中央辺りまで進んだが、筋肉に巻き込まれ止められた。

(くそっ、勢いが足りなかったか!?)

「ユウ、さがれ!!」

コッホラゴーが平手を振り上げている。

とっさに、刺さったままの刀から手を離し、避けようとした。左からの衝撃。吹っ飛ばされた。

「がっ……!!」

僕は吹っ飛び地面を転がった。

「ぐうううっ……」

いてえ……左腕が折れた……あばらも何本かイッた……

「ユウさん!!」

「ユウ、くそっ!!使っぞ!!」

チコとセラの声か……意識が……

だめだ、ここまできて龍声を使わせるのはいやだ。それに僕の刀は突き刺さったままで、良い状況だ。

「セラ、使うな！！あと、刀を抜かせるな！！」

何とか大声を出し、セラに指示を飛ばす。

セラは苦い顔をしたが、分かってくれたようだ。

セラはまた戦闘に入った。チコの爆薬で奴は片手を使えないように、セラは僕抜きでも渡り合えている。すげえ……

近くに気配を感じた。

転がっている僕の目の前には、この状況の原因、アルフレッド クロストラフがいた。

「こんにちは……」

何となく挨拶してみた。

「お、お前、なんで逃げないんだよ！！」

なにやらアルフレッド怒ったように言った。

まあいろいろ理由がある。

「アルフレッドだっけ？僕はあとでちゃんと君をぶん殴るつもりだよ。だからこそ、今はこの状況をどうにかしなくちゃいけないし、君に死んでもらったら困る。」

そう言いつつ僕は、左手を使わないように立ち上がる。

「お、おい、動くな！！今、治してやる。」

治す？

アルフレッドはキャスタスタッフ詠唱杖を構え、目を閉じ、僕の左腕に手をかざす。詠唱杖の上部、詠唱器の部分が、カシャという音と共に起動。

アルフレッドの足もとに術式コードの描かれた魔法陣が発生し、かざしている手が輝き、青く柔らかな光が僕の左腕を包む。

治癒系大気術『ヒーリング第一治癒法』だ

骨折の痛みが引き、骨が繋がったようだ。  
すごい……

スベル大気術の中でも治癒系の大気術は難度が高い。  
治癒系が使えるなら、中級以上の大気術が使えるはずだ。

「よし、いいぞ。あくまでも応急処置だからな。あとで病院行けよ。」

「ほ……すごいな。よし、手伝え。」

こいつ、結構使えるな。予想外。

「て、手伝うって、俺はあんな奴の相手はいやだぞ……！」

アルフレッドはびびるように言った。

「いいだろ、別に。ちょっと動きを止めるだけでいい。」

「簡単に言うな……！もし俺が標的にされたらどーしてくれるんだ

よ!!--」

おいおい……お前のせいでこうなったんだろっが……

「はあ……もし、君が標的になったら、僕が助けるよ。それでいいだろ。」

「信用できるか!!お前もあいつらのように、危なくなったら逃げるんだろ!!」

あいつら?誰のことだ?まあいいか。

「約束する。君がやばくなったら、体を盾にしても守ってやる。」

本気だ。詠唱師と共に闘うということは、詠唱師を守ることと同義だ。

昔、おっさんに教えられたことだ。

詠唱師の盾となるのが、パーティ集団を組んだ氣闘士の役目、そう教えられた。

「くっ……わかったよ!!やれば、いいんだろ、やれば!」

しばらく僕の目を見て、迷っていいようだが、決心したようだ。

「よし!!--」

「動きが速すぎると狙いが付けられない。できる限り奴の速さを落としてくれ。時間は二十秒後!!--」

僕は今、刀を持っていない。奴に突き刺さったままだ。格闘で攻めるしかない。

ああー今日は疲れた。あばらの骨は折れたまんま。

戦いが終わったら、アルフレッドに奢らせて、たらふく飯を食ってやるう。

あと、チコの頭をなでなでして、セラのメイド服姿を堪能する!!  
おしっ!!やる気でできたー!!

次で終わりにする!!

## 第22話：森林内激闘（二）＋おしおき

スベル  
大気術を使用する上で必要なこと。

一つは、エーテルの緻密な操作。

一つは、魔法が発動するイメージ能力。

一つは、これらを冷静に行える集中力。

スベル  
キャストスタッフ  
アルフレッドは大気術の発動のために、詠唱杖にエーテルを徹す。  
キャストコア  
徹されたエーテルは、詠唱杖の上部にある詠唱器にいたり、大気エーテル干渉術式に変換される。

（おちつけ、おちつけ、俺・・・！大丈夫だ、俺ならやれる！！）

いつからだろうか・・・

自分がこんなに実戦に対して臆病になったのは・・・

思い出す。ペルード魔法学院にいたころ。

キャスト  
俺は、優秀だった。魔法学院の詠唱師の中で一番優秀だった。

模擬戦をすれば、俺のいたチームはいつも快勝だった。

家は富豪。顔は美形。女の子にはモテまくった。

俺は傲慢だった。周りから嫌われていることは分かっていた。

カスロア騎士団入団試験、実戦形式の戦闘試験。

そこで、俺はチームを組んでいた奴らに見捨てられた。

詠唱起動中の動けない状況の俺が、対戦相手のチームの攻撃にさらされても誰も助けはくれなかった。みな攻撃を避けるため逃げた。ボロボロになった俺は、試験に落ち、俺は実戦が苦手になった。

実戦をすると、大気術を発動するのに必要な集中力が得られず、実戦では役立たずに成り下がった。誰も信用できなくなった。

それなのに、それなのに、俺はなにやってんだ？

あいつの言葉にそそのかされた。体を盾にしても守ってやる？  
嘘つけ。お前もやばくなったら逃げるんだろ……

でも、あの眼は、あの真剣な眼に信用させられた。  
もう一度誰かを信用してみようという気になった

コッホラゴーのほうに目を向ける。

口をあけ、エーテルの砲弾を撃ち出そうとしている。  
射線上に俺がいる!？

(こ、こつちにあたる!?)

そう思った瞬間、あいつとセラちゃん、そしてちびっ子が、たたみかけるように攻撃し、コッホラゴーを転ばせた。見事なコンビネーションで、射線からこちらを逸らしてくれたようだ。

(いまのうちだ!!)

イメージする。

コッホラゴーが凍りつくイメージ。  
できた。久しぶりの集中力。奴を凍りつかせて捕縛する!!

「いくぞっ!!」

宣言通り二十秒、大氣術が発動する。

~~~~~

あと十五秒。

アルフレッドから離れ、戦っているセラに声をかける。

「セラ、チコ、十五秒時間稼いで！」

「お、おい、ケガはないのか？」

「そ、そーです！！危ないですよ！！」

「へーき、へーき。」

「ぬ……分かった。時間稼ぎは私がやる。君はあまり前に出るな。」

「私もがんばるです！！」

僕は投擲用ダガーをコートの中から引き抜き、投げ、右手で発劔を撃つ。

そして、高速移動で攪乱。

セラは積極的に前に出て、攻撃を自分に集中させる。

チコは遠距離から大きなハンマーを投げつける。
チコのハンマーはブーメランのように、コッホラゴーに直撃した後、
自分のもとに帰ってきている。
すげえ……。なんだ今の技。

あと五秒。

コッホラゴーが口を開いた。

あの技だ!!

奴の射線には詠唱中のアルフレッドがいる。避けるわけにはい
かない!!

「セラ、チコ、転ばせる!!」

セラはコッホラゴーの膝裏にけりを打ち込み、チコは地面にハンマ
ーを打ちつけ足もとの地面を破壊。

コッホラゴーは足もとが崩れたことと、膝裏の衝撃で転んだ。
よしっ!!

もう二十秒くらいだな……

「いくぞっ!!」

アルフレッドの声だ。宣言通りだな。

「全員退避!!」

セラはチコを抱え、跳びさがる。

中級大気術『フリーズ第二氷法・縛ブリズン』

コッホラゴーの足もとに魔法陣が現れ、回転、発光。

バキッ!!

という軋むような音と共に、氷の花が開いた。

体感温度がいつきに下がり、あたりを霧のような煙が包む。

コッホラゴーの下半身は氷で覆われ、身動きが出来ない。

今のうちに僕は接近する。

「ははっ……!!」

接近しつつ、僕は笑ってしまった。

これほどは!!これほどの威力とは!!

あいつ、やるじゃないか。伊達に魔法学院トップは名乗ってないな。

コッホラゴーは身動きが取れなくなって、ほんの一秒。

すでに、氷を無理やり壊そうとしている。

だが、すごい。

あの怪力のセラとためを張る、コッホラゴーを一秒以上封じ込めている。

これはすごい。大気術が使えるとは思っていたがこれほどとは。

コッホラゴーの目の前に到着。

僕はコッホラゴアの腹に突き刺さったままの刀をつかむ。

雷撃

それも、さきほどグロウリザードに使った時のように短時間ではなく、本気で雷撃を流し続ける。

バリツバリツ!!

と、まるで雷が落ちたような音。

雷撃は刀を伝って、コッホラゴアの体内に直接叩きこまれた。

両手のグローブの甲についた簡易詠唱杖に全力でエーテルを流す。オーバーヒートさせないように注意しながらも、自分の体内エーテルの続く限り流す。

十秒近く雷撃を流し続け、停止。

僕が突き刺さっていて刀を抜くと、コッホラゴアは轟音と共に後ろに倒れこんだ。

ふう〜終わった・・・あれ？

膝に力が入らず、そのまま膝についてしまった。意識が少し朦朧とする。

「ユウ!!」

「ユウさん!!」

セラとチコが駆け寄ってくる。

二人とも心配そうな顔だ。

「立てるか？」

「無理……ふらふらする……」

「エーテル欠乏症ですね。セラさん、肩を貸してあげてください。」

「

「ああ。ユウ、つかまれ。」

僕は礼を言い、セラに肩を貸してもらった。
さて、お仕置きの時間だ！！

~~~~~

「アルフレッド。御苦労さん。」

僕はセラとチコをつれだって、アルフレッドのいる場所まで来た。

「あ、ああ……当然だ！！俺を誰だと思っている、アルフレッド クロストラフだぞ！！」

ふっという感じで、かっこつけている。  
急に偉そうになったな。

僕に肩を貸しているセラから、怒気が噴出している。  
チコはあきれた様子だ。

「なあ、ユウ。私が殺つていいか？いいよな？」

「ひい……ごめんなさい……！」

セラのリアルな殺気にビビり、瞬時に態度を変えるアルフレッド。

「アルフレッド、お前金持ちだろ？それに詠唱師としても使えるし、しばらくは俺たちの金づる兼雑用係だ。セラもチコも何かあったらアルフレッドを使えよ。」

僕の提案を聞いた、アルフレッドはいきり立った。

「ちよつと待て……！金づるに雑用係だと……？ふざけんじゃ……。いいつす、それで！喜んで……！」

セラの威嚇で、即効承諾。

よしよし。

「まずは、夕食だな。腹減つて死にそうだから、今日はアルのおごりでたらふく食おう。」

「やた……！」

チコが万歳している。

「くっそ……おい、名前をアルつて略すな……！」

「いいじゃないか。名前長すぎなんだよ。雑用アルよろしくな。」

ぐううう……と、悔しがっているアル。

ふう・・・まあ、なんとか切り抜けられたか。

帰り道、セラが途中から僕をお姫様だっこした。

嫌がったのだが、肩を貸して歩くと時間がかかると言われ、無理やり従わされた。

なんて、羞恥プレイだ！！

### 第23話：守護四神武家

時刻は夜。『ニニギ亭』。

あれから首都まで戻って、その足で医者に行った。

あばらと左腕の骨を、治癒系大気術で修復してもらった。

安静にしておけと言われ、今は包帯が巻かれている。

その後『ニニギ亭』に来た。

「満腹だー」

「満腹です」

テーブル席に座った僕たちは、宣言通りアルの金でたらふく食った。

『ニニギ亭』は庶民的な店であるが、その店の中でも高額なメニューを選びまくった。

僕とチョコが満腹で幸せに浸っている横で、セラは僕の倍以上の量を軽くたいらげている。

「うん。ひさしぶりにたくさん食べたな。」

本気で食ったセラは恐ろしいな。

その細い体のどこにあの大量の食糧が格納されたんだ？

僕の横にいるアルは財布を覗いて肩を落としている。

「ちよつとぐらい遠慮してくれよ……」

泣きそうな声だ。

まあ、しょうがないだろー。

満腹感に浸っていると、チコが何やら緊張した様子で話しかけてきた。

「あの〜、ユウさん。『銀月華』の整備はどうしているんです？」

「ん？毎晩手入れはしているけど、ちゃんとした整備は旅を始めてからしてないかな・・・」

『銀月華』というのは僕の左腰にある刀のことだ。

自分のできる手入れはしているが、専門の魔法技師クリエーターに見せたりはしていない。

「えーと、良ければ私が整備をしてもいいです？と、とっても興味・・・いや、いや、お世話になったので！！」

ああー興味しんしんなのね。チコは魔道具好きだなー。

「いいよ。じゃあ、おねがいします。」

僕はそう言って、刀をチコに預けた。

受け取ったチコは、目を少女マンガのキャラの如くキラキラさせている。

「はい、まかされました！！ふあ〜美しい・・・」

刀を眺めて自分の世界にトリップしてしまった。

後ろに気配を感じた。  
ん？

店長のユウラさんだ。いつも快活に笑っている黒髪のお姉さんだ。

だが、今は少し真剣な顔だ。

「ユウ君、チコちゃんが持つてる刀は君のかい？」

「はい、そうですけど……？」

「ふん……どこで手に入れたんだ？」

「剣を習った師匠にですけど……なんでです？」

「いや、知り合いの持っていたものと同じだからね。」

なんか尋問みたいなのりだ。だが、逆らえない。

ユウラさん、怖いんだもん。僕は若干ビクビクしながら答える。

「師匠の名は？」

「ガウス ランドールです。」

「ガウス……？ああ、なるほど!!」

師匠な名を告げた後、しばらく考え込んだユウラさんは、急に何やら納得したようだ。  
なにがなにやら。

「ユウ君、君の流派の名前は？」

「アルベイン流です。」

「ほう……なるほどね。」

ユウラさんの笑みが深くなった。

「えーと……それで何がわかったんです？もしかして師匠と知り合いですか？」

「んー……言っているのかな……？まあ、いいか。君の師匠と私は知り合い、しかも同郷だよ。私の本名は虎島こじま 優羅ゆうらだ。虎に島と書いて、虎島だ。」

「虎島！？」

と、驚いたのは僕ではなく、さっきまで刀を眺めてトリップしていたチコだ。

「な、なに、チコ？急に……」

「い、え、お、こ、虎島といえば東方の国ヤマトの守護四神武家ガーディアンアームズでふおー！！」

ヤマト！？日本語とほぼ同じ言語を扱う国。

おっさんはヤマトの人間！？

そうか、それで僕がこの世界に来た時、僕の日本語が通じたのか！！それにしてもガーディアンなんたらって何だ？

「守護四神武家とは、ヤマトの戦闘部門のトップです。虎島こじま、竜宮みや、亀平かめひら、鳳おおとり、それぞれ格闘、剣術、陰陽道、忍、をつかさどる武家です！！」

すごく丁寧に説明してくれた。

つまりはユウラさんが強いってことだな。わかります。

「へえー、チコちゃん、詳しいな。他国の人間がそこまで知っているととは思わなかったよ。」

ユウラさんが感心している。確かにチコはヤマトについてよく知っている。

刀のことにしても、鬼族のことにしても。

「私の旅の目的は、鬼族の技術を学ぶことなので、ヤマトについてたくさん勉強したんです!!」

なるほど、そういうことか。

それにしても、一つ疑問が残る。

ユウラさんの本名が和風テイストなのに、同じヤマト出身のおっさんがバリバリのカナ文字の名前なのはなぜだ？

その疑問にユウラさんが、あっさり答えてくれた。

「ユウ君、その答えは簡単だよ。あいつが偽名を使っているからさ。」

「なるほど・・・でもなんで？」

「あいつは、昔から偽名をいくつも持っていたからな。ザックライネルとか、カール アルベインとか・・・ガウス ランドー ルもその一つだ。」

「ア、アルベイン!？」

流派名と同じ！？じゃあ、アルベイン流っておっさんが作ったのか！？

いや、おっさんが偽名であるなら、そもそもアルベイン流なんて存在しない。

あの野郎、何もんだ！？

「ゆ、ユウさん……カール アルベインって十年前の戦争の英雄ですよ……たしか戦争の原因となった、帝国皇帝を討ったとか……ユウさんの師匠さんは、すごい人です……。」

チコがびっくりした様子で言った。

「ユウさん、マジですか？」

「マジ。」

確かユウさんも戦争経験者だ。嘘ではないだろう。

ああー！！だから、なにもんなんだよあの野郎！？

そんなすごい人だったのか？普段は、ただのエロ親父なのにー！

「で、ユウさん。結局、師匠の本名って何なんですか？」

「んー、秘密。」

「ええ！？なんで！？」

「本人に聞くといい。これ以上勝手に話すと怒られそうだ。」

「その本人が行方不明なんです！ー！」

「まあ、いずれ会えるさ。じゃあ、私は仕事があるからー」  
逃げられた。

うーん、結局おっさんのうさん臭さが倍以上に跳ね上がったただけだ。  
ヤマト出身で、戦争の英雄、僕の師匠。  
今はどこにいるのやら。

「結局、ユウの師匠は何者なんだ？」

「僕にもさっぱりだ。」

黙って聞いていたセラも驚いているようだ。  
チコもびっくり顔で固まっている。

アルは……ナンパ中だ。

おい……

~~~~~

夕食が終わり、ナンパをしていたアルを叩きのめし、チコが帰るこ
とになった。

「アル、チコを家まで送って行け。」

「なんで俺……分かった、行ってくる!!」

僕の後ろでセラが手をボキボキいわしている。

「あと、今日の話は、他言無用だ。」

「今日のことって、コッホラゴをやったことか？なんで？」

アルのことだから、自慢しまくりそうなので釘を刺しておく。

あまり有名になるのは、避けたい。

「なんでも。もし、ナンパのための自慢話に使ったら、ビリビリ
いわずからな。」

「げえ……わかったよ。せつかくナンパのいいネタができ
たと思ったのに……」

やっぱりな。

あとはチコに注意しとかないと。

「チコ、アルに何かされそうになったら大声出すんだぞ。」

「大丈夫です。アルさん、ひよろいですから私でも殴り倒せます
よ。」

「おい、いろいろ失礼だろ！！そもそも俺がこんなちびっ子に手
を出すわけないだろ！！」

「むっ……、ていつ……！」

「ぐおっ……」

ばっちりドワーフのチコの腕力が身にしみたようだ。

「ユウさん、刀の整備は任せてください。」

「うん、よろしくね。」

チコは別れを言い、ぶつぶつ文句を言うアルをつれだって帰って行った。

~~~~~

「なあ、ユウ。何である時、あいつに大氣術スベルをわざわざ使わせたんだ？」

チコとアルが帰ってからはしばらくしてから、セラが急に聞いてきた。

「へ……？何が？」

っていうか、まだアルの名前覚えてないんだ……

「森でコツホラゴーと戦った時の話だ。あいつにわざわざ大氣術を使わせなくても、君の刀がコツホラゴーに刺さった時点で、私たちの勝ちは確定していた。それなのに君は、わざわざあいつに大氣術を使わせる選択をした。あれはなぜだ？」

するどいな。

セラの言ったことは本当だ。

あの時、別にアルに大氣術でコツホラゴーの動きを止めてもらわなくても、突き刺さった刀に近づくことは可能だった。

つまりは、セラの言うとおりコッホラゴの腹に刀を刺せた時点で僕たちの勝ちは確定していた。

「理由ね……実はさユウラさんに頼まれてたんだ。」

「ユウラさんに?」

フロリア森林地帯に行く前、セラがメイド服を着替えに行っている間、アルについているいる教えてくれたのだ。その時の会話を思い出す。

~~~~~

セラの着替えている間、僕は『ニニギ亭』の席で待っていた。

チコは店の中で知り合いを見つけたらしく、そっちのテーブルで何か話している。

仕事中のユウラさんが話しかけてきた。

「なあ、ユウ君。今の奴のことだけど、いいかな?」

「今の奴って、アルフレッドってやつのことですか?」

「うん、そうそう。ごめんねー、あいつ性格悪いから……」

「なんでユウラさんが謝るんです?」

「あいつの両親とは旧知だね。息子のあいつについては、少し心配してるんだよ。騎士団入団試験の時に仲間に裏切られたらしくて

ね。軽い人間不信で、実戦恐怖症になっちまったんだと。」

「へえ………」

まあ、あの性格だからなあ………」

「それで、騎士団入団試験に連続で落ちまくって、今じゃすつかりだらけてるんだ。でもな、結構良い腕してるんだよ、あれでも。」

良い腕ねえ……まあ確かに、持っているキャストスタッフ詠唱杖はとても豪華で性能がよさげだった。あれがちゃんと使いこなせるなら、確かに良い腕ではある。

「それで、ユウラさん。そいつの話を僕にしてどうするつもりなんでしょう?」

「機会があれば喝を入れてやってくれってこと。」

「はあ………どうして僕に頼むんです?」

「うん。ユウ君、なんだかんだで人がいいからね。頼めそうだと思うって。」

いい人って言われるのは別にいいが、人がいいと言われるとなんだか微妙に残念だ。

「わかりました。あんまり期待しないで下さいよ。そもそも、いつ会うかもわからないのに………」

「機会があればって言ったろ。心に留めておいてくれればいいさ。」

「
そう言っつて、ユウラさんは仕事に戻って行った。

~~~~~

「ふーん、ユウラさんの知人が・・・」

「そういうこと。見捨てるわけにもいかないだろ。それに、実戦で失った物は実戦で取り返すべきかなーと思っつてね。それでわざわざ、手伝わせたんだよ。結果うまくいったから、いいんじゃないか？」

セラはまだアルに対して怒りを感じているようだ。

「でもあいつが大声出したせいで君は怪我したんだ。もっと怒っつてもいいんじゃないか？」

「十分だよ。奢っつてもらったし、これから仕事を手伝わせたりするわ。」

「そうか・・・君がそう言っつならいいか。」

納得してくれただかな？

セラがこんなに怒るのは僕の怪我のせいかな？

「セラがそんなに怒るのって、僕の怪我のことがあるから？」

「む……まあ、そんなところだ。」

「そっか。ありがと、心配してくれて。」

「別に……礼はいらない。」

そう言っつて顔をむこうに向けてしまった。  
耳が赤くなっているのが見える。

セラのかわいい態度に、癒される。

こうして長い一日が終了した。

## 第24話：いろいろ予想外

白い世界。

前後左右、真っ白。

久しぶりにこの夢か……

前に見たのは、首都に来たころだったかな。

イヴはどこだろ？

後ろを振り返ると、白い髪と白いドレスの少女がうずくまっている。誰かと言っても、イヴに違いないだろうが……

「しくしく……」

えー……

泣きまね、それも自分の口でしくしくって言っている。

なんだろ、つつこんだほうがいいのか？

「あー……イヴ、ひさしぶり。なにしてるの？」

「私は泣いてるの。あまりの出番の少なさを嘆いているの。しくしく……」

どうしろと？

僕が困惑していると、イヴは急に泣きまねを止め、立ち上がった。赤い瞳がこちらを向く。

「とまあ冗談はそこまでにして、久しぶりね、ユウ。」

「……………君ってそんなキャラだったっけ？」

僕の第一印象は、ミステリアスで怖い感じの美少女だったのに……

「前は時間がなかったし、やっぱり第一印象は怖い感じがいいかなー、と思つて。」

イヴはいたずらが成功して喜んでいる。

だ、だまされたー！！

微妙にへこんだ。

気を取り直して

「で、今日は急ぎじゃないの？この前会った時はすごい急いでいたけど……………」

「ええ。時間は気にしなくてもいいわ。もう安定したようだから。」

安定？なにが？

と思つたが先に聞きたいことがいくつもある。

「前にも聞いたけど、僕をこの世界に連れてきたのが君って言うのは本当？」

「本当よ。私がこの世界に連れてきた。」

「どうして……………なぜ僕を？」

「ユウが選んだのよ？」

え………？  
僕が選んだ？

「私がユウに死ぬのと生きるのどっちがいい？って聞いたら生きたいって言ったから、この世界に連れて来たの。」

なんか聞きづてならん単語がいくつかあるぞ！？

「死ぬか生きるかってどどういうこと！？」

「私がユウを連れてきた理由は二つ。才能があることと、死にかけていたこと。つまりは、ユウは元いた世界で死にかけてたのよ。」

ああ………そういうことか。

生きたければ、世界を渡れ………ということか。まあ当然生きる選択をする。」

「怒った？」

イヴは少し心配そうに聞いてきた。

「いや………実際この世界のことはそんなに嫌いじゃないし、生かしてもらったんだから文句は言わないよ。それにしても、僕って何で死にかけてたの？」

「思い出してないのね………じゃあ、はい！」

そう言っつて、イヴは僕の額に触れた。

フラッシュバックする。

見えるのは、横断歩道。

近づいてくるトラック。

視界がぐるりと回転し、暗くなった。

「うおっ!!」

うあー……。死ぬ瞬間のことを思い出した。

気分悪いな……。

「大丈夫？ 思い出せた？」

「もう、バッチリ……。あんまりうれしくはないけどね。」

「立ち話も何だから、座りましょう。」

イヴがそう言うと、僕たちのすぐそばにいつの間にかテーブルと椅子が現れていた。

テーブルの上にはカップがある。紅茶のようだ。

「いつのまに？」

「ここは精神世界だからね。なんでもあり。どうぞ。」

僕は勧められた椅子に座り、紅茶をいただく。

うまい。

気分の悪さが無くなった気がする。

「ユウ、もっと聞きたいことがあるでしょう？答えられることは答えてあげる。」

僕の正面の椅子に座り、カップを手に取りつつイヴは言った。その言葉は答えられないことがあるということか……。まずは何から聞くべきか……。

「僕が、元の世界に戻してくれ、って言ったら戻してくれるの？」

「私の目的を果たしたくれた後なら、考えるわ。」

「目的？僕を連れてきた目的ってこと？」

「そう。内容は今はナイシヨね。」

「ええー……教えて！」

「ダメー」

手をバツにして完全拒否ですか。

「そのうち教えるからね。ごめんなさい。」

ごめんなさいの顔が素晴らしく可愛かったので許す！！

他の質問は……何聞こう？

「うーん……そもそもイヴって何者？」

「神様？」

なんで疑問形？

「なんだろ？管理者と言ったほうが妥当かなー……めんどくさいからナイシヨで。」

めんどくさいって……

管理者……この世界の管理者？  
なんか壮大すぎてよくわからん。

「その神様っぽい物であるイヴが、なんで僕を頼るの？何でもできそうじゃないか。」

「今は神様レベルが低下中なのー。」

真面目にお願いします。

「簡単にいうとね、今は本気が出せない状態なの。だからユウに手伝ってもらいたい。ユウには才能があるから大丈夫だよ！」

才能。

僕には縁のない言葉なんだが。

生まれてこの方、何かに才能があるなんて言われたことがない。

「じゃあ、イヴは僕に何をしてほしいの？」

「今のところは何もなしよ。強くなっていってくれればいいよ。」

僕は何させられるんだろ……怖いな。

僕が次に聞くことを悩んでいると、イヴが目をきらきらさせて僕に聞いた。

「ねえねえ。ユウに聞きたいことがあるんだけど、いい?」

「ど、どうぞ……」

僕はイヴの勢いに少し押され気味で答えた。

「ユウはロリコン?」

「ぶっ……げほっ!!何でそんなこと聞くんだった!?!」

危うく飲んでた紅茶を吹き出すところだった。

まさかこの世界に来て、ロリコンという言葉を知るとは……

「だってユウは、チョコちゃんにとっても優しいじゃない。ちっちゃい女の子が好きなのかなーと思って。」

「チョコに優しいのは、なんというか親が子供を見る的なことであつて、僕は断じてロリコンでは……って、あれ!?!なんでチョコのこと知ってるんだ!?!」

「なんでってあなたの見ていることは、すべて知っているけど?」

「なんだと!?!」

「そ、それはまずい!?!」

「だから、ユウがセラちゃんのお仕事に、スカートから何とかパンチラが拝めないかと観察しているのも知ってるよ。」

いやー！！やーめーてー！！  
プレイバシーの侵害だ！！  
男の子なんだから仕方ないだろ！！

イヴはニコニコ笑っている。  
くっ・・・なんて奴だ！！

「ふふっ・・・ユウの反応は面白いね。その反応から見て、ユウの本命はセラちゃんだね。」

どの反応ですか！？  
な、なんか話がまずい方向に行きそうだ。

そう思っていると、イヴは急に体をピクッとさせ、上を見た。  
僕も上を見たが何も無い。

「どうしたの？」

「うん・・・そろそろ時間切れだね。」

イヴは残念そうに言った。  
僕は内心ホッとしている。

「ユウ、最後に。もうすぐいろんな事が動き出すよ。注意してね。  
じゃあ、またね。今日は楽しかったよ！！」

イヴはそう言うと、体がどんどん薄くなり消えていった。  
注意しろって何に？

具体的に言うてくださいよー。不吉なことを言って消えないでくれ

よ。

僕の意識も覚醒へと向かった。

~~~~~

目を開けると、木でできた天井が見える。

僕が泊まっている宿の天井だ。

身を起こす。

前の時にも思っただが、今の夢は真実なのだろうか。

僕が脳内で勝手に考えた妄想に近い夢、という可能性も捨てきれない。

それはそれで自分が情けなくなるが……

誰かに話してもいいが、頭がおかしいと思われるのが落ちだしな！。

まあいいか。

さてと、今日も元気にがんばろー

僕は身支度を整え、部屋を出る。

宿のおじさんに挨拶をして、出発。

~~~~~

前回のチコの依頼から、五日たった。

僕はチコに刀を預けていたので、その間の仕事をアルに手伝わせて

いた。

この五日間、受けた仕事はすべて戦闘系だ。害獣駆除や、護衛などなど。

アルを実戦慣れさせるためだ。あの実力を利用しない手はない。

戦闘系依頼の中でもあまり難度の高くないのを選んだ。

そうしないとアルがビビりまくって、仕事にならないのだ。

まあ実際難度が低くてもアルはビビりまくっている。

いまだに実戦に慣れないようだ。

「おい、ユウ、きたきたきた！助けてー！！」

とか

「帰るー！！お家に帰るー！！」

とかよく言う。

だが、以前よりは少しマシになっているように感じる。

あくまでも少しだが……

今日は、チコに預けていた刀の回収と、セラの母親についての情報を情報屋に報告してもらう。

まずはチコのほうから。

クロツク通り、チコの工房に来た。

ノックす……

「ぐはっ………!!」

またもやドアの攻撃!!  
鼻に当たった。ツーンという痛み。

「ふおおお?いい音?」

チコまたか。君はもう少しドアをいたわりなさい。

「うああ!?!ユウさん、ごめんなさい!?!」

「ああーいいよ。今日は刀を取りに来ただけど?」

僕は鼻を押さえつつ聞く。

「はい、少し待っててください。」

チコは部屋に引っ込んだ。ドアを閉めて。  
なんかいやな予感がするので、念のためドアから離れておく。

Bannon!!

ドアが恐ろしい速度で開いた。  
わざとだろ!!

「あれ、ユウさん?どうしたんですか?」

くっ………無自覚なのか。怒れない。

「なんでもないです……。刀はどうなった？」

「はい。ばつちり整備しておきました。刀身の砥ぎと、インサイドコート内部術式の微調整、その他劣化部品の交換などしておきました。たぶん、エーテルの徹りが良くなっていると思います。」

刀を受け取り、抜刀。

エーテルを徹す。

チコの言うとおり、エーテルの徹りが少し良くなっている気がする。

「ありがと、チコ。いい感じた。お代はいくら？」

整備費用のことだ。

「お代はいいです。その刀でいろいろ勉強させてもらったので。とつてもすばらしい作品でした！感激でした！」

「そ、そう。どういたしまして。じゃあ、チコ。またねー。」

チコの興奮した様子に押されつつ、別れの挨拶をする。

「はい。またいつでもどうぞー」

~~~~~

僕は港まで来た。

首都ペルートの東側は広大な湖、フロリア湖に面しており、飛空艇の港として賑わっている。港には各国からの定期便や、貨物船などがある。

以前セラの母親のについて依頼した情報屋は、この近辺に店を構えている。

この情報屋はユウラさんの紹介なので、おそらく信用できる。何かいい情報が入っているだろう。

店に入る。ぱつと見は雑貨屋だ。

「こんにちはー。」

「いらっしやい。あんたは確かユウラさんとこの人か。」

店の中にいた老店主に挨拶する。

「写真の人見つかりましたか？」

情報屋はセラの母親の唯一の手がかりである、母親の写真を複写して調査してくれていた。

情報元が写真だけという状況なので、前金だけでかなりの額を払った。

セラには内緒だ。

「ああ、そのことなんだが……すまない。この仕事降りさせてもらってもいいか？当然もらった前金は返す。」

「な、なんですか突然？」

予想外だ。だまされたか？

「あんたはユウラさんの紹介だ。できる限りのことはしてやりたい。だがまずい。帝国にいる俺の仲間が、その写真について軽く探りいれたんだがな。みんな消された。」

消された？

殺されたのか。どういうことだ？

「すまん。あんたも、その写真について調べるのは止めたほうがいい。」

僕は頭が整理できないまま、店を後にした。

~~~~~

港をあてもなく歩く。

写真を見る。

そこには金髪の美しい女性が微笑んでいる。目元がセラに似ている。

どこかの部屋の暖炉の前に椅子を置き、そこに座っている構図だ。

身なりの綺麗さ、暖炉などの調度品などから考えて貴族の女性だ。情報屋の仲間は、帝国で殺されたらしい。

ならば帝国の貴族？

だが、なぜ殺される？  
情報屋は軽く探りを入れたと言っていた。

その程度で普通殺されるだろうか？  
セラの母親は相当ヤバい存在なのだろうか？

そこまで考えて、ため息をついた。  
僕の予定では、今日明確な情報を手に入れ、セラを喜ばせることができるはずだったんだが。

帝国の貴族かもってだけしか分かっていない。  
しかも、危ない存在というおまけつき。

伝えるべきなんだろうか？

ああーどうしよう……

僕はいつのまにか倉庫街まで来ていた。

「おっと……ぼーっとしすぎたかな。」

もと来た道を帰ろうとした。

「ああ？払えねえってのか？」

「お代は全部払ったはずですよ！」

男の声。片方はドスの利いた声。片方はひ弱そうな声だ。  
僕が今通り過ぎた、倉庫と倉庫の間の道から聞こえる。  
この近辺は、人通りが少ない。

「あれは前金だ。ほら、ちゃんと依頼完遂したんだからもう半分

よじせー！」

「そ、そんな無理です！お金がありません！」

「うそつけ。まだ持つてんだろ？」

僕は声の聞こえる道を覗いてみる。

傭兵らしき人が8人、1人の商人風の男を取り囲んでいる。  
おそらく飛空艇の護衛だ。

飛空艇は空賊や、空に住む凶暴な生物に狙われやすい。  
そのため護衛をつけることが多い。

こいつらは護衛を請け負った、たちの悪い傭兵だろう。

ほっところか……

という思考が出てきたが、さすがに後味が悪い。

でも8人だ。一人でも腕のいい奴がいるとつらい。

不意打ちで2、3人倒してから、どうにかするか。

いざとなれば逃げればいい。

僕が飛び出そうとした瞬間、

「おやめなさい！！！」

僕の計画を完全に潰す大きな声。

女性特有の高く、よく通る声。

僕のいた位置から、傭兵たちをばさんでちょうど反対側。

そこには、仁王立ちした、女騎士がいた。

## 第25話：騎士の役割

いきなり大声を出した少女。  
身なりからして、傭兵には似つかわしくない気品がある。騎士の風格だ。

少女は、帝国軍の高機動<sup>イキガ</sup>猟兵が用いる軽装甲鎧に近い形のものを着ており、足には膝辺りまで覆う金属製の脚甲。  
武器は持っていない。

背は高く、美しい金髪が腰辺りまであり、後ろ髪は見事にくるくる縦ロールだ。

顔立ちはきつめの顔であるが、美しく、瞳は碧い。

誰かに似ているような？

と、まあいい。

8人もの傭兵相手に手ぶら！？

こゝ、これはやばいんじゃないか……

「話は聞かせてもらいました！あなた方がやっていることは、ただの恐喝ですわ！！」

「ああん？なんだてめえ……邪魔するつもりかあ？」

8人の傭兵の中のボス格の大柄な男がドスの利いた声で話した。

「直ちにその人を解放して、去りなさい。今なら許して差し上げますわ。」

「ちつ・・面倒だ。やつちまえ。」

ボス格の男が部下に指示をした。

部下の男二人が、腰から剣を抜き、少女に近づいていく。

助けに入ろう。

と思つて瞬間、少女は、背中の腰あたりから何かを引き抜いた。

その何かに少女がエーテルを徹した瞬間、それは一瞬で連結、長大な斧槍ハルバードになった。

おおっ!?

折りたたみ式!?

三つに分割されていてコンパクトになっていたようだ。

ハルバード斧槍はその名の通り、槍に斧のような大きな刃がついたものだ。

本来突きをメインとする槍に、斧の刃をつけることで、斬ることも可能とした武器だ。

その分重量が増し、扱いにくい物となっている。

少女の手にいきなり武器が現れたことで動揺した部下の二人は、一瞬隙ができた。

その隙をついて、少女は斧槍を振り、男二人の武器を叩き落とす。

その動きを殺すことなく、斧槍を回転させ、柄の部分で片方の男のみぞおちを突き、もう片方の男には、脚甲のついた脚による蹴りが顔面に炸裂した。

一瞬のうちに2人を無力化した。  
お見事。

今の動きでボスの男は、警戒したようだ。

「おい、女。調子に乗るなよ……」

今度は部下たち全員でかかるようだ。

フアィター 氣闘士は剣を抜き、キャスター 詠唱師は詠唱杖を起動させる。

まずいことに、残りの6人の中に詠唱師が2人いるのだ。キャスター さすがに遠距離攻撃があると、彼女もつらいだろう。

ちよつとお手伝い。

戦闘が始まる前に、僕は倉庫の陰から飛び出した。

コートの中からダガーを抜き、投擲。

目標は詠唱師の持つ詠唱杖だ。キャスタースタッフ

「ぐあっ!?!」

「な、なんだ!?!」

二人の詠唱師はいきなりの後方からの攻撃に驚いた。

高速で飛ぶダガーは風を切り裂きつつ目標に直撃。

ちよつど詠唱杖の重要部分である杖の上部、キャスタコア 詠唱器の部分だ。

もう大氣術スベルは使えない。

僕の攻撃を機に少女が動いた。

体を地面すれすれまで体を倒した前傾姿勢で、高速移動。

接敵。

相手も傭兵だ。瞬時に攻撃態勢をとり、エーテルの徹された剣を振る。

少女は攻撃はすべて弾き、斧槍で武器を巻き込み、叩き落とす。そして、斧槍の柄による打撃、間合いの近い相手には蹴り。

まるで踊っているかのように勢いを殺さず動き回り、斧槍を頭上で回転させ、足技を放つ。

すでにボスの男以外は地面に這いつくばっている。

「まだやりますの？」

少女は余裕の構えだ。

「ふ、ふん……俺をこいつらと同じだと思っなよ！」

ボスの男は剣を構えた。剣には十分にエーテルが徹されている。大柄な体に似合わぬ高速移動で近づき、横薙ぎに払った。

少女はその場から跳んだ。

恐ろしく身軽に跳び上がり、空中で一回転し、ボスの男の後ろに着地。

そのまま足払いを放ち、仰向けに倒れたボスの男のみぞおちに斧槍の石突きを刺し、昏倒させた。

戦闘が終わると、少女は斧槍を一瞬で折りたたみ、腰に戻した。

「ふう……商人の方、大丈夫でしたか？」

「は、はい！ありがとうございます、助かりました！！何かお礼を……………」

「いえ、その必要はありません。市民を助けることが騎士の役目ですもの。当然のことをしただけですわ。」

という騎士の少女と助けられた商人の会話。

やはり見た目通り、高潔な感じだ。

僕はたいして役に立っていなかったなので、このままこっそり帰ることにした。

~~~~~

港まで戻って来た。

そう言えば僕は考え事をしていたんだった。

ああ…………セラになんて言えばいいんだ…………

言ったら言っただ、絶対に帝国に行くことになるだろう。

でも、危険だな……。言うべきか、言わないべきか……………

僕が頭を抱えながら歩いていると後ろから肩を叩かれた。

振り向く

「はい？」

「さっき助けてくれたのはあなたでしょう？どうして逃げるんですの？」

そこにはさっきの女騎士がいた。ちよつと怒つたような顔だ。追いかけて来たのか……

「あー……まあ、たいして役に立ってなかつたし。」

「そんなことはありません。見事なナイフ投げでしたわ。お陰で助かりました。」

褒められた。

「えーと……わざわざそれを言いに？」

「いえ、その、それだけではなく、わたくし道に迷ってますの。道を教えてくださりませんか？」

若干、恥ずかしそうに言った。

この人、迷子か。それで倉庫街なんかにはいたのか。

「いいですよ。どこですか？」

「『ニニギ亭』というお店です。ご存知？」

「うっ……!!」

この人を『ニニギ亭』に連れていくということは、必然的に、そこで働くセラと合うことになる。
言つか言わないか決めてないんだが……

「どうしたんですの？知りませんか？」

「あー、いや、知ってるよ。案内する。」

行く道で考えるか……

「ありがとうございます。わたくし、ルーリアと申します。」

丁寧な自己紹介だ。なんか新鮮だ。

「僕は、ユウ。よろしく。」

僕はルーリアを連れて、アルプス通り『ニニギ亭』に向かった。

~~~~~

「ユウは『ニニギ亭』に行ったことがありますの？」

港から『ニニギ亭』に向かう道で、ルーリアさんが聞いてきた。

「うん。仲間がそこで働いてるからね。ルーリアさんはどうして『ニニギ亭』に？」

僕が聞くと、ルーリアさんは少し怒ったような感じで

「ルーリアでよろしいですわ。歳はたいして変わらないでしょう？私もユウと呼ばせてもらいますから。」

と言った。

呼び方のことか。まあ確かにルーリアと僕はたいして変わらない歳に見える。

「わかった。えーと、ルーリア、『ニギ亭』にはどうして？」

「知り合いますの。その人に会いに。」

ふん……

ユウラさんかな？

と、もうすぐ着く。港と『ニギ亭』はたいして離れていない。セラの母親についてはどうしようか……

うん……

あ、そうだ。ルーリアにちょっと聞いてみるか。

「ねえ、ルーリア。関係ない話なんだけどいいかな？」

「なんですの？」

首をかしげている。その仕草、いいね！！

「えーと、友人の大切なものを見つけたんだけど、そこにはすごい危険がある、そんな場合、君ならどうする？友人に教える？」

ルーリアは少し考えたようだが、すぐに返事を返した。

「わたくしなら、教えますわ。それを取りに行くかは、自分で決めたいですもの。大切なものであるなら、なおさらですわ。」

自分で決めるか……  
セラもそう思うだろうか。

思うだろうな。

それに僕はセラの大切な写真を預かって、情報収集をかってでたんだ。

このまま黙っているのは、道義に反する。

「ありがと、ルーリア。参考になった。」

「どういたしまして。もしかして、ユウが先ほどから悩んでいる様子だったのは、このことですか？」

うっ……悩んでいたのは、ばればれか。  
表に出してないつもりだったのに。

おっと、もう着いた。

『二二ギ亭』の扉をあけ、中に入る。

「い……なんだ、ユウか。」

いらつしゃいませってちゃんと行って!!  
僕にもお客様としての対応をしてください!!

セラが僕の後ろにいる、ルーリアに目をやった。  
と思ったら急に目がつり上がった。

あれ？怒ってる？

セラは小さな声、囁いているかのような声で、僕に言った。

「ユウ。君は私が汗水たらして働いている間、女の子とお出かけか？ふふふ……後で……」

後で！？その先は！？

後で何されんの！？

こえー、ちよーこえー。

いままでのセラの中で一番怖い。すごい圧力だ。

「こちらへどうぞ。」

セラはそのまま仕事モードで座席を案内した。

それがますます怖い。

後ろにいるルーリアは僕がビクビクしている様子を、不思議そうに見ている。

カウンター席に座り、セラが離れていったところでやっと緊張が解けた。

ふく怖かった。

「ルーリア。知り合いは見つかった？」

「いえ、まだです。」

とにかく何か注文するか……

「おう、ユウ君。いらっしやい……って、あれ？その子……」

そうやってきたのは、店長のユウラさんだ。  
ユウラさんはルーリアを見て驚いている。

「ユウラさん、おひさしぶりです。」

ルーリアは丁寧にお辞儀をした。

「あなたは確か……ハルギートのおっさんとの……」

「はい。長女のルーリアです。」

「ほ……大きくなったな。なるほど、今回は君か。」

「はい。」

どうやら知り合いは、ユウラさんだったようだ。  
会話の内容は、聞いてもいまいちよくわからなかったが。

「それで、ユウ君はなんでルーリアと？」

「道案内をしただけですよ。」

「ふーん、そっか。おっと、注文は？」

思い出したようにユウラさんは言った。

僕たちは昼食のメニューから適当に選び注文。

ユウラさんは注文を聞いて、さっさと行ってしまった。

「少ししか話してないけどいいの？」

「ええ。十分ですわ。」

今ので十分？変なの。

~~~~~

昼食を食べ終わったころ、『ニニギ亭』にアルがやってきた。

「おい、ユウ。今日は仕事……はじめましてお嬢さん。俺の名前はアルフレッド クロストラフ。ユウの友人、よろしく。良ければ、この後どこかで遊びませんか？」

僕への挨拶なしに、速攻で隣にいたルーリアに自己紹介を始めた。ははは、殴る。

「ぐおっ……な、なにするんだ!!」

「いきなりやめろ。見境なしめ……」

ルーリアは訳がわからない様子だ。

「ユウ。この方は、なんですか？」

「えーと、変人ってやつだ。近づくと妊娠するぞ。」

「うおおおい!?なんだそれは!!!ちゃんと紹介しろ!!!」

おかしいな。ちゃんと紹介したつもりなんだが。

「つまり、近づいてはいけない方ですね。」

「その通り!!」

「違う!!」

それから、僕はアルと依頼請負屋クエストショップに行くことにした。
当然、アルは嫌がったが、問答無用だ。

ルーリアはこれから宿を探そうだ。

「ユウ、道案内助かりましたわ。ありがとう。」

そう言って、ルーリアと別れた。

「くそお……どうして、どうして、こんなその他大勢顔の奴
にセラちゃんや、さっきの美人さんみたいなのが寄ってくるんだ……」

と、意味のわからんことを言うアルを引きづりながら、依頼請負屋
に向かった。

あっ!!セラにお母さんの情報のこと言うの忘れてた!!
セラがずっと怒っている様子だったので、すっかり忘れてた。

また、明日にするか。

~~~~~

深夜。

『ニニギ亭』店長のユウラは閉店作業をすべて終え、自室へと帰ろうとしていた。

ん？

部屋の中に誰かいる。

もう来ていたのか。

ドアを開けると、部屋の中央にはテーブルとイスがあり、そこには金髪の少女が座っていた。

「お邪魔しております。」

金髪の少女、ルーリアは椅子から立ち上がり礼をした。

「おう。今回の伝令はきみか。意外だな。」

「皆、忙しかったのでわたくしが参りました。」

「なるほどね。まあ、座りなよ。」

ルーリアは先ほど座っていた椅子に座り、ユウラはテーブルをはさんで反対側の椅子に座った。

「で？そつちの様子は？殿下は元気？」

「はい。国外に出ることを今も勧めています、一向に聞いては

くれませんの。」

「ふふ……頑固なのは相変わらずか。そっちの戦力はどんなんだ？」

「少し不安があります。」

そうか……

ユウラは少し考え込む。

「ユウラさん、共和国のほうはどうですか？」

「あつちは凶一郎が向かった。なんとかするだろう。」

戦力不足か……

ユウ君とセラはどうだろうか？

ユウ君は凶一郎の弟子。

セラは恐らく、あの体内エーテルの質から見て、龍族だ。

協力させたら凶一郎は怒るだろうか？

ユウ君はなんだかんだで引き受けてくれそうだし、セラはあの様子だとユウ君に付いていくだろう。

「ルーリア、君をここまで道案内してきた子がいるだろ？」

「ユウのことですか？それがなにか？」

「どうだった？」

「少しひ弱そうな印象がありました。ナイフ投げがうまくいったですね。」

「あの子は凶一郎の弟子だ。」

ルーリアは目を見開いた。

「凶一郎さんの！？あの方の技を教えられて、使える人間がいるんですの！？」

「意外だろ？私も直接實力を見たわけではないから、詳しくはわからないが、いい腕を持っていると思うよ。」

「ユウに協力してもらえとおっしゃるんですの？」

「できたらね。無理強いはしないさ。」

「凶一郎さんに怒られませんの？」

「怒られるだろうな。わざわざ、行方不明になって手伝わせないようにしてるんだから。だが、そんなこと言ってられないだろう？」

「まあ、そうですが……」

「ま、考えとくってレベルの話だ。もし、そうすることになったら私から頼むよ。ほら、長旅で疲れたら？今日は宿に帰ってゆっくり休みなよ。」

「はい。お邪魔しました。」

そう言つてルーリアは立ち上がつて、礼をして、窓から出て行つた。相変わらず身軽な子だ。

ルーリアが歸つたのを見届けたあと、就寝の準備をしながら考える。凶一郎は前の戦争で異界人の友人を死なせてしまったトラウマがある。

ユウ君から聞いた凶一郎の行動から考えて、ユウ君は恐らく異界人だ。

もし、私の考えた通りユウ君が異界人であるなら、私が何もしなくとも戦いの渦の中に飛び込んでいくことになるだろう。

イヴの導きによって。

## 第25話：騎士の役割（後書き）

（11/15）

ちょっと更新が遅れたような・・・

登場人物紹介をちよびつと追加してみました。

## 第26話：説得、交渉、爆音

セラの母親についての情報が入った、次の日。昼ごろ。昨日は結局セラに詳しいことが言えなかった。だ、だってなんが怒ってるんだもん！！

と、自分に言い訳しつつ、『ニニギ亭』を目指す。ちよつとビクビクしながら歩く。

はたから見ると、完全に変な人だ。

到着。

ついた……ついてしまった。

今日は怒ってないよね？

ドアを開ける。

「……………なんだ、ユウか。」

迎えたのは相変わらずスカートがきわどいメイド服姿のセラだ。

いらつしやいませが完全に消えた。

泣いていいですか？

でも昨日とは違って、怒っている様子はない。

よかったよかった。

「セラさん、お話があるんですが……………」

「なんで敬語なんだ？まあ、いい。今仕事中心だが？」

「うん、ユウラさんから許可もらってくるよ。」

僕はユウラさんにセラの時間を貰いに行く。  
ユウラさんは厨房のほうにいるようだ。

「ユウラさん、ちょっといいですかー？」

「おーユウ君。なんだい？」

ユウラさんが料理の手を止めずに答えた。

「ちょっとセラを貸してもらっていいですか？」

「ああ、いいよ。ついでに午前中は休みっことにしてあげるよ。」

ん？

ユウラさんの気前がやたらいい。  
なんか不気味だ。あとで厄介事を頼まれそつな予感がする。

セラにユウラさんの答えを伝えた。

「ふーん、そうか。じゃあ着替えてこよう。待っていてくれ。」

「……………」

残念だ。その格好のままでいいのに。

思っているが言わない。殴られるのが目に見えていますから。

僕も学習するんですよー！！

「着替えないほうがいいか？」

「うん、もちろん！……あ」

急にセラが聞いてきたので、正直に答えてしまった。

「やっぱりな。隠してるつもりだろうが、顔に出てるぞ。」

セラに呆れられた。

ひ、卑怯だぞ！！

~~~~~

セラの着替えが終わり、『ニニギ亭』のテーブル席に座る。

「で？どうしたんだ？ユウにしては珍しく強引だな。」

「うん。えー……実はセラのお母さんについて情報が入ったんだ。」

「ほ、ほんとかっ！！」

いきなり立ち上がって大声を出したので、店中の視線がこっちに来た。

「セラ、落ち着いて。めっちゃくちゃ目立ってるよ。」

「あ、ああ。すまん。」

セラは恥ずかしげに、席に戻った。
店の中の雰囲気は元に戻る。

「あんまり期待しすぎないですよ。正直、確定的な情報じゃないんだ。」

「わかった。話してくれ。」

僕は情報屋が帝国で殺されたこと、依頼を断られたことを話した。

「そうか……」

セラは何か考え込んでいる。

「まあ、そんなこと。結果から見れば、帝国にいるかもしれない。どうする？」

「私は帝国に向かう。この店で働いて、旅費のほうはだいぶ稼げた。ユウラさんに了解をもらい次第、向かうつもりだ。」

即決か……危険ってわかってんのかな？

「セラ、情報屋の人殺されたんだよ？絶対ヤバイよ？分かってる？」

「当たり前だ。それでも手がかりがそれしかないなら、私は行く。」

まあ、予想通りの反応ではある。
仕方がないか……

「わかった。じゃあ僕も準備するか。」

「ちょ、ちよつと待て！何で君が準備するんだ！？君とはここで別れるはずだったろう？」

セラが慌てた様子で言った。

ああーそういえばそんなこと言ったか……
すっかり忘れてた。

「えー……まあいいだろ。付き合うよ？」

「待て待て！危険だと言ったのは君だろう？私のことで君をこれ以上危険な目に会わせたくはない。だから……ここでお別れだ。」

やべえ……このままだとほってかれるな。
説得する口実考えてくるんだった！！

ああー……そうだ！！

「僕も帝国に用があるんだ。この前図書館で見つけた異界人に関する本の作者と会ってみようと思って。」

ここにはじめて来た時に読んだ、モルドスなんたらって人の本だ。
正直、元の世界に帰る方法はイヴが持っている。

まあ、あの夢が真実か妄想か判断付かない状況なので、自分でも探しておきたい。

この理由、今考えたけど……

セラは僕の答えを聞いて一瞬黙りこんだが、すぐに怒ったように言った。

「ダメだ！君は私とは別に帝国に向かえ。いいな！！写真返してくれ。」

コートのポケットからセラの母親の写真を出す。
うー……どうする、どうする。

「おおー！誰これ？超美人じゃないか！。紹介して！！」

僕が手渡そうとしたセラの母親の写真を見つつ、大声を出したのは予想通りアルだ。

このどんよりした空気のなか良くそんなことが言えるな。
空気読め！！

「アル、死にたいのか？」

セラがマジギレ三步前だ。

「ひい……な、なんだよ。場を和ませよう……ってあれこの家紋……」

マジビビりしていたアルが何か思い出したように

「この家紋ってあれだ。確かランドグリフ家の家紋だな。」

家紋？

確かに写真の女性の後ろの暖炉に家紋らしきものがある。だが女性の頭で半分以上隠れて判別できない。

「おい、アル。こんなちよつとしか見えてないのになんでわかる？」

「おいおい忘れたのか？俺様は魔法学院のトップ。一度見たものは忘れないんだよ。」

「一度見た？」

「ああ。うちの家、このランドクリフ家と昔親交があったんだよ。子供のころだったけど、なんとなく覚えてるな。でも、この家断絶したんじゃないかったか？」

おー！！

アルが初めて役に立った！！

おめでとうアル。君は今日から雑用アルではなく、たまに役立つアルだ。

「間違いないか？」

セラが真剣に聞いた。アルも何となくセラの真剣さを感じ取ったらしく真面目な顔で

「間違いない。まあ、俺の記憶力を信じるならだが・・・」

セラはしばらくアルの顔を見つめると

「信じよう。断絶したというのは？」

セラがアルのこと信じるって言った!?

以前の僕の怪我以来、嫌っているようだったのに。

「単純に跡取りがいなくなったって話だったはずだ。帝国の下級貴族だしな。よくあることだ。」

やはり帝国か……

これで情報が固まったな。

「よかったじゃないか、セラ。これで心おきなく帝国に向かえるね！」

「そうだな！……って一緒に行くというのはダメだぞ！」

くっ……どさくさまぎれに勢いで丸めこむのは無理ですか。頑固だな

「おい、ユウ。どうなってんだ？俺にはさっぱりだぞ？」

質問攻めされていたアルは、事情を知らないの不思議そうな顔だ。いろいろ情報くれたことだし、事情を話してやるか。

「ユウさん、セラさん、アルさん、こんにちは。」

話そうと意気込んだ所に声をかけられた。

やたら幼い声の主はチコだ。

チコはいつも通りの作業着に、大きなりュックだ。

「おーチコ、こんにちは。また依頼？」

「いえいえい。今日はお別れの挨拶に来たんです。」

「へ・・・？お別れって？」

「はい。お金もたまったんで、旅を再開するつもりなんです。」

そういえばチコの旅の目的は、ヤマトに住む鬼族の技術を学ぶことだったけ。

「いつ行くんだ？」

「明後日です。だから今日はユウさんのお仕事お手伝いして、最後に『銀月華』にお別れしようよと・・・ああ、いえいえ、もちろん皆さんにもちゃんとお別れしたかったので！！」

『銀月華』は僕の持つ、鬼族製の刀だ。
チコ、刀がメインだろ。

閃いた！

これは使えないか？

「ねえ、チコ。旅は危険がいつぱいだよね？」

「ふあ？まあそうですね。」

「ヤマトへの途中に帝国があるよね？」

「そうですね。ヤマトは帝国を越えて、海の方です。」

「護衛がいたら安心だよね？」

「まあ、居たらありがたいです。」

「まかせたまえ！！」

「え！？護衛してくれるんでふ！？」

「うんうん。さあ、セラ、僕も帝国行くぞ！」

セラは呆れたように

「別にかまわんが、一緒にはいかんぞ。」

あ……なんも解決してねえ……

「どじゆじゆことですか？」

ああ……チコにも話していいかな？

「要するに、ユウはセラちゃんに振られたと。」

アルがニヤニヤしながら言った。

ち、違うぞ……！！

失敬な……！！

「アル。そういう問題ではない。私の身内の捜査にユウがついてくると言っているだけだ。断っているがな。」

セラが言った。

「それでどうしてついて行っちゃだめなんです？ユウさんとセラさん仲いいのに・・・」

チコ、いいこと言った。あとで飴をあげよう。

「どうした、どうした？さっきからもめてるな？」

ユウラさんが出てきた。

うるさくしすぎたかな。

「帝国行くとかなんか言ってたけど、良ければ飛空艇のチケットやるぞ。」

な、なんだ!？

ぶ、不気味すぎる!!

ユウラさんがタダで、しかも割と値段のする飛空艇のチケットをくれるなんて。

今日はとことん変だ。

「そういう話じゃないんですが・・・」

とセラ。

事情を知らない三人に説明する。

母親を探していること、情報屋が殺されたこと、セラが付き添いを断ること。

「ふーん。セラが意地張ってるだけだろ。」

「ですねえー」

ユウラさんとチコは、そう言った。
当たってるな。

「そ、そういうことじゃないでしょう!?!」

「セラ、お前がこの店で暴れた時も、そんなこと言ってたな。他人を巻き込みたくないか……。だが、ここでユウと別れたら、前みたいに後悔することになるぞ。」

ん? セラがユウさんの店で暴れたのって、そういうこと?

「ちよ、ユウラさん。そういうことは言わなくていいでしょ!?!」

なんか恥ずかしそうな、セラ。

なんかいい感じ?

そのまま説得お願いします、ユウラさん!?!

「じゃあ、セラ。ユウとチコと一緒にいくなら飛空艇のチケットをやるけど、どう?」

おお!?! いいぞユウラさん!?!

「べ、別に歩いていきます。」

「急ぎたいんじゃないの? 飛空艇なら、だいぶ時間短縮になるぞ。」

「ぐ……。じゃあ飛空艇降りるまで……。」

よし、きたー！！

「私もいいんですか？」

とチコ。

「ああ、もちろん。」

「ユウラさん、ありがとー。」

そしてユウラさんは、僕のほうを見て

「うん。で、ユウ君にはその代わりにお願いがあるんだけど。」

ユウラさんが申し訳なさそうなふりで頼んできた。絶対ふりだ。ぐうつ、きたぞ。何を頼まれるのやら。

「飛空艇のチケットの行き先が、ザガルバフってとこなんだけど、そこに私の手紙を届けてもらいたい。どう？」

あれ？そんなの？

もっと大事、頼まれると思ってたのに。

「それぐらいなら、まかせてください。」

「うんうん。お、ちょうどいいところに。ルーリアー。おいでー。」

ルーリアー？

軽装鎧姿のルーリアがちょうど店に入ってきた。
こちらのテーブルに来る。

「ユウラさん、こんにちは。」

「おう。ユウ君とアルはもう知ってると思うが紹介しておく。私の知人の娘で、ルーリアだ。しばらくここにいるから、仲良くしてやってくれ。」

「はじめまして、みなさま。ルーリアです。」

とルーリアが丁寧にお辞儀した。
で、アルが軽薄な感じで声をかける。

「ルーリアさん、俺のこと覚えてるー？」

「ああ、昨日の……近づいてはいけない方？」

アルはこけた。
全員に笑われた。

~~~~~

それから、ユウラさんは仕事に戻り、僕たちは全員で昼食をとる。  
結局、セラとチコと飛空艇に乗ることとなった。  
出発は、五日後ということだ。

いっつ……!!  
急に頭に激痛が走った。

なんだ？

「ユウ？どうした？」

僕が顔をしかめていることにセラが気付いた。

「ああ……なんか……ぐっ!!」

「お、おい。ユウ!!」

何か聞こえる。イヴの声？

「ユウ……そこは……き……西から……」

まるでノイズが入っているかのように、断片的にしか聞こえてこない。  
なんだ？西？

「おい、ユウ。治療術かけてやるうか？」

と、僕の冗談ではない様子に、アルが心配そうにしている。  
断ろうと僕が口を開いた瞬間、

爆音。

それも尋常じゃない大きさの音だ。

「うわああ！！なんだ、なんだ！！」

店の中が騒然となった。

僕たちは店の外に出る。

僕はまだ頭が割れるように痛く、セラに肩を貸してもらいながら、外に向かう。

外では大勢の人々が逃げ惑っていた。

首都の西側の入口から、大きな煙が上がっている。

アルが近くの人を捕まえて事情を聴いている。

「おい、何があつたんだ？」

「魔物だ！！魔物が攻めてきた！！白くてでかいクモだ！！10体以上いやがつた！！」

魔物！？

以前相手にした、クモのでかいやつ。あれが10体以上！？

「ユウ、これは……………」

「ああ、まずいな。魔物が以前相手にした奴と同じなら、戦うのに百人以上、必要になる。この国の騎士団が、がんばってくれればいいが……………」

僕に肩を貸したセラが、驚いた様子だ。

さつきから騎士団らしき鎧姿の人間が煙の上がる、西側に走っているのを見つけた。

そこでまた、強烈な頭痛と、今度は鮮明に聞こえるイヴの声。

「ユウ、ユウ！！聞こえる！？西は囹！！本命は湖のある東からよ！！！！」

何・・・？

そこでまた爆音。

今日、二度目の爆音は東のフロリア湖、飛空艇の港のほうから聞こえた。

## 第27話：対魔物戦開始

爆音は近い。

この『ニニギ亭』は首都の東側にあるアルプス通りにある。そのため二度目の港からの爆音は、大きく感じた。港の方から人が大勢逃げてくる。

まずい。

騎士団は、西側の魔物にほとんど戦力を割いているはずだ。反対側の東側に対処できない。

イヴの言う囀とはこついうことか!!

先ほどのイヴの声を聞いてから、頭痛が消えた。肩を貸してくれていたセラの礼を言う。

「もう平気なのか？」

「うん。治った。」

いきなり

カシャッ!!

という音が足元で聞こえた。

僕の足元ではない。

ルーリアの足もとだ。

ルーリアのつけている脚甲が変形している。

かかとの部分に詠唱器キャストコアに近い機器が現れている。

いきなりルーリアは真上に跳んだ。  
そして、跳躍の最高点で止まった。  
浮いている。

「ル、ルーリア、なにを……」

う、浮いている。どうやってるんだ？

「わたくしは港に向かいますわ。みなさんは急いで避難を！」

そう言うと、ルーリアは体を縮めた。

そして、まるで何かを蹴るように勢いよく体を伸ばした。

ドッ！！

という音と、大気エーテルの薄緑色の光を残して、港のほうにかなりの速度で飛んで行った。

「あ、あれ、なんだ？」

「ウインドウォーカー翼脚甲というものです。」

僕の疑問の声にチコが答えた。

「ういんどうおーかー？」

「はい。帝国が開発した空戦武装です。共和国の有翼人飛行部隊エンジェルに対抗するために作られたものです。原理は飛空艇と同じように、大気エーテルを反射することで推力を得ます。扱いの難しい武装で

すので、あまり知られていませんが、ルーリアさんはかなりの使い手のようです。」

ほおー……すごいな……

と、感心している場合ではない。

ルーリアが先走ったので、僕も向かうしかないかな？

「僕は港へ向かうけど、セラは来てくれる？」

「当然だ。」

即答してくれた。

なんかうれしいな。

「よし！！じゃあ、チコとアルはユウラさんと一緒に避難を……

」

「私も行きますですー！！」

僕の言葉を遮るようにチコは言った。

「チコ、今回はヤバい。止めといたほうがいい。」

「ユウ君、チコちゃん連れて行ったほうがいい。」

ユウラさんに言われた。ユウラさんはチコのほうを見て、

「チコちゃん、ワイザーじいさんから聞いているんだろ？」

「はい。おじいちゃんから対魔物の戦術について一通り。だから、ユウさん私はお役に立てますよ!!」

対魔物の戦術!?

ドワーフはそんなのも知ってるのか。

確かに魔物に対してどう対処するかは迷うところだ。

「わかった。でも危なくなったらすぐ逃げるんだぞ。」

「わかりますた!!」

さて、アルはどうするのだろうか？  
さっきから黙りこんでいる。

「アル。お前は どうする?」

「お、おれは……どうすればいい?」

いや、聞かれても。

「今回は魔物が相手だ。お前が自分で決めてくれ。僕は来てくれるとありがたいけど……」

アルはうつむいて、うなっていた。

「ぐ……うー、あー、くそっ!!お、お前らだけだと心配だから、俺様が助けてやるよ!!でも、やばくなったらすぐ逃げるからな!!」

「本当にいいのか?危ないぞ?」

「いいつて言ってるだろっ！！ほらさっさと行くぞ！！」

おおー！！

アルが珍しくやる気だ。

まあ、ここはアルの生まれ育った町だ。必死にもなるか。

「それじゃあ、ユウラさん行つてきますね。」

「ああ。気いつけてな。」

ユウラさんに挨拶して、僕たちは港へ向かう。

と、言つても逃げる人が大勢いて、通りは混雑している。

そっだー！！

「セラ、屋根伝いに港へ向かう。チコを頼む。」

「まかせろ。」

セラはチコを抱えて、跳び上がった。

僕もアルを掴んで、体内エーテル操作による脚力強化。

跳ぶ。

「つぎやああー！！」

僕に急に捕まれて、跳び上がったので、アルが面白い声を上げた。

一瞬の浮遊感、『ニニギ亭』の屋根の上に着地。

「き、急に跳ぶな！何か声をかけてから跳べ！」

と、アルは文句を言っている。

おもしろかったから、今度からも声かけないようにしよう。

さて、

「おしっ！！じゃあ、ルーリアが心配だし、さっさと向かうか。」

「ああ。」

「はいです！！！」

「ふえーい。」

一人を除いて頼もしい返事だ。

僕たちは屋根の上を港に向かって走り出した。

~~~~~

屋根伝いに港へと向かう、四人を見送っていたユウラは少し感心していた。

あのヘタレだったアルが、ついていくことになるとは。

ユウ君にいろいろ頼んだのは、正解だったか……

「ユウラさん、私たちはどうします？」

店員の猫人のミスカだ。
ウエアキヤット

「従業員は貴重品持って避難。戸締り忘れるな。火事場泥棒が出るかもしれないからな。」

「わかりました。ユウラさんはどうするんです?」

「私は、ちょっとお手伝いに行ってくるよ。若い奴らばかり働かすのは、可哀そうなんでね。」

「ユウラさん……あなたの体は……」

「わかってる。ちょっと手伝っただけだよ。じゃあね。」

そう言ってユウラは、港へと歩き出した。

~~~~~

僕たちは屋根伝いに港へ向かいながら、チコの話の聞く。

「魔物は基本的に、核コアと呼ばれる、中枢を破壊すれば死にます。人間で言う所の脳に当たる部位ですね。この核は体のちょうど中央辺りにあることがほとんどです。そして、魔物の厄介な点は、その外殻です。魔物の体の表面は柔らかいんです。」

「柔らかくて何で厄介なんだ?硬いよりいいだろ?」

と不思議そうにアルは言った。

「いいえ。硬い装甲は衝撃の伝導が容易です。柔らかいと衝撃が吸収されてしまったため、内部破壊を行うにしても、かなり大変です。」

確かに。

ただ硬いだけなら、なんとかかできる。

だが、柔らかい装甲というのは面倒だ。

前回のように、装甲の耐久力を上回る連続攻撃を行うか、内部破壊を成功させるか、どちらかになる。

「この魔物の柔らかい装甲を、ソフトアーマー軟体装甲と呼びます。」

話しているうちに、港の近くの建物の屋根までたどり着いた。

そして、絶句した。

そこはひどい状況だった。

港に着水している飛空艇のほとんどは破壊され、破片が湖に浮いている。

周辺の建物も破壊され、火が上がっているところもある。

何人が倒れたまま動かない人も見受けられる。

魔物は三体。

どれも体の表面が白い。生物としてあり得ないと思える白さだ。

脚が8本、そのうち前方の2本はハサミの形になっている。

胴から尾が伸び、体の上の前方にある。尾の先にもハサミのようなものが付いている。

簡単に言うと、サソリだ。

大きさは2トントラックぐらいの体を持ち、足は太い。

ルーリアは、翼脚甲で地面をスケートするように動き回り、魔物の周りを動き回り翻弄して、時間稼ぎをしている。

「チコ。奴の情報は？」

「あの魔物は第二級<sup>セカンドクラス</sup>、『スコピオン』のB型です。背中の上から、胴体の中央辺りにある核を狙うのがセオリーです。ですが、背中に乗るとあの大きな尾で攻撃されます。よって、まずは尾の破壊、続けて背中からの衝撃伝導技による体内の核の破壊が基本戦術となります。」

なるほど。

まずは、しっぽをぶっ壊せか……

「他の有効手段として、関節部への攻撃。あと、雷撃による攻撃が有効です。魔物は総じて電気に弱いんです。注意点は外殻の軟体装甲は絶縁体なので電気を通しません。だから、装甲に傷をつけてからの雷撃は比較的有效です。」

ほう……

僕の見立てとしては、魔物は機械に近いものだ。  
電気に弱いつても、うなづける。

よし、対処法は分かった。

周りを見る。

倒れている人たちの救助もしたいところだが、ルーリアの時間稼ぎ

も限界のように見える。

「よし。じゃあ、僕とセラはルーリアに加勢してくる。アルとチコはケガ人救助だ。」

3人は頷いた。

「僕たちがすることは、時間稼ぎだ。僕たちだけでは、倒しきれない可能性が高いからね。あぶなくなったら、即逃げる。いいな？」

続けて、

「行くぞ!!」

「」「」「おっ!!」「」「」

戦いが始まる。

## 第28話：首都内戦闘（一）

アルとチコを抱え建物の屋根から飛び降り、着地。

アルとチコはそのまま行動開始。

僕とセラは脚力強化による高速移動で、ルーリアのほうに向かう。ルーリアはサソリに2体に挟撃されている。

「ルーリア!!!」

「ユウ!? 何で来ましたの!? 避難しろと言ったたでしょう!」

僕はその言葉を聞きつつ、近くのサソリに接敵。

刀は抜かず、両手に体内エーテルを収束。

アルベイン流 格闘術 七式 『金剛竜破』

龍の顎の形をした高密度体内エーテルを、両手で叩きつける技だ。衝撃により相手を跳ね飛ばす。

ボゴツ!!

鈍い音と共に、サソリの顔面にエーテル塊が叩きつけられた。でかい体をはじき飛ばした。

そしてもう一匹には、セラの飛び蹴りが直撃。吹っ飛んだ。

僕はルーリアに文句を言う。

「ルーリア、君一人でどうにかできると思ったのか？」

「私は騎士です。無理であつても市民を守ることが私の使命であり、騎士道ですわ。」

か、かけええ……

僕もこういう言葉を言ってみたいものだ。

絶対、似合わないだろうが……

「僕が言いたいのは、手伝って欲しければ言えればいいのにと。」

「ですが、私の勝手にあなた方を手伝わせるわけには……」

「気にしない、気にしない。」

なんかそついう所は、セラに似ていると思つな！。

「で、どうするんだ？」

セラが聞いてきた。

「んー。一匹づつ集中攻撃して、減らしていくしかない。」

「のんびりは、してられませんわ。どうやらあの魔物、首都の中央に向かおうとしているようですわ。」

中央ということは、中央議事堂セントラルが狙いか？

中央議事堂とは、この国の議会が開かれる施設だ。  
国の中枢と言っている。

そこで気づいた。

僕とセラがダウンさせたサソリ以外のもう一匹は、港から市街地に向かっている。

「やべっ!!あれを止めないと……」

僕たちがそちらへ向かおうとした瞬間、市街地に向かおうとしていたサソリは、港のほうに吹っ飛んできた。  
ええっ!?

吹っ飛んだサソリの向こうから人影が現れた。

「おーい。お前ら。こいつは私にまかせな!!」

ユウラさん!?  
なにやってんだ!?

「ゆ、ユウラさん!?!なにやってんですか!!危ないですよ!!」

「んー?私はこれでも虎島の女だよ。君の師匠ほどではないけど、この程度の相手に後れは取らんよ。私は気にせず、そっちの二匹は頼んだよー。」

ユウラさんはいつも通りの口調で言った。  
だ、大丈夫かな?

「ユウ。あの方の言うとおり、私たちは目の前の二体に集中しま

しょう。あの方なら大丈夫ですわ。」

ルーリアはそう言ったが、表情に心配そうな雰囲気を感じられる。

「あの方の体が、もてばいいのですが……」

僕には聞こえない小さな声でルーリアは呟いた。

近くにいる二体はもう起き上がって臨戦態勢だ。

あの一体は、ユウラさんに任せるしかないか……

さて、始めるか。

~~~~~

アルは少し離れた位置から、ユウたちの戦闘を見ていた。
どうやら、うち戦闘チームは戦いを始めたようだ。

ユウは剣術と格闘を織り交せて、セラは剛力を生かした格闘、ルーリアは空中からの奇襲。

3対2ではあるが、善戦している。

そして、ユウラさんがたった一人で、魔物一体を相手にしている。
ユウラさんが強いというのは、両親から聞いて知っていたが、ここまでとは思わなかった。

「アルさん。こっちへ!!」

チコに呼ばれた。
けが人を見つけたようだ。

近づいてみると、建物のがれきに挟まれている人がいる。
ひげ面のガタイにいい男だ。飛空艇の船員かもしれない。

「うう……た、たすけてくれ……」

どうやら意識はあるようだ。

どうにかして、このがれきをどけないと……

「アルさん、どいてください。」

そう言うと、チコは片手でがれきを持ち上げた。

「うおっ！？すげえな……。そういえば、ちびっ子はドワーフ
だったか。」

「そんなことはいいですから、早くその人を引っぱり出してくだ
さい……」

へいへい……
引っぱり出す。

「おっさん。大丈夫か？」

「ぐ……あ、足が折れたみたいだ……」

「わかった。動くな。」

キャストスタッフ
詠唱杖を起動。

エーテルを徹す。

治癒系大気術「第一治癒法」
ヒーリング

骨折していた骨を簡易復元。ついでに痛みを取り除く。

「ん？おおつ！？すげえ、痛くねえ！！」

船員らしき男は、飛び跳ねている。

「おい、おっさん。簡易復元だから無理すると、また折れるぞ。」

「う……そうなのか。」

飛び跳ねるのを止めた

こいつに少し聞いてみるか。

「おっさん、あの魔物どこから現れたんだ？」

「それがな、どうやら飛空艇の積み荷の中に紛れ込んでたみたいだよ。荷を降ろしてる最中に急に出てきたんだ。」

飛空艇の荷物に？

どう言うことだ……

魔物が積み荷の中で大人しくしてたつてののか？

「どこの飛空艇の積み荷から出てきたんだ？」

「たしか……ラーバス運送だったかな。ここいらじゃ聞か

ない名だから、どこの国のもんかわかんねえ。」

ラーバス運送！？

確か帝国の国营企業で、帝国内のみを営業範囲としているため、この辺には現れない。

と、いうことは……

ぞっとした。

これは帝国の侵攻だ。

帝国は魔物を操るすべを見つけたのだろう。

そう考えれば今回の魔物の不可解な行動にも説明がつく。

中立国を攻撃したんだ。共和国も黙っちゃいないだろう。

俺はもしかしたら、これから始まる大戦のきっかけとなる事件の真ただ中にいるんじゃないか？

横にいたチコも同じ考えに至ったのか、顔をこわばらせている。

「おっさんはさっさと逃げな。」

「おお、そうさせてもらう。助かったぜ！！」

そう言って、船員らしき男は、市街地のほうに走って行った。走ったら折れるぞ。

「とにかく、周りの人をできるだけ助けましょう！」

そうだな！

面倒なことは後で考えよう！

~~~~~

セラは後方から尾に一撃を入れた。

「ふっ!!」

ドラゴニックアーツ  
龍式拳殺術 剛天三式 『屠龍穿華』

掌底が直撃した瞬間、軟体装甲の奥に衝撃とエーテルを伝導させる。  
内部破壊技の一つだ。

正直、エーテル操作が細かいので苦手な技だ。

衝撃があまり透過していない。

先ほどから、私が二発、ルーリアが一発、尾に攻撃を加えているが、  
全くダメージなしだ。  
どうすべきか……

「セラ、攻撃を重ねるぞ！僕は前から、君は後ろから!!」

ユウが周りの音に負けないように、大きな声を出す。

それを聞いて、私はスコープピオンの側面を抜け、後ろに向かう。

スコープピオンがハサミを振り上げる。

ユウは紙一重でかわし、地面に叩きつけられたハサミを足場に、前  
方宙返り。

スコープピオンの背中に着地する。

間髪入れずに、尾の先についたハサミが背中にいるユウを狙う。

それを読んでいた、ルーリアが空中から斧槍で止める。

ギインッ！！

ハサミと斧槍がかちあって、火花が散る。

空中にいるルーリアの翼脚甲から、反射されたエーテルが薄緑の光を放ちながら、後ろに吐き出される。

どうにか抑え込んでいるようだ。

「ユウ、急ぎなさい！！長くは持ちませんわ！！」

ユウが背中を走り、尾の位置まで来た。

私もすでにスコープイオンの後方に来ている。

ユウのタイミングに合わせて、技を放つ。

ドラゴンクックアーツ  
龍式拳殺術 剛天三式 『屠龍穿華』

先ほどと同じく、内部破壊技。

ユウも、拳から内部破壊技をぶつけた。

前後から挟み込むようにして、同じ位置を攻撃された尾は、風船のように内部から膨れ上がった。

あともう一息！！

そこで、ハサミを抑え込んでいたルーリアが、ハサミをはじき、斜

めに落ちるようにして膨れ上がった部分を切り裂いた。

バシャツ！！

という液体のはじける音と共に、魔物の白い体液が舞った。ちぎれた尾が地面に落ちる。

ルーリアは、港の石畳をけづるようにして、着地した。

魔物の動きが鈍い。

「よしっ！！たたみ掛ける！！」

ユウの指示に従い、行動を起こす。

ユウはスコープピオンの背中から、体の中央辺りに行き、拳を叩きつけた。

ポゴンッ

という音。軟体装甲がへこんで衝撃を吸収しようとする。

私も跳び、スコープピオンの背中に乗って、ユウがダメージを与えた地点にさらに攻撃。

龍式拳殺術 剛天二式 『龍牙・連迅』

高速の二連撃を、叩きこむ豪快な技だ。

ドドンッ！！

軟体装甲が衝撃を吸収仕切れていない。

私とユウは、後方宙返りで、背中から飛び降りる。

スコーピオンの真上の位置で、ルーリアが斧槍を構えている。

「これで終わりですわ!!」

重力と、翼脚甲の加速を合わせて、落下。

目標は、当然私とユウによってダメージを与えた、核の直上の軟体装甲。

エーテルが徹された斧槍は、衝撃を吸収しきれない軟体装甲をぶちぬき、核を破壊した。

キイイイイツ!!

先ほどまで鳴き声一つ上げなかったスコーピオンが、断末魔をあげ、倒れた。

やった!!

と喜んでいられない。もう一匹残っている。

「ユウラさんっ!!」

そこでアルの悲鳴と呼べるような声を聞いた。

## 第29話：首都内戦闘（二）・雷撃

ユウラは魔物と向き合う。

構えも取らず、直立姿勢だ。

魔物が左右のハサミと尾についたハサミによって、三方向から攻撃してくる。

ユウラはすべて最小限の足運びで紙一重で避けている。そして隙を見て、何発か拳を入れる。

（ふむ……。思い出してきたかな……。）

魔物の軟体装甲ソフトアーマーに拳を入れ、感触を思い出す。

（久しぶりの実戦か……。早めに終わらせないとな。）

何発か拳を入れることで、思い出してきた。

ユウたちのほうに視線をやる。

ちょうど、ユウがスコープイオンの背中に乗り、尾に攻撃を仕掛けている。

セラとルーリアのコンビネーションで、尾がはじけ飛ぶのが見えた。

（へ……。即席のコンビネーションの割にさまになってるな。）

視線を目の前の魔物に戻し、構える。

さて、こちらにも終わらせるか。

本気が出せるのは、一分ぐらいだろう。  
瞬殺する！！

体内エーテル操作による、身体機能強化を最大に。

スコープイオンのハサミが、目前に迫る。

虎島流 紫電章 『陽炎陣』

直撃の瞬間、ユウラは二つに分かれた。

ユウラが二人いる。

分身だ。エーテルによって作り出された、質量をもつ分身。  
左右に分かれ、スコープイオンの側面を高速で移動する。

左右から同時に、スコープイオンの地面に突き刺さった6本の足を連続ローキックで刈る。

足が全て浮き、スコープイオンがバランスを崩す。

その際に、二人のユウラは後方に回り跳ぶ。

尾を挟むように同時に蹴りを入れる。

ドゴンッ！！

ものすごい音。

二人のユウラは、蹴りを入れた体制のまま、霧のようにかき消えた。  
そして本物のユウラは、いつのまにかスコープイオンの背中で構えている。

分身が蹴りを入れた地点に向けて、拳を放つ。

虎島流 紅蓮章 『羅刹功・碎破』

拳からものすごい量のエネルギーが、軟体装甲の内部に流し込まれた。拳が当たった位置の半径1メートルが内側から爆発した。

白い体液をまき散らし、尾が地面に落ちる。

そのまま背中の上を走り、体の中央へ。

虎島流 紅蓮章 『羅刹功・碎破』

核を破壊すべく、拳を叩きつけ……

力が抜けた。

身体機能強化が抜ける。

（なっ……もう時間切れ！？一分も持たないなんて！？）

スコーピオンが背中の上からユウラを振り落とそうと、近くの建物に体当たりをする。

とっさにスコーピオンの背中から飛び降りる。

着地。

だが、足に力が入らず、膝をついた。

スコーピオンは建物にぶつかって暴れている。

喉の奥から、熱い物が上がってくる。

「カハツ・・・!!」

ユウラは、血を吐いた。

~~~~~

「ユウラさんっ!!」

アルの悲痛な声が響く。

僕はユウラさんのほうに視線をやる。

ユウラさんは、地面に膝をついている。

地面には血の跡が・・・

ケガでもしたのか!?

「いや、吐血したようだ。」

セラが教えてくれた。

病気が何かか?

僕は、目の前の魔物をセラとルーリアに任せて、ユウラさんの加勢に向かおうとする。

「ユウ!!来るな!!」

ユウラさんが叫ぶように言った。

僕はとつさに立ち止まる。

「君は自分のすべきことをしろ!!」

そう言われても……

「私はこいつを任せると言ったんだ。任せておけばいい。」

アルのほうに視線を送る。

アルは小さくうなずいた。

あいつに任せるか……チコもいるしな。

「ユウ、あちらは任せましょう。わたくし達も油断しては、やられますわ。」

ルーリアはそう言ったが、心配そうな顔だ。

だが、ルーリアの言うとおりだ。

僕たちがすべきことは、こいつをすぐに倒して、加勢に行くことだ。

先ほどの手順で、こいつも倒す。

目の前の魔物に、攻撃を仕掛け……

ん!?

スコープイオンの両手のハサミと顔の位置がもりあがり、眼球が現れた。

やべえ!!これは……

「散れ!!」

叫び、回避行動に入る。

セラモルーリアも僕の声で、とっさに地面に身を投げた。

現れた眼球から、無音の光の帯が発せられた。
レーザーだ。

僕のすぐ隣を光の帯が走り、後方にあつた港に留められた飛空艇を
両断した。

ひいっ!!

どうやら一匹、魔物を倒したことで、お怒りのようだ。
迂闊に近ずけない。

どうする？

~~~~~

アルはユウラが戦っている最中に急に、血を吐いてことに驚かされ  
た。

両親の友人であるため、付き合いが長い人だが病気を患っているな  
んて聞いていない。

(なんでそんな大事なこと黙ってるんだ、あの人は……)

微妙に腹が立つな。

ユウラは今も魔物の相手をしている。

どうやら身体機能強化ができていないようで、先ほどのような異常

な速さで動いたりはしていない。

ってというか身体機能強化なしで戦ってるって、すごすぎだろ……

・

とにかくユウラさんは、決定打が打てない状況だ。

ここは俺がやるしかない。

ユウにも任せろ、みたいな合図を送ってしまったしな。

「ちびっ子、ユウラさんを助けてやってくれ。援護してやる。」

横にいるチコに声をかける。

「わかりましたです。アルさんはどうするんです？」

「しつぽをユウラさんが破壊してくれたから、雷撃を破壊した部分から流しこめるだろ？だから、第三雷法ヴォルトをかます。」

「なるほど。確かに雷撃系の上級大気術ハイスベルなら、かなり効果があると思います。でも、そんなの詠唱してたら、援護なんてできませんよっ。」

「とっておきがあるんだよ。」

アルはローブの中から、小型の詠唱杖キャストスタッフを取り出す。

詠唱杖『シュト・リア』だ。

右手に持つ豪華な詠唱杖『ランサーコア』の半分ぐらいの長さだ。増幅率が低いが、予備として持っている。

「こっちで援護してやる。」

「こつちつて……まさか、二重詠唱ツインキャストを使えるんですか!？」

二重詠唱はその名の通り、大気術を同時に発動する杖の二刀流だ。実際、簡単にできるものではない。

大気術は、イメージとエーテル操作によって発動する。

つまりは、左右で同時に違う量のエーテルを操作し、さらに同時に異なったイメージを作り出さなければならぬ。

並列処理を行う必要がある。

常人なら、イメージが混濁し、どちらの大気術も発動しない。

「はあー……アルさんは器用ですねー」

「おおよ!どうだ尊敬したる。アルフレッド様と呼んでくれていいぜ!」

「じゃあ、行ってきますねー」

くっ!! つっこみすらナシか……  
とにかく成功させないとな。

チコガリユックから、ドデカいハンマーを抜き出し、走ってユウラのもとに向かう。

その間に、詠唱を始める。

詠唱杖『ランサーコア』を地面に突き立てる。

地面には術式コードの描かれた大きな魔法陣が発生。

第三雷法の詠唱開始。

かなり時間がかかる。

同時に、左手には小型詠唱杖『シュト・リア』をもち、別の大気術を詠唱。

ユウラさんを救助しに行くチコを援護する。

スコープオンが、走ってくるチコを見つけ、そちらに攻撃しようとする。

「チコちゃん、来ちゃダメだ!!」

ユウラさんが叫ぶ。

だがユウラさんも、少しふらついていて、もう限界のようだ。

スコープオンがチコに向かってハサミを振りおろす。

チコは動きが遅いため、避けきれない。

基礎大気術 ブレイズ 『第一爆法・連射』 バースト

第一爆法を三発、連続で発生させる。

狙いは、ハサミ。

ドドドンッ!!

爆発が三発。

チコに向かって振り下ろされたハサミは、爆発にはじかれる。

その間にチコはユウラを担ぎ、安全な位置まで移動。

魔物がこちらを向いた。

え？

まさか狙われてる？

今、詠唱中だから動けないぞ！？

助けてー！！！！

~~~~~

ユウラは怒っていた。

「チョコちゃん、危ないだろう！！」

怒鳴られたチョコは、気にせず言った。

「ユウラさんは、無理しすぎです。これ飲んでください。」

そう言って、チョコはリュックから瓶を取り出した。
中には緑色の液体が入っている。

「ライフリートの高濃度ゼリーです。一時的ですが、体内エーテ
ルが回復するはずです。」

高濃度って……マズそう。

「まずいですよ。めちゃくちゃ濃い草の味がします。」
仕方なく受け取る。

チョコは、そのまま魔物のほうに向かおうとする。

「それじゃあ私は、アルさんを助けに行ってきます。危ないみたいなので。」

止める前に、トテトテ走って行った。

アルが何か詠唱している。

魔物はアルを標的としているようだ。

急いで瓶を開ける。

口に入れるのを一瞬ためらい、ぐいっと一気にあおる。

「……………マズッ！！！！」

草の味が、口いっぱい広がった。

これではしばらく待てば、体内エネルギーが回復する。
それまで死ぬなよ、二人とも。

~~~~~

基礎大気術 『ブレイズ  
第一爆法・連射』  
バースト

撃つ、撃つ、撃つ。

こちらに向かってくる魔物に向かって連続起動。

スコープイオンは、爆発を受けても多少ひるむだけで近づいてくる。

やべえ—————

こっちくんな!!!

アルから十メートルほどの位置まで来た。

「ふおおおいつさ!!!」

珍妙な掛け声でチコがハンマーを振りかぶった。  
スコープピオンの横っ腹にハンマーが直撃。

ボゴツ!!!

横にある建物にめり込んだ。

「アルさん、あとどれくらいですか？」

ハンマーを担いだチコが聞く。

「あと10秒!!!」

そう言った瞬間、建物からスコープピオンが飛び出し、チコにハサミをぶつけた。

チコはギリギリでハンマーで防御。

だが、体の軽いチコは、吹っ飛ばされ、ぐるぐる転がった。

「ふひゃあああーあいたっ!!!」

がれきにぶつかって、転がるのが止まる。

そしてスコープピオンがこちらをロックオン。

あと少し、あと5秒。

また第一爆法を詠唱が、発動しない。

小型詠唱杖『シュトーリア』から、煙が出ていた。連続起動によるオーバーヒートだ。

スコープイオンは、もう目の前だ。死を覚悟する。

突然、アルとスコープイオンの間にユウラが現れた。拳を放つ。

ゴンッ！！

スコープイオンは地面をけづるようにして後退。ユウラさんは、地面に膝をつき、また血を吐いた。

「やれっ！！」

発動。

上級大気術『ヴォルト第三雷法・クレイモア大剣』

地面に突き立てられた詠唱杖『ランサーコア』より術式展開。大気エーテルが反応し、スコープイオンの真上に5メートルほどの剣の形をした電気エネルギーを精製。

大剣が、スコープイオンの破壊された尾の部分に突き刺さった。

轟音。

本物の雷が落ちたような音と共に、スコーピオンは電撃に焼き尽くされた。

後に残ったのは、黒こげとなったスコーピオンの死体だ。

「やったぜ……見たか俺の実力。」

アルは息を切らしながら言った。

魔物の二体目を破壊。

残り一匹。

### 第30話：首都内戦闘（三）・暗躍

ユウたちが戦っている港のフロリア湖をはさんだ向こう岸。そこには小さな森がある。

森の中で、黒いローブ姿でフードで顔を隠した男がいる。

男の前には、魔法陣が3つ浮遊しており、映像が映されている。2つは映像が途絶えている。スコピオンの視点から送られる映像だ。

この男、魔物操者は焦っていた。コンタクター

まさか自分の操るスコピオンのうち、2体がやられることになるとは。

それも騎士団でもない連中に……

このままでは、作戦失敗だ。

あの方に殺されてしまう……

「おいおい、どーいうことだ？これは？」

急に真後ろから軽薄な声が聞こえた。

男はスコピオンの操作をオートに切り替え、後ろを振り向く。

「て、天次郎様……」

後ろにいたのは、ヤマトの民族衣装をだらしなく着た、黒髪の中年の男、天次郎。

その後ろには、銀髪碧眼の顔立ちの整った男と、天次郎の護衛である黒装束の隠密部隊の人間が数人。

「俺は戦争の始まる瞬間を楽しみにしてたんだが、まだ中央議事堂が破壊されていないのは、どーいうことだ？ん？」

魔物操者の男は冷や汗を流した。

このままでは殺されてしまっ！！

「も、申し訳ありません！！予想外の抵抗がありまして……」

「騎士団は囿に引つかかったはずだが？」

「それが、一般人の中に腕の立つ者が数人おりまして、抵抗されています。」

「ふん……」

天次郎は湖の対岸に目を向ける。  
常人なら遠すぎて見えない距離だが、天次郎には見えているのだらう。

「ほー……面白いのがあるな。あれは『神殺拳』のユウラか？  
虎島の次期当主がこんなところで何してんだか。それに……おい、  
ローグ。お前の探してる龍族の女はあれか？」

天次郎は、後ろにいた銀髪の男に声をかけた。

「ああ。あの人が私の標的。セラ S・D・ライノス、ライノス家の直系だ。」

「へえ……三大龍族の銀龍宗家か。美人だねえ……。まあ今回はほっとけよ。」

銀髪の男は頷いた。

そして、天次郎は魔物操者の男を睨む。

「龍族と『神殺拳』といっても、『神殺拳』は病気、龍族はまだ若い。死ぬ気でやれば勝てるはずだぞ。」

「はい！！死ぬ気でやります！！！」

男は急いで魔法陣に向き合い、操作をオートからマニュアルに。その男の後ろに、天次郎は全く気配を感じさせずに近づいた。

「安心しろ。俺が死ぬ気にさせてやる。」

え？

男が振り返るよりも先に、天次郎が男の首に注射器のようなものを刺した。

「これでお前は死ぬ気になったぞ。」

天次郎はニヤリと笑う。

この薬は、暴走薬バーサーカ！？

そ、そんな……う、あ、ぐおおおお！！！！

男の意識は、一瞬のうちに暴走した。

もうスコープイオンの前にいる奴らを殺すしか頭がない。

「さあ、死ぬ気でやれ。」

天次郎が笑う。

~~~~~

「うおつとと・・・」

僕の横をレーザーが通った。

あぶねえ・・・

何度か攻撃を仕掛けて分かったことは、レーザーを発射するあの眼球は、体のどこからでも現れるようだ。

後ろに回り込んでも、眼球が尾の部分に現れ、狙われる。

だが、眼球は同時に3つまでしか出せないようだ。といつても、こちらは3人。

それぞれが違う方向から攻撃しても、狙い撃ちされる。

どうする？

考えていると、雷が落ちるような音が聞こえた。

アルが大気術スベルを使ったようだ。

自分の目の前のスコープオンに注意しつつ、アルのほつを見る。黒こげのスコープオンが煙を上げている。

さすが、魔法学園トップ。
あとで、何か奢ってやるう。

後は目の前にいる一匹だけだ。

レーザーが邪魔だな・・・
眼球を破壊すべく、行動を起こす。

その時、スコープオンに異常が起こった。
体表に一瞬、幾何学的な模様が走ったかと思うと、体全体が真っ赤になった。

キイイイイ！！

そして、スコープオンが叫んだ。
な、なにごと！？

スコープオンがハサミを振りかぶる。

え？

とつさに体をずらした。

僕の真横の地面を砕いて、ハサミが叩きつけられた。

速い！？

見えなかった！？

そして、今までうつしかなかった、体表の眼球が数え切れないほど出現。

見た目が恐ろしくキモくなった。

っていつかあの眼全部からレーザー出すのか!?

レーザーに当たらないように、とにかく動く。

走りながら、観察する。

スコピオンの動きはさっきまでと違って、めっちゃくちゃだ。

目の前にいるものすべてに攻撃している。
レーザーを乱射し、ハサミを振り回す。

これじゃあ、ますます手が付けられない。

セラもルリアもレーザーを避けるので必死だ。

僕は走りつつ、ダガーを取り出し、投擲。

目標はレーザーを発射する眼球。
ソフトウェア
軟体装甲から飛び出すように現れている眼球には、それほど防御力
はないはず!

眼球に直撃。

突き刺さり、白い体液が飛び散った。

よしっ!!

予想通り、あの眼球には軟体装甲ほどの強度はない。

「きゃっ!!!」

空中から悲鳴。

ルリア!?

空中にいるルーリアを見ると、右足の脚甲から煙が出て、バランスを崩している。

どうやら翼脚甲ウイングフッターの踵にある浮遊機関を、レーザーが破壊したようだ。

何とかバランスを取ろうとしているが、間に合わない。ちょうど湖の上にいたため、このままでは水に落ちる。

しかも、スコープピオンの眼球が、落ちていくルーリアを狙っている。

「セラ、援護！！」

走りつつ叫ぶ。

僕は港の端からルーリアに向かって跳んだ。

空中でルーリアをキャッチ。

体をスコープピオンのレーザーの射線に割り込ませる。

「ユウ！？何を！？」

レーザーが来た。

背中に直撃。

僕はコートにエーテルを徹し、防御フィールドを全力展開。

だが、レーザーはフィールドを一瞬で貫き、コートを焼き、背中を焼く。

痛い、痛い！！

そこでセラがスコープピオンを攻撃し、射線をずらしてくれた。

あとコンマ一秒でもレーザーが当たり続けていたら、体を貫通して

たかも。

「ユウ!!!大丈夫ですよ!?!」

僕の体より、今の状況がまずい。
湖に落ちていつてるのだ。

ルーリアの翼脚甲で落ちる速度は遅いが、確実に落ちている。

僕は体をひねり、水面に足を向ける。

バシヤツ!!!

アルベイン流 秘戦術 四号 『水渡し』

僕は水面に着地した。

「ど、どうなってるんですの?水面に立ってる?」

『水渡し』はその名の通り、水面を移動する技術だ。
体内エーテルを足から水に徹すことで、表面張力を操作、水面を移動可能とする。

今回はルーリアを担いでいるので、いつもと重さが違う。
水面が足の裏ではなく、くるぶしの位置にある。
沈む

「ユウ!!!狙われてるぞ!!!」

いつ!?!?

セラの声が聞こえた。

僕は水面を走り、回避。

僕のいた位置の水面にレーザーが当たり、水蒸気をあげる。

逃げながら、ルーリアを担いでいないほうの手を水面につけ、水をすくう。

アルベイン流 秘戦術 三号 『水牙』

すくった水にエーテルを徹し、水を棒手裏剣のような尖った棒3本に形成。

さらにグローブにつけられた簡易詠唱杖ライトスタッフで体内エーテルを雷撃変換。

『水牙』で作り出された水の棒手裏剣に雷撃を付加。

指の間に3本の棒手裏剣を挟み、投擲。

1本は軟体装甲に弾かれたが、2本は眼球に刺さり、雷撃を内部に伝導させる。

キイイイ!!

雷撃が体内に入り、スコープイオンは動きが止まる。

今のうち!!

僕はそのまま水面を走り港の端に行き、跳んで水面から上がる。

ふー・・・水面は不安定で怖い。

担いでいたルーリアをおろす。

「ユウ!? 背中が!?!」

どうやらひどい状態のようだ。

今はあまり痛くない。

「ルーリアは下がってて。足やられてるだろ？」

ルーリアの足は脚甲に守られていたが、レーザーの直撃で怪我しているはずだ。

「それを言うなら、あなたのほうがよっぽど重症です!!ごめんなさい、わたくしのせいで・・・」

「いいよ。今はそんな痛くないし・・・僕はセラを助けに行ってくる。ルーリアはここに居ろよ!」

そう言って僕は走り出す。

セラはレーザーを避けつつ、眼球を攻撃している。

どうやら先ほどの雷撃が効いているようで、動きが鈍い。

スコピオンに急接近し、抜刀。

セラと一緒にあって、眼球を破壊する。

いくつか破壊したところで、スコピオンの動きが戻って来た。

まだ眼球はいくつか残っている。

僕とセラの二人だけで倒せるか？

ハサミの攻撃は相変わらず速い。

背中痛みが、増してきた。

そこで、スコピオンが予想外の行動にでた。

真上に跳んだのだ。

踏みつぶす気が!?

僕は地面の影を見て、転がるようにして影の範囲から出る。

僕のちょうど目の前にスコープオンが落ちてきた。

ハサミをすでに振り上げている。

僕は転がった状態から立ち上がったところだ。

背中の痛みと、予想外の行動で反応が遅れた。

避けられない!!

ボグッ!!

腹にハサミが直撃。

パキパキという枯れ木を折るような音が僕の腹から聞こえた。足が地面から離れる。

一瞬の浮遊感のあと、背中に強い衝撃を感じた。

「ユーーーーウ!!」

セラの絶叫が聞こえた気がする。意識が途絶えた。

第31話：首都内戦闘（終）・紅光

ユウがスコープピオンのハサミによって、横殴りに吹き飛ばされ、半壊していた建物に突っ込んだ。

「ユーーーーーウ!!」

セラは思わず叫んだ。

直撃だ。

そんな……まさか……

「くそっ!!ユウ!!」

セラはユウの突っ込んだ建物に向かおうとした。

しかし、スコープピオンが妨害するように、道をふさぐ。

セラは怒りで目の前が真っ赤になった。

もう龍族であることを隠すことなんて、どうでもいい!!

「どけええ!!」

怒りによって、無意識にエーテル共鳴声帯が発動。

ドラムンヴォイス

龍声によって大気エーテルが共鳴し、衝撃波が発生。

スコープピオンに直撃した。

港の石畳をえぐり、スコープピオンは数メートルほど吹き飛ばす。

ハサミが片方と、足がいくつか吹き飛ばされ、白い体液が舞う。

セラの瞳は龍化した時のように、細く変化している。

「このまま消してやるっ!!」

意識の隅、かすかに残った理性が、今の状態がかつての暴走と同じ感覚であることを感じさせる。

しかし、すぐさま怒りにかき消され次の行動に移る。

ドラクエラフ
龍魔法で跡形もなく消してやる!!

空気を吸い込み、歌を謡う。破壊の歌を。

「セラッ!!」

その時、セラは走って来たユウラに思いっきり殴り倒された。

「バカか、おまえはっ!! 落ち着けっ、龍魔法なんか使ったらこの辺一帯がなくなるぞ!! そもそも、お前がユウ君の所に行ったところで、なにも出来んだろうが!!」

殴られたショックで、セラは冷静になった。

危なかった。無意識のうちに龍声を使い、あげくは龍魔法まで使う所だった。

「す、すいません・・・」

「ふうー・・・冷静になったんならいい。ユウ君のところにはアルを向かわせた。まあ、ユウ君のことは安心しな。こんなところで死なない、というか死ねないだろからね。」

死ねない?

いったい、どういう意味だ?

セラはどういうことがユウラに聞こえた時、スコープオンが起き上がった。

白い体液をボタボタ滴らせ、残った足で何とか歩いている。

これなら勝てると思ったら、スコープオンの白い体液はまるで意志を持っていてかのように動き、吹き飛ばされた部分と繋がり、再生しようとしている。

「こいつは……コングクター魔物操者が、エーテル供給を暴走させてるのか!? 魔物操者は死ぬ気か!?!」

キイイイイイ!!

スコープオンは再生だけでは終わらず、ソフトアーマー軟体装甲が溶け出している。魔物はサソリの形から崩れ、どろどろとした赤い塊となっていく。

「セラ、出し惜しみなしだ。龍声も使っちゃいな。」

「あ、あれ、ユウラさん、私が龍族だって分かったんですか?」

「まあね。実際に龍声使ってたし、龍族のエーテルの質は特徴的だからね。」

え、エーテルの質!?

どうやって見るんです、そんなの?

「とにかく手加減するなよ。あの状態の魔物は危険だ。まだ騎士団の連中は来てないから、龍族だってことは私たちにしかばれないよ。」

周りには、ユウラさんと、ルーリアの足を手当てしているチコ、気絶している人が数人。これならまあいいか。

「ユウラさんは、見ててください。」

「セラだけだと心配だから、私もやるぞ。」

「さっきまで血吐きまくってたくせに、よくそんなこと言えますね。」

「そうですね。病人は休んでいてください。」

足の手当てを終えたルーリアがやってきた。

「わかったよ。病人扱いしやがって……二人とも気いつけなよ。」

そう言ってユウラさんは下がった。
かつてスコープオンだったものは、今や赤いどろどろした塊になって、こちらに向かってくる。

「セラはユウのことが大事ですね。」

「な、なにを急に……」

「ふふ……気持ちはわかりますわ。」

「？」

「ユウを大事にしたくなる気持ちってことですね。」

魔物の赤い体表に、大量の眼球が現れた。
あの光の攻撃か・・・

セラとルーリアは、視線を合わせ頷く。
2人は、同時に魔物に向かって踏み出した。

~~~~~

「ユーウ、起きなさい!!」

誰かが呼んでいる。  
なんだ？

意識が少しずつ鮮明になる。  
視界に入ってきたのは、真っ白な色。  
そして僕を覗きこむ、白い美しい髪と血のように紅い瞳を持つ少女。

「目、覚めた？」

あれ？

ここはどこだ？  
イヴがいるってことは、あの真っ白な精神世界か・・・

僕いつの間に寝たんだ？  
ここには、眠った時にしか来れないはずだが・・・

「まだ寝ぼけてるの？しっかりしなさい!!」

「あれ？なんで？どうなってんの？」

僕が混乱していると、イヴは呆れたように言った。

「ユウはスコピオンの攻撃もろに食らって、吹っ飛んだでしょ？」

あ……ああー！！

思い出した。そういえば攻撃食らってから、意識が飛んだような気がする。

「僕って今どーいう状況？」

「内臓破裂に、肋骨の骨折、あと折れた骨が肺に刺さって穴が空いている。まったくー……ユウに死なれたら困るんだけどなー。プンポン。」

プンポンって……。

怒られてしまった。

その状態って死にかけじゃないか？

「えー……死にかけ？」

「そうだよっ！！こんなところで死なれちゃ困るの……だから、緊急処置としてユウの体内エーテルを昇華ブイストします。」

僕の体のことなのに、何やら勝手に決められている。

「ぶーすと？」

「うん。体内エネルギーが一時的に増加、身体機能を回復とか、いろいろ効果があるわ。でも、今の状態だと30秒が限界ね。」

「30秒って、なにが？」

「昇華状態でいられる時間のこと。それ以上過ぎると、ユウの体が内側から爆発しちゃうわ。」

ええ〜・・・なにそれ。

別にそんなことしなくていいけど。

「今、セラちゃんとルーリアちゃんがスコピオンと戦ってるけど、負けそうだよ。」

なんと!?

それは急がないと!

「わかった。じゃあ昇華ってやつをよろしく。」

「よろしい。最初からそう言いなさい。でも、気をつけてね。溢れ出る力は、精神を侵食する。心をしっかり持ちなさい。」

イヴが真剣な顔でそう言うと、僕の意識は覚醒へと向かった。

~~~~~

アルは急いで、ユウが突っ込んだ建物に向かった。

あんな攻撃を受けて、あいつは大丈夫なのか？
不安で足が勝手に急ぐ。

建物に入り、ユウを探す。

ユウが突っ込んだであろう部屋を見つけ、ドアを開ける。

いた。

外壁を突き破って、部屋の中であおむけに倒れている。

状態を見る。

呼吸はしているが、異音が混じる。肺に穴があいているのだろう。

それに、口から大量に血を流している。内臓をやられているのかもしれない。

とにかく今は応急処置だ。

キャストスタッフ
詠唱杖を構える。

治癒系大気術 『ジエネラルヒーラー第二治癒法』

ヒーリング第一治癒法よりも回復速度が速い大気術スベルだが、これまでの戦闘で体内エネルギーをほとんど使っているので、調節が甘い。

くそっ！！

こんな重症、専門家じゃないと焼け石に水だぞ！！

焦っていると、ユウが目をつつすら開けた。

立ち上がるうとする。

「ん……ぐう……」

「ユウ!? 起き上がるな!! 重症だ!!」

「わかってる。もう大丈夫だ。」

「大丈夫な訳が……え？」

ユウがおかしい。

ユウの目と髪は、黒かったはずだ。

今は、今は、髪は真っ白になり、瞳は血のように紅い。

そして、ユウの体の周りには体内エーテルが火の粉のように舞っている。

おかしい。

この世界においてエーテルの色は薄い緑色ということは、空が青いということと同じように、当然のことだ。

だが、ユウの放つエーテルは紅い。見たこともない、紅い色のエーテル。

「アル、離れているよ。殺してしまいそうだ。」

ぞっとした。

ユウの声だが、その言葉と雰囲気はまるで違う。

ユウはそのままフラフラしながら、突き破った外壁から外に出た。ど、どうなったの？

~~~~~

セラとルーリアは苦戦していた。

セラが龍声で表面のどろどろしたものを吹き飛ばして、ルーリアが斧槍で内部に攻撃を仕掛けている。

しかし、まったく効いている気がしない。やはり二人だけでは無理か。

どろどろした体表を吹き飛ばしてもすぐ再生する。

眼球は何度破壊しても、また別の所から現れる。

ただ、レーザーの狙いはめちゃくちゃで避けることができる。

「はあ、はあ……手詰まりだな。」

「そう……ですわね。」

二人とも息が荒い。

もういつそのこと龍魔法を使って完全に消滅させるべきか。

そこで、半壊した建物からユウが出てきたことに気づいた。

ほっとすると同時に、何かが違うことに気づく。

様子がおかしい。

髪の色も目の色も違う。

そして纏っているエーテルが異質な紅い色。

まるで体の周りから火の粉が出ているようだ。

そして、その表情は虚ろでボーっとしている。

不安にかられ、セラは叫んだ。

「ユウっ!!」

~~~~~

危ない。

本当にアルを殺しそうだった。

まるで自分が自分でないような、とにかく魔物を……

建物の外に出た。

外は明るい。

まぶしい。

僕は何をするんだったか。

何を殺すんだったか。

いやそもそも僕は、どうして、あれ、なにが。

思考が散乱する。

自分の内側から、力がわき出てくるのを感じる。

これだけの力があれば、何でもできる。

だれにも負けない。

僕が、俺が、私が、ミンナコロセル……

「ユウっ!!」

誰かが僕を呼ぶ。

誰？

そうだ。あの声は……

そこで思考が、鮮明になる。

ん？え？あ、ああ！！

何してんだ、僕は！！

なんか錯乱してたぞ！！

『ユウ、のんびりしていると時間切れになるわよ！！後10秒』

頭の中にイヴの声が響く。

そうだ。

急がないと！！

セラとルーリアがこちらを見ている。

2人の前には、赤いどろどろした塊。

あれが魔物か？

ずいぶん形が大ざっぱになったな。

体内エーテルが異常に溢れ出てくる。

これが、昇華^{ブレスト}つてやつか。

今なら、あの技を使えるかも。

おっさんに教えられたアルベイン流の中には、僕には使えないような技が多々ある。

奥義に当たる技の3分の1は使えない技だ。

だが、今なら。

僕は刀を探す。

どうやらさっきの攻撃で吹き飛ばされた時に、落としたようだ。

10メートル先の地面に突き刺さっているのを見つけた。

刀には、僕の徹したエーテルが残留している。

それに意識を飛ばし、引つ張るイメージ。

突き刺さっていた刀は、カタカタと揺れたかと思うと、地面から抜け、回転しながらこちらに来了。僕の手収まる。

『遠隔操剣術』という技術だが、普段の僕にできる技術ではない。

手に収まった刀を一度納刀。

魔物に近づく。

アルベイン流 奥義 第五天 『韋駄天』

奥義に属するが、この技は移動術だ。

『閃光』などの移動術の数倍の速さで動く。

一瞬で魔物との距離をゼロに。

納刀した刀に手を置き、体内エーテルを徹す。

エーテルが紅く輝く。

どうして紅い？

と思ったが、今は魔物を倒すことが先決だ。

魔物と交差するようにして、抜刀。

超高速移動状態からの抜刀により、敵を両断する。

『韋駄天』での移動を行うことで、初めて可能となる技だ。

キンツッ！！

紅い光が一瞬きらめき、金属を切ったような音。

そして納刀。

僕の後ろにいる魔物は、一本線が入ったかと思うと、ずれた。そのまま2つにパツカリ割れた。

そして、紅い燐光を放ちながら、解けるようにして死んだ。

ふううー。

自分の中にあふれていた力が、ふっと消える。

その瞬間すさまじい倦怠感と、体中の痛み。

そして眠気。

あー………寝る………

~~~~~

港に、一瞬目を覆いたくなるほどの紅い光が輝いた。それと同時に、

「は、ぐ、ぐ、ぐおおおお・・・」

魔物操者<sup>コンタクター</sup>は苦しみだしたかと思うと、絶命した。  
魔物からの破壊反応<sup>ダメージフィートバック</sup>のショック死だろう。

「・・・・・・・・・・はははははっ！！見てみるお前らあの紅い光を！」

天次郎は急に笑い出し、後ろに控えている部下たちを振り向く。

「あれこそが俺たちの真の敵。異界からの刺客。俺の覇道を邪魔する者、『イヴの眷属』だ！！そして、あの紅きエーテルが『イヴの眷属』の力の象徴たる『異界<sup>アナザーワールド</sup>』だ！！」

そして、天次郎は紅い光を見る。満面の笑みを浮かべて。

「今回も俺を邪魔するために来たか、異界人よ！！また楽しませてくれよ！！」

そう言い、笑いながら天次郎は湖を後にする。

部下たちも音もなく従う。

後に残ったのは、魔物操者の死体だけ。

### 第32話：セラの日記（2）

大陸暦1999年5月4日

私たちが首都に来てから、もうすぐ二週間。

『ニニギ亭』の仕事にはもう慣れた。

何度かユウの仕事を手伝ったりして、知り合いも増えた。

以前一緒に仕事をしたドワーフのチョコ。

年齢は私よりも上だが、仕草はとても幼くて見ていてとても楽しい。

もう一人は、アルフレッド。

キャスター 詠唱師なのだが、性格に問題ありだ。

絶望的に空気が読めない時がある奴だ。

最近、ユウと一緒に仕事をしているらしい。

肝心の母上に関する情報収集は、ユウに任せてしまっている。

これまでのことも、母上の情報についても、ユウに頼りすぎている気がする。

~~~~~

5月5日

今日はユウが、店に女の人を連れてきた。

私が汗水たらして働いている時に、女の人と食事とはいい身分だ。

決して、ユウが女の人と一緒にいることに怒ったわけではない。

単純に私が働いている時に、楽しめているのが癪に障っただけだっ！！

~~~~~

5月6日

今日はいろいろな事があった。

母上に関する事が少しわかった。

母上の実家は、帝国貴族でランドグリフというそうだ。

断絶しているらしいが、帝国に行けば何かしらわかるかもしれない。

ユウとアルにはとても感謝だ。

そして、ユウラさんに丸めこまれて、ユウとチコと共に帝国に向かうこととなった。

そのおりに、昨日ユウと一緒にいた女性、ルーリアが紹介された。なんだ、ユウラさんの知人だったのか。

それからみんなで昼食をとっている時に、事件は起こった。

首都に魔物が攻めてきた。

私は、自分の力を暴走させかけた。

ユウラさんは、病気で血を吐き、ルーリアは足にけがをした。

そして、ユウは重傷を負った。

結局、ユウが紅いエーテルを用いて魔物を倒した。

あの力は何だったのか……。

ユウに聞いてみたいが、無理だ。

ユウは魔物を倒した後、病院に運ばれ治療されたが、昏睡したままだ。

医者が言うには、重度の体内エーテル欠乏症だそうだ。

骨折や傷などの体に関しては、治癒系大気術で治療されている。

大丈夫だろうか？

あの時、紅い光を放ったあの時、ユウは少しおかしな状態だった。あれは、いつたい？

それから、暴走しかけた時からエーテル共鳴声帯に違和感を感じる時がある。

これはなんだろうか？

疑問だらけだ。

~~~~~

5月7日

今日は朝から騎士団の本部に行った。

チコとアルも一緒だ。

ルーリアはこの国にすることをあまり公にしてくないらしく、辞退した。

本部で騎士団長直々に、魔物との戦闘に対する礼と、礼金をもらった。

正直、別に必要なかったが受け取らないと面倒なことになりそうだったので、ありがたくもらった。

『ニニギ亭』の営業はいつも通り行っていたので、仕事が終わった後ユウの見舞いに行った。

ユウはまだ目覚めていない。

ユウのいる病室には、ユウラさんが来ていた。

ユウラさんは、ユウのあの力について知っているのだろうか？

「あの、ユウラさん。聞いてもいいですか？」

「ん？なにかな？」

「ユウラさんは、ユウのあの紅いエーテルについて何か知ってるんじゃないですか？」

「んー……なんでそう思うんだい？」

「ユウはこんなところでは死ねないって言ってましたから……」

「あー……そんなこと言ったか……」

しばらくユウラは、黙りこんだ。
そして、話始めた。

「ユウ君が異界人だってことは？」

「知ってます。」

「んー……私も詳しい事情を知ってるわけじゃないんだ。昔の仲間の異界人から聞いたことだからね。そいつが言うには、異界人とはイヴという存在によって、この世界に連れてこられた者なんだと。」

イヴ？

何者だ？

「イヴってというのは、異界人の主人らしい。だからユウ君みたいな異界人は、『イヴの眷属』とか呼ばれてたな。」

「イヴの眷属……」

「『イヴの眷属』は、これまでに何度か現れているらしい。んで、あの紅いエーテルは『イヴの眷属』がを扱う特殊能力で、『アナザーワールド異界』と呼ばれている。」

イヴの眷属アナザーワールドに異界か……
わからないことが多すぎる。

「ま、私も聞いたただけだからな。詳しいことはユウ君、本人に聞きな。今頃、イヴに事情を聞かされているころだろう。」

今？

ユウは私達の目の前で寝ている。

「イヴは基本的に夢の中に現れるらしい。たまにこちらの世界に顕現するらしいけどな。」

なんだそれは？

人ではないのか？

「ま、私が知っているのはこのくらいかな。」

結局、ユウに聞くことが一番か……

~~~~~

5月8日

ユウはまだ目覚めない。  
今日は仕事が休みだ。

ユウの病室に行くと、ルーリアがいた。  
足のケガはもういいようだ。

「あら。おはよう、セラ。」

「ああ、おはよう。」

「セラはお見舞いですか？」

「ああ。今日は仕事が休みなんadena。」

しばらくルーリアとたわいもない話をした。

ユウのことや、これまでの旅に関して。

こうしてルーリアとゆっくり話すのは、初めてだった。  
話してみると割と気が合う。

「そういえばセラは龍族でしたわよね？」

ルーリアは少し声のトーンを落として話した。

この前の戦闘でルーリアは、私の龍声ドラゴンヴォイスを間近で見ている。

「そうだが？」

「龍族が外の世界に出てくるのは、珍しいことではないんですの？」

「まあ、そつだな。私は目的があったから、国を出てきた。」

「目的？」

「ああ。母を探す。」

「お母様を……どこにいるか見当は付いているんですの？」

「ユウとアルのおかげで帝国にいるのではないか、ということが分かった。ユウが目を覚ましたら向かうつもりだ。」

「まあ……そうですね。」

ルーリアは帝国の騎士だったか？

帝国の人なら、母のことを聞いてみようか。  
写真を取り出し、ルーリアに見せる。

「この人が私の母らしい。アルが言うには、ランドグリフという家の人らしいんだが……ん？ルーリア？」

ルーリアは写真を見てかたまっている。

「せ、セラ。この方があなたのお母様ですか？」

「ああ。どうかしたのか？」

何やら様子が変だ。

「セラ。重大なことがわかりましたわ。」

「な、何だ急に？」

すごい真剣な顔で言った。

ルーリアから聞いた内容は、言葉通り重大なことだった。

### 第33話：驚愕のいろいろ

またか……

最近よくこの空間に来ているな！

白い空間。

精神世界だ。

あたりを見回してもイヴの姿は見えない。  
どうしたんだろう？

しばらく見回していると、遠くのほうに人影が見えた。  
すごいスピードでこちらに走ってくる。  
イヴのようだ。

「なんで走ってんだ？」

いや、止まれ。

すでにすぐそこまで来ているのに、イヴはスピードを落とさない。

「この、ポケナスがああああ！！！！！」

と、叫びながら、僕から数メートルの位置で跳んだ。  
空中で両足をそろえて、蹴り。

僕の顔面に突き刺さった。

「バグウホッ！！！！！」

いきなりだったので、棒立ちの状態で顔面に蹴りを入れられた。変な叫びを出してしまった。

だいぶ吹っ飛ばされた。

白い地面を削りながら止まる。

イヴは僕を蹴った反動を利用して、軽やかに着地。

「い、いきなり何するんだっ!!」

僕は倒れたまま叫んだ。

ところで、イヴの来ている服は白いワンピースのドレス。

飛び蹴りなんかしたものだから、一瞬すばらしい景色が見えた。ありがたや、ありがたや。

「ユウは何考えてるの？馬鹿なの？アホなの？」

「え、えっ？何が？」

も、もしかしてばれてましたか!?

「あの程度の魔物にやられちゃった事!!昇華ブーレストはもう少したってから使いたかったのに!」

何だ、そっちのことか。

見たのがばれたかと・・・

「あ、見たのは、ばれてるよ。」

ぐっはぁー!?

~~~~~

「ところでさー……結局、昇華^{ブーレスト}ってなんなの？僕の体はどうなってるの？」

この前のように、白い空間にテーブルとイスがあり、僕とイヴはそこに座っている。

「ユウはこの世界に来る前、死にかけてたのは覚えてるよね。」

忘れる訳がない。

あれは思い出したくないことの一つだ。

「覚えてるけど、それが？」

「私は『死にかけていたこと』が条件って言ったよね。なんでだと思っ？」

死にかけていたことがこの世界に連れてきた条件、っていうのは前に聞いた。

そっいえばなんでだ？

別に死にかけでなく、僕よりもっと有望な人がいただろうに。

「んー……分かん！なんで？」

「死にかけている人だからこそ、改造できるんだよ。」

え………？

か、かいぞう？

解像、海造、改造………改造！？

「え、なにそれ！どーいうこと！？」

「死にかけているから、助けるために改造っていう理由ができるでしょ。」

「なんじゃそりゃ！イヴは神様なんだろうっ！そんな理由をつけなくても、有望な人を改造しちゃえばいいじゃないか！！」

「えーつと………神様にもいろいろルールがあるのっ！！なんの理由もなく人を改造なんてできませんー。」

えー………

僕はホントに体を改造されてるのか？

「僕の体は全部機械ってこと？」

「そんなわけないでしょ。食べたりできるし、血だつて出るでしょ。改造というより強化手術っぽいかな？この世界に来るには必要なことだから、仕方がないよ。」

必要なこと？

強化することが？

なんでだ？

「んー……じゃあ、ユウはこの世界に来てから、病気がした？」

な、何だ急に？

「いや、別にないかな……。」

「この世界は異世界だよ。ユウの元いた世界とこの世界は成り立ちが違う。つまり、ユウの世界にはないウイルスとか病原菌があるかもしれないでしょ。それなのにそのまま放り込んだら、病気にでもかかったらすぐに死んじゃうよ。」

おー。なるほど。

そういうことも考えられるのか。

「それに、ユウは不自然に思わなかった？ユウの師匠の技を、たった二年でほぼマスターできるなんて、ただの人間にできるはずがない。ユウには確かに才能はあったけど、強化することでエーテルに対する感度を上げていたからこそ、今ぐらい強くなれたんだよ。」

そうか……

僕は本来、不器用なほうだ。

おっさんの教えに対して、僕にしては呑み込みが早いと思っただら、そういう事情があったわけか。

「納得した？」

「した……ということにしておく。で、あの紅いエーテルは何なの？」

この世界におけるエーテルは、薄い緑色をしているはずだ。
なのになぜ紅い？

「ユウの体内エーテルは、『異界』アナザーワールドという名の特別製なんだよ。普段はこの世界のエーテルと同じ機能を持つんだけど、昇華状態フイストの時には、紅く輝き、爆発的にエーテルを生成し続ける。その他いろいろ機能があるけど、それはまた今度ね。」

ふーん……

まだ教えてもらっていないことがありそうだ。

いきなり体からミサイルが出てきたり、腕がロケットみたいに飛んでいかんだろうな!?

若干心配だ。

「ほんとに『変身!』とか言って、ヒーローに変身するみたいな強化がしたかったんだけどな。」

セーフ!!!!

それは絶対嫌だ!!

「なんで? かつこいいのに……」

「それは恥ずかしすぎるよ……」

助かった。

~~~~~

イヴが少しほっとしたように言っ

「まあ、ユウが無事でよかった。昇華したことで私との線ラインがかなり強くなったから、これからはもっと助けてあげることができるよ。」

「イヴに助けてもらえるのか。」

「魔物が出現する時も教えてくれたし……ってあの時なんで頭痛なくなったんだ？」

「それは、今ほど線ラインが安定してない状態で、強制的に声を送ったから、ユウに負担がかかった結果だよ。今度からはもう心配しなくていいよ。」

「そして、イヴはイスから立ち上がる。」

「さあ、ユウ。そろそろ起きないと、セラちゃん達が心配してるよ。」

「うん。分かった。イヴいろいろ教えてくれてありがとう。」

「僕もイスから立ち上がる。」

「次第に視界がぼやけていく。覚醒が近い。」

「うんうん。じゃあ、またね。すぐ会えると思っけど。」

「え？」

~~~~~

「う……くっ……」

まぶしい。

目をうつすらと開けて、周囲を確認する。

見慣れない天井。

独特のにおい。

窓からは、青い空とオーロラのようなレイラインがきれいに見える。

「病院……か？」

僕は病室のベッドで寝ているようだ。

体を起こそうとする。

あれ？

動かん。

無理やり動かす。

ゆっくりとではあるが体が反応する。

なまってるなー……どれくらい寝たんだ？

コンコンという小さなノックの後、がちちゃっという音が聞こえた。

ドアのほうを見ると、ユウラさんが入って来た。

「お！起きたか。随分ねぼすけだね、ユウ君。おはよう。」

「おはようございます。今いつです？どれくらい寝てました？」

「あの事件から5日たったよ。」

そんなに寝てたのか。

僕は起き上がるうとして、ユウラさんに止められた。

「そのままでもいいよ。いくら異界人といっても、それほどの怪我はすぐには治らんだろう?」

「はぁ……あれ?僕、ユウラさんに異界人だって事、話しましたか?」

セラに聞いたのかな?

「いいや。私は君の師匠の仲間だったからね。以前の異界人を知っているから、君が異界人だとすぐに分かったよ。」

なんじゃそりゃ……

それから、ユウラさんは医者を呼びに行った。

医者の方に体の状態を聞かれ、答える。

どうやら退院はまだ先になるそうだ。

先生が出ていくと、ユウラさんはベッドの横の椅子に座った。

僕は気になっていたことを聞く。

「結局あの魔物は何だったんですか?」

「カスロアの公式発表では魔物の襲撃、とされてるけど、ちまたでは帝国の仕業だ、って噂が流れてる。」

「帝国の?」

確かに魔物が自発的に連携をとるのはおかしいと思った。
だがなぜ帝国が？

「で、裏情報なんだが、港の反対側で魔物操者の死体が見つかった。帝国所属の詠唱師キャスターの装備を身につけていたことが分かってる。それに、魔物が帝国からの積み荷から現れたことを目撃した一般人が、大勢いる。だから、噂通り帝国の仕業である線が有力だな。」

どこから仕入れてきたんだ、そんな情報。

「なるほど。ところで、魔物操者コンタクターってなんです？」

「魔物操者ってのは、魔物の制御をおこなう詠唱師だ。帝国じゃ、10年前の戦争で実験的に、実戦投入を行っている。まあ、公にはなっていないがね。」

そんなことまで知ってるのか……

ユウラさんは、こちらに顔を近づけ、さらに小さな声で話す。

「ここからは本当に裏情報なんだがね、帝国では少し前にクーデターが起こって、開戦派が勢いづいている。今回の一件はそいつらの差し金だ。」

いつ！？

クーデター！？

そんな話初めて聞いたぞ。

「ほんとなんですか？クーデターって……。」

「ああ。皇室は乗っ取られていると言ってもいい。戦争反対派の

議員数人と非協力的な皇族は拘束されてる。帝国国内でも、乗っ取りに気づいてる奴は議会の一部の人間だけだ。」

ユウラさんは頷いて、言った。

「帝国国内の人たちが気付いてないようなことを、なんでそこまで知ってるんだ？」

「ユウラさん、あなた何者なんです？僕にどうしてそんなこと伝えるんですか？」

おかしすぎる。

帝国でクーデターなんか起こったらすぐに情報が出回るはずだ。そんなこと聞いたこともない。

「私はある組織の一員なんだ。」

「組織って……？」

「10年前の真実を知る者達が集まって作られた組織『ファンテムナ亡霊騎士団^{イッ}』。」

10年前の真実？

なんだそれは？

「ユウ君は帝国のことはどれくらい知ってる？」

「ほとんど知りません。共和国とよく戦争する国、ってことくらいしか知りません。」

「ふーん……じゃあ、10年前の戦争については？」

「全く知りません。師匠は戦争についてはほとんど教えてくれませんでした。」

この世界の一般常識を習う時に戦争について聞いたことがあったが、ほとんどはぐらかされた。

「君の師匠や私が戦争に参加していたことは知ってるよね？」

「はい。」

「おかしいとは思わない？私も君の師匠もヤマトの人間だよ。なんで他国の戦争に首を突っ込むんだ？」

ん？そう言われるとそうか。

ユウラさんは、ヤマトで高い位を持つ家の出身のはずだ。

その人がなぜ他国の戦争に赴く必要がある？

考えられるのは……

「ヤマトの人間が戦争にかかわっていた……？」

「そう。正解だ。10年前の戦争、あれはある男によって仕組まれたものだった。」

「仕組まれた？」

「ああ。仕組んだ奴の名は、竜宮天次郎。ヤマトの守護ガーディアン四神武家アンアムスの一つ、竜宮家の人間だ。そして君の師匠、竜宮凶一郎の双子の弟にあたる。」

おっさんの弟!?

っていうかおっさんの本名はそんなのだったのか……。

竜宮凶一郎……くっ、なんかかっこいい名前だな。納得いかねえ……

「じゃあユウラさんとうちの師匠は、その天次郎とかいう奴を始末するために戦争に参加したってこと?」

「私はそうだけど、君の師匠は違うよ。凶一郎はその時にはもうヤマトを出ていたからね。偶然出会って助けてもらったんだよ。」

へー……

おっさんが竜宮。で、天次郎って奴が黒幕か。

「10年前の真実って言うのは、その天次郎が絡んでいることを知っている人達ってことですか?」

「そーいうこと。戦争が仕込まれていることに気づいた人達で、天次郎をシバキに行ったわけ。その集まりが『亡霊騎士団』って組織になった。まあ、実は組織と言うほどの人数はいないんだけどね。」

なるほど。

ユウラさんがやたら情報通なのは、その組織の情報網があるからか。

「今回の魔物騒動も、帝国のクーデターにも天次郎が絡んでるらしいんだよ。」

「え?天次郎って奴を始末できなかったんですか?」

「いや。殺したはずだった。だが、今でも生きて、裏でこそ」
そやってるらしい。」

まあ、理解した。

このままだと戦争になってしまっただろうか。

おっさんがいなくなったのも、この話と関係あるんだろうな……
自分の弟が戦争を起こそうとしてるんだしな。

「それで、この話を僕にしてユウラさんはどうするつもりですか
?」

「当然、協力してもらいたい。このままほっとくと戦争になる。

10年前の二の舞だ。」

「そう言うと思いました。少し考えさせてください。今はなんと
も……」

「ああ、いいさ。別に断ってもかまわないよ。」

嘘つけ。

ここまで話されたら、さすがに断りづらい。

そこで、廊下から騒々しい足音が聞こえてきた。
ドアが乱暴に開かれる。

「ユウが目を覚ましたのか!？」

「ユウが目を覚ましたんですの!？」

セラとルーリアだ。

病院では静かに。

「おーおー、ユウ君はモテモテだね。私はもう帰るとしよう。」

ユウラさんはそう言って椅子を立ち上がった。

「あら？ユウラさんはもう帰りますの？」

「ああ。店に戻るよ。じゃあね。」

ユウラさんは手をひらひらと振りながら病室を出て行った。

セラとルーリアは椅子に座る。

「体の調子はどうだ？」

「うん。ちょっと動きにくいけど、大丈夫かな。」

「そうか……。」

セラはほっとしたように言う。

その横のルーリアは少し申し訳なさそうな様子だ。

「ユウ。今回のこと本当に申し訳なく思っていますわ。」

謝られた。

「なにが？」

「ユウの怪我は、わたくしをかばった時の傷が原因でしょう。だ

から……」

確かにルーリアをかばった時の背中、怪我で、動きが遅れた。でも実際、スコープピオンの行動に驚いて、反応が遅れたことが原因だしな。

「あー別に気にしないでいいよー。」

「そう言うわけにはいきません！この恩はきちっと返しますわ！！」

そう言っつてグツと拳を握りしめている。そんなに気合を入れなくても……

「というわけで、なんにか困ったことがあれば何でも言うてください。わたくしが誠心誠意お世話しますわ！！」

な、何でもですか！！

えっと、それは本当に何でも！？

あんのことや、こんなことも！？

とか考えていると

「ユウ。バカなことは考えるなよ。」

セラの妙に迫力のある声が聞こえた。

「え、は、な、なんのことですか？僕にはわからないな。あはははは……ごめんなさい。」

ごまかそうとしたが結局謝ってしまった。

「?・・・ユウは何を謝っているんですの?」

よく分かっていないルーリアは首をかしげている。
いや、なんでもありませんよ。

~~~~~

それから、セラに近況を報告してもらおう。

ルーリアはリンゴのような果物の皮をナイフで剥いている。結構器用だ。

「チコは、ユウの装備とかルーリアの翼<sup>ウインドウオーカー</sup>脚甲の修理をしてくれる。アルはたまに君の見舞いに来てたぞ。」

「そっか。街の様子は?」

「魔物が帝国の仕業なんじゃないかって噂が飛び交ってるな。騎士団はピリピリしてる。」

ユウラさんの言う通りみたいだな。  
街が戦争を意識している。

この世界のことには結構気に入っている。  
戦争なんて起こってほしくない。

そう考えていると、僕の目の前にフォークに刺さった果物が突き出

された。

「はい、ユウ。あーん。」

ルーリアは切った果物を、僕の口元に持ってきた。  
え、なにこれ。

「ユウはまだ体が本調子じゃないのでしょうか？私が食べさせてあげますわ。」

え、え、いいんですか、そんなこと？

僕すげえしあわせだ。

女の子にあーんって、すばらしい。

食べようと口を開けたら、セラにフォークを持ってかれた。  
ひどい。

「ルーリア、食べさせるのは私がやる。」

「あら？どうしてセラがやるんですの？」

「えーっと……私にもこれまでの恩があるから。」

「わたくしが剥いたんですよ。わたくしがします。」

私が、わたくしが、とセラとルーリアが言いあっている。

何だかじゃれあっているような雰囲気だ。

仲が良さそうなんだが、少し疑問がある。

「二人ってそんな仲良かったっけ？」

僕がそう言つと、二人は顔を見合わせた。

「あー……そう言えばユウに言わなければならぬことがある。」

セラが急に真面目な顔になった。

「そうですね。ユウには伝えておきましょう。」

ルーリアが頷く。

「私とルーリアはどうやら親戚のようなんだ。」

え？

ええええええっ!!

「え、マジで!?!」

「本当です。しかも、従姉妹同士ですわよ。」

なんと!?!

### 第34話：桃色入院生活

忘れていた。

ルーリアと始めて会った時、誰かに似ていると思っていたじゃないか。

僕が寝ているベッドの横にセラとルーリアが並んで座っている。

そーいえばよく似ている。

セラは銀髪ストレート、ルーリアは金髪縦ロールとちがうが、顔の造形はそっくり。目元とか特に似ている。

「セラの写真に写ってる方がわたくしの母によく似ていましたし、母の旧姓はランドグリフでしたから、状況から考えてセラは母の妹であるセリア・ランドグリフの娘であると思いますわ。」

へえーセラのお母さんの名前ってそんなのだったのか。

「私は母の名すら知らなかったからな。ルーリアの話はとても興味深かったよ。」

セラはうれしそうだ。

「じゃあ、お母さんの行方は分かったの？」

「いや、どうも母は何年も前に失踪していたらしい。」

「えー！？なんで？」

せっかく明確な情報が入ったと思ったのに……

「わたくしが母から聞いた話では、何かを研究しに行くと言って、  
消息を絶ったそうです。」

研究？

研究者だったのか？

「はい。セラのお母さまは、かなりの天才肌だったようで、剣術  
などの武芸の腕があるだけでなく、研究機関ではエーテル技術開発  
や大気術<sup>スベル</sup>開発にも携わっていたそうですわ。」

ど、どんな超人だよ……

セラのお母さんだから完全に体育会系だと思ってた。

「でも、良かったじゃないか。血縁のある人が見つかったんだし。」

「ああ。よかった。」

セラのその言葉には大きな喜びが感じられる。  
その横でルーリアもにこにこしている。

「セラとは、とても気が合うようです。いろいろ話してみても、  
楽しかったですわ。」

ほ……

仲良さそうだね。

「セラとわたくし、男性の好みのタイプなんかは特に似てますわ。」

「ちよっ……ルーリア!?」

セラが慌てている。

好みのタイプですと!!

それは聞いてみたいですな!

「教えて!!」

「黙れ!!」

顔を赤くしたセラに怒られた。

ひどい……。

~~~~~

その後、二人はしばらく世間話をした後、帰って行った。

夕方には、病院の夕飯が来たのだが、味が薄くて量が少ない。

もつと濃い物を、一杯食いたいのだが、5日間も寝ていたのでダメなんだそうだ。

夜になり、部屋の明かりが消される。

ベッドに横になって思考する。

セラとルーリアが血縁だったのは驚きだ。

これまでの話から、セラのお母さんは帝国の実家を出て、龍の国に

行き、セラを産んでから龍の国を出ていると考えられる。帝国には帰ってきていないようだ。

しかし、解せないことがある。

セラのお母さんの身元がはっきりしたのはいいのだが、ならば情報屋が殺された一件はどうなるんだ？

研究内容に何かあるのだろうか？

帝国に行けばもっと情報があるだろうか？

そもそも戦争の危険性がある現在、帝国に行くことは危険じゃないだろうか？

「はあー……………まだわからん事が多いな。」

「そうねえー……………」

……………誰だ!?

急にベッドの横に誰かが現れた。

「イヴ!?!」

「こんばんはー」

「え、え、どうして!?!僕寝てないよ!?!」

「あら?私、寝てる時以外に会えないなんて言った?」

いや、言ってないけど……………

なんか普通の景色にイヴがいると違和感がある。

「どっつなってるの?」

「うん。この前の昇華^{ブイスト}で、線^{ライン}が強化されたから、こーいうこともできるようになった。」

そう言っつて、イヴはその場でぐるっと回った。

目の前にいるように見えるが、何か違和感がある。

手をのばして、イヴに触れようとするっつとすり抜けた。

「やっぱり。イヴはここにはいないのか?」

「そーだよ。ユウの視覚を利用して、目の前にいるように見せてるだけ。今のユウを、はたから見ると、一人でブツブツ言っている危ない人だね。」

うわ。

嫌だな、それ。

「で、イヴは何しに来たの?」

「ユウに助言をしにきましたよー。あ、ついでにお見舞いも。」

お見舞いをメインにしてくれ。

「助言っつて?」

「ユウラに言われたこと。あの話を受けて、帝国に行きなさい。」

助言じゃなく、命令ですよそれ。

戦争を止める協力をするってやつか。

「どうして？」

「私がユウをこの世界に呼んだ目的の一つが、今回の戦争を止めることだから。」

え？

そーなの？

「じゃあユウさんの申し出を受けて、帝国に行けと？」

「うん、帝国にいるんだよ。この世界の敵がね。」

「敵……？」

「そうそう。強敵だから注意してね。」

「注意って言っても、昇華フイストがあるから簡単には負けないんじゃないの？」

正直、昇華フイストを使えば、おっさんクラスの相手でなければ余裕で勝てる。

「あー……実は昇華フイストは、体への負担が大きいから連続では使えないの。今だって、ちゃんと動けないでしょ？慣れれば連続起動が可能になるけど今は1週間以上、間を開けないと。強い力にはそれなりのリスクがあるからね。」

申し訳なさそうにイヴは言った。

まあ、そんなに期待はしていなかったけどね。

それに、昇華^{フリスト}状態は少し気分が悪いから好きにはなれない。

「わかった。えーっと、ユウラさんの申し出を受ければいいんだよね？」

「そうそう。お願いねー。じゃあ、おやすみ。」

そう言っつて、イヴは現れたのと同じような突然さでフツと消えた。はあー驚いた。

「あ、言い忘れてたけど、私に用があったらいつでも呼んでね。」

またいきなり現れたイヴが言い、すぐに消えた。

心臓が悪いからいきなりは止めてください。

~~~~~

朝から医者先生の診察、まずい朝ごはん。

基本的に動けないので暇だ。

暇つぶしにナースのお姉さんを観察。ナース服はすばらしい。

昼ごろ、ルーリアがまたやって来た。

今回は一人だ。

「おはよー、ルーリア。今日は一人？」

「おはよう、ユウ。わたくし一人では不満ですか？」

ちよつと拗ねたような顔が可愛いですよ。

「いやいや、そんなことないよ。暇だから、話し相手がほしいんだよ。」

「よかった。セラは仕事があるので今日はまだ来れませんわ。なので、今日一日わたくしがお世話します!」

え………

一日ですか？

「別にそこまでしなくてもいいよ。ルーリアだってすることあるだろ?」

「わたくしのことは気にしなくてかまいません。それで、ユウは何か困ってることとか、したいことがありますか?」

困っていること、したいこと………  
んー何だろ?

「んー……風呂に入りたいかな。しばらく入ってないし。」

何となく体もべたべたするので、言ってみた。

「わかりましたわ。」

え?

わかりましたって何が?

ルーリアはそう言っただ病室を出て行った。  
どうする気なんだ？

戻って来た。

ルーリアは桶とタオルを持って帰った来た。

ああーそういうことか。

「お風呂は無理ですが、体を拭くくらいならわたくしにもできま  
す！」

とても気合いの入っている様子。

嫌な予感しかない。

「あー・・・ルーリア。自分でやるからいいよ。」

「いえ、遠慮せずにユウはじっとしててくださいー！」

と言って、桶のお湯で濡らしたタオルを片手に、こちらに近づいて  
くる。

「いや、ほんとに自分でできるから、いいですよ!？」

「遠慮しないでいいんですよ。よいしょっと。」

ベッドに横になる僕に馬乗りになり、着ている服を脱がし始めた。  
抵抗してみるが体がうまく動かないうえに、ルーリアも割と力があ  
る。

「ちょ、ちょっと待って!!あ、ズボンはダメだ!!下はやめて

ー!!」



今のうちにルーリアをひきはがす。

「ルーリア、体拭くのはいいから、この果物の皮剥いて。」

と、別のことを頼んで注意をそらす。

「ふむ、わかりました。」

ベッドから降りてくれた。

ふー助かった。アル、いいタイミングだ。

もう少しで公開羞恥プレイだったぜ。

次の日、アルから話を聞いたセラがルーリアと同じことをしようとした。

またその時も絶妙のタイミングで、アルが登場し、泣いて走り去っていった。

### 第35話：リハビリ模擬戦

圧倒的な破壊の空気をまとった拳が、僕の顔面に迫る。

どうにか顔をそらし、円を描くような足運びで回避する。  
顔の右側を風を切り裂いて拳が通り過ぎる。

（こわっ！！）

相手は一撃ではとまらず、そのままハイキックから踵落としと連撃を仕掛けてくる。

（て、手加減をしてくれっ！！）

足運びで回避した後、反撃すべく拳に力を込める。

アルベイン流 格闘術 七式 『金剛竜破』

両手に収束させた龍の顎の形をした圧縮エーテルを叩きつける。

「はっ！！」

地面を踏み抜きつつ、両手を突き出す。  
直撃。

相手は吹っ飛・・・ばない！？

相手も同じような性質の技を使ったようで、完全に相殺された。

バアンツ！！

圧縮エーテルがぶつかり合い、衝撃がはじける。

「うわあっ！？」

予想外の事態で僕は無防備になった。

相手は僕の懐に入り込み、襟元をつかんで背負い投げの要領で投げられた。

「うおお！？」

ドスンッ！！

地面に叩きつけられ、息が一瞬詰まる。

気づいた時には、相手は拳を振り上げている。

僕の負けだ。

~~~~~

「参ったっ！！ストップストップ！！」

僕の顔の数センチ前で、拳が止まっている。
あぶねえ〜……………

「セラ、僕病み上がりなんだけど……………」

「手加減しただろうか？」

僕と組み手をしていたセラが、倒れた僕に手を差しのべながら言う。あれで手加減かよ……

セラの手を取り、立ち上がる。

ここは首都から数分の平原地帯だ。僕が退院して3日たった。

今の組み手は、入院中になまった体を叩き起こさすためのリハビリだ。

「ユウ、大丈夫ですか？」

「やーい。負けてやんの。」

ルーリアが気遣ってくれた。

ヤジを飛ばしているのは、アルだ。

殴るぞ、こちら。

チコモいるのだが、僕の武装の最終調整に熱中しているようだ。

三人は少し離れた位置の平原に、シートを敷いて座って、くつろいでいる。

「あー……大丈夫。」

「別に痛くないだろう？大袈裟だな。」

痛さ云々ではなく、単純に怖かったんだが。

三人のいるシートのほうに向かうと、ルーリアが立ち上がった。

「それでは、次はわたくしの相手をしてくださいます?」

「……………僕、病み上がり……………」

「セラだけずるいです。わたくしもユウと戦ってみたいですわ。」

そう言って、折りたたみ式斧槍ハルバードを起動させた。
ずるいって何ですか?

はぁ……………しょうがない。

「チコー。『銀月華』はどーお?」

チコは僕の刀に接続コードを何本かつないで、入力結晶インプットブロックで術式コードを打ち込んでいる。

この前の魔物との戦闘時、昇華ブースト状態で刀に莫大な量のエーテルを徹したことで、内部術式インサイドコードが破損していたそうだ。

この刀だけでなく、魔物のレーザーによって背中に穴のあいたコードも修理してくれている。

そのため僕は今、体にフィットした半袖の防刃シャツに旅人用のズボンと軽装だ。

チコは、僕の装備だけでなく、ルーリアの翼脚甲ウインドウオーカー、アルの詠唱杖キャストスタッフの修理も請け負ってくれた。
ありがたい。

「はい。オツケーです!!」

チコは接続コードを外し、僕のほうに投げる。
受け取って鞘から引き抜く。

刀身は美しく輝いている。
エーテルを徹す。

「いいね。さすがチコ。」

「えへへー、がんばりましたです!!」

チコは照れたように笑う。

よしよし、後で飴ちゃんをあげよう。

ルーリアと少し離れた位置に移動。

「それでは、ユウ。よろしいですか？」

「はい、いいよー。」

ルーリアは構える。

僕も構える。

勝負!!

~~~~~

セラは立って、ルーリアとユウの戦いを見る。

刀と斧槍が何度もぶつかり合い、火花を散らす。

ルーリアは槍術と蹴り技を用いる。

リーチをいかした斧槍ハルバードの攻撃。斧槍の射程の内側では、翼脚甲によって加速させた蹴り技を用いる。

そして、最も特徴的なのが翼脚甲による三次元的な戦闘スタイル。前後左右だけでなく、上下の動きも可能であることは大きな強みだ。

対して、ユウの特徴は技の柔軟さにある。

私知っているだけでも、ユウの技は剣術、格闘術、暗殺術、移動術、と様々だ。

その技の豊富さによってあらゆる状況に柔軟に対応する。

少しでも油断すると思いがけないことをするのが、ユウのすごいところだと思う。

先ほどの私との組み手では、ユウは格闘術だけしか使っていなかった。

そのため、私は余裕で勝つことができたが、ユウが刀を持った状態だったなら、どうなったか分からない。

「セラちゃん、こつち来て座ったらー？」

アルは地面に敷かれたシートに寝転んでいる。

お前はくつろぎすぎだ。

その隣のチコは、先ほどまでユウの刀につけていた接続コードを、リュックから取り出した詠唱杖キャストスタッフに取り付け、作業を始めた。

「チコ、それは？」

チコの隣に座りながら聞く。

「これは、アルさん用の新型詠唱杖です。アルさんの二重詠唱専ツインキヤスト用に作りました。設計自体はアルさんがやったんですけどね。」

アルが設計を？

アルのほづを見ると得意げだ。

「そうそう。俺様何でもできるから、設計ぐらい簡単なんですよ。すごいだろー。褒めてくれたっていいぜ！ー！」

さて、ユウ達の模擬戦を見よう。

「あれ？セラちゃん、何か反応してー！ー！」

無視だな。

~~~~~

僕はルーリアの斧槍から幾つものエーテル弾が、突きによって飛んでくるのを見た。

アルベイン流 戦刀術 二ノ太刀 『天衝烈破』

斬撃の形をしたエーテル衝撃波を3つ放つ。

続けて、

アルベイン流 戦刀術 三ノ太刀 『竜旋牙』

体を回転させ、横一文字の大型のエネルギー衝撃波を放つ。

ドドドドッ！！

爆音が響き、飛んできたエネルギー弾をすべて撃墜する。

その隙にルーリアは、接近してくる。

斧槍が斜め下から、斬り上がってきた。

刀の反りを使い、いなす。

ルーリアはいなされても、斧槍を回転させバランスを崩さず、勢いのままさらに突きを繰り出す。

僕は前進した。

突きが僕の顔の真横を通り過ぎるのを感じながら、斧槍の射程の内側に入る。

このまま格闘に持ち込もうとすると、ルーリアのハイキックが来た。それも翼脚甲の反射浮遊《リフレクションフロート》機構で加速された蹴りだ。

刀でガードすると同時に、衝撃を散らすために自分から跳ぶ。

ガンッ！！

衝撃に飛ばされて、斧槍の射程に戻される。

（ヤバっ！？）

ルーリアの斧槍を回転させつつの連撃。

バックステップで距離をとりつつ、左の拳の発射でエーテル弾を飛ばし牽制。

さらに地面を踏み抜き、飛び散った小石にエーテルを徹し、接近しようとするルーリアの目の前で破裂させる。ダメージはないだろうが、足止めになった。

(くっそー……どーしょ。)

距離をとって向かい合う。

今のところこちらの劣勢だ。

体内エーテル操作による身体機能強化は、知覚速度を高める。その高めた知覚速度でさえ、ルーリアの移動は捉えきれない。

やりにくい。

戦っていて最初に感じたのは、それだ。

斧槍の射程は長いし、接近戦ではあの蹴りだ。

うーん……

「ユウ、どうしましたの？あなたはまだ、本気ではないはずですよ……」

ほ、本気でしたらだめだろ。模擬戦だぞ。

と、言ってもこのままだと負ける。

正攻法では無理だから、搦め手で行くか……

~~~~~

ルーリアはこれまでの攻防で、ユウの異常さに感ずいた。さすがは、『技喰らい』と呼ばれた凶一郎さんの弟子。

技のバリエーションが多すぎる。

何度か必殺の一撃と思える攻撃をしたが、すべて避けられるか、相殺された。

今の小石を破裂させた技術も普通の人間にできるものではない。

(だが、それもハルギート流槍術で打ち破って差し上げます!!)

ユウが刀を振り、エーテル衝撃波はを飛ばしてきた。連続で。

「くっ!!」

何十発も連続で撃ってくる。

ハルギート流槍術 『シールドウォール  
防壁』

自分の前で斧槍を高速回転させ、壁を作り出す。壁にエーテル衝撃波がぶつかり、はじく。

そのまま移動しつつ、反撃。

ハルギート流槍術 『ジャベリン  
突烈衝』

突きによってエーテル弾を飛ばす基本技だ。

それを連続で出し、飛んでくるエーテル衝撃波を撃ち落とす。

そうしている間に、あたりには土煙りがおき、視界が悪くなる。  
これはチャンスだ。

ルーリアは翼<sup>ウイング</sup>脚甲<sup>フットアーマー</sup>を起動させ、地面を這うような低い姿勢のままユウのいる方向に高速移動。

土煙りを抜け、刀を振り上げているユウの顔に驚きが浮かぶ。

（勝ちましたわ!!）

斧槍の一撃を加える。

すり抜けた!?

「な……これは!？」

目の前にいるユウが霧のように消え去った。

「アルベイン流格闘術、『陽炎陣』。」

ユウの声が後ろから聞こえた。

しまった!!

振り返るよりも先に、ユウの刀が首に突き付けられた。

「勝負あつたんじゃないかな？」

「くっ……負けましたわ。」

~~~~~

ふうー………なんとか勝てた。

『天衝破』の連射のうち数発を、わざと地面に打ち込み、土煙りを発生させた。

その間に『陽炎陣』によって分身を作り、囷にした。

アルベイン流 格闘術 八式 『陽炎陣』

エーテルによって質量をもつ分身を作り出す技だ。

おっさんのような熟練者なら、分身で攻撃したり、連携を組むことも可能になる。

僕の実力では、囷に使う程度しかできない。

まあ、今回はうまく行った。

それにどういっわけだか、体の調子がいい。

エーテルの出力というか、瞬間的に使えるエーテル総量が上がっているような気がする。

昇華^{ブースト}の影響だろうか？

後で、イヴに聞いてみよ。

「むー………負けてしまいました………」

「よしよし。いい勝負だったよ。」

と、ルーリアはセラに抱きついて悔しがっている。

お前ら仲良すぎだ。

僕たちは、シートに座って昼食を食べることにした。ユウラさんが持たせてくれた携帯食が今日の昼食だ。いわゆるサンドイッチに近いものだ。

うまうま。おいしい。

隣に座るルーリアがパンをこちらに突き出した。

「ユウ。はい、どうぞ。あーん。」

「なんで？」

このパターンはまずい。

「む。なら私も、あーん。」

ほら。なぜかルーリアにセラが対抗意識を持ったため、対処が大変なのだ。

普段仲いいのにどうしてこうなるんだ？

「あー……食べるから置いといて。」

「ダメですわ。」

「ダメだ。食べ。」

何だこの拷問は。入院中にも何度かこういう状況にあった。死ぬほど果物を食わされたこともある。

「セラちゃん、ル・リアさん、ここに一人かっこいい男がいますよー!」

アルが自己主張しだした。

「はいはい、お前はこれでも食ってる。」

セラはそう言って、サンドイッチの入っていたバスケットにあった、飾りのパセリをアルに突き出した。

「なぜだ、なぜ、ユウばかり……」

アルが目を見走らせて睨んでくる。

チコはニコニコしてこちらを見ている。

見てないで止めてくれ。

二回ほど口に詰め込まれたパンがのどに詰まったが、今回の拷問に打ち勝った。
つらかった。

~~~~~

みな食事が終わり、一息ついている。

さて、みんなに言うておかないといけない事がある。

「みんな、ちょっといいかな?」

全員がこつちを見た。

「全員気になってただろうから、僕がこの前使った紅いエーテルについて説明する。」

紅いエーテル。

その言葉で、全員の顔が緊張した。

この前の事件から、みんな紅いエーテルについて話題にするのを避けていた気がする。  
気を使ってくれていたのだろう。

異界人であることや、イヴのこと、僕が『アナザーワールド異界』と呼ばれる特別製の体内エーテルを持つこと、など僕の知る情報を説明した。

「ほー……昇華に『アナザーワールド異界』ですか。興味深いです！」

チコが興奮したように言う。

「なら、あの髪の毛が白くなるのは、昇華ブリストってやつブリストの副作用か何かか？」

アルが聞いてきた。

白くなる？

「なんのこと？」

「お前がその昇華ブリストを使った時、髪が真っ白になって、瞳が血のように紅く変化していた。分かってなかったのか？」

なんだそれ!?

僕は、そんなのになつてたのか……知らなかった。

髪が白くて、瞳が紅いつて、イヴの姿みたいだな。

「知らなかった。自分がどうなっているか考えるほど、余裕がなかったからな」

「そうだろうな。お前、錯乱してたしな。」

うっ、僕も必死だったんだぞ。

「ゆ、ユウさん！！ちょっと調べさせてください！！血を少し抜いてもいいです？」

チコが興奮している。

こわっ！！

血をとって何か調べるのか？

何だかこのままだと解剖されそうな気がする。

「ちょっと落ち着け、チコ！！」

「おお！？申し訳ないです。」

はあ。

結局、あまり深刻な話にならなくて良かった。

僕が異界人であることを、みんな気にしていない様子だ。とてもありがたかった。

### 第36話：旅立ちの気配

「なあ、そのイヴって子かわいいのか？」

訓練を終えて、首都へと帰る道でアルが聞いてきた。

「ん？まあ……それなりに……」

「えー！！それなりって何よ」

「うわああ！！」

イヴが僕の目の前に急に現れた。

「ど、どうした!？」

「なにごとですの!？」

「え？え？」

セラとルーリアは驚き、チコは何が起きたのか分かっていない。

あ、そーいえば僕以外にはイヴは見えないのか。

「なんだ急に叫んだりして？陽気のせいでおかしくなったか？」

セラ、ひどい。

「イヴが僕の目の前にいるんだけど、みんなには見えないよね？」

「なに？ほんとか？」

イヴの言うとおり見えてないのか。

「なあ、イヴ。みんなに見えるようにはできないの？」

「ん？んー……あ、そうだ。ユウ、さっきの分身もっかいしてみて。」

分身というと、先ほどの模擬戦で使った『陽炎陣』のことか。とにかく言われたとおり、『陽炎陣』を使いエーテルで分身を作る。僕が右に一步動くと、さっきまでたっていた場所に分身ができる。分身といっても、薄くむこう側が透けて見えるような残像だ。

「おおー！！こんな技、見るの初めてです！」

チコは感心している。

魔道具整備で、先ほどの模擬戦を見てなかったようだ。

「イヴ、分身作ったよー。」

「はい。じゃあちよっと待っててね。」

そう言って、イヴは姿を消した。  
何する気なんだ？

「ユウ。結局どうなったんだ？」

セラが聞いた。

みんな不思議そうにしている。

「んー……イヴがこの分身使って何かするらしい……  
ん？」

分身にノイズが走ったかのように乱れた。

ノイズの範囲が大きくなり、分身が全体がノイズに包まれる。  
ノイズが収まった時には、僕の分身がイヴの姿になっていた。

「ええー、どーやったの!？」

「ちょっと割り込みをかけただけだよ。」

割り込みって何だ？

「お、おおおおお!!この人がイヴさん!!はじめまして、  
アルフレッドです!!」

こりない奴だな、アル。

うるさいので黙らしておく。

ボコッ!!

「んじっ……」

よし黙った。

「彼女がイヴか？」

セラが僕の分身だったものを見ながら聞いた。他の二人も驚いてい  
る。

「面と向かうのは初めてね。私がイヴ。ユウの雇い主、というか主人かな？よろしく。」

と、イブは礼儀正しく自己紹介をした。

主人って……僕はイヴの使いツパシリか。

「みんなのことはユウの視覚から見せてもらって知ってるわ。これからもユウのことよろしくね。」

だんだん分身のが薄くなっていつている。もうすぐ消える。

フツと霧のように一瞬で消えた。結局自己紹介しただけだな。

まあ、これでイヴが僕の妄想の産物ではないと証明できただろう。

「驚きましたわ。一体なんだったんですの？彼女は精霊のたぐいなのですか？」

ルーリアがいまだ驚いた顔で聞く。

「自称、世界の管理者だって。僕も詳しいことは聞かせてもらってないよ。」

「ふぁー、すごいです。遠隔から他者の制御化にあるエーテルに割り込みをかけるなんて、どうやって行っているのか皆目見当がつきません……」

チコはどうやら技術的なことで感心しているようだ。

チコらしい反応だ。

イヴが戻って来た。

みな気づいていない。いつもの状態なのか。

イヴは何か疲れた様子だ。

「はあー……なれないことすると疲れる。今日はもう帰る  
」。

そう言っつて、すぐに消えた。

イヴでも疲れるんだ。

「……う……あれ？俺なんで寝てるんだっただけ  
」？

アルが今頃起きた。

「イヴさんは？」

「疲れたから帰るって。」

そう言っつと、アルはがっくり膝をついた。

~~~~~

首都まで帰っつてから、みんなとは別れ、セラと共に『ニニギ亭』に
向かう。

セラは仕事がある。

「じゃあ、仕事に行ってくる。」

「うん。いつてらっじゃい。」

『ミニギ亭』に着くと、セラは仕事用のミニスカメイド服に着替えに行った。

僕はカウンターにいるユウラさんの所に行く。

「やあ、ユウ君。昼食のパンはどうだった？」

「おいしかったですよ。」

「そりゃよかった。」

そーいえばユウラさんに伝えとかないと。

「ユウラさん、この前の件受けますよ。」

「ん？なんのこと？」

「ファンタムナイツ亡霊騎士団の件ですよ。」

「へー……イヴに言われたのかい？」
びっくりした。

まさかイヴのことまで知っているとは。

「それもありますけど……単純にこの世界が好きなんですよ。だから、戦争になるのを止めたい。」

これは本当だ。

違う世界から来たからこそ、この世界の美しさは無くしてはいけないものだと感じる。

「ふーん、そっか。ありがとう。ユウ君が参加してくれるとありがたayo。じゃあ、約束通り飛空艇のチケットあげるよ。体の調子はもういいのかい？」

「はい。もうほとんど治りました。そろそろ動くころと思います。セラが抜けても平気ですか？」

「セラが抜けると売り上げが落ちるだろうけど……しよーがない。気をつけて行きなよ。帝国にはすでに天次郎が入り込んでいる可能性がある。」

竜宮天次郎……

おっさんの双子の弟か……あんなのがもう一人いるなんて考えたくねえ。

「ルーリアも一緒に帝国に帰ることになってるから、案内してもらいな。ついでに、亡霊騎士団についての詳しいことも聞いときな。」

「え？ルーリアも一員なんですか？」

なんとなくそんな気はしていたが。

「ああ。あの子の父親が初期メンバーの一人なんだよ。」

へー、ルーリアの父親か。
ルーリアが協力してくれるのは、とても心強い。

そーいえば、ユウラさんには聞きたいことがあったんだった。

「ねー、ユウラさん。うちの師匠の本名が竜宮凶一郎ってことは、僕の使う技は竜宮流ってことなんですか？」

「ん？いや、厳密には違うよ。君の使うアルベイン流は、竜宮凶一郎流と言うのが正しいかな。」

あれ、違うのか？

おっさんが竜宮なら教えてくれた技も竜宮のものだと思ったのに・・・

「それってどういう意味です？」

「つまりは、君の師匠が生きてきた中で手に入れた技の集合体。独自の流派と言っている。竜宮流も混じってるし、私の使う虎島流も混じってるはずだ。」

なんだそれ？

虎島流って格闘技がメインのはずだ。

「竜宮凶一郎の戦時中は『技喰らい』って呼ばれてたんだ。」

急にユウラさんが話題を変えた。

「わざわざはいっ。」

「そう。文字通り、『技』を『喰う』だよ。あの男は他人の技を一度見ただけで、鏡で写し取ったかのように自分のものとする。二度見ると、技の本質を写し取った相手よりも深く理解し、自分の使いやすいように改良してしまう。」

うげ……

おっさんの教える技が、やたらバラエティーに富んでいるのはそのせいかな。

「そんなこと簡単にできるんですか？」

「まさか。普通の人間にできる訳がない。あいつは異常なんだよ。竜宮の中でも千年に一人とか言われている超天才だ。竜宮流剣術を弱冠12歳で会得してる。」

12歳って小学生だろ!?

そんなガキの頃に既に一流派を会得していたなんて、異常だ。

「私は、ユウ君が凶一郎の技を覚えられるのもすごいと思っけどね。」

ぬ？褒められた？

僕って結構すごい？

まあ、イヴの改造のお蔭なんだろうけどね。

「いろいろ教えてくれて、ありがとうございます。」

「いいよ。いつ出るんだい？」

「セラも早く帝国に行きたいだろうと思うので、旅の準備をして

二日後には。」

「そっか。がんばりなよ。」

そう言ってユウラさんは、僕の頭をポンポンと叩いた。

ユウラさんにはすごく助けられた。

この街とももうすぐお別れとなる。

第37話：帝国へ

明日、首都ペルルトから飛空艇に乗り、帝国に向けて旅立つ。戦争の気配が高まり、帝国行きの飛空艇が少ない。

夜。

今日はセラのお別れパーティーという名目で、夜から『ニニギ亭』のメニューが半額。
そのため、客が多い。

酔って泣き出す客もいる。

「セラちゃん、行かないで〜!!」

と言うセリフが、そこかしこから聞こえる。

接客態度はぶっきらぼうなセラだが、割と愛されているようだ。

僕はカウンター席の端っこで、夕食中だ。

セラは歌を披露するらしい。僕も久しぶりに聞くので、楽しみだ。

チコ、ルーリア、アルも来ている。

チコは知り合いに挨拶に行き、アルは女の人に声をかけに行った。

ルーリアは僕の隣に座って、カウンターの向こうにいるユウラさん
としゃべっている。

食事を終えてしばらくすると、店内が拍手に包まれた。

セラが歌うようだ。

息を吸い、歌い始める。

セラの透き通ったソプラノヴォイスがあたりに響く。
周りの拍手は一斉に静まる。

セラの歌はこちらの言葉ではない龍言語で歌われている。
だが、すべての人が聞き入っていた。

バラード調の静かな曲だ。それゆえに、セラの声の美しさが引き立つ。

6分ほどの曲が終わるまでの間、誰ひとりとして声を出さなかった。
歌が終わると、数秒の間の後、拍手喝さいだ。

「すげえー！ー！セラちゃん、お見事！ー！惚れ直した！ー！」

ピーピー口笛の音もする。

僕の隣でルーリアも拍手している。

「すごいですわ！！感動しました！！」

カウンターの向こうにいるユウラさんも、

「龍族の女性は歌が上手いって話は聞くけど、これほどとは思わ
なかったな……。あ！ー！これで客引きすればよかった……。
」

と言って感心している。後半の言葉は聞かなかったことにする。

セラは無然とした表情でお辞儀している。顔が少し赤いので、恥ず
かしがっているようだ。

それから、客が持参した楽器の音に合わせて、店員の猫人のミスカウエアキャットさんが踊り始めた。

ミニスカメイド服のまま踊るものだから、きわどい。

あと少し、あと少しスカートが上がれば……。

殺気を感じて視線をあげると、セラが人を殺せそうな目つきでこちらを睨み、隣にいたルーリアはニコニコ笑いながら、僕のほっぺたを結構な強さでひねってきた。

その様子を見てユウラさんがけらけら笑った。

~~~~~

店の外に出て、風に当たる。

夜風が気持ちいい。

店の中からは、いまだにどんちゃん騒ぎの音が漏れてくる。

夜も深くなり、通りには人通りはない。

「よしっ……！」

体内エーテル操作による脚力強化。跳びあがる。

『ニニギ亭』の屋根に着地。

腰を下ろす。

「ここならいいかな。」

「イヴ。」

「はい。呼んだ？」

僕の隣にイヴが突然現れる。

「呼んだ。ちょっと話したいことがあってね。」

わざわざ屋根の上にのぼったのは、他人には見えないイヴと会話して一人でブツブツ言っているのを怪しまれないようにするためだ。

「これで良かったのかなーっと思っ……」

「帝国に行くことになったこと？」

「うん。この時期に行くのはまずいんじゃないかなー、とか思う……」

「でも、ユウはセラちゃんのことほっとけないでしょ？」

まあ、確かに。

セラは少し危なっかしいからな。微妙に世間知らずだし。

「戦争か……なんか大変なことになって来たなー」

「ユウにはその戦争を止めてもらわないといけないんだけどー。」

「んー……分かってるけどさ、本当に僕にそんなことができ

るかな？」

不安だ。

「大丈夫。簡単なことだよ。ユウは元凶を潰すだけでいいの。」

「竜宮天次郎って人？」

「そうそう。あんまり深く考えすぎないでねー。」

イヴがそう言った時、通りのほうからルーリアが跳んできた。

「よっと……こんなところで何してるんですの？」

ルーリアは僕の隣に軽やかに着地した。

「イヴとちょっと話をね……」

「なるほど。イヴはそこいるんですの？」

「うん、いるよ。」

イヴのほうに目を向ける。

「おっと、お邪魔のよーなので消えまーす。」

そう言ってイヴはさっさと消えた。

別に邪魔じゃないけど……

「行っちゃった……」

「どうしましたの?」

「イヴが帰った。」

「邪魔してしまいましたか?」

「いや別にそんなことないよ。」

ルーリアは僕の隣に座る。

「ユウ、亡霊騎士団ファントムナイツについて聞きましたか?」

「うん。ルーリアも一員らしいね。」

「はい。ユウが参加してくれることは、とてもうれしいですわ。」

そう言って微笑んだ。

む、その面と向って感謝されると気恥ずかしい。

「いや、僕、役に立つか分からないよ?」

「そんなことはありません。ユウの力はとても頼りになりますわ。」

あー………あんまり期待しないでくれ〜。

と思いつつ、ルーリアが徐々にこちらに密着してくる。

いや、なんか、素晴らしい感触が………

「なにをしている?」

と、ルーリアとは反対の位置から声が聞こえた。  
ビクツとしてしまった。

振り向くとミニスカメイド服の格好のままのセラがいた。  
なんか怒ってるような………?

「あら？セラ、あなたはパーティの主役なのに、こんなところ居  
ていいんですの？」

「別にかまわんだらう？みんな酔いが回って気付かないさ。そんな  
なことより、こんなところで二人は何してるんだ？」

な、なんか口調がきつい。  
セラ、怖いぞ。

ルーリアはニコニコ笑いながら、

「ユウとお話してましたの。そーいえば寒いですわねー。」

と言い、僕のほつにさらにくっついてきた。

寒くないよー。わざとだー!!

いや、感触が素晴らしいので僕的には、いいんですけどねー……

・  
・

はっ!?!セラの顔に青筋が!?!

「ルーリア、そ、そんなに、くっつかなくて、いいだろう?」

セラの言葉が震えている。

ルーリア、セラが怒ってるよー!!

「知りませーん。」

うわぁ……挑発してる!!

セラは、しばらくむっつり黙りこんだ。

そして何を思ったのか、ルーリアのいる位置とは反対側の僕の隣に座った。

「なら、私もその話に混ぜろ。」

そう言ってセラまで密着してきた。

え、何なのこの状況？

「セラの方こそ、くっつきすぎなんじゃありませんか？」

「そんなことはない。」

うわっ。張り合いだしたぞ。

これはまずい。

二人が張り合いだすと、なぜかいつも僕がひどい目にあう。

「セラ、あなたは離れなさい。」

「そっちが離れる。」

二人がさらにこちらによって来る。

最初のほうはありがたい感触だったのだが、今は両方向からプレスにかけられている感じだ。

潰れるー!!!

「あの二人とも……離れ、ゴフッ……潰れる……」

そんな僕の様子を気にすることもなく、セラとルーリアは口喧嘩している。

「あ、おおおーい！な、なんてうらやましいことしてやがるんだっ！！」

通りにはこちらを見上げているアルとチョコがいた。アルは相変わらず素晴らしいタイミングだ。

それをきっかけに二人のプレス攻撃がやんだ。

~~~~~

プレス攻撃から解放された。

ふうー・・・圧死するところだった。

アルとチョコまで『ニニギ亭』の屋根にのぼって来た。

「ユウさん大丈夫です？」

ああ・・・心配してくれるのはチョコだけだよ。アルは恨めしそうにこちらを見ている。

「で、結局何をしていたんだ？」

と、アルは聞いてきた。

「ほら、前話した亡霊騎士団について。」

以前の魔物の襲撃にかかわった、セラ、アル、チコ、には亡霊騎士団については話してある。

「ああ。ユウが参加すると言っていた組織か……」

「そうそう。アルはどうするんだ？お前もユウラさんに誘われてたろ？」

「ん……俺には無理だよ、そんなの……」

「そっか……それじゃあ、明日お別れか……」

アルが自分で決めたことだ。反論するつもりはない。

明日、首都を出るのは僕とセラとルーリアとチコとなる。

「なんだよ？俺様がいないと寂しいのか？」

「……いや、別に」「」「」

みんなの声が見事に重なった。

「ひどいつ……」

みんな笑った。

明日にはお別れだ。この場所とも、ここに住む人々とも。

~~~~~

次の日。

飛空艇に乗るべく、湖の港の集まった。

ユウラさんが見送りに来てくれた。

アルは来ていない。

「みんな気をつけなよ。」

「はい。本当にお世話になりました。」

みんなで、礼をいう。

「セラ、あんたには餞別をやるう。」

と、ユウラさんは何か取り出した。

銀色に鈍く輝く、格闘用の手甲だ。

「私が現役の時、使ってた手甲『虎鉄』だ。龍族のセラのばか力なエーテルにも耐えるだろうから、使ってやってくれ。」

「あ、ありがとうございます。」

「ぬおおおおおー!!」

受け取ったセラの手元を覗きこんだチコが叫んだ。  
びっくりした!!

「これはすごいです！！後で見せてくらはいつ！！」

チコが暴走した。

チコをなだめてから、ルーリアが別れを言う。

「ユウラさん、お体気をつけてくださいね。」

「大丈夫だよ。この体とは、もう10年の付き合いだ。そっちこそ気をつけるよ。そろそろばれてもいい頃あいだ。」

「分かっています。」

ばれるって何だろ？

と、考えていると

「そろそろ出港になりまーす！！乗船するお客様はお急ぎくださいー！！」

おっと、もうそんな時間か。

「それじゃあ、僕たちは行きます。」

「ああ。……それにしても、アルの奴は何してんだか……」

そーいえばなかなか現れない。

何となく腑に落ちないまま、僕たちは飛空艇に乗り込む。

出港の合図の鐘が鳴る。

「……………おおい！！待てっ！！その船、待てっ！！」

アルだ。

アルが走って港まで来た。

手にはキャストスタッフ詠唱杖、肩から大きめのカバンを下げている。  
旅の準備をした格好だ。

「ユウラさん、俺行ってくる！！」

「ああ。行つといで。」

アルは走りながら、ユウラさんに言った。  
そして、そのまま飛空艇への橋を渡る。

「ハア……………ハア……………疲れた……………」

「アル、どーしたんだ？」

息が上がっているアルに聞く。  
みんな驚いている。

「パパに帝国の支社に行つて来いと言われて、しかたなくお前たち  
に同行してやることとなった。嬉しいだろう？ありがたく思え！  
！」

アルの実家は飛空艇貿易の会社だったか……………  
まあ、同行してくれるのはありがたい。

「アル、頼りにしてるぞ。」

「んお!? あ、ああ、うん。」

けなされるもんだと思っていたアルは、びっくりしたようだ。たまには、正直に言っただけやるもんだな。

飛空艇が湖を走り出す。

加速がつくと、徐々に水面から船体が浮き上がる。

帆がエーテルを反射し、空中をさらに加速。

僕たちは下にいるユウラさんに手を振る。

「行ってきます。」

こうして僕達5人は帝国に向けて旅立った。

### 第38話：平和でゆっくり空の旅

僕は飛行機に乗ったことがない。

中学の時の修学旅行で、新幹線に乗ったのぐらいだ。

そのため、飛空艇からの景色は圧巻だった。

だが、飛空艇に乗ってから三日目の今日は、あいにくの雨。  
甲板に出ることができない。

現在は飛空艇の船内の一室。

僕たち五人が泊まっている部屋だ。

二段ベッドが4つ部屋の端にあり、部屋の中央には机と椅子が置かれている。

僕たちはその机で、チコの話を知っている。というか、聞かされている。

チコのテンションが恐ろしく高い。

「本日、まずご紹介するのは、ユウさんの持つ多機能<sup>マルチ</sup>コート。前回の魔物との戦闘でできた損傷を見ごと修復しました!！」

そう言って、黒いコートを取り出し、広げた。

確かに魔物のレーザーで、背中に空いた穴が塞がれている。

しかし、ただ塞がれているわけではない。

穴のあった背中に大きく『鬼』と銀色の刺繍がある。

なんじゃこりゃ!!

なんでヤクザの人が着そうな感じになってるんだ!?

「な、なにこれ？」

「え？いや、かつこいいかなーと思って！！いいですよね？」

かつこ悪くはないが、着るのが若干恥ずかしいよ……

「この文字の部分、全部エルメト銀系ですから、すごくお金がかつちやいました。」

エルメト銀系は術式記述などに使われ、エーテルを徹しやすい。結構高価な素材だ。

どれだけ請求されるんだろうか……  
まあ、直してくれたからいいけどね……

「はい、では次の商品をご紹介します！！次はユウラさんがセラさんに渡した、手甲『虎鉄』です！！こちらのセラさんのエーテルに対応するために、内部術式に微調整を加えました！！あくそれにしても素晴らしい一品です。おおっと、よだねが……」

興奮しすぎだ。

ユウラさんがくれた手甲『虎鉄』は鈍い銀色の装甲に、金色の虎の装飾がついた業物だ。

おそらく、かなり上等な武器だろう。

「そんなにいいものなのか？」

と、セラが聞いた。

こちら、チコの話が長くなるだろう！！

「それはもう！！こちらモウさんの刀同様、鬼族謹製の武器です！！並の技術じゃないですよ！！例えばこの部分、大気エーテルを吸収して打撃力に変換する特殊機構ですよ！！こっちは・・・」  
やっぱりいい品なんだな。

そんな物をポンと人にあげるユウラさんもすごいな・・・  
ところで、このままだとチコが鬼族の歴史まで語りだしそうなので、横やりを入れとく。

「よしっ！！チコ、次いこ、次。」

「おおっと！それもそうですね。では次は、アルさん用の新型詠キャスト杖です！！これは・・・ってアルさん起きてください！！  
あなたのですよっ！！」

アルはさっきまでベッドの端に座って、チコの話聞いていたが、いつの間にか横になって寝ていた。  
チコの声で、アルは起き上がった。

「あーはいはい、起きますよー。ちびっ子の話は長いんだよ・・・」

と、あくびをしながら言う。

「真面目に聞いてくださいっ！！アルさんが使うことになるものですよ！！・・・では、説明しますです。この詠唱杖は二重詠唱シンキャスト専用の詠唱杖です。並列処理機能を搭載するため、詠唱器を二器使用しています。」

詠唱器は詠唱杖の核となる部分だ。  
それを二つもつけて、重くならないのか？

「そこんところは知ってる。俺が設計したんだ。問題は重量のほうだな。」

僕の疑問通りのことを、アルが言った。  
「っていうか、アルが設計したのか……相変わらず、すげえ万能っぷりだ。」

「はい。重量については確かに一般の詠唱杖より若干重くはなり  
ましたけど、許容範囲内に収めることができました。」

「へえー……おっ、ほんとだ。どうやったんだ？」

アルは詠唱杖を手にとって、確かめている。  
確かに以前の詠唱杖より、杖の上の部分が大きくなった気がするが、  
大きな変化はない。

「高価ですが軽量の素材と、鬼族の技術に応用した詠唱器を使用  
してみました。」

「鬼族か……なるほど。はじめて見る型だな……」

アルは詠唱器を覗き込みながら、言った。

「ユウさんの刀とか、セラさんの手甲で学んだ鬼族の技術を実験  
的に盛り込んだんです。不具合があったら言ってください。」

「はいよ。ありがとうございます。」

チコの優秀さを再確認できたな。

「それでは、こちらが請求書になります。みなさんの分を一つにまとめました。はい、ユウさん。」

請求書を受け取る。

え？

なにこの値段……？

「うわぁ………すげえ値段だな。」

「私の金は全部ユウに預けてあるから、後は頼んだ。」

「これは………すごいですわね。」

みな、他人事のように言う。

現在の所持金の3分の2が飛んでいくぞ。

「安くは………」

「なりません！結構苦労したんです。今回で手持ちのお金と素材をほとんど使いきっちゃいましたから。よろしくおねがいしますです。」

ぐうー………

あ、そうだ。

「アル、お金出して。」

「ん？そりゃ、俺の詠唱杖の分は出すが……」

「いや、全部。」

「はあ？何でおれが……」

金持ち坊ちゃんのかせにー。  
ぶーぶー。

「……じゃあ、少しだけだぞ。」

「……アルは神様だ。」

「大げさな……」

ありがたい。

しかし、またどっかでバイトしなくちゃいかな。

~~~~~

次の日、天気は晴れた。

甲板に出ると、昨日の雨のしずくが太陽の光を反射して輝いている。
僕は深呼吸する。

「ん……昨日、一日中部屋の中にいたから、気持ちいいな

」

「そうだな。」

一緒に甲板に出てきたセラが言う。

セラの腰辺りまである銀髪も、雨のしずくに負けず劣らず太陽の光を反射し、輝いている。

その姿に見とれながら、船の後側の甲板に向かう。

甲板の端で、しばらくセラとぼーっと流れる景色を眺めていた。

なんとなくセラに聞いてみる。

「セラはさあー・・・お母さんに会った後どーするの?」

「ん?どーいうことだ?」

「お母さんに会って、お父さんの手紙を渡した後、龍族の国に戻るの?」

そう聞くとセラは、黙り込んだ。

しばらくして、ぼつりと答えた。

「・・・わからない。」

戸惑っているというか、途方に暮れているような感じだ。

「故郷に戻りたいとは思はないの?」

「あまりいい思い出はないし、そもそも私は脱走して来たからな。帰るわけにはいかない。」

セラは龍族の国で監禁されてたらしい。
龍族ってよくわからんなー

「ふーん……そつか。じゃあ、今のところ目的はなし？」

「そうなるな。君の方こそ戦争を止めた後どーするんだ？……
やっぱり、元の世界に戻るのか？」

セラは少しさびしそうに言った。

「あー……どうしようかな。この世界に不満はないし、別に帰らなくてもいいかなーとか思ってる。」

この世界に来て二年が過ぎた。

両親や姉、友人に会えないのは少し寂しいと思うこともある。
でも、二年たっているのだ。元の世界で何年たっているか分からないが、二年の月日は大きい。

そして、僕はもう何人も人を殺している。
いまさら帰って、何もかも忘れて平穏に暮らしていけるか分からない。

そんなことを考えると、このままこの世界に居てもいいかなと思う。

「だから、この世界を旅してまわろーかと考えてる。」

「そつか……」

「セラも目的がないんなら、一緒に行く?」

なんとなく誘ってみる。
すると、

「い、いいのか!? 私も一緒に行ってもいいのか?」

と、やたら興奮して聞いてきた。
僕はおされぎみに答える

「あ、ああ。別にいいよ。」

「ほんとか?ほんとにいいのか?」

「そんなに何度も聞かなくても………うん。いいよ。一緒
に行こう。」

「うん。………ありがとう。」

めちやくちや笑顔で礼を言われた。

うー………面と向かって礼を言われると、恥ずかしいな。

っていうか、別に礼を言われる理由もないんだが。

今すごい顔が赤くなってるだろうな。

セラの笑顔は割と貴重だ。

恥ずかしいのを紛らわすために、甲板の手すりについている雨のし
ずくをすくってエーテルを徹す。

水をビー玉のような球体にして、指で転がす。

「ユウは相変わらず器用だな。」

「え？なんで？」

セラは僕の手にある水の球体を見て、感心している。

「それだよ。水にエーテルを徹すだけならできるが、そこまでうまく変化させて球体にするなんて、並みじゃないぞ。」

あれ？そーなの？

誰でもできるもんだと思ってた。

「その通りですわ。」

んお！？

びっくりした。

後ろには、美しい縦ロールの金髪をなびかせた少女ルーリアだ。

セラもそうだが、この二人はやたら気配を消して近づいてくることが多い。

ルーリアはそのまま移動して僕の隣に立った。

「水や木材などの有機物にエーテルを徹すこと自体は、それほど難しい物ではありませんが、ユウのしているように自在に形を変化させることは非常に難しいものです。水の操作は本来、大陸北部に住む人魚族マーメイドのみに伝わる秘伝なのですよ。」

「そーなの？……おっさんが普通にしてるから誰にでもできると思ってた……」

「おっさんという……凶一郎さんのことですか？」

「うん。ルーリアは知ってるの？」

「ええ。4年ほど前に一度お会いしています。稽古をつけてもらいましたわ。」

へー、ルーリアと知り合いだったのか。

「ユウ。もしよければ、その水の操作、教えてもらえませんか？おもしろそうです。」

僕の手元の水の球体を指さして言った。

「え？別にいいけど……」

「それではお願いします。」

「ちよつと待て。私にも教える。」

急にセラが割って入って来た。

「不器用なセラには無理だと思えます。それに、さっきまで二人きりだったんですから、次は譲ってください。」

「そ、そんなの関係ない！私もやればできるはずだ！」

「無理です。セラのばか力のエーテルでは、繊細な操作なんかできませんわ。」

「うるさいぞー！金髪ドリル！」

「な、なんですって！！セラの脳みそ筋肉！！」

何やら低レベルな口論が始まった。

ケンカするほど仲がいいってやつなのか？

とにかく喧嘩を止めるか。

「どっちにも教えればいいんだろ。喧嘩するな。」

なんとか治まったが、どちらも不機嫌そうだ。

僕は雨のしずくを集めて、水の球体を野球ボールぐらいの大きさにする。

「じゃあ、まずルーリアから。はい、これ。壊さないようにね。」

僕は球体を渡す。

受け取ったルーリアは戸惑ったように言う。

「え？これどうすれば……………」

「エーテルを徹し続けて。ほつとくと崩れるよ。」

球体は徐々に元の水の状態に戻ろうとしている。

ルーリアは慌てて球体にエーテルを徹した。

しばらくは形を保っていたが、不安定に揺れだし、つぶれてしまった。

「あ……………潰れてしまいました……………」

「まあ、最初はこんなもんだよ。これを繰り返して10分以上球体の状態を継続できるようになれば、次の段階に進める。」

「じゅ、10分ですの……先は長いですわね……」

僕も最初は1分もできなくて、おっさんにバカにされまくった。

「よし！次は私だな。」

セラが意気込んでいる。
無理だと思っけどな〜

先ほどと同じぐらいの水の球体を作り、セラに渡す。

「む……むむむ……」

セラはエーテルを徹し始めた。

球体はゆらゆらと揺れながら、膨らんでいく。
これはまずい。

僕は目をそらす。

バシヤツ！！

「ふわっ!?!」

「きやつ!?!」

セラとルーリアが悲鳴をあげた。

水の球体のはじけ、水が飛び散った。

予想通りの結果だ。

「な、なにがどうなった？」

「セラは人よりもエーテル出力が大きいんだから、もっと力を抜かないと……」

龍族は体内エーテル総量が多いだけでなく、瞬間的に操作できるエーテルの出力も大きい。

水に大量のエーテルを一瞬で徹したことから、破裂してしまったのだ。

「やっぱりこうなりましたわねー。」

と、にやにやしながらルーリアが言った。

「うるさい。ルーリアだって失敗しただろ。」

「私の方が見込みのある失敗の仕方でした。」

「大して変わらん。そうだよな、ユウ？」

「そんなことないですわよね、ユウ？」

あれ、僕は何でこんなに冷や汗が出てるんだらう？

「えー……どっちというわけでもなく……」

やべえ……最近よくなる展開だ。

な、なんとかしなければ。

と、そこで気付いた。

甲板から船内に入るドアが小さく開いており、アルがこちらを覗いている。

悔し涙を流しながら……

「くそぉ……うらやましいー!」

という声が聞こえる。

「アル……何やってんの?」

僕がそう言つと、アルがこっちにやって来た。

「うらやましい展開だな、ユウ!!死ねばいいのに!!」

なんだ急に……

どこがうらやましいの?

だが、このままうやむやにできそう。

ナイスだ、アル。

最近このパターンで何度助けられたか……

~~~~~

しばらく4人で世間話をしていると、飛空艇のスピードが急に落ちた。

「ん？なんだろ？」

「さあ？故障かもしれんな。」

どうしたんだろ？

そう思っていると、後ろから別の飛空艇がこちらに接近してきている。

ん？なんだ？

「ありゃ、帝国軍の船だな。巡視艇か何かじゃないか？」

と、アルが言う。

帝国の飛空艇は僕たちの船を追い抜き、前を塞ぐようにな位置に移動した。

後部甲板には錆びた銅のような色の軽装鎧を着た兵士がすでに抜剣している。

そして、脚力を強化した兵士たちは、こちらの船の前部甲板に次々と飛び移ってくる。

やばくない……？

「まずいですわね……あの鎧、帝国憲兵隊ですわ……」  
ルーリアが呟いた。

平和でゆっくり空の旅は、もう終りそうだ。

### 第39話：タイプー！！

憲兵隊。

軍隊内部における警察組織だそうだ。

アルが教えてくれた。

僕たちは赤い軽装鎧と兜で顔を隠した兵士に囲まれている。全員が抜剣しており、剣を突き付けてきている。

どーして？まだ何も悪いことしてませんよ？

囲む兵士の中から、兜の形が少し違う兵士が前に出てきた。

おそらく隊長格だろう。

「我々は、帝国憲兵隊だ。帝国騎士団第一空挺連隊所属『大鷹隊』イーグル副隊長ルーリア ハルギート第一級空戦騎士。ファーストクラスエリアルナイトあなたに国家反逆罪の容疑がかかっている。ご同行願おう。」

げえ・・・・・・

ファントムナイト

おそらく亡霊騎士団のことが漏れたのだ。

クーデターで開戦派が支配している現在の帝国にとって、戦争を止めようとする亡霊騎士団は邪魔以外の何ものでもない。

どうしようか？

強行突破でもするか？

「おい、ユウ。動くなよ。スナイフキャスター狙撃詠唱師がいる。」

アルが小さな声で言った。

憲兵隊の飛空艇を見ると、甲板上に数人の詠唱師キャストが通常よりも大きな詠唱杖を肩に担ぐようにして、こちらに照準をつけている。バズーカ砲で狙っているような姿だ。

狙撃詠唱師とはその名の通り、遠距離狙撃に特化した詠唱師だ。射程距離は、通常の詠唱杖の大気術スヘルをはるかに凌ぐ。ただ、狙撃用詠唱杖は大きく、取り回しが悪い。接近戦では全く役に立たないため、使いどころが難しい。

現在の状況では、狙撃詠唱師の存在は脅威だ。こちらの攻撃の射程のはるか向こうだ。迂闊に動けば、即大気術が叩きこまれるだろう。

「わかりました。同行しましょう。この方たちは関係ありません。見逃していただけますか？」

ルーリア！？

一人で捕まる気か！？

しかし、隊長格の兵士は首を振った。

「いえ、同行者も連行しるとの命令を受けております。残念ですが………」

こりゃ大人しく捕まるしかないかな。  
セラが今にもとびだしそうでヒヤヒヤする。

「ん？確か、同行者を含めて5人のはずだ。船内は搜索したのか

「？」

と、隊長格の兵士が部下に言う。  
チコだけがいまだに船内に残っている。

「現在船内を搜索中です。搜索班がまだ戻ってきていません。」

チコは無事だろうか？

そう思っていると、船内のほうからドスンという音が何度か聞こえた。

「おいおい……まさかちびっ子、戦ってんじゃないだろうな……」

アルが心配そうに言う。

大丈夫かな？

船内に続くドアがゆっくり開いた。

そして、隙間から筒状の物が二つ転がって来た。

筒は隊長格の兵士の足に当たり、止まった。

カシャっという音と共に筒の両端が開き、煙が噴き出した。

煙幕か！！

ナイスだ、チコ！！

これなら視界が悪くて、狙撃できない。

目の前にいる兵士の剣の側面に触れ、エーテルを徹す。

兵士が徹していたエーテルを一瞬で押し返し、剣を支配下に置く。

剣をへし折り、兵士のみぞおちに当て身を入れる。

僕が動くのと同時に、セラとルーリアも動いた。兵士たちは煙幕にひるんでいる。

セラは目の前にいた兵士を掌底で突き飛ばした。何人かを巻き込み、倒れる。

ルーリアは折りたたみ式の斧ハルバート起動して、隊長格の兵士の足を払い、転ばせた。

だがこのまま戦っていても、いずれは捕まる。この場合は……

「みんな、降りるぞ!!」

煙幕で視界が悪い中、全員に聞こえるように言う。

向かってきた兵士を足払いで転倒させ、アルのほうに寄る。

「ユウ、まさか降りるって……冗談だよな？な？今、空中飛んでんだぞ!?!」

「諦める。行くぞっ!!セラも早くっ!!ルーリアはチコを頼む!!」

僕は渋るアルを抱え、船の端まで走る。

セラもこちらに向かって来ているのが見える。

ルーリアはチコを抱えて、僕たちとは反対側の手すりに向かっていく。

追いかけてくる兵士に向かって、ダガーを投げる。

チコが作った特別製ダガーだ。

エーテルを徹すと、爆発する仕組みになっている。

エーテルを徹す量によって爆発時間を調節できる。

ダガーに直接術式を刻むため、一本あたりの単価が高いのがネックだ。

ボンッ！！

「うわぁっ！！！」

甲板に突き刺さったダガーは追いかけてくる兵士の足もとで爆発し、吹き飛ばす。

甲板の手すりに足をかける。

その先はもう何もない。

景色は、はるか下に見える。

覚悟は決めた。

「おいおいおい！！マジかよっ！！！！うわぁぁぁぁぁぁ！！！！」

わめくアルを無視して、僕は空中に身を投げた。

~~~~~

ゴオオオオという風を切る音。

さてこれからどうしよう……

飛びだしたのはいいが、その先を考えていない。

昇華^{フイスト}して、技の反動で落下速度を相殺するのはどうか？

ん……無理っぽい。

飛行機に乗ったことすらない僕が、スカイダイビングなんて当然初めてだ。

どうすれば空中を移動できるのか分からない。

チコは翼^{ウインドフォーカー}脚甲を持つルーリアに抱えられているから大丈夫だろう。

抱えているアルを見ると、失神している。

おいおい……

頭を叩かれた。

何かと思ったらセラだ。

どうやらうまく体を操作して、こちらに寄ってきたようだ。

僕の耳元に口を当て、何か伝える。

「龍化する……これを……たの……目をつむ……ろ……見るなよ！！」

そう言って、付けていた手甲を外し、僕に渡す。

風の音でよく聞き取れなかったが大体分かった。

僕は頷く。

龍化。

すなわち、龍族の真の姿である龍の姿への変身。

セラは体を動かし、空中を器用に移動して僕から離れた。

セラの体が輝き、大気エーテルが収束。
龍化が始まった。

あ……そう言えば龍化すると着ている服が破れる。
それで、見るなっということか。
目を逸らしておく。

輝きが収まると、落ちる僕の真下にもぐりこむように大きな銀色の
龍が現れた。

セラが相対速度を合わせてくれて、何とか背中の上に着地する。

「おととと……ふう……ありがと、セラ。助かった。

「ああ。降りるなんて言うから焦った。服も破れちゃったじゃないか……」

龍の姿のセラは不満そうに言った。
「つていうか龍の姿でも話せるんだ……
龍化したセラを見るのは久しぶりだ。」

首の根元に行き、座る。

なかなかセラの背中への乗りごころは結構いい。
銀色の美しい鱗が僕の足もとに並んでいる。
撫でてみるとすべすべしていて、気持ちいい。

「じ、じらー！おい、ユウー！くすぐったいからあんまり触るな
！！」

お？

感覚があるのか。

「おい、ユウさーん！！」

上を見るとルーリアに抱えられたチコが手を振っている。
良かった。みんな無事だったようだ。

アルはいまだに失神したままだが……

くくくくく

うつそうとした森が眼下に見える。

その森の中の開けた場所に降りることにする。

セラが着地して、僕はアルを担いで飛び降りる。

「よつと……セラ、お疲れー。」

「ああ。」

龍の姿のセラが言う。

上空から薄緑色のエーテル反射光を輝かせルーリアがゆっくり降り
てきた。

着地して、担いでいたチコを下ろす。

「ふう……重かったですわ。チコはいつたいどれだけ荷物を持ってるんですの?」

「リュックの中に皆さんの荷物も詰め込んできましたから。」

チコのドでかいリュックも担いでいたんだから、ルーリアも大変だっただろう。

「チコモルーリアもけがはない?」

「ええ。」

「はいです。」

よかった。

それもこれもチコの煙幕のおかげだ。

「チコ、あの煙幕、助かったよ。」

「いえいえ。船室から帝国の船が見えたんで念のためと思ったら、憲兵隊が現れたんで驚きました。」

まあそうだろうな。

帝国国内に入ってさっそく目をつけられてしまった。

「ユウ。人型に戻る。あっちに行ってる。」

セラがこちらを睨んで言った。

こわいこわい。

失神しているアルを引きずって離れる。

「あら？ユウはどこに行くんですの？」

「ルーリア、セラのことよろしくー。」

ルーリアはセラが真っ裸になっていることを知らないだろう。

~~~~~

ルーリアはアルを引きずって森の奥に行くユウを見送った。

「どういことですか？」

よろしくと言われましたが、どういことなのでしょう？

そう思っていると、目の前に立っていた銀色の龍が発光した。

龍の体に大気エーテルがまとわりつき、ポんつと小さな爆発の後そこには人の姿のセラがいた。  
素っ裸で。

「セラ……なんで裸なんですの？」

「し、仕方がないだろ！！龍化は体を変異させるんだ。着ている服はすべて破れる。と、とにかく何か着るものをくれ！！」

あらあら……龍族は意外と不便ですね。

「チコ。わたくしの荷物から予備の服をとってください。」

チコがリュックから予備のわたくしの服を取り出した。  
基本的な体格はセラとわたくしとでは、たいして変わらない。  
あくまでもたいして、だが。

背の高さは少しセラの方が高い。  
ただ、胸の大きさは負けていないはず。

チコが取り出した服を渡す。

「はいどうぞ。」

「わるい。助かる。」

木の陰に隠れて、セラはいそいそと服を着た。  
服はわたくしが軽装鎧の下に着ている上下ともに黒い戦闘服だ。

しばらくして、服を着たセラが出てきた。  
さすがに靴の予備はないので、裸足だ。

「すこし、丈が短いが、ちょうどいいな。ありがとう、ルーリア。」

「いいえ。それにしても、セラの龍化した姿には驚かされました。」

「そーですね。」

チコも同意する。

セラは少し悲しそうな顔をして、

「その……怖かったらどう？」

と言った。

「は？いえ、そんなことはありませんよ。セラだって分かっているんですから。綺麗でしたわよ。銀色の鱗。」

「はいです！……とっても綺麗でした！！」

わたくしとチコの言葉を聞いて、セラは顔を赤くしている。

「あ、ありがとう……」

と小さく言った。

ああ、かわいいな……。珍しく素直ですわね。

ユウを呼ばないと。

「ユウ、もーいいですわよ。」

「はい。」

というユウの声が森の中から聞こえた。

これからのことを考えないといけませんわね。

~~~~~

今日は着地した地点から少し移動した場所で、野宿することになった。

たき火をみんなで囲む。

「それにしてもひどい目に会った……………」

と、アルが文句を言う。

お前はずっと失神してただろ……………」

「チコ。ここがどのへんか分かる？」

僕が聞くと、チコはリュックから地図を取り出した。

「えーっと……………飛空艇であと2日でザガルバフに着く予定でしたから……………たぶんこの辺です。」

チコが地図を指さす。

ん……………徒歩で行くとなるとまだ一週間はかかるな……………」

「ごめんなさい、みなさん。わたくしのせいでみなさんを巻き込んでしまいました……………」

と、ルーリアが頭を下げた。

「いや、僕は別に気にしてないよ。亡霊騎士団の件があるから、こういうことは覚悟してたしね。」

セラも頷いた。

「私もルーリアには母上のことをいろいろ聞けるから、ついてきたことには後悔していないよ。」

続けてチコも首をぶんぶん縦に振りながら、

「私も皆さんと一緒に行動するとしても勉強になってますので、全然平気ですよ!!!」

と言った。

全員の視線がアルに行く。

「え、俺？俺は謝っている女の子に文句なんて言わないぜ。紳士だからな！」

そして歯をキラーンと光らせた。

なまじかつこいいのでさまになっているが、イラツときた。

「みなさん、ありがとう。」

とルーリアは礼をした。

まあ、そんなことよりもだ。

「ルーリア、僕たちが向かうザガルバフってどんなところ？」

「ザガルバフは砂狼族サンドウルフズが自治統治する鉱山都市です。自治区ですから帝国も手を出しづらいので、わたくしたちの拠点となっています。それに、亡霊騎士団と砂狼族とは前大戦から協力関係にあります。」

ふーん。

鉦山都市か……

「おい……よくよく考えると、徒歩で行くとなると砂漠越え
しないといけないんじゃない？」

と、アルが冷や汗を流しながら言った。
砂漠？

「そうなりますね……仕方がありませんが……」

うげえ……とアルが漏らした。
ルーリアも顔をしかめている。

「砂漠があるの？」

「ええ。飛空艇は砂漠を越えてくれるはずだったんですが、徒歩
で行くとなるとそうなりますね。」

「砂漠ってそんなにきついのか？」

とセラが聞く。

僕も砂漠というものは知っているが、当然体験したことはない。

「当然。飛空艇の上からでも、あの暑さは堪えるからな。あ……
……今から憂鬱だ……」

とアルが言う。

そんなに大変なのか。

不安だ……。

))))))

帝国首都ダイノスト ラファエロ機関本部
機関長室。

大きな執務机の前にある豪華なイスに座る天次郎は、報告する副官を睨む。

「逃げられた？」

「は、はい。憲兵隊の制圧を抜け、飛空艇から飛び降りたようです。死体を捜索しますか？」

天次郎はおかしそうにくつくつ笑う。

「くつくつく……死体だと？そんなものあるはずないだろう。銀龍の姫に空挺部隊のイーグルファイター、それに『イヴの眷属』がそろってるんだ。飛空艇から落ちた程度で死ぬわけないだろうが。」

副官は天次郎の言葉に恐縮する。

「も、申し訳ありません……では？」

「ああ。地上に待機させてある『ハウンド獵犬隊』とローグに連絡、殲滅しろ。」

そこで、さつきまで部屋のソファに座って黙っていた白衣をきた研究者の女が割り込んだ。

「待て。銀龍は殺さない約束だ。」

メガネを指で押し上げながら言った。

金髪を結びあげた美しい女性だ。

副官はいつも、この女の偉そうな物言いが天次郎を怒らせないかとヒヤヒヤさせられる。

「ああ。そうだったな。銀龍は殺すな。捕獲しろ。」

「り、了解しました。」

副官は連絡をするため部屋を出ていく。

「さて、今回の『イヴの眷属』の実力を見せてもらおうか。ふふふ……」

天次郎は楽しみをこらえきれないように笑う。

その様子を見ていた金髪の女は殺気をこめて天次郎を睨む。

「おい。銀龍は無条件でこちらに渡せ。いいな。」

「わかってるさ。睨むな。あんたとは敵対する気はない。」

研究者の女は席を立ちあがり、部屋を出て行った。

「おお、怖い。研究者のだす殺気じゃないね。」

天次郎はその殺気にすら楽しみを感じる。

さて、『イヴの眷属』の実力によってこの先の計画はいろいろ変化する。

今回はどーかな？

第40話：襲撃者

「あつ！！そーいえばあの憲兵隊の奴が言ってたけど、ルーリアさんが『大鷹隊』^{イーグル}ってホントなの？」

アルが急にルーリアに聞いた。

飛空艇から飛び降りてから一日。

森から抜けて、街道に出た。

僕たちは街道を一路、砂漠地帯の入口にあるというコウロンというオアシスのある街に向かっていている。

気温が上がってきているのを感じる。

暑い。

「ええ。『大鷹隊』^{イーグル}の副隊長を務めていました。憲兵隊に目をつけられた以上、もう『元』ということになりますわね。」

「ほあゝそりやすげえ……。」

「なにが？」

よくわからないので聞いてみる。

「空挺部隊の中でも『大鷹隊』って言えば、空戦騎士のトップガンが集まる部隊だ。隊員であるイーグルファイターは、空戦騎士の憧れの的なんだぞ！」

「ふゝん……やけに詳しいな……。」

僕がいぶかしげに見ると、アルは自慢げに言った。

「お前知らないのか？空挺部隊は、ほとんどが女の子なんだ！！ファンクラブだってあるんだぜ！！」

あー……なるほど。

それで詳しいのね。

「それにしても、なんで女の子ばかりなの？」

「それはですね、単純に重量の問題なんです。」

僕の前を歩くチコが振り返った。

「重量？……あつ、そうか！飛ばないといけないからか！」

チコがコクコク頷く。

「そーです！ウインドウオーカー翼脚甲は大気エーテルを反射して浮力を得ますが、当然、限界があります。だから、高速戦闘を持ち味とする空挺部隊では、やはり体重の軽い女性がその大部分を占めることになるのです。」

相変わらずの説明役、ありがとう。

それにしてもルーリアがファントムナイッ亡霊騎士団ってどこから漏れたんだろ？内部に裏切り者がいるとかだったら、イヤだな〜

「いえ、たぶんそういうわけではないと思います。」

ずいぶんあっさり否定したルーリア。

「わたくしは本来、訓練中のケガで自宅療養中なんです。」

「ん？つまりはズル休み？」

「ええ。おそらくそれが部隊の人間からばれたんだと思います。」

あらら・・・

そんな簡単な偽装でいいのか？

「そろそろバレてもいいと思っていたところでしたし、このまま今の帝国に従うのは嫌でしたから、これがいい機会だと思います。」

お父様には怒られそうですが・・・

苦々しくルーリアが言った。

お父さんも確か亡霊騎士団のメンバーだったかな？

「父は、わたくしが亡霊騎士団に参加するのをずっと反対してきましたから。でも、殿下のことがありますから、わたくしもほつてはおけませんでしたし・・・」

「殿下って？」

「あ！そういうば話していませんでしたわね。大事なことですから、皆さんにも聞いておいて貰わないと。」

大事な話か。

歩きながらだと何だから、休憩するか。

ちよつと昼なので、昼ご飯を食べながらルーリアの話を聞くことと

なつた。

~~~~~

街道から外れ、小さな川のほとりで食事始める。

チコのリュックに詰められた保存食だ。

恐ろしいほどたくさん物が入るチコのリュックだが、秘密がある。以前、不思議に思ってた聞いたら、

「リュックの中の空間を歪めてあるので、見た目よりいっぱい入るんです！すごいでしょ？」

と、自慢げに語ってくれた。

まあ、それは置いていて。  
ルーリアの話を聞こう。

「今回のクーデターの中心人物のひとりに、開戦派の重鎮のクロイラー議員という方がいます。この方は奥様を共和国との戦争で亡くしています。そうしたことから、クーデター前の帝国の和平路線を許すことができなかつたんだと思います。」

うーん……迷惑な野郎だな。

「彼はクーデターが始まってすぐに開戦に反対する皇族、議員を拘束しました。わたくし達、亡霊騎士団はなんとか皇太子のラブリフ殿下だけは助けることができました。」

「そのラブリフ殿下がルーリアが言っていた殿下？」

「その通りです。今はザガルバフにいます。わたくしとは子供の時から友人なんですの。」

なるほど……

友人では見捨てられないだろう。

皇族と交友関係を持っているのはすごいな。

「どんな人？」

「そうですね……基本的に穏やかな人ですが、頑固です。国外に逃げることを勧めたのですが、帝国にとどまって戦うと言って、いまだにザガルバフに居ます。感じとしては、アルと似ているかもしれませんね。」

ん？今の説明でどこが似てますか？

「女性を見るとすぐに口説きにかかります。」

「似てるね。」

「そ、そんなことないぞー!!」

アルは即座に否定したが、当然誰ひとりとして同意しなかった。

「それにしても、どーしてクーデターの情報がこんなに回っていないんでしょう？不思議です。」

パンをもぐもぐ食べながら、チコが首をかしげる。

「それはおそらく竜宮天次郎による情報統制。それに、皇帝陛下は元々病で表に出てきませんし、協力的な皇族に代役をやらせておけば、ほとんどの国民は気づきません。」

「でも、いずればれるのではないんです?」

「戦争が始まってしまえば、どうとでもなると考えているのでしよう。いざとなれば、扱いやすい皇族を皇帝にして、傀儡政権としてやっていくつもりでしょう。」

「まずいな。急がないとホントに戦争がはじまりそうだし、すこし焦りが出てきた。」

~~~~~

全員が昼食を食べ終わり、休憩していると、

「砂漠に近づいてきたせいか、暑くなってきましたわね。川で水浴びでもしましょうか?」

「うん。いいなそれ。チコもどう?」

「はい! いいですね!」

という、女性陣の会話が聞こえた。

み、水浴びだと……!?

アルを見た。

アルも僕のほうを見ている。

「これは素晴らしい展開だな!!」

「だな!!」

という視線での会話を行った。

当然口には出さない。

「おい、その男ども。何を見つめあってる、気持ち悪い。」

ひどいよ、セラ。

つづけて睨んで言う。

「お前たちは向こうに行ってる。変なまねをすれば、すり潰すからな。」

す、すり潰すんですか……

「なにを言っているのか分からないが、僕たちは紳士だ。な？アル。」

「おう！安心して水浴びをしたまえ!!」

僕たちはさわやかな笑顔でグッと親指を立てた。

セラは疑いの目を向けたまま、川のほうに向かった。

僕たちは川から離れ、森の中に入る。

さて、

「なあ、ユウ。俺たちは紳士としてどう行動すべきだ？」

どう行動すべきか？

- 1 のぞく
- 2 こっそりのぞく
- 3 堂々とのぞく
- 4 のぞかないわけがない

うん。どれでも一緒ですな。

「僕は何事にも全力を出す主義だ!!」

「それでこそユウだ!」

僕たちはがっちり握手をした。

~~~~~

ばしゃばしゃという水音が聞こえてくる。

「うわっ!?! ちょ、ちょっと、ルーリア。」

「えい、えい。水遊びも面白いですわね。」

セラとルーリアのはしゃぐ声が聞こえる。

僕は今、川の近くの茂みに伏せている。  
ここからは、大きな岩が邪魔で川のほうが見えない。  
この岩を回り込むしかない。

僕とアルは協議の結果、別々の位置に向かうということになった。  
危険を分散させるのが目的である。

茂みに伏せ、匍匐前進。今の位置は川に隠れて近づくには最適な場所だ。

アルベイン流 秘戦術 五号 『影渡し』

気配を消し、エーテル、音を消し、匂いすらも限りなく無にする暗殺術の一種。

本気を出しすぎな感はあるが、何事も全力で行く。  
特にエロに関しては！！

「ふあゝ……いいなー……お二人とも。私もそんな大人ボデイになつてみたいですー。」

チコの声が聞こえてくる。

お、お、大人ボデイだと！？

それはどんな……おっと、ダメだ。

集中を切らすと、『影渡し』が継続できない。

平常心、平常心。

「うわあ……ふかふかです！！いいなー、いいなー。」

「チ、チコ。止める……くすぐつたいぞ。」

へ、へ、へいじょーしん、へいじょーしん!!

匍匐前進で邪魔な岩を迂回して川の見える位置に向かう。

そこで、アルの叫び声が聞こえた。

「ふぎやあああつあああ!!!!」

な、なんだ!?

僕から右斜め方向にある茂みからだ。

なにがあつたんだ?

と、とにかくこの隙にこの岩を回り込む。

あと少し!!

カチン

という何かが作動するような金属音が響いた。

すさまじい嫌な予感で、動きが止まる。

ポスつという音と共に、目の前の地面の中から筒状のものが飛び出した。

「なにっ!?!」

筒には『おしおき粉末』とかわいらしい文字が一瞬見えた。

空中で筒の両端が開き、ブシュと煙が噴き出した。

びっくりして粉末をおもつきり吸い込んだ。

「ふぎよおおおおっお!!」

先ほどのアルと大して変わらない叫び声を出してしまった。  
喉がひりひりして、目からは涙がドバドバ出る。

「予想通りだな。」

「まさか、ここまでうまく引つかかるなんて驚きですわ。」

「新しい鎮圧用薬品を試せて良かったです。」

よ、読まれていたとは……。

~~~~~

「すり潰すと言ったよな。」

「はい。」

僕とアルは顔面を腫らして、女性陣の前に正座している。
さきほどの鎮圧地雷を川の水で洗い流した後、セラにポコポコにされた。

気分が高揚して忘れてたが、僕たちが忍び込みやすいと感じる場所にセラやルーリアが気付かない訳がない。
そこに地雷を仕掛けておいたということだ。

「ひ、卑怯だぞー、地雷なんてー」

「ああん？」

「ごめんなさい！！」

すさまじい眼光で睨みかえされた。

結局、お前らはしばらく飯抜きだ！！
という判決が下った。

~~~~~

道草を食ったが、ザガルバフへと出発。

街道を一路、砂漠の入口の町コウロンへ。  
歩いていると、何かの駆動音がすかに聞こえた。

「ん？なんだろ？」

「飛空艇の駆動音だと思います。」

チコが間髪入れずに答えてくれる。

音は徐々に近づく。

「コウ！気を付けて！相手は相当な手練だよ！！」

イヴが横に現れ、警告した。

「みんな！！敵だ！！」

僕がそう叫んだ瞬間、僕たちを影が覆った。  
真上を中型の飛空艇が通り過ぎる。

飛空艇から5つの影が飛び降りてきた。

「！？・・・アル！撃墜しろ！！」

「わ、わかった！！」

アルが詠唱杖を起動。

基礎大気術 『フレイズ第一爆法・アロー射出』×5

アルの周りに次々と小型の魔法陣が現れ、炎の矢が射出される。

ツインキャスト二重詠唱を使つて、瞬時に5回の大気術スベルを起動。

炎の矢は一直線に飛び降りてきた影に向かう。

空中では身動きできない。

直撃すると思われた瞬間、

影は剣を振り、エーテル衝撃波を放つ。その反動で空中で動き、矢を避けた。

うまい。反動を使うとは、イヴの言つとおり相当な手練だ。

ドスツという音を響かせ、5つの影は地面に降り立つ。

鋭角的な黒い鎧、顔を見せない兜。そして所属を表す表記が一切ない。

この雰囲気、見覚えがある。

「ユウ……こいつらは……」

「ああ。たぶんセラと会った時に戦った特殊部隊だ……」

帝国の所属だったのか!?

「まさか……特務戦術部!？」

ルーリアが顔を驚きでいっぱいにして言った。

「ルーリア?」

「特務戦術部は国内外で特別任務につく帝国騎士団の中の一つの部署です。気を付けてください。特殊戦術部は、竜宮天次郎の影響が最も強い部署でもあります。」

折りたたみ式斧槍ハルバードを起動させ、構える。

ということとはセラを狙っていたのも、帝国の連中だったのか!?  
くそっ!!

僕は、わざわざ奴らの本拠地にセラを連れてきてしまったのか!!

先ほど頭上を通り過ぎた飛空艇が戻って来た。

今度は二つの影が飛び出してきた。

まだ来るのか!?

影の一つは鎧の形が少し違い、マントを付けている。そしてこいつは、兜をかぶっていない。

顔をさらしている。涼しげな顔に黒髪、紅い瞳が見える。

恐らく先に跳び下りてきたやつらの隊長だろう。なぜか剣を帯びていない。

無手で戦うのか?

もう一つの影は銀色の髪をなびかせた美形の20代半ばの青年。

銀髪のほうが何かつぶやいた。

遠い位置のはずなのにそのつぶやきがハッキリ聞こえた。

『潰れる。』

!?

大気エーテルが歪み、圧倒的の衝撃波が現れた。

ドラゴンヴォイス  
これは龍声!?

「みな、散れ!！」

とっさに言いつつ、転がる。

ボゴンッ!!!

先ほどまで僕たちがいた場所は陥没し、大きな煙が上がった。

「みんな、無事か!？」

みんなのよわよわしい応答が帰ってくる。

危なかった……

何故、龍族が……？

僕たちが立ち上り、煙が収まった時には、もう二人の影は地面に着地している。

銀髪の青年が恭しく礼をする。

「お久しぶりです、姫様。わたくしを覚えておいででしょうか？」

姫様……？

セラに向かって言っているように見える。

「ローグ……ローグ S・D・ハイネル……なぜお前が……」

セラが脅えたように言う。

「あなたの存在が銀龍一族繁栄の邪魔なのです。申し訳ありませんが、消えていただきます。」

平坦な声で、ローグと呼ばれた男は言った。

## 第41話：狂戦士

「あなたの穢れた血は、銀龍に不幸しかもたらさない。」

「う……だ、だまれ……」

ローグの言葉にセラは弱々しく反論する。  
カチンときた。  
言いかえしてやろうと思った瞬間、

「では、行きます。覚悟してください、姫様。」

ローグが消えた。  
見失った。

ドンッ！！

「うあっ!?!」

ローグはいきなりセラの目の前に現れ、大きな打撃音をたててなぎ払うように蹴り飛ばした。

セラはなんとか防御態勢に入ったが、踏ん張りきれず、街道横の林の木をなぎ倒して、吹き飛んだ。

ローグは追撃するように林に入って行った。

「セラ!?!」

とっさにセラを追おうとする。

「貴様の相手は私だ。『イヴの眷属』。」

背筋が凍るような冷たい声が聞こえる。

黒い髪と鋭い赤い瞳、20代程度の冷たい風貌の男だ。

黒い鎧と赤いマントのがつしりした体が道を塞ぐ。

「どけっ!!」

強行突破しようとしたが、思いとどまった。

無理だ……そんな力押しが通用する相手ではない。

なんだかおっさんと対峙している時と似た感覚がある。

何をしても、簡単に対処されてしまいそう……そんな感覚。

「私は特務戦術部『ハウンド獵犬隊』隊長、デユラハン ノルドラ。」

紅い瞳が僕を射抜く。

ルーリアが息をのんだ。

「!?!?……ユウ、その男は危険ですわ! 帝国騎士団で一二を争う剣士として、名を聞いたことがあります!!」

「うえっ……面倒な奴が出て来たな……」

こいつだけじゃなく、あと5人黒い鎧の兵士がいる。

増援がないとは限らない。

勝てるか……?

急がないと、セラが危ない。

先ほどから林の中から大きな打撃音が聞こえる。  
セラとローグの戦闘の音だ。

「さあ、始めるぞ『イヴの眷属』。……………『<sup>コトリング</sup>召喚』。」

そう言ってデュラハンは右手を前に出した。

すると、空中に5つの魔法陣が現れた。

その魔法陣を突き破るようにして5色の大剣が出現した。

一つ一つの造形はほぼ変わらない、赤、青、翠、黒、白の五色だ。

赤い色の大剣を掴む。

残りの4本の大剣はデュラハンの背中に回り込み、浮かんでいる。

なんだ……………この剣は？

「魔剣です！！この人は魔剣使いです！！」

チコが目を見開いている。

魔剣ってたしか……………

~~~~~

「魔剣ってのはな、魔道具の上位だと思えばいい。」

「そんな大雑把な説明でいいのか……………」

おっさんの説明に呆れていしまった。

外での戦闘訓練中に魔道具について聞いている時、魔剣の話が出た。

「実際どんな違いがあるの？」

「ん〜・・・キャストスタッフ詠唱杖なしでスベル大気術が使えたり、武器自体にすげえ付加効果があるとか・・・まあ、いろいろ。」

「なにそれ・・・反則もんじゃないか。」

「まあ実際、魔剣使う奴と戦うことなんてまず無いぞ。」

ん？そんなに便利なら使う奴は多いんじゃないのか？

「希少価値が高いんだよ。魔剣ってやつは・・・」

「なんで？作れないの？」

「作れるのが魔道具。作れないのが魔剣だ。」

作れない？じゃあどうやって魔剣はどうやって現れるんだ？

「高濃度の大气エーテルが集まる場所では、まれにエーテル自体が意識を持つことがある。それが精霊だ。で、その精霊が宿った武器が魔剣って呼ばれてんの。そもそも魔剣ってのは一つのカテゴリ名だ。別に剣じゃなくても、精霊が宿ってればどんな武器でも魔剣って呼ばれる。」

「え・・・精霊？」

「そうそう。意識を持ったエーテル体だ。つまりは魔剣には意志があり、使い手を選ぶことになるのよ。」

使い手を選ぶね・・・
それで珍しいのか。

「だから、魔剣を持つてる奴つてのは精霊に気に入られている奴か、精霊をねじ伏せるだけの力がある奴つてことになる。どちらにしても、魔剣を持つてる奴は、かなりの実力を持っている奴つてことだ。出会ったら逃げたほうがいいぞー。」

相変わらずの気の抜けるような声でおっさんは締めくくった。

~~~~~

逃げられないぞ、おっさん。

冷や汗を流しながら、おっさんの言っていた言葉を思い出す。

魔剣を扱う奴は実力者。

それは分かった。どーせなら対処法を聞いとけばよかった・・・  
しかも相手は、五本も魔剣を持つてるぞー・・・  
希少価値が高いんじゃないのかよ!?

どうやってるのか知らんが、デュラハンという男は赤い魔剣を手に持っているが、残り四本は宙に浮かんでいる。

「お前たちはあの三人を捕縛しろ。この男は私が相手をする。」

デュラハンが部下に指示をした。

5人の黒い鎧が一斉に動き出す。

まずい！！

僕の意識が5人に移った瞬間、

「貴様の相手は私だ。」

！？

近い！！

今の一瞬で近づかれた。

赤い魔剣が上段から振り下ろされる。

足捌きと体をそらすことで回避。抜刀して構える。

つつ……やばい！

さらにそこからの連撃。

大剣を扱ってるとは思えない速さで打ち込んでくる。  
ヘタしたら刀がへし折れそうだ。

なんとか刀と足捌きで逸らしているが、防戦一方だ。

そしていつの間にか、どんどんルーリア達から離されている。  
くそっ……孤立させられる。

いつの間にか街道横の林の中に、追い込まれている。

これ以上離されるわけに離されるわけにわいかない！！

ギイン！！

火花が散り、刀が軋む。  
足を踏みしめ、鏢迫り合いの状態にする。  
すると熱を感じた。

「あつつ……!？」

デュラハンの魔剣から炎が吹き出す。

「炎蛇よ……」

その炎は蛇のようにのたうちまわり、刀にまとわりついてきた。  
まずい、このままだと炎にまかれる!!

とっさに刀を手放して、バックステップ。  
刀を手放した右手を握り、振りかぶる。

アルベイン流 格闘術 一式 『発剄・通牙』

通常の発剄よりも速く、貫通力の高いエーテルをライフル弾のごとく撃ちだす。

デュラハンはまだ鏢迫り合いの位置から動いていない。直撃コース  
!!

バチインツ!!

弾かれた？

いつの間にかデュラハンの背中にあった魔剣の一本が、エーテル弾を弾いた。

デュラハンが持っている訳ではない。

魔剣が自動で防御に入ったのか!?

ここで追撃されるとまずい!!

落とした刀に目をやり、遠隔操剣術リモートで引き寄せる。

遠隔操剣術。

その名の通り遠隔から武器を操作する技術だ。武器に徹したエネルギーを感じ取り、それを操作することで可能な技術だ。

普段なら使わないが、距離がちかく、刀を手放してすぐなので、残留エネルギーが多い。

刀は回転しながら、僕の手にとまった。

すぐさま構える。

あれ?

結構隙だらけだったのに追撃がない。

デュラハン先ほど位置から微動だにしていない。

「なかなかだ。剣術はうまい。武器を躊躇せず手放す度胸も評価に値する。」

「な、なんだよ……褒めても何も出ないぞ。」

急に褒められた……

なんだよ、こいつ。

「遠隔操剣術リモートまで使えるとは、器用だな。……だが、本当の遠隔操剣術とは、こついうものだ。」

デュラハンが左手をこちらに突き出した。  
すると、デュラハンの背中で浮遊していた4本の大剣が、こちらに  
すさまじい勢いで飛んできた。

「うおっ!？」

4本の剣がまるで人によって振られているように斬りかかってくる。

素早く刀を振り防御するが、焦る。

数が多い。徐々に後ろに下がる。

お、重い……

遠隔操剣術で操っているとは思えないような重さだ。  
だんだん受けきれなくなってくる。

耳と頬を浅く斬られた。

さらに腕、太ももとじわじわと傷が増えていく。

せつかくチコに直してもらったコートが傷だらけで、血まみれだ。  
痛い。

切り傷なので結構な量の血が流れていく。

ある程度後ろに下がると、4本の剣はデュラハンのもとに戻って行  
った。

この距離が射程距離か……

「はあ……はあ……くそっ……」

いてえ・・・切り傷って地味に痛いんだよ。  
なんとか痛みを意識の外に閉め出す。

「どうした、こないのか？もう何も聞こえないぞ。」

聞こえない・・・？

あっ！？

先ほどまで聞こえていたセラとローグの戦闘音。  
ルーリア達の戦闘音。

まるで聞こえない。

「くそっ・・・まさか、セラもルーリア達も・・・」

「このままだと貴様の仲間は終わりだぞ。」

技量では完全にこっちが負けている。正面きつて戦っても勝てない。  
どうする、どうすれば・・・  
焦る、焦る、焦る・・・  
汗がだらだら流れる。

「さあ、あの力を使え！あの紅いエーテルの力を！」

こいつ・・・  
ブレスト  
昇華させるために手を抜いていたのか！？

「あの力さえ使えば、私と対等の勝負ができる！使わなければ貴様の仲間を助けることは出来んぞ！！」

デュラハンの顔は先ほどまでの冷たい風貌は消え去り、残忍な笑みでいつぱいだ。  
戦闘狂め……

たしかに昇華すれば、なんとかなるかもしれん。  
だが制限時間が30秒じゃあ……

「ユウ、時間のことなら心配なくていいわ。」

「……………どうゆうこと?」

イヴが僕の隣に現れた。

「前回の昇華で、ユウの体が『アナザーワールド異界』に適應してきたから多分、3分程度持つはずだよ。」

それなら、使うしかないか……3分でこいつを倒し、みんなを助ける。

やってやる。やってやるさ!

「決まったか?」

デュラハンは動かない。待っている。

「あんたの願いどおり使ってやるよ!!」

僕は恐れを吹き飛ばすように、声を大にする。

「はははっ……それでこそっ!!」

昇華する。

~~~~~

セラはローグの打撃を受けて、林に突っ込んだ。
木を5本ほどなぎ倒してようやく止まる。

防御に入れた手がしびれている。

なんて蹴りだ。

ユウラさんにもらった手甲『虎鉄』がなければ、骨が折れてたかもしてない。

ローグ。あの人かなぜ……

ローグは親戚として何度か会ったことがある。

また、私が龍式拳殺術トアゴニックアーツを教えてもらっていたジョフ F・D・ガ
イエンの愛弟子で、銀龍の中でもトップクラスの實力だ。

過去に何度か手合わせしたことがあるが、一発も入れたことはない。

頭を振り、立ち上がる。

「くそっ……引き離されたか……」

「気を抜いてはいけませんよ。」

つつ!?

もう追いついて来た!

気を引き締め、拳を構える。

蹴りが来た。

ハイキック。

膝から力を抜き、体を落として回避。

反撃をこころみようとするが、ハイキックは頭上で急停止し、踵落として変化した。

とっさに、連続でバック転をして踵落としを避けた。

ローグの踵落としが地面と接触し、轟音をあげて地面が陥没する。

背筋がひやつとした。

だが、ゆっくりはしてられない。

ユウたちが気になる。

心を奮い立たせ、足に力を入れる。

いくぞっ！！

地面をえぐりつつ、高速で接敵。

長い銀髪がしっぽのようにひるがえる。

右手に体内エーテル収束させ、ハンマーのように振りかぶる。
轟と大気エーテルがうなり、空気が震える。

龍式拳殺術 剛天四式 『屠殺龍衝』

右手を中心として、半径5メートルの範囲を圧殺する。

『虎鉄』の大気エーテルを打撃力に変換する機構により威力が上がつている。

拳を振り下ろす。

ドゴンっ！！

地面をえぐるのみ。

ローグはバックステップで後方に。

やはり同門であることから、技の効果範囲を知っている。

避けられた・・・が、追撃する。

龍式拳殺術 疾風二式 『回転落蹴』

右手の振りおろす力を利用して、体を前方に連続回転させ、あびせ蹴り。

ドスンッ！！

(受け止められた！？)

ローグは腕を頭上で交差させ受け止めている。

「少しは腕をあげたようですが、まだまだですね。前にも言ったでしょう？あなたは自分の腕力に頼りすぎだと。大きな力は適切な時に使うべきなのですよ。」

「つるさいぞー！！」

とっさに受け止められた腕を蹴り、宙返りで距離をとる。

着地した時にはすでにローグは目の前にいる。

「くっ……!!」

ローグの拳と蹴りが空気を切り裂き、せまる。

龍式拳殺術 剛天五式 『龍鱗舞踏』だ。

まるで舞踏を舞うかの如く拳と蹴りの連撃を繰り返す。

対抗するかにようにセラも『龍鱗舞踏』を放つ。

至近距離での乱打戦。

打撃がぶつかり合い、空気が鳴動し、木々が衝撃の余波で軋む。

純粋な腕力ではセラが上回っている。

セラの身体機能は龍族の中でもトップクラスである。

しかし、ローグには当たらない。

すべてかわすか、少しの力を加えて打撃の方向を逸らす。

（くっ……当たらない。どうしてだ!?!）

徐々に焦りが出てくる。

私は以前より強くなっているはずだ……それなのに!!

乱打戦が続いていたが、ローグが動いた。

セラの拳を逸らした瞬間、ねじり込むようにセラの脇腹に拳を入れた。

体が浮き上がり、鈍痛。

(これは・・・内部破壊の！？)

龍式拳殺術 剛天七式 『龍咬・一』

相手の体内にエーテルをたたき込み、内部を破壊する技だ。はらわたを咬みちぎる龍の一撃。

とっさに体内に流れ込んできたローグのエーテルを受け流そうとする。

が、ほとんど受け流すことができず、内臓を揺さぶられた。

「ぐふっ!!」

セラの口から大量の血が吐き出された。

後ろに下がろうとするが、足がもつれ、膝をついてしまう。

「これが適切な時に使うということです。姫様」

「ぐあっ・・・うう・・・」

どうにか立ち上がるが、力が入らない。

格闘戦では到底かなわない。

だが、諦めない。

別の、私が勝てるもの……

ドラゴンヴォイス
龍声だ。

私の龍声の出力は龍族で一番だ。

混血であることが影響しているのか、体内エーテル総量や身体能力、エーテル共鳴声帯の力は他の龍族を圧倒している。だから……

『ラ』

セラの声。エーテル共鳴声帯が音を大気エーテルに伝え、強力な衝撃波が発生する。

と、思われた瞬間、

『滅』

ローグの口から吐き出された言葉が、空間を満たした。

何も起こらない。

衝撃波の発生がなかった。

セラは混乱した。

「な……に？」

そんなバカな！！

ローグは全く動くことなく、自然体で立っている。なにがどうなったんだ？

ローグがうつすら笑い、セラの疑問に答える。

「エーテル共鳴声帯からの大気エーテルへの伝導は、音が波として空気を伝わる原理と同じです。だから私は、あなたの龍声の逆位相の波をぶつけて相殺したのですよ。」

意味が分からん。

だが、途方もないことをやっていることはわかる。

「この力『アンチヴォイス対消滅』が、私が銀龍の中でもトップクラスの實力だと言われている所以です。」

べらべら喋ってる隙を!!

『吹き飛ばっ!!』

『断る。』

またキャンセルされた。

ダメだ……勝てない……何をしてもそれ以上の技で返される。

心が折れてしまった。
怖い。

今まで感じたことのない恐怖。
体がピクリとも動かなくなり、涙がにじんできた。

「う……あ……」

「諦めましたか？姫様。では……………」

そこで一瞬、ローグは息を吸い込み、

『弾ける。』

セラに向かって龍声による衝撃波が放たれた。

セラは目をつむり、祈った。

助けて……………ユウ……………

第42話：再び登場！！

「くっ……アルは大気術スベルの速射でわたくしの援護を！！チコはアルに誰一人近づけないように！！」

ルーリアは冷静に指示を飛ばす。

「お、おっつ！！」

「はいですつ！！」

アルは若干ひるんだ様子で、チコはやる気満々で。

まずいですわね……セラは引き離され、ユウはデュラハンの相手で手一杯だ

そして、こちらの敵は5人。

それも全員、特務戦術部の所属だ。

チコとアルとわたくしでは少し荷が重いですわ。

5人の黒い鎧たちは、手信号でやり取りしながら、こちらに接近してくる。

全員ファイター、気闘士だ。

「行きます！！」

ウィンドウォーカー
翼脚甲を起動。地面を滑るように前進。
ハルバード
斧槍を振り、迎え撃つ。

5人は分散し、アル達を先に狙おうとする。
戦闘において詠唱師キャスターを先に潰すのはセオリーだ。

だが、やらせない!!

ハルギート流槍術 『スラッシュユライン』
大閃刃』

大きく斧槍を振ることで、大型の横一線のエーテル衝撃波を放つ。

集団の足もとを狙う。

黒い鎧の兵士たちは全員、小さく跳び、回避する。

ここだ!!

翼脚甲の最大出力で加速。

集団の中央の一人に狙いをつける。

まだ着地していない。

下段から斧槍を斬り上げる。

兵士はとつさに剣でガードし、金属同士の衝突音と火花。

だが勢いを殺すことができず、兵士の体は上空に跳ね上げられた。

空中こそが空戦騎士エリアルナイトの主戦場!!

跳ね上げられた兵士と共にルーリアも翼脚甲を用いて飛ぶ。

ハルギート流槍術 『エアラッシュ』
空乱列斬』

空中で何度も方向転換し、高速機動で相手を切り裂く。その姿は、高速ターンの連続によって分身しているかのように見える。

兵士は何とかガードしていたが、空中では無駄なあがきだ。ルーリアは手を緩めることなく連続で切り裂き、兵士をバラバラにした。

「まず一人!!」

他の4人は仲間が死んだことを気にした様子もなく、アル達のほうに向かっていている。

基礎大気術 『ウインド第一風法』

任意の空間を風の刃で切り刻む基礎の大気術。

兵士たちの進行方向を予測して、ツインキャスト二重詠唱によって連続起動。

だが、兵士たちも直撃はしない。

アルの視線から、タイミングを見計らい、回避行動をとっている。

さすがだ。

急いで、援護に回る。

上空からルーリアは斜め下に急降下。

ハルギート流槍術 『シューティングスター流星』

上空から流星のように地面に向けての降下攻撃。

重力加速と翼脚甲のエーテル反射加速をあわせた超加速を利用し、

攻撃する。

あまりの速度に、視界が歪み、みるみる地面が近づく。

丁度、兵士がアルの大気術を避けた瞬間を狙った。

ズシヤツ！！

地面を削るように着地しながら、一人の兵士を後方から両断した。上半身が血液をまき散らして、吹き飛ぶ。

「ふたりっ！！」

あと三人。

すでにアルの前に立つチコに肉薄している。

「守りますですっ！！」

チコは大きなハンマーを構える。

兵士三人は分散し、三方向に分かれる。

「わ、わ、わ、別々にこないでくださいー！」

チコは慌てつつも、何かの薬品の小瓶をばらまいた。

地面で割れ薬品が飛び散った。

兵士たちは避けたが、一人が飛び散った薬品を踏んだ。

「！？」

足を取られ、兵士は驚く。

靴底の薬品は粘って、地面に縫いとめている。

さすがチコの薬品。意表を突く。

その隙にルーリアは接敵する。

斬撃を仕掛けようと斧槍を振り上げた瞬間、目の前に術式の刻まれた魔法球が出現した。

大気術!?

魔法球の範囲が爆発した。

とっさに転がって避け、空中に逃げようとする。
しかし、

バキンッ

と、翼脚甲の浮力機関フロートユニットを破砕する音。

ピンポイントで浮力機関を破壊された。
バランスを崩す。

「狙撃!?!」

魔法球はさらに大量に発生する。
爆発。

「くっ………がはあっ!?!」

大量の爆発が直撃した。

ルーリアの軽装鎧ははじけ飛び、体は地面に転がる。

「ルーリアさんっ!!」

「くそっ!!ちびっ子、もう少し頑張れ!!」

チコの悲痛な声とアルの焦る声。

ルーリアは衝撃で朦朧とした意識のまま、視界を巡らせる。

増援だ……

いつの間にか5人の詠唱師キャストが後方で、詠唱杖キャストスタッフを構えている。
狙撃詠唱師スナイプキャストまでいる。

ここまで用意周到だとは……

5人の氣闘士に集中しすぎた。

奴らの飛空艇から増援が来たのだ。

なんとか立ち上がろうとするが、力が入らない。

アルとチコは反撃していたが、接近されてはアルも詠唱できない。
二人とも押し倒され、拘束されている。

一人の兵士がルーリアに近づき、腹に蹴りを入れる。

「ぐふっ……っほっ、っほっ……」

「やってくれたな……エリアルナイト空戦騎士。だが、もう終りだ。」

そんな・・・こんなところで・・・
わたくしはまだ・・・

意識が薄れていく。

ごめんなさい、みんな。

~~~~~

昇華<sup>ブイスト</sup>によって体内エーテルが急増  
紅いエーテルが全身から吹き出し、視界を紅く染める。

体の中から力があふれてくる。  
圧倒的な全能感に精神が高揚する。

「は、は、ははははは！！」

思わず笑いが出てくる。

最高の気分だ！！

これで目障りな魔剣使いを殺せる。  
すべて、俺が・・・

！？

おっと、また錯乱してた！！

しかし、前回よりも精神の高ぶりがゆるい気がする。  
そーいえばイヴが、僕の体が慣れたって言ってたか……

さて、デュラハンに目をやると、こちらを見てうっすらと笑みを浮かべている。

「ほう……それが昇華した姿か……。楽しめそうだな」

「そりゃ良かった。じゃあ、さっさと終わらせるぞ。」

「できるのならな。」

殺ってやるよ。

増加した体内エーテルによって身体機能強化。  
知覚が加速し、近くにある木から落ちてくる葉の落下速度が次第に  
ゆっくりとなる。

いつもの三倍は速い。

アルベイン流 奥義 第五天『韋駄天』

超高速移動で閃光のように移動。

デュラハンの後方に回り込む。

これで終わりだ!!

デュラハンの首を切り落とすべく、刀を振る。

ギインッ!!

デュラハンの背中に浮かぶ翠色の魔剣が受け止めた。

自動防御が『韋駄天』の速度についてくるのか!?

デュラハンの笑みが見える。

「スイフウ翠風、吹き飛ばせ。」

翠の魔剣から強烈な風が巻き起こり、吹き飛ばされる。

「ぐうっ……」

足を踏ん張り、地面を削りつつ止まる。

追撃するように、四本の浮遊する魔剣が一斉に襲いかかって来た。

アルベイン流 格闘術 五式 『剛体陣』

全身から体内エーテルを放射し、攻撃をはじく防御技だ。

「かあっ!!」

裂帛の気合いと共に体内エーテルが全身から吹き出し、4本の魔剣すべてを吹き飛ばす。

そして前進。今度は真正面から斬りかかる。

デュラハンも迎え撃つように仁王立ち。

激突。

刀と魔剣は強烈な火花を放つ。  
轟音と共に大気が弾け、周りの木を揺らす。  
鏢迫り合いに。

「ははは……楽しいな！『イヴの眷属』よ！！」

「うるさい……黙れよ。」

「くくく……これほど骨のある相手は久しぶりだ。本気が出せるといっのは素晴らしい。」

よほど上機嫌なのか、やたらとベラベラしゃべってきやがる。  
うぜえ野郎だ。

体内エーテルによって鋭敏になった知覚が、背後に気配を感じ取った。

先ほど吹き飛ばした4本の魔剣が戻って来たのだ。

「後ろばかりを気にしてはいかんな。唸れ、蒼雷<sup>そうらい</sup>」

デュラハンの手の中にある魔剣はいつの間にか赤から青に変わっている。

いつ持ちかえた！？

「なっ……ぐうううっ！？」

デュラハンの声に呼応するように、青い魔剣から雷撃が流れ出す。  
鏢ぜり合っている刀を通して、全身に雷撃が回り、痺れる。

こんなもの！！

余りある体内エーテルを身体機能回復にまわし、瞬時に痺れをとる。しかし、その一瞬の間に僕の手の刀は、デュラハンの魔剣に叩き落とされている。

前からはデュラハンが斬りかかり、後ろからは4本の魔剣が遠隔操剣術で襲いかかってくる。そして僕の手には刀がない。

知覚をフルに使い、デュラハンの魔剣をぎりぎり回避。そして、両手でチョコ特製の爆裂ダガーをコートの中から2本ずつ抜き出す。

ダガーに大量のエーテルを徹し、前後に投げる。

爆発。

前後ともに至近距離まで迫っていたが、躊躇せず爆発させた。後ろの魔剣たちは爆風にあおられ、見当違いのほうに。デュラハンは爆風をもろに受けた。

当然僕も爆風を受けた。

前後から。

「くっ……」

口から血が流れる。

爆発の衝撃が内臓を傷つけたようだ。

増加した体内エーテルを総動員して防御したが、ダメージは大きい。コートに守られてはいたが、体のそこかしこに火傷がある。

体内エーテルを用いて痛覚遮断と同時に治癒を開始。

爆煙の中からデュラハンが飛びだし、膝をついた。

デュラハンの着る黒い鎧は一部が破損し、赤いマントは破れている。

「っ……くくく、やってくれるな……まさか至近距離で爆発させるとは。だが、私よりも貴様のほうがダメージが大きんじゃないか？」

確かに。

前後から挟むように爆風を浴びた俺の方がダメージは大きいだろう。

「それがどうした？丁度いいハンデだ。」

「ふふ……そうか。」

デュラハンは立ち上がり、左手を突き出す。

すると飛び散っていた魔剣たちデュラハンのもとに集まる。

赤と翠の魔剣を手にとる。

二刀流か？

俺は落とした刀を拾い上げ、構える。

アルベイン流 奥義 第五天 『韋駄天』

高速接敵。

速さに惑わされることなるデュラハンは僕を見据える。

近距離での斬り合いが始まった。

いくつもの火花と轟音が鳴る。

暴風のようなデュラハンの二刀。

刀、拳、蹴り、とめまぐるしく攻撃方法を変化させ、対抗する。

ガチインッ！！

両者の武器がはじけ、小さな間隙が生まれる。

ここだ！！

アルベイン流 戦刀術 五ノ太刀 『桜花連刃』

無数の斬撃を繰り出す高速剣術。

普段なら同時に6発が限界だが今なら！！

合計20の斬撃が瞬時に生み出される。

だが、デュラハンにはひるむことなく、両手の魔剣で叩き落としていく。

さらに炎と風を同時に発生させ、炎をまとった風を作り反撃してきた。

バックステップで距離をとりつつ、刀を納刀。

炎風が眼前に迫る。

だが、焦りは全くない。それどころか……

「これにも対応するのか……。ははは……。おもしろいな。」

いつの間にか俺の顔は笑みでいっぱいだった。

ケタケタと笑ってしまっていた。

そのことに気づいても、もう笑いを止めようと思わない。

どっどん精神が高揚し、知覚速度が加速する。  
時が止まっているようだ。

居合の構え。腰を落とす。

アルベイン流 戦刀術 四ノ太刀 『斬鉄閃』

抜刀。

「うおらあっ!!!」

鞘から飛び出した刀が音速に近づき、ソニックブームが発生。  
炎風を断ち切る。

増大した体内エーテルが身体機能を果てしなく向上させる。

アルベイン流 格闘術 八式 『陽炎陣』

体内エーテルを分化して、質量を持つ分身を作る。  
今回は二つ作る。

昇華状態のため普段よりもずっとしつかりした分身だ。

合計三人の俺たちは、バラバラの方向から同時に攻めた。

デュラハンが魔剣を分散させて、同時に対応する。

いくつもの剣撃の音があたりに響き渡る。

分身はすぐに破壊された。  
当然だ。俺が遠隔から操作しているようなものだから、反応速度は本体とは段違いだ。

だが、今ならデュラハンの手元にある赤い魔剣以外、周りに魔剣は一つもない。  
好機だ！！

接近、そしてデュラハンから三步ほど手前で地面を踏み抜いた。  
飛び散った小石にエーテルを徹し、デュラハンの目の前で弾けさせる。

当然、この程度デュラハンのレベルなら気にも留めない。  
だが、それと同時に俺は刀を全力で振り下ろした  
全力でだ。体制が崩れるのもいとわず、全力で振り下ろした。

小石による牽制で少しばかり反応が遅れたデュラハンは、華麗な足捌きで回避。

ここだ！！かかったな！！

高速の斬撃が通りすぎた場所には、空気もエーテルも斬り裂かれ存在しない。  
その真空に近くなった断層に、自分の持つ体内エーテルのほとんどを込めた蹴りを叩きこむ。

すると、蹴りによって叩きこまれた体内エーテルと、真空の断層に吸い込まれる大気エーテルが巨大な渦を作り出した。

「な……にいい!？」

デュラハンの顔に驚きが浮かぶ。

アルベイン流 奥義 第三天 『螺旋翔破』

大気エーテルと体内エーテルを利用して、蹴り足を中心に巨大な渦の衝撃波を作り出す。

巨大な渦はデュラハンをやすやすと飲み込み、周りの木々を飲み込み、地面を削り、吹き飛ばした。

「はぁ・・・はぁ・・・やったか？」

地面には渦の通りすぎた傷跡が残り、土煙りで視界が悪い。

地面には3本の魔剣が落ちている。  
動き出す気配がない。

虚空に目を向ける。

「イヴ・・・いる？」

「いるよ。大丈夫？」

イヴが姿を現す。

「うん。昇華はまだ続く？」

「もう駄目。終わるよ。」

イヴの言葉を聞いたとたん、体をすさまじい倦怠感が襲った。  
そして眠気。

思わず地面に膝をつく。

「くそっ……セラ達を助けないといけないのに……!!」

刀を杖代わりになんとか立ち上がり、元の街道のほうに歩きだす。

「ユウっ!!うしろっ!!」

イヴの焦った声が聞こえた。

「え？」

背中にドンという軽い衝撃を感じ、そして……

僕の腹から黒い剣が生えた。

ノドの奥から何かが上がってくる。

「ごはっ……」

ビシャ

という音が鳴るほどの大量の血液。

ゾブツという音と共に黒い剣が引き抜かれた。

体がふらつく。

「う……あ……?」

何が?

後ろをゆっくりと振り向く。

デュラハン……

鎧のほとんどが吹き飛び、額からは大量の血を流し、顔が半分赤い。あれを避けたのか?

「危なかったぞ、あの攻撃。見事だ。だが、この魔剣の力を知らずに、あの特技を使ったのは失策だったな。この『黒影』は影の中を移動することを可能とする。」

影の中……?

なんだよそれ、反則だろ……そんなの。

「ユウ、逃げてっ!!早く、走って!!」

イヴが必死に叫ぶ。

無理だよ……

腹に空いた穴から自身の生命が流れ出て行っているのわかる。  
もう駄目だ……

「なかなか楽しめたぞ、『イヴの眷属』。だが、我が魔剣の技すべてを使い尽くすほどでは無かった。その程度ではこの先に道はない。私が引導を渡してやる。」

とどめをさすべく、デュラハンが黒い魔剣を振り上げる姿がゆっくり見える。

避ける……無理だ。

体が動かない。

嫌だ……死にたくない!!

死にたくない一心から、デュラハンから逃げようとする。

しかし、体は言うことを聞かず、体は前のめりに倒れていく。

後ろから空気を切り裂いて、黒い魔剣が迫る。

終わりだ……

ギインッ

金属音。

魔剣の衝撃はやってこなかった。

そして倒れかかっていた僕は、誰かに受け止められていた。

「まったく……魔剣使いの相手はやめろと言っただろ?」

久しぶりに聞く声だ。

ああ……なんてタイミングなんだ。

わざとじゃないかと疑ってしまっほど、かつこいいタイミング。  
思わず涙が出てしまいそうだ。

「ほらほら、もう寝ときな。あとは任せなさいよ。」

気の抜けるような緊張感一つない声。

しかし、僕は圧倒的な安心感と共に意識を閉じていく。

かつこよすきだぞ、おっさん……………

### 第43話：亡霊騎士団

ゴオッ！！

という音が鳴るほどの強烈な炎が、セラの目の前に現れた。そして、ローグの龍声ドラゴンウオイスとぶつかり合った。

炎がはじけ飛び、衝撃を相殺した。

一瞬、本当にユウが助けてくれたのだと思った。だが、違う……この炎は……

「誰だ……そこにいるのは……」

ローグの声が木々の間に響く。

林の奥からこちらに歩いてくる影がある。

誰なんだ？なぜ私を……えっ！？

見覚えがあった。

と言うより、知り合いだ。

奥から現れたのは、給仕服にヘッドドレスというメイド姿。そして炎のような赤毛。

ミス F・D・ガイエン

私が監禁生活を送っていた時の世話係だった人だ。

どうしてここに？

それに何でメイドの格好のままなんだ？

そーいえば、私はミリスのメイドの格好以外見たことがない。

「お久しぶりです。お嬢様。」

恭しく礼をする。

こんな時だというのに、いつものようにやたら丁寧なふるまい。相変わらずだ。

突然の再開に驚きを隠せない。

「君は確か……ガイエン先生の娘さんだったか……お久しぶりです。」

私同様驚いた様子のローグ言う。

ガイエン先生とは、私とローグの龍式拳殺術ドラゴニックアーツの師でありミリスの父  
ジヨフ F・D・ガイエンのことだ。

「ええ、お久しぶりです。ローグ様。バカな父がお世話になって  
おります。」

「バカな」の部分に力を入れて言った。

ジヨフは優秀な格闘家で、炎龍としては破格の強さを持つ。  
龍族内部での地位も高い。  
だがその性格は大雑把だ。

良く言えばユーモアのあるおじさん、悪く言えばバカ丸出しのエロ  
親父である。

真面目でいつも冷静なミリスとは、まるで正反対の性格だ。  
そのためミリスはジヨフの行動でよく怒っている。

それにしても、どうしていきなり現れたんだ？

「お嬢様、私は助けに参ったのです。」

「えっと、ありがとう……」

???

助けてくれたのはありがたいが、疑問の方が大きい。

「それは私と戦うということかな、ミリスさん？」

「そうなりますね。」

「あなたに戦う理由があるとは思えませんが……」

そうだ。私を助けることにミリスが得をすることなんてないはず。  
ミリスは私の世話係だったにすぎない。

「ガイエン家は、ライノス家に大きな恩があります。銀龍の政権争いにお嬢様が巻き込まれることを、先代ライノス家当主は望んでいなかった。それに、私は亡霊騎士団ファンタムナイツの一員です。あなたを倒すには十分理由があります。」

え……ミリスが亡霊騎士団!?

そーいえば、ミリスとジョフは戦争に参加したとか聞いたことがある。

それにしても銀龍の政権争いか……  
それで狙われていたわけか……。

ミリスの言葉にローグは構えた。

「わかりました、相手をしまししょう。ですが、いくらガイエン先生の御令嬢であつても私にかなうとは思えませんか？」

「ミリスは直立姿勢で動じた様子がない。

確かにその通りだ。

銀龍でもトツプクラスの实力を持つローグ。

ミリスは確かに強い。龍式拳殺術の使い手としては高レベル。

だが、ローグにはその上を行く龍式拳殺術と『アンチグロイイス対消滅』がある。  
分が悪い。

私も加勢すれば何とかなる！

そう思い立ち上がるうとするが、力が入らない。

まだローグに当てられた内部破壊技の余波が残っている。

「ミリス・・・私も」

「お嬢様はそこでじっとしててください。お任せを。」

だが・・・

ミリスは焦っている様子がまるでない。

「ローグ。私があなにかなわない分かっていきます。私ひとりならですが。」

！？

ローグがいきなり横っ飛びで動いた。

ドゴンッ！！

ローグが先ほどまでいた場所に巨大な影が落ちた。  
土煙が舞いあがる。

「くっそー！！今のを避けやがるとは、噂通りやるようだな！！」

影が大声を出した。

土煙がはれると、そこには三メートル近い狼男がいた。  
砂のような茶色い毛並みと、巨体。

だ、だれ？

「俺は砂狼族サンドウルフズ一の戦士、コウ シュラーだ！銀龍、俺が相手にな  
るぜえ！！」

砂狼族ウルフォンつて砂漠地帯にすんでいる人狼族だ。

ローグは一瞬驚いたようだがすぐに落ち着いた目になる。

「二人か……まあ、いいでしょう。」

「はっ……すかした面してられんのも、今のうちだぜ！！」

コウと名乗った人狼は、腰に着けていた袋を手に取り中身をぶちま  
けた。

中身は砂だ。

砂があたりに散らばる。

これに何の意味があるんだ？

「砂狼一族の秘伝、『砂の陣』を見せてやるよ!!」

その言葉と同時にコウはローグに向けて突進していく。

「それでは、お嬢様。私も行ってまいります。しばしお待ちを。」

「う、うん。気を付けてな・・・」

ミリスは頷き、メイド服をなびかせ、戦闘に参加しに行った。

~~~~~

アルは地面に押し倒されながらも、必死に策を練っていた。

（まずいな・・・なんとかしないと）

特務戦術部の兵は増援を合わせて、視界に入るだけでも10人いる。

ルーリアは負傷で、意識がない。

チコはアルと同じく兵士に取り押さえられている。

（こんな状態で何やってもおんなじか・・・ルーリアさんは大丈夫なのか？）

ルーリアはピクリとも動かない。

心配だ・・・

だが、なぜ殺さない？

俺とチコは拘束されているだけで、殺される気配がない。

兵士たちの会話を聞きとることができるとは、言語が大陸標準語であるフェイタル語ではない。

できるだけ声量を落として、隣に転がっているチコに話しかける。

「ちびっ子、大丈夫か？」

「はい、私は……でも、ルーリアさんが……」

「あの傷なら、死にはしないはずだけど……」

「黙っている。」

ドスの利いた声が入り込んで来た。

近くにいた兵士がこちらを見下ろしている。

兜で顔が見えず、表情が分からないので余計に怖い。

「ちびっ子、殺されはしないみたいだから、じっとしてろ。」

「その通り。じっとしてて。」

え！？

今の誰の声だ！？

「アルさん、今何か言いました？」

チコも目を白黒させて、僕のほうを見る。

当然俺の声じゃない。女性の声だ。

周りを見渡すが、兵士たち以外見えない。しかし、兵士たちが警戒しだす様子もない。

「あなた達にしか聞こえないようにしてる。動かないで。いい？」

言葉が途切れた瞬間、数人の兵士が一気に倒れた。

兵士の首筋には、珍しい形の刃物が食い込んでいる。

何が起こった！？

「*****！！」

アルの目の前に立っていた兵士が謎の言語で周りに何か言っている。その背後に、上から影が落ちてきた。

そして、兵士の首をかき切った。

鮮血が吹き、兵士は崩れ落ちるように倒れた。

そこには、肌の露出の多い独特な雰囲気^{ウルフオン}の服装をした少女が立っていた。

短めの黒髪とかわいらしい顔立ち、そして頭部には大きな耳、ふさふさのしっぽが揺れている。
人狼族だ。かなり若く見える。

手にはユウが持つ刀とよく似た武器を持っている。

「……まさか、ヤマトの忍びです？」

「な、なんだそれ？」

チコの言葉に少女がコクコク頷く。
かるうじて聞き取れる小さな声で話す。

「そう。しばらくじっとしてて。掃討する。」

少女は走って、戦闘に入った。

いつの間にか、黒い装束の人物が何人も現れて、戦闘を開始している。
不意打ちで襲いかかったからなのか、ほとんどの兵士は倒されている。

「なあ、忍びって？」

「ヤマトの国のスパイとか暗殺を受け持つ職業です。」

なるほど、隠密部隊ってわけか。

それで特務戦術部の兵士に気づかれずに近づけたのか。

ものの数分でほぼ殲滅、敵は撤退を始めている。

アルとチコは立ち上がり、周りの惨状を見て啞然としてしまった。
た。

先ほどに少女がこちらにやって来た。

「あなたが連絡にあった異界人の仲間？」

「あ、ああ……それより、ルーリアさんの手当てを……」

「ん。分かってる。」

少女の指示で黒装束の一人が治癒大氣術をルーリアに施す。

「あんた達は……?」

「ファントムナイト亡靈騎士団所属の犬上いぬがみレン。よろしく」

少女はニコリともせず、自己紹介をした。
なんかとっつきにくい子だな……

「そ、そうだ!!ユウさんと、セラさんは無事なんですか?」

チコが少女に詰め寄る。

「平気。どちらも腕利きが迎えに行つた。」

~~~~~

『イヴの眷属』を仕留めるべく振り下ろした魔剣を、突然割り込んできた男の持つ剣に受け止められた。

男は、不精髭にぼさぼさの白髪混じりの髪。

ダボダボで古びた旅人用の服装をしており、浮浪者だと言われれば納得してしまうような風体だ。

デュラハン ノルドラは、驚かされた。

単純に自分の攻撃が受け止められたこと、そして助けに入った男の顔が上官の顔にそっくりだったこと。

そして何より、いつ現れたのか分からなかったことに驚かされた。

(こいついつの間になんか……それに今、目の前にいるのにもか  
かわらずこの違和感は何なんだ?)

まるで目の前にいるが、いないようにも見える。  
うまく認識できない。

「貴様……『技喰らい』の竜宮 凶一郎だな。」

「んお？初対面のはずだが？」

「貴様の顔は、私の上官の竜宮 天次郎によく似ている。」

「あー、なるほど。でも俺の方が天ちゃんよりも男前だね!!」

噂ではもつと冷血な人間ときいたが……  
予想外だ。

そこで一瞬、凶一郎を見失った。

「なにっ!?!」

気づいた時には、数メートル離れて位置に『イヴの眷属』を寝かせ  
ている。

まただ……移動していることは分かったが、認識できなかった。

どういう技法だ？

凶一郎は上空を見上げ、声をあげる。

「おい！！ノーラ、こいつの治癒を頼む！！」

「はいはい！！」

上空から声が帰って来た。

バサツバサツという大きな羽の音。

美しい金髪と白い羽を持つ有翼人<sup>エンジェル</sup>の女性だ。

だが、有翼人は共和国固有の種族でほとんど国外に出てこないはずだ。

なぜこんなところにいる？

有翼人の女性は『イヴの眷属』の傷を調べて、素っ頓狂な声をあげた。

「うひゃあ！？こ、これは重傷ですよ！！」

「わかってる。とにかく傷を塞いでくれ。死にはしないさ。」

「わかりました。やってみます」

そして凶一郎がこちらを向いた。

「さて・・・悪いね、待たせた。こんな奴でも一応弟子だね。

弟子をここまでフルボッコにされちゃあ、師匠としては黙ってすま

せるわけにはいかないんでね。相手してもらっぞ。」

「望むところだ。貴様らを逃すつもりはない。」

バラバラになっている魔剣を呼び戻す。

四本の魔剣が瞬時に集まり、背中に回り込む。

そして、手に持っている『黒影』と『炎蛇』に入れ替える。

黒い魔剣と赤い魔剣が瞬時に入れ替わる。

これがこの『五連魔剣』の特性だ。

どの魔剣もお互いに繋がっているため、意識するだけで魔剣を入れ替えることができる。

凶一郎は構える様子すらない。剣を肩に担ぐようにして立っている。

その姿にはまったく覇気を感じられない。

念のため忠告しておく。

「本気で来い。」

「当然。フルボッコにしてやるよ。」

そう言った瞬間、すさまじい速度で凶一郎が動いた。

一瞬見失うほどの速さ。

おそらく先ほどの戦闘で『イヴの眷属』が使った高速移動術だろう。だが、技のキレが違う。

側面からの突き。

（だが、防げないほどの速度ではない！！）

先ほどのような、認識できない特別な技法ではない。  
防ぐことは可能だ。

背中で浮かんでいた魔剣の一本で受け止める。  
そして残りの三本で凶一郎の剣をねじるように抑え込む。

武器破壊 『連天破碎』

剣はねじ切られ、バラバラに砕け散った。

「おつとつと・・・」

凶一郎は躊躇なく剣を手放していた。

そして、さらに間合いを縮め、格闘の間合いに。

凶一郎の右手には、いつの間にか巨大なエーテル塊が現れている。  
とっさに手に持っていた魔剣を、凶一郎の右手と体の間に入れる。

ドンッ！！

弾かれて、後ろに飛ぶ。

だが、もろに食らうことにはならなかった。

( 奴の剣は破壊した・・・格闘主体の接近戦で来るだろうな )

魔剣を『蒼雷』に持ちかえ、接近戦に備える。

凶一郎は追撃はせず、その場に止まっている。  
その手にはなぜか・・・

!?

「な、どういうことだ……なぜ貴様が、私の魔剣を!？」

凶一郎の手には、デュラハンの翠の魔剣『翠風』スイフウが握られている。魔剣は持ち主以外の者に触れられれば拒絶される。

そもそも、私の魔剣には私のエーテルが込められている。扱うことはできないはずだ。

『翠風』を戻るように意識を集中させるが、まったく反応がない。どういうことだ!？

凶一郎はあざけるように笑う。

「なんだ？魔剣を操るのが自分にしかできないとも思っていたのか？」

「バカな!？私のエーテルを押しつけ、さらに剣に宿る精霊を支配したのか!？そんなことできるはずが……」

まさか……『喰われた』のか？私の技が？

「ごちそうさま」

ニヤリと凶一郎が笑った。

「くっ!！」

残りの魔剣『蒼雷』、『炎蛇』を両手に持つ。

蒼魔剣技 『電刃』

『蒼雷』を振り雷撃をまとったエーテル衝撃波を撃ち出す。  
続けて、

赤魔剣技 『炎功弾』

炎の弾丸を『炎蛇』の剣先から撃ちだす。

凶一郎は翠の魔剣を振り風の壁を作り出し、受け止める。

爆音。

煙が上がり、視界が遮られる。

その煙をぶち抜くように凶一郎が現れた。

『翠風』を体をねじるようにして大きく振りかぶる。

(魔剣を返してもらおうぞ!!!)

二本の魔剣で交差するように受け止め、接触点からエーテルを徹す。  
『翠風』の制御を奪つ。

そこで違和感を感じた。凶一郎の気配が薄いような気がする。  
まさかこれは!?

「バカめ。それは囷だ」

後ろから声がした。

目の前にいた凶一郎は薄緑色のエーテルを残し、消え去った。

やはり分身か！！

背中に浮かぶ魔剣たちが反応。

凶一郎を切り刻もうと回転する。

しかし、凶一郎は魔剣たちの一撃を難なくかいくぐり、接近。こちらが防御する暇もなく、脇腹辺りに拳が突き刺さった。

「ぐぐあっ！？」

その一撃は筋肉の鎧をもとせせず、衝撃を体内に伝えた。

枯れ木を折るような音と共にあばら骨が数本砕け、血をはき出す。

凶一郎はすぐに距離をとる。

「急所は外しておいた。すぐに治療すれば助かるぜ。」

「ぐふっ……なぜ……」

何故そんな真似を？

「俺の弟子がリベンジを望むと思ってな。あんたは殺さない。」

くっ……完敗だ。手加減された……おそらく半分ほど力を出していないだろう。

屈辱を感じながら、デュラハンは後退する。

内臓の損傷は体内エーテルを操作して、血液の流れを制御して応急処置。

これで何とか持つはずだ……

噂の『技喰らい』は、想像以上だった。

だが、今回は万全ではなかった。

『イヴの眷属』との戦闘での疲労とダメージがあった。

「次だ。次会った時には!!」

「次はない。次あんたと戦うのは、うちの弟子だ。忘れるな」

その言葉を背中に聞きつつ、デュラハンは足早に撤退を開始した。飛空艇まで戻れば、治癒が可能だ。

デュラハンの頭の中では、標的はすでに『イヴの眷属』から竜宮凶一郎に切り替わっていた。

また、会えるはずだ。また心躍る戦いをする事ができる！  
負けた屈辱を大きく上回る期待感があふれていた。

「くつくつく・・・ああ、楽しみだ!!」

デュラハンは飛空艇へと向かう。

## 第44話：合流

林の中、ふだん静かな場所だが今は違う。  
打撃音と爆発音があたりに響く。

セラは、ミリスとコウ対ローグの戦闘を離れた位置から見ていた。

『燃え上がれ！』

ミリスは龍声ドリンゴンヴォイスで強烈な炎を生み出す。

『火は起きず』

しかし、炎は始めから存在しなかったかのようにかき消えた。

ローグの対消滅だ。アンチウオイス

ローグは龍式拳殺術ドラゴンツクアーツで反撃すべく走る。

それを砂狼族サンドウルフズのコウが迎撃する。

「こいやあっ！！」

コウの丸太のような腕がしなり、かぎ爪がつなる。

ローグはわずかに体を落とし、移動速度を速めることで爪の一撃を回避。そしてコウの巨体の下にもぐりこんだ。

コウは人狼化しているため、体が大きくなっている。  
そこは死角だ。

下から拳で顎を打ち上げる。

ゴスツッ！！

鈍い音。

しかし、コウは顎が上に上がることもなく、平然としている。

ローグの拳はコウの顎下で止まっている。

(なに！？どーなってるんだ？ローグの一撃をくらって平然としているなんて、どんな頑丈さだ！？)

セラは驚かされた。

そしてコウの周りには砂が舞っていることに気づいた。

「くっ……これが『砂の陣』というものか……」

ローグの拳は砂の壁に阻まれている。

砂にはエーテルが徹されているのだろう。

「どうよ？俺の砂は武器にも防具にもなるんだよ！さあ、今度はこっちから行くぜ！！」

砂がコウの拳にまとわりつき、拳を強化。

ローグの体を下からすくうように殴る。

ローグは衝撃を殺すために、自分から跳びあがりつつ防御。

跳び上がった先の空中には、ミリスが待ち構えていた。

「よいタイミングですね。」

ミリスの右足が鞭のようにしなる。

「ぐっ!!」

直撃。

ローグは地面に突き刺さるように落ちた。

ちゃんと受け身をとって着地してる。

だが、そこをコウが追撃する。

コウの周りに砂でできた針が何十本も現れる。

「いくぞっ!!かあっ!!」

コウの口から圧縮された呼気が吐き出された。  
針が吹き飛び、ローグを襲う。

ドドドドッ!!

爆煙が上がる。

空中からミリスも加勢する。

『炎弾よ』

龍声によって無数の炎の弾丸が生成され、爆煙の上がる地点に殺到する。

『吹き飛ばす』

ボツ！！

強力な衝撃波が周囲に走り、砂と炎のすべてを吹き飛ばした。あたりの木々もなぎ倒す。

離れていたセラもバランスを崩すほどの衝撃を感じた。

「やっってくれるな……だが、ここまでだ」

ローグは衝撃波で深くえぐれた地面の中心点に立っている。

服が破れていたり、少し焦げていたりとさすがに少しダメージを負っているようだ。

ローグが再び戦闘に入るべく、腰を落とす。

その瞬間、頭上に赤い光が輝いた。

信号弾か？

「ちつ……」

それを見たローグはすぐさま反転、林の中に入って行った。撤退したのか？

あまりに潔い撤退の仕方だったので、ミスもコウも追う体制に入る前に逃げられた。

「んん？随分あっさり逃げやがったな……まあ、いいか。今回の仕事は救援だったしな！！」

「そうですね。」

二人はそのままローグを見送った。  
セラの方にやってくる。

三メートル近い狼男は歩きながら、徐々に人の姿に戻って行った。  
砂色の短髪にいかつい顔、筋骨隆々の体。人狼化していたため上半  
身は裸で、ズボンが膝辺りまで破れている。  
たしかコウって名乗ってたかな？

「よう！！あなたは大丈夫だったか？・・・ん？この匂い・・・  
・・・あんたも銀龍か？」

見た目通り快活な大声で話しかけられた。

「はい、そうですけど・・・えと・・・匂いですか？」

匂いで何かわかるんだろうか？

「コウ。女性に対して匂いなんて、相変わらずの変態っぷりです  
ね。お嬢様が戸惑っていますので、やめてください」

ミリスがコウを叱るように言う。

「ああっ！？なんだよそれ！俺は変態じゃねえ！！鼻が良いんだ  
から仕方ねえだろ！！」

ミリスとコウのやり取りは気心の知れた仲のように見える。  
そういえばミリスがこんな軽口を言うのを見るのは初めてだ。

「お嬢様、立てますか？」

「ああ……ありがとう、助かった。コウさんもありがとう  
ございます。」

「ん？おお！いいってことよ！！」

「お嬢様、こんな獣に礼は必要ありませんよ。」

コウはぶつぶつと文句を言っているがミリスは完全に無視してセラ  
に肩を貸す。  
立ち上がり、歩きだして思いついた。

「そうだ！ミリス、ユウ達……私の仲間はどうなってるんだ  
！？」

「ご安心を。亡霊騎士団の他のメンバーが向かっています。すで  
に集合地点に向かっているはずですよ」

そうか……みんな無事だといいけど……

~~~~~

ミリスが集合地点と言っていた場所には中型の飛空艇が着陸してい
た。

飛空艇の周りには人影がある。

黒い装束の集団、そしてアル、チコだ。
それから……

「ルーリア!？」

思わず叫んでしまった。

地面に座っているルーリアの姿は、痛々しかった
包帯を体中にまかれ、着ていた鎧は見る影もなく砕かれている。

「セラ!?良かった・・・無事でしたのね」

「いや、私よりもルーリアのほうが重傷だろうが!!平気なのか
?」

「ええ。不覚をとってしまいました」

がくりとうなだれた。

「そんなことないです!!ルーリアさんはすごいがんばってま
した!!」

チコがルーリアをフォローする。

「だいたい敵の数が多すぎたんだ。仕方なかったって」

同じくアルもフォロー。

「後はユウさんだけですな!!」

ユウだけまだ来ていない。

少し心配だ。

「それにしてもレン。共和国は大丈夫なんですの?」

ルーリアが軽装の少女に話しかけた。
頭部に大きな獣耳が見えるので、おそらく人狼族だろう。

「うん。捕らえられていた『牙王』を救助したから後は大丈夫だ
って、凶一郎が言ってた。」

「そうですね。あの人がいれば、まあ安心ですわね」

それから自己紹介などをしてユウの到着を待つ。

どうやらユウを迎えに行った人は、ユウの話にたまに出てくる先生
なんだそうだ。

~~~~~

「迎えに行こうか……」

「お嬢様はじつとしていてください。けが人なんですから」

なかなか帰ってこないのでセラは思わずそうつぶやいてしまった。  
当然止められる。

ケガ人と言っても先ほど治癒大気術を施され、さほど痛みはない。

ほどなくして林の奥から二人の人影が現れた。

一人は大きな羽を持つ美しい金髪の女性。手には詠唱杖キャストスタッフを持って  
いる。

もう一人は中年の男性。背中に誰か背負っている。

背負っているのは……!?

「ユウっ!？」

思わず走り出してしまった。

近づいてみると、ユウはぐったりとしており、顔が異常なほど白い。

そんなまさか……

顔に触れてみるとすごく冷たい。

セラの頭の中に父の死の間際の顔が思い起こされた。  
あの時のような白く、血のけない顔。

「落ち着いてください。大丈夫ですよ」

肩をぽんと叩かれ、我に返った。

エンジェル  
有翼人女性が立っていた。

「で、でも、こんなに冷たいなんて……本当に大丈夫なんですか？」

「安心しな、お嬢さん。異人<sup>人</sup>つてのは首を切り落とされたりで  
もされない限り、死なないんだよ。」

ユウを背負う中年男性が言った。

この人がユウの先生なのか？

「死なないって言っても、こんな状態……」

心配だ。

「この方の今の状態は仮死状態に近いんですう」

「カシ状態？」

「はい。普通の人なら大量の失血と体内エーテルの枯渇で死んでいてもおかしくない状態けどー、この方は自ら仮死状態になることで代謝を抑え、回復に専念しているようですよー」

やたら間延びした声で有翼人の女性が説明してくれた。  
いまいち意味が分からない。

「ま、ほつとけば目を覚ますってことさ。こんな美人が心配してくれるなんて、こいつも幸せもんだなーあーうらやまし」

ユウの話通り変わった人のようだ。

これで全員そろった。

ユウが心配の状況だが、助かった。

私たちは飛空艇に乗せてもらい、ザガルバフに向かうこととなった。

## 第45話：セラの日記（3）

6月2日

亡霊騎士団の人たちに救出されて2日。

現在は飛空艇に乗せてもらい、砂漠を越えている。

船内は比較的涼しいが、外は暑い。

砂漠というものは知識として知っていたが、実際に体験するととても辛い。

徒歩で歩くことにならなくて良かった。

ユウはいまだに死んだように眠り続けている。

今日も様子を見に行ってみる。

ドアをノック。

「はーい。どーぞー」

部屋の中から間延びした声が聞こえる。

ドアを開け部屋の中へ。

部屋には小さなテーブルとイス、そしてベッドがある。

ベッドにはユウが寝ており、イスには白く美しい羽を背中に持つ女性が座って本を読んでいる。

「おはよーセラちゃん。」

「おはようございますノーラさん」

背に白い羽、金髪、いつも優しげな笑顔をしている有翼人。エンジェル

それがノーラ ローランという女性だ。

優秀な詠唱師キャスターであり、空戦においても無類の強さを発揮するそうだ。

ルーリアに、

「あの人と空中戦をして、一度として後ろを取れたことがありません」

と言わせるほどだ。

見た目と違って、かなりの腕なだろう。

「ユウはどうですか？」

「んー、だいぶマシになって来たよ。心拍数も上がって来たし、肌も血色がよくなってきたみたい。」

「そうですか……」

よかった。

一時はどうなることかと……  
腹に大きな穴をあけられて、この程度ですんでいるのは幸運なのか  
もしれないが。

よくよく考えてみると、ここ最近ユウは良く怪我をしている。  
前回の魔物との戦闘でも倒れたんだっとな。

ユウに近づき、頬に触れる。

冷たい。だが、少し暖かさが戻ってきている。  
しばらくその寝顔を見つめる。

「心配？」

「そりゃあまあ・・・心配ですよ。こつ頻繁にこんな大けがをす  
ると」

「ふーん・・・あのさー、セラちゃんはユウ君の恋人なのー？」

いきなりそんな言葉が飛んできた。

振り向くとニコニコ笑うノーラさん。  
とつさに否定する。

「は？・・・いえ、違います!！」

「あら、違うの？」

「違いますよ!!--どうしてそういうことになるんですか!?!？」

「だって、いい雰囲気だしてたし・・・ルーリアちゃんの話  
を聞くと、そーなのかなーと思って」

ルーリア・・・いったい何を話した?  
後で聞いてやらなければ!!--

「でも、好きなんですよ？」

「な、なんでそんな話になるんですか!?!？」

「だってー、最近こつこついう色っぽい話が周りになくて、飢えてるんだよ〜」

知りませんよ……

このままこの話を突っ込まれるといろいろ大変なことになりそうなので逃げよう。

「私、用があったのでもう行きます！ユウのことよろしくお願ひしますじゃあ！！」

早口にそう言っつて部屋を出る。

「あー、ずるいーまた今度聞かせてねー」

ドアを出て、閉まるまでの間にノーラがそう言った。  
私はあの人苦手だな……

~~~~~

6月3日

船内の一室。女性陣が寝泊まりしている部屋。

昨日と同じくユウの様子を見て、部屋に帰ってくると珍しい組み合わせの二人がいた。

チコと人狼族ウルフォンの忍びである犬上いぬがみ レンだ。

レンは短めの黒髪に、頭部に大きな犬耳、お尻にフサフサのしっぽ

を持つ小柄な少女だ。
ヤマトの出身で、『忍者』という暗殺などの隠密行動を主とする職
業らしい。

二人はテーブルをはさんでイスの座っている。
テーブルの上には、武器類が数多く並べられている。
どれも見慣れないものばかりだ。

「あ！セラさん、お帰りです。ユウさんはどうでした？」

「うん。順調に回復してるみたいだ」

「そうですか！！よかったです！！」

チコは飛び上がって喜んでいる。

それにしてもチコは何してるんだ？

「それはですね、レンさんにヤマトの武器についていろいろ聞いて
いたんです」

レンはコクコクと頷く。

そういえば私はこの人と話したことがない。

「そうか……ヤマトの武器は変わっているのが多いな。これ
はなんだ？」

手のひらサイズの十字の形の金属を手にとる。

「手裏剣と言うそうです。投擲武器です」

「これを投げるのか？」

「はい。回転することで殺傷能力を高め、投擲時の軌道を安定させます」

「ふーん……これうまく飛ぶのか？」

私がそう言うと、レンが手裏剣を手に取り壁に向かって投げた。

ストトトトト

という音をたてて、横一列に綺麗に10の手裏剣が突き刺さった。一度しか投げたように見えなかったが、いつの間にか10本も投げられている。

「おおー！！すごいです、レンさん！！」

「すごいな……こんな一瞬で10本も正確に投げるなんて」

「別に、普通」

レンはまったくの無表情だが、お尻にあるしっぽはパタパタ振られている。

喜んでるのか？

顔には出ていないが、割と感情豊かなのかもしれない。

その後もチコは連に質問しまくっていた。

レンは嫌な顔を見せず、それにつきあっていた。

何となく微笑ましく思いながらその姿を眺めた。

~~~~~

6月4日

砂漠を越え、ザガルバフに到着した。  
大きな山のふもとにある鉱山都市。

いくつもある煙突から煙が出ており、ゴンゴンという音が鳴り響いている。

帝国随一のエレメント鉱石産出量を持ち、自治都市として砂漠狼が統治している。  
サンドウルブズ

エレメント鉱石はエーテルを用いる武装を製造する上で必要となる金属だ。  
戦争をするためには大量に必要となる。

そのため10年前の帝国によるザガルバフの襲撃は、前大戦の引き金になったそうだ。

着いてすぐにザガルバフの中心部にある塔のように背の高い建物に通された。

この建物は『首領塔』というらしい。

エレベーター  
浮力床に乗って『首領塔』の最上階へ。

亡霊騎士団の面々と共にザガルバフの首領・ドンフォイス シュラーと

人物に謁見をするそうだ。

建物の最上階の部屋。部屋の中には壮年の男性がいる。礼をして、全員が入室した。

「よく帰った。共和国の方はどうだった？」

しゃがれているが良く通る声でドン・フォイスが言った。

「ああ。『牙王』の救出は成功したぜ」

気安い感じでコウが答える。

そういえば、コウさんもシユラーというファミリーネームだったはずだ。

親子なのか？

「ふむ……それにしてもずいぶん早い帰りだな。何かあったのかな、ミリス君」

「それはだな！」

「コウっ！！お前は黙っている、私はミリス君に聞いているんだ！バカ息子が失礼した」

一喝されて、コウさんは大きな体を込ませてシユンとしてうなだれている。

やっぱり、親子か。

ミリスが前に出る。

相も変わらずメイド姿のまま。

「はい。『牙王』様の救出に成功した現状では共和国よりも、竜宮天次郎が目撃されている帝国の方が危険性は高いと判断しました。そして……」

「あー、そつからは俺が」

凶一郎さんがミリスを止める。

ドン・フォイスが嫌そうに顔をゆがめる。

「貴様が……竜宮凶一郎。なぜお前がここにいる？」

「まあ、それは気にしないで。今回の帰還は俺の意志だ」

どうやら、ドン・フォイスは凶一郎さんを良く思っていないようだ。言葉の端々に敵意が見える。

「どづいつことだ？」

「今回の『イヴの眷属』は俺の弟子だね。ちょっと心配になって急いで帰って来た」

「なにに！？そんな話は聞いていないぞー！」

「まあ、今はじめて言ったからな」

「なぜ黙っていた！」

「もう巻き込むのはごめんだと思ったからさ。あんただって思うだろ？」

ドン・フォイスは黙りこんだ。  
やはり仲は悪いようだ。

それにしても『イヴの眷属』というのはユウのことだろう。  
今回、とはどういうことだろう？  
やはり私には知らないことが多いようだ。

それから現状報告をミリスが行い、解散となった。

~~~~~

6月5日

昨日はドン・フォイスに用意してもらった部屋でぐっすり眠ることができた。

今日はルーリアと昼食を一緒に食べる。

『首領塔』の食堂。

ルーリアと共にテーブルにつく。

メニューは肉っぽい物が多い。味はなかなかだ。

「あ、そうだルーリア。昨日のことで、聞きたいことがあるんだ
が」

「ええ、いいですよ。何です？」

いまだに前回の戦闘の怪我が治りきっていないようで、ルーリアの腕には包帯が巻いてある。

「昨日のドン・フォイスへの報告の時、『牙王』を救出したって言っただけど、誰のこと？」

「『牙王』というのは通称で、本名はグラトン ブルクという共和国の狼將軍です。」

「狼將軍？」

「ええ。一兵卒から將軍まで上り詰めた人狼族ウルフォンの英雄です。帝国側からは『牙王』と呼ばれています。亡霊騎士団の初期メンバーで、頼りになる方です。」

共和国の人か。

亡霊騎士団のメンバーは底が知れないな……

「助けだしたってことは捕まっていたのか？」

「ええ。共和国でも帝国と同じように開戦派が力を持ち、非戦派であったグラトン將軍は拘束されていたんです。それを凶一郎さん達が救助に行ったということですよ」

なるほど。

共和国でも帝国と同じようなことが起こっているのか……
偶然……じゃあないよな

それにしても、

「ミスが亡霊騎士団のメンバーだつてことには驚いたな……」

ミス F・D・ガイエン

かつての私の世話係の炎龍。

まさか、ミスまで国を出ているとは思わなかった。

「ミスというと……あの赤毛でメイド服の？」

「ん？ルーリアは面識がないのか？」

「ええ。亡霊騎士団に龍族の方がいるなんて初耳でしたわ。驚きました。しかもセラの世話係だった人だなんて……世間は狭いですわねー」

それは同感だ。

~~~~~

食事を終え、紅茶を飲みゆっくりしていると

「ルーーーーーリーーーーアーーーーー!!」

と、大きな声を出しながら食堂に誰かが飛び込んできた。さらさらの金髪に上等そうな服を着た青年だ。ルーリアのほうを見ると、頭を抱えてため息をついている。

青年はルーリアを見つけると、すぐさま近づいてきた。

「久しぶりだね、マイハニー！！怪我をしたらしいじゃないか！  
！心配したよっ！！！」

「殿下……あなたは狙われている身であることを理解して  
いるんですか？目立つ行動は控えてください」

「殿下なんてそんな他人行儀な！！いつもみたいにラー君と呼ん  
でいいんだよ！！！」

私の第一印象は、何だこいつ、だ。  
異様なテンションに若干引いてしまう。  
ルーリアの知り合い？

「殿下をそう呼んでいたのは子供の時だけです！！少しは静かに  
してください。」

そこでゴホンと咳払いをして、

「セラ、ご紹介します。以前話した、現在絶賛逃亡中の帝国皇太  
子ラブリフ R<sup>ロイ</sup> シグルド殿下ですわ」

この人が皇太子！？  
もっと落ち着きのあるのを想像していたが……  
どうすればいいんだ？

形式通り膝について礼をした方がいいんだろうか？

私が戸惑っていると、ラブリフ殿下はこちらを見た。

「やあー！はじめまして、セラさんと言つのかい。僕はラブプリフ。気軽にラー君、またはラー様でもいいよ」

「はあ……」

今思い出したが、ルーリアが前に皇太子はアルに似ていると言っていた。

なんとなく覚えがある光景だ。

仮にも相手は皇太子。ぶん殴るわけにもいかない。

「君が良ければ僕の嫁にガバラッ！！」

後半の言語の乱れは、ルーリアの右拳が顔面に突き刺さったためだ。

「相変わらずですね、殿下。しかしこの子に手を出したらわたくしがタダじゃ置きませんよ。わたくしの大切な従姉妹ですので」

ラブプリフ殿下は殴られて顔を腫らしているが全く微動だにせず、会話を続ける。

「なんだって！？どおりで美しいはずだ！！ぜひとも僕の……  
・ルーリア、その拳は何だい？」

怖い笑みを浮かべてルーリアが拳を振りかぶっている。

「次は手加減しませんわよ」

「はっはっはっは！！冗談だよ、ルーリア。なんだい、嫉妬しているのかい？安心していいよ。僕のハニーは君だけさー！！」

アルよりも打たれ強い分、たちが悪いな……

隣からは肉を殴打する音が何度も響いている。

怒ってるなー、ルーリア。

こうして帝国皇太子との騒がしい出会いを果たした。

## 第46話：目覚め

「シヨボーン・・・・・・・・」

「ユーウ、そろそろ立ち直ったらー？」

「ズーン・・・・・・・・」

「はぁ・・・・・・・・そんなにシヨックなの？」

精神世界の白い空間。

僕は白い空間に座りこんでいじけている。

イヴが僕の隣にいる。

「そりゃあまあ・・・・・・・・あんなにおもつきり負けるとは思わなかったしなー」

「仕方ないよ。状況が悪かったし、相手が強すぎたね」

まあ、確かに。

おっさんを抜けば、あそこまで強い相手に出会ったのは初めてだ。

セラ達のが気にになって勝負を急ぎすぎたし、技量の差は歴然だった。

経験もおそらくデュラハンの方がずっとあっただろう。

「まあ、落ち込んでても仕方ない。次はどうにかするー!!」

「そうそう！その意気！！へこたれたらだめよー。それに、ユウの体はバージョンアップされてるから次はもっと楽になるよ」

ん？

バージョンアップ？

「ユウの体は『昇華』<sup>フイスト</sup>をすればするほどユウの体内エーテル『異界』<sup>ワールド</sup>に適応していくんだよ」

それでバージョンアップってことか。

そういえば、初めて『昇華』を使った頃ぐらいからエーテル出力が上がった気がしてたけどそういうことか……

「さあさあ、ユウ。起きて、次に備えなさい。今回は助かったけど、次はうまくいくか分からないんだから。」

おっしやる通り。

じゃあ起きるぞ！！

~~~~~

目を開けると、扇風機のようなものが見えた。

天井に空調用のファンが見える。

右側に視界を移動させると、窓からさんさんと輝く太陽が見える。

暑いな……

「んっ……」

起き上がると、左側のベッドの横にある椅子に誰かがいた。

「……いたのか」

「……おっさんはそんなに存在感がないかね？」

しょんぼりした様子のおっさんがそこにいた。

約二か月ぶりか？

久しぶりにみたが、相変わらずのうさんくさい中年おやじっぶりだ。

「体はどうよ？」

「ん？なんか倒れる前より快調な気がする」

イヴの言ってたバージョンアップかな？

体の調子がいい。

「どれぐらい寝てた？」

「結構。だいたい一週間ぐらいか……まあ、無事で何よりだ」

「うん……あっ！うちの仲間は無事か？」

「ああ。亡霊騎士団が救助した。安心しろ」

「そうか……よかった……」

ホッとした。

そしてしばらくの間、沈黙が続く。

「なあ、おっさん。なんで勝手に出て行ったんだよ？」

ずっと聞きたかったことだ。

「んんんんんん。この戦いにお前は関わるべきじゃないと思ったからさ」

渋い顔をしておっさんが言った。

「この戦い・・・？」

「そう。俺と天次郎の兄弟喧嘩にだ」

兄弟喧嘩って・・・

まあ、敵の総大将がおっさんの弟らしいから、そう言えなくもない。それなら事情を話して、一緒に連れて行ってくれればよかったのに・・・

「怒るなよー。カスロアは中立だから大丈夫だと思ったんだけどなー。ユウラの奴に乗せられて、こんなとこまでノコノコと・・・お前はあの村でなにも知らず生きていくことが幸せだったろうに。」

少し不満そうな顔をして言った。

おっさんがそんな顔してもキモイだけだぞー

「別に乗せられたわけじゃないけどな。戦争を止めるって言うから協力しようと思ったただだよ」

「どうしてそこまでする？お前にとってこの世界は、異郷の地だ。戦争なんかにかかわる必要がないだろう？」

「まあそうなんだけどね……この世界のこととは結構気に入ってるし、大切な人たちがいる。それが理由じゃダメかな？」

おっさんは黙りこんだ。

そしてため息をつく。

「はあ……お前もあいつと同じこと言っただな……」

何か言ったようだが、僕には聞き取れなかった。

「ん？何か言った？」

「いや！そういうえばお前、あそこまでの相手と戦ったのは初めてか？」

強引に話題を変えて来たな……
なんだ、急に？

相手と言うのは先日のデュラハンのことだろう。

「まあね。惨敗だった」

「敗因は何だと思う？」

敗因か……やっぱり勝負を急ぎすぎたことかな？

「バーカ。もっと他にもあるだろ」

イラッ

久しぶりにこのくそオヤジにバカにされたな

「他か……技量とか、経験とか？」

「そんなもん当たり前だろ。お前が逃げられない状況を作り、なおかつ精神的に追い込むことで有利な立場にたつ。ここまでされたら戦闘経験の浅いお前じゃ敵わんのは、当たり前だ。それじゃなくて他にあるだろー」

相変わらずムカツク物言いだ。

それにしても、何だろ？

「お前、体内エーテルが増幅するとかいう『昇華』^{フイスト}ってやつを使つたろ？」

「うん。使ったけど……それがどうしたの？」

昇華^{フイスト}のことまで知ってんのか、この人……

「んで、調子に乗っていつもは使わないような大技を使ったりしただろ？」

「ぬ……そんなのなんで分かるんだよ？」

あまりにも言われた通りなので、反発しなくなる。

「んなもん戦闘痕を見たらわかる。『韋駄天』とか『陽炎陣』と

か無駄に連発しただろ」

ぐっと詰まってしまった。

確かに『昇華』によって増幅されたエーテルを用いて、大技を使った。

「エーテルの増幅つてのは便利だが、増幅されたエーテルをお前は扱いきれてない。だから、技にキレが無くなるんだ。エーテルに振り回されて、技の本来の姿を逸脱している。いつも言ってるだろ」。技は適切な場で、適切な時に出せつて」

全くその通りだ、と感じた。

あの時のことを思い出し、実感する。

「使うなと言ってるんじゃないぞ。使いこなせと言ってるんだ。じゃないと次、奴に会った時に勝てんぞ」

「はい………つて、あれ、次？デュラハン生きてるのか？」

「生きてるけど、なんで？」

いやそりゃ、あんたがここにいるんだから

「いや、てつきりおっさんが始末したもんだと」

「いやいや、お前がリベンジするために逃がしたんだぜ」

おっさんは感謝しろって感じで胸を張った。

その言葉に違和感を覚えた。

おっさんってそんな気遣いをするタイプだったか？

殺すと決めたらばつちり殺すタイプだ

疑いの目でおっさんを見る。

じーーーーー

「な、なんだよその目は？」

「で……本当は？」

「あー……ほんとはちょっと殺しきれなかったというか……先に武器壊されちゃって、マズイなーと思つて、『お前は殺さない、感謝しな、キラーン』とかハツタリかけたら逃げてくれた」
なんじゃそら。

「いや、だって魔剣を五本持つてる奴相手に、素手はちょっとキツイでしょ？」

いや、聞かれても。

実はやればできたんじゃないの？

「できなくはないけど、しんどいだろー」

え………できんのか……このおっさんほんとキモイな。

「あれ、すごーいとか、さすがーとかないの？ほめてほめてー」

おいまじでキモイぞ中年オヤジ。

~~~~~

コンコンとノックの音。

「どーぞー」

僕が返事をする、女の人が入ってきた。

大きくて白い翼を背中に持つ、金髪の女性だ。

金髪は腰のあたりまであり、さながらほんとの天使のようだ。

たしか、大陸の西側に多くいる有翼人エンジェルという種族だ

僕の視線に気がつく、ニコニコと笑顔になり近づいてきた。

「よかったー。もう起きられるんですねー」

誰だろこの人？

それにしても……

僕の視線は女性のある一部分で固定された。

胸だ。とても、すばらしい大きさ……巨いや爆……

歩くたびに揺れる光景は、すばら……はっ!?

横を見るとおっさんも僕と同じところを見ている。

いかん！こんなエロオヤジと同じ行動をしては！

視線を強引に外す

有翼人エンジェルは背中に大きな羽がある。

そのため服装は、背中が開いていて、首からつりさげるような服を着ている。

その服装が女性のスタイルの良さを強調している。接近してきたことと思わず

「でけえ……」

「はい？」

「いえっ！！なんでもありません！！」

おもわず口に出してしまった。

おっさんを見ると、こちらを見てニヤニヤしている。くっ……何となく負けた気分だ。

で、このスタイル抜群の女性は誰だ？

「自己紹介がまだでしたねー。私、ノーラ ローランと申します。よろしくー」

若干、間延びした口調で自己紹介された。

「は、はいよろしく……ユウです」

にこやかに手を差し出してきたので、握手する。しっとりとした柔らかい手だった。

「ユウ、その人に感謝しとけよ。お前の治療はノーラが行った。

お前が生きてられんのもこの人のおかげだ」

「おーげさですよー、凶さん」

「ほんつとに、ありがとつございました!」

ベットの上で土下座してみた。

「そこまでしなくていいですよ」

あわてた姿がまたかわいらしい。

ノーラさんは診察を始める。

空中に魔方阵が出現し、僕の体を精査しているようだ。

ノーラさんは医者なのかな？

「んー、本職は違うけどねー」

「本職？」

「うん。本職は空戦詠唱師エリアルキャスターつてのかな」

空戦・・・まあ、有翼人だから当然か

それにしても、その大きな胸は空戦には邪魔ではないですか？その  
・空力的な問題で  
と疑問を持ったが、当然口には出さない。

「うん。ばつちり健康体だねー。さすが異界人。回復が早いねー。」

もう歩くこともできる?」

僕はベットから降りてみる。

ちよつとふらついたが、特に異常は感じられない。

むしろ快調だ。体が軽い。

今はとにかく腹が減った。

何か食いたいな。

「それじゃあ食堂に行こー。たぶんセラちゃんたちもいるはずだから」

というわけで食堂へと向かうこととなった。

~~~~~

おっさんを伴って食堂に来た。

食堂は、南国の雰囲気を感じさせる天井の大型扇風機が見える広い空間だった。

食欲を誘ういい匂いがする。

人はまばらだが、奥が少し騒がしい。

「ルーリア! デートはどこに行きたいんだい?」

「私は行くとは、一言も言ってますん! ! そもそも今、食事中です。静かにしてください殿下」

「じゃあ、セラちゃん！僕と一緒に楽しい観光でもどうだい？長いことここにいるから、案内できるよ！」

「……………仮にも狙われてる身なんですから、じっとしててください」

セラとルーリア、そしてさっきからやたらと二人に声をかけている男がテーブルを囲んでいる。
なんだあのチャライ系の男は…………

まあ声かけてみよ。

「セラ、ルーリア、おはよ……………っておはようは変か？こんにちちは？今何時だ」

セラとルーリアがこちらを向いて固まった。

あれ？どうした？

そして、急に椅子を吹き飛ばす勢いで二人同時に立ち上がり、こちらにダッシュで近づいてきた。

「もう大丈夫なのか！？」

「もう大丈夫なんですの！？」

わあ……………そんなに驚かなくても。
近い近い…………

「まあ驚くのも、無理ないわな。お前一週間ぶっ倒れてたんだからな。」

驚いている僕の隣で、けらけら笑いながらおっさんが言った。
体が快調すぎて忘れてたけど、そーいえば一週間も倒れてたんだ

「まったく・・・けろつとした顔で出てきて・・・心配したんだぞ・・・このボケ、あほ、女の敵」

セラが若干涙声で言った。

この際暴言は聞き流す・・・お、女の敵？

「あー・・・ごめん。心配掛けた」

「うるさい、ボケ・・・」

目元を服の裾でゴシゴシしながらセラが言った。
涙ぐんでしまったことが恥ずかしかったようだ。

「やあ、君がユウ君だね。」

急に話しに入ってきたチャライ系。

「えーと・・・どちらさま？」

「よくぞ聞いてくれた！！ここしばらくの逃亡生活で自己紹介する機会がなくなって、残念に思っていたところなんだ！！僕はこの大陸で最も美しく、最も高貴な存在であり、・・・」

意味のわからん華麗な身振り手振りで動き回るチャラ男

「この方はシグルド帝国皇太子ラブライフ Rロイ シグルド殿下になります」

ルーリアがチャラ男の自己紹介をぶつちぎって言った。

「ひどい！ルーリア、私の楽しみを奪うなんてひどい」

わぁー・・・テンション高いなこの人。

~~~~~

皇太子がなんでこんなところにいるの？という当然の疑問に

「亡命中だからだよ。今や帝国は龍宮天次郎と、彼の傀儡となつた父上が支配しているからね。僕の居場所は無かつたのさ。だから今は亡霊騎士団やこの都市の人々に助けてもらっている。」

皇太子は特に悲観する様子もなく言った。

この人は見かけ以上に多くの苦難をくぐりぬけてきているのだろう。

「わりいな・・・皇太子のぼつちゃん。俺の弟が迷惑かける」

おっさんが申し訳なさそうに言った。

「そんな顔しないでくれ、凶一郎。いや、今はガウス ランドールと名乗っているんだっただか。僕はそれほど悲観していないよ。ガウス、君やここにいるセラやルーリア、それに異界の戦鬼たる彼が僕の味方となってくれている。その事実だけで大きな希望が持てるさ」

そう言って穏やかな表情でおっさんを見、僕を見た。  
その姿はさつきまで騒いでいたチャラ男とは別人のようだ。

「改めて、よろしく。異界の戦鬼よ。君の存在は大きな希望だ。」  
そう言って手を差し出した。

「そこまで期待されても困るんだけど……まあ戦争を止める  
のには協力するさ」

あまりにも期待されるその言葉に恥ずかしくなり、ぶっきらぼうな  
口調で言ってしまった。

「それで充分だ」

そして、しっかりと握手を交わした。

## 第47話：新たな力へ

うちのパーティーナンバーワン大食いセラとためを張るくらいの飯を食った。

「なかなかやるな、ユウ」

「もう食べません……」

濃い味付けの肉料理が多く、かなり満足できた。

セラはまだまだいける様子だが、目の前には10枚以上の皿が積みれている。

僕はもう満腹だ

皇太子は僕らから離れたところで護衛であるひげの強面のおじさんと僕のボンクラ師匠とで、なにやら真剣な表情で密談している。

食後の休憩の間、ルーリアからこれまでのいきさつを聞いた。

「ふーん、亡霊騎士団のメンツがねえ……世の中狭いもんだなー。セラの師匠やら、ルーリアの親父さん、僕の師匠とかつながりがあったんだなー……」

思わず感心してしまう。

これは偶然なのか、それとも何かの導きなのか……そんなことを考え、ぼっーっと椅子に座っていると

「あーっ!」

という叫び声が食堂の入口から聞こえた。

入口には小柄な少女と軽装の男前が立っていた。  
チコとアルだ。

「ユーーーーウさーーーーーん！」

チコが助走をつけて僕の胸に飛び込んで・・・いや、腹にヘッドバツドをかました。

「ごふう・・・チコ・・・中身が出ちゃっよ」

さっき食ったものが全部出そうだった

「ご無事でなによりですう・・・じんばいじだんでじゅよ〜」

最後のほうは、涙と鼻水でぐちゅぐちゅになりつつ言ったので、めちゃくちゃだ。

チコの後をアルがゆっくりと歩いて近づいてきた。

「よっ・・・無事で何より」

「ああ・・・悪い。心配掛けたな」

「別に俺は心配してねーよ」

またまたー心配してたくせにー

「してねーよ・・・」

まるでツンデレのようである。男がしてもキモイだけ

二人とも無事でよかった。

ふと何か後ろに気配を感じたような気がする

「ん？・・・うわあ!？」

後ろにはいつの間にか小柄な少女が立っていた。

背丈はチコよりはあるが、中学生程度の年齢にしか見えない。

和風な服装、いわゆる忍び装束的なものを着ている。

そして目を引くのが、短めの黒髪の中にある耳だ。

犬耳？どうやら人狼族ワルフォンのようだ。

しかし、こんな近くまでこられるまで気づかなかったのは驚きだ。  
気配の消し方が尋常ではない。

「こんにちは」

小さな声であいさつされた。

「はあ・・・こんにちは」

「犬上いぬがみ レン」

「ん・・・？あ、名前ね。僕はユウ、よろしく」

「ん」

な、なんだこのなつかない猫みたいな少女はいや、人狼だからなつかない狼？

「あ、レンさん。ユウさんにあいさつにきたんです？」

僕の服でしつかりと涙と鼻水を拭いたチコがいった。後で着替えよ……

チコの言葉にコクコクとレンがうなずいた

「ユウさん。レンさんが私達を助けてくれたんです！！」

へえー……こんな小さな子が……

「そっか。ありがとうな。僕の仲間、助けてくれて」

そう言いつつ、頭をなでてみる。

さらさらとした髪感触が気持ちいい。

レンは一切表情に変化を起こしていないので、どう感じているのかわからない。

怒ってるの？

「ユウさん、レンさんは喜んでます」

チコがそう言ってレンの後ろを指差した。

黒い毛のふさふさ尻尾がパタパタと揺れている。

家の近所に住んでいた友人の飼い犬を思い出した。

あー喜んでるときこんな感じだったかな。

「よう、レン来たか」

「うん、来た」

それまで皇太子やらと話していたおっさんがレンを見つけ声をかけた。

「来たってなんか約束してたの？」

「ああ、まあな。ユウ着替えて、外に出る」

「へ？着替えるって」

「模擬戦をする。準備しろ。お前にイイこと教えてやる」

おっさんはにやりと笑った。

この2年間何度も見た、師匠としての顔だ。

~~~~~

「ちょっと、ちょっと・・・ユウさんは病み上がりですよ」

「異界人に病み上がりもクソもあるか。あいつだってそうだったろうが。それに時間がない。」

むーっとノーラさんは不満そうに黙りこんだ。

ここは鉾山都市ザガルバフの一角、訓練場だ。
この都市の砂狼族サンドウルブズの戦士たちが訓練を行う場所だ。

砂を武器とする砂狼族のため、訓練場は砂地と岩場が多い。

いきなりの模擬戦ということで、僕を看護していたノーラさんが異議を訴えたのだが、おっさんにあっさりと却下されていた。

あいつって誰だろ？

と思いつつ、自分の装備を再確認する。

戦闘用の黒い軽装甲服と左腰に刀『銀月華』、太ももに付けてある革製ホルダーには投擲用のダガー！。

手にはエーテルを状態変換する簡易詠唱杖搭載の格闘グローブ。
すべてチコお手製のオーダーメイド一点物だ。

おっさんがこちらを向き、厳しい口調で言う

「ユウ、今回はレンとやってもらう。手加減はなしだ。なめた態度でやってると、一瞬で終わるぞ。」

「はい。あのさ、模擬戦構わないんだけど、なんでこんなにいきなりなんだ？」

「さっき言ったろ。時間がない。また俺は出張だ。」

出張？

どっかいくのか？

「まあな。そんなわけだから、急ぎでいろいろ教えてやる。」

それはありがたい。

相手はレンか・・・僕はレンが戦っているところを直接見たことがない。

多少、チコから聞いたがあまり参考にならなかった。

だって・・・

「ヒュってあらわれて、シュパパパパッと攻撃して、ビュババと戦ってましたです！」

・・・うん、わからない。

でも必死で説明する姿がかわいかったので許す！！

レンはいわゆる忍び装束的な服装で、腰の後ろに忍者刀をつけている。

忍びと呼ばれていることと、パツと見ての武装から、完全なスピート型。

手数と意表をつく攻撃で攻めてくるはず。

「準備はいいか」

「いつでも」

「うん」

僕は腰を落とし、刀の柄に手を置く。

対してレンはそのまま直立態勢で構えるそぶりを見せない。

相手の手の内が読めない以上、様子を見たほうがいいのかもしいれないが、腹の内を読み合うのは嫌いだ。

先手をうつ！！

「それでは………はじめ!」

居合の要領で突進攻撃をしかけ………!?

ギインッ!!

ヒヤリとした。

とっさに刀を抜く動作を中断し、納刀状態のままの刀で首筋に向かうはずだった刃を受け止めた。

速い!?

尋常じゃない。

受け止めた勢いで後退しつつ抜刀。

また背筋が凍るような感覚。

なんだ!?

すでに振り上げられているレンの忍者刀を受け止める。

「くっ………なんだ!」

さっきからレンの動きは速いだけじゃない。いつの間にかレンが移動している。

捉えきれていないわけじゃない。

何と言えいいのか……まるで何かずらされている様な感覚。

何合か打ち合い、レンがこちらの攻撃を受け止めた勢いを利用して後ろに下がる。

この打ち合いの間にも、何度かヒヤリとする攻撃があった。

「どうだユウ。なんか気になることでもあるか」

「いや、なんか、わからんけど・・・」

おっさんの質問に要領を得ない返答をしてしまう。

「何度か気づかないうちに、攻撃されてただろ？」

そうだ。気づいたらレンの忍者刀が迫ってきているので、何度かビツクリした。

「これはな、『錯線』って技だ。簡単に言うとタイミングを故意にずらすだけなんだけどな。」

タイミングをずらす？

どういふこと？

「お前に限らず、人間だれしも相手の動きを予測して動いている。この腕の振りならこれぐらいの速度でパンチが来る、この歩幅ならこれぐらいの速さで近づいてくる、ってな感じだな。これは己が意識するまでもなく行っているものだ。だから、そのタイミングをずらすとどうなる？」

予測がはずれる。
なるほど。

「ユウ、今日からお前はレンに毎日この『錯線』を見せてもらえ。そしてできるようになれ」

「えーっと思えるだけでか・・・できるかなあ・・・おっさんが教えたかった技ってこれのこと？」

「ん？あー、まあ、これはついでだ。」

「ついで？どついでついで？」

「レン。んじゃあ、悪いが頼んだぞ。」

「ん。頼まれた」

そしておっさんはふらつと訓練場から出て行った。

こうして、訓練が始まった。

第48話：神の視界

鉦山都市ザガルバフ。エレメント鉦石が多く産出される、世界有数の鉦山都市。

砂狼族が治めるこの地は、帝国領内であるにも関わらず、自治都市として機能している。

帝国が何故、自治を許すのかにはいくつか理由がある。

1つは歴史的なもの。前大戦はこのザガルバフに帝国が進軍したことが引き金となった。

2つ目は砂狼族のエレメント鉦石加工技術だ。ドワーフ並のその加工技術は、帝国にとって欠かせぬものであった。

3つ目は、単純に帝国に攻め落とせなかつただけである。これまでの歴史上、ザガルバフは1度しか帝国にその領地に足を踏み入れさせていない。

それは、ザガルバフを覆う砂漠地帯とザガルバフ鉦山という天然の城塞があつたからだ。

これは生半可な戦力では突破できない。

そう、生半可な戦力では……

~~~~~

セラとルーリアは、訓練場が見渡せる休憩施設のテラスからユウトレンの訓練を見ていた。

この訓練も今日で3日目だ。

「もう3日目か……あいつ大丈夫なのか……？」

「あの様子ですと、むしろ体調がいいように見えますわね。」

そうなのだ。

ユウの訓練の様子を見てみると、扱うエーテルの量も増えているし、動きも以前より速くなっているように感じる。

そのユウを圧倒しているレンという少女は、相当の使い手なのだろう。

今もレンは何かをユウに投げつけているが、ユウは回避できていない。

ユウは訓練に励んでいる。体調も良い。何も文句はないそれでもセラは不満だった。

なぜかはよく自分でもわからないが、不満である。

「最近かまってくれないですものね、ユウ」

「べ、別にかまってほしいなんて思ってないぞ！」

「ふーん、そう」

そう言つてルーリアはクスクス笑った。

ぬう……

確かにユウは最近訓練が多い。

そしてセラ自身も最近は、姉弟子であるミス F・D・ガイエ下リコニックアーツンから龍式拳殺術の訓練を受けている。

そのためここ数日は、挨拶ぐらいでちゃんと会話していない。

「ただ、話しておきたいことがあるだけだ」

ローグ。

ローグ S・D・ハイネル。

現在の銀龍宗主である私の叔父の右腕である男だ。

つまりは、銀龍一族が戦争を引き起こそうとしている者たちと、協力関係にあるということ。

「私の叔父は侵略派のトップだからな。協力していても不思議じゃない。」

「侵略派？どういう意味ですか？」

「龍族は基本的に他種族には干渉しないという考えの保守派と、そういった考えを捨てて、外へ侵略しようとする考えを持つ者たちがいる。侵略派はその名の通り後者にあたる。」

「ふーん……どこの世界にも過激な人はいるんですね」

そして、侵略派の者たちにとって私は邪魔な存在だ。

前銀龍宗主の娘であり、そして保守派の最大権力である現金龍宗主の息子ピート G・D・レイールと婚約関係にある。

「は？こ、婚約？なんですか、それは？」

ルーリアは啞然としている。

「政略結婚というやつだ。銀龍の厄介者でも金龍と縁戚関係を結べれば役に立つとも思われたんだろ」

「そんな知らない人との結婚、わたくしが許しませんわよ!!」

ルーリアは真つ赤になって怒っている。心配してくれているのは分かるので嬉しいのだが・・・

「な、なんだ急に？君は私の親か？」

「従姉ですわ!!」

いや、それはわかってているが。

それに別に知らない相手というわけではない。

ピートは私の数少ない友人の一人である。悪い奴ではない。

「じゃあ結婚してもいいと思っっているんですの？」

「いや、そもそも私は龍族の国から逃げ出してきたんだ。もう関係ないさ」

とにかくこの戦いに龍族がかかわっているなら、同じ龍族として止めなければならぬと思う。

母を見つめ、父上の遺言を渡すという旅の目的に一つやるべきことが増えた。

私がローグを、叔父上の暴走を止める。

きつともういない父上もそれを望むはずだから。

~~~~~

見ろ、観ろ、視ろ。

もっとよくミロ。

「視て覚える」

訓練の時、よくおっさんに言われた。

あれはどついつ意図があつたのか……

~~~~~

棒手裏剣というものがある。

簡単に言うと先の尖った金属の棒だ。

これは投げられる方から見るとかなり厄介である。

投げられる方から見ると、飛んでくる棒手裏剣はただの点にしか見えない。

避けるにしても、叩き落とすにしてもかなり技術が必要となる。

その上……

ヒュッ

黒い点が接近する。

首をひねる。頬を浅く裂き、棒手裏剣が通過した。

続けて左足を狙うもう一本。

それを回避すべく左足をひく。

回避……したはずの棒手裏剣が左太股に突き刺さった。

「ガツ……!?!?」

『錯線』だ。

予測錯誤により、避けたと勘違いさせられた。ただでさえ避けにくい棒手裏剣に『錯線』まで使われると、もうどうにもできない。

訓練はレンの投擲する手裏剣を、叩き落とすか回避、後に接近しレ  
ンに一撃を加える、というものだ。

レンは無表情に次々と棒手裏剣を投擲する。

その一つ一つに『錯線』が使われており、軌道、速度が読みきれない。

左足の痛覚をエーテルの身体機能操作によって抑え込み、次の一本を見る。

捉えていたはずの棒手裏剣が掻き消えた。

「グアツ……」

次は右肩に突き刺さった。

もうすでに僕の体から5本の棒が生えている。  
たまらず片膝をついた。

「つう……いてえ……」

「もう終わり?」

いつの間にか近くまで来ていたレンに言われた。  
突き刺さった棒手裏剣を無理やり引き抜く。

「ぐっ……だあっ!!」

痛覚を抑え込んでいてもこの感触は気持ち悪い。

カランと音を立てて血がついた棒手裏剣が地面に落ちる

「くそっ……ぜんぜん見えない。見て覚えるなんて無理だぞ……  
なあレン、なんかコツとかないの？」

「ないことはない。でも教えない。」

えー!?

なんで? 教えてよ!!

もう訓練3日目だが、この技を少しも見切ることができない。  
レンの投げる棒手裏剣も5本中1本避けられればいい方だ。

「凶一郎がダメって言った」

あ・の・お・や・じい……

どんだけ嫌がらせなんだ!!

「ユウ、あなたならできるはず」

「そんな断言されてもなあー」

「あなたは凶一郎の弟子。だったら同じ特性をもっているはず。これは『錯線』を覚えるだけの訓練ではない。この訓練の意味をもっと考えて」

え？

どういう意味だ。特性？

訓練の意味？

わからない・・・僕にはレンが何を言いたいのかわからない。

「そろそろ本気をだす。次は殺す気でやるから」

え・・・？

本気ですか？

レンは体をぐっ縮めて唸り声をあげる。

短めの黒髪が逆立ち、爪が伸び、犬歯が若干伸びる。

「グウウウ・・・ガアッ！！」

人狼化だ。

男性型は完全な人狼になるが、女性型は変化はそんなにないが身体能力が飛躍的に上がる。

「この状態では手加減はできないから」

その目は本気だった。

レンが目の前から掻き消えた。

気づいた時には、僕から10メートルほど離れた地点にいる。

「『錯線』と『韋駄天』の複合技、『不知火』。これができるようになれば、まずは合格」

これか!!  
おっさんがいつも使っていた移動術は!!  
高速移動術『韋駄天』を『錯線』でさらに予測錯誤させて、まるで魔法のように移動する。

僕はもつと強くないといけない。  
あいつに、あの魔剣使いに負けないように

~~~~~

ドンッ!!

レンの人狼化した状態での蹴りがユウのわき腹に直撃した。

「ゲゴツ……!!?」

ユウは10メートルほど吹き飛び、地面を転がる。
レンは追撃する。

転がっているユウを蹴り上げ、浮かす。
同時に自身も跳ぶ

鳳流忍体術 『旋風』

体のひねりを利かせての連脚。
レンはコマのように回転しつつ蹴りを放つ。

ユウはなんとか防御はしているが……

(まだ見切れていないみたい)

レンは攻撃を止めることなく思考した。

攻撃のいくつかに『錯線』を用いている。

まだ二人とも空中にいる。

ユウが反撃に刀を振り上げている。

その振りよりも速く、左腕をとり関節を決め、背負い投げに入る。

鳳流忍体術 『迅雷』

脳天から地面に叩き落とす。

バカッ!!

地面が陥没し、土煙が上がる。

「ゲ……ア……」

ユウは頭部からおびただしい量の血を流している。

意識が飛びかけているため、目が虚ろだ。

まだ、まだ足りない。

もっと、もっと傷めつけなければ……

~~~~~

ミリス F・D・ガイエンはセラを探して街中を歩いていた。  
もうすぐ訓練の時間だ。

ミリスの姿はいつも通りメイド姿。

ザガルバフの人々にはあまり馴染みのない衣装なので、不思議そうに見ている者が何人もいる。

ミリスはその視線ををものともしていないが……

セラのエーテルの匂いをたどってくると訓練場付近の休憩施設にたどりついた。

休憩施設の中はひんやりとしており、訓練を助けるために飲み物などがある。

中には管理者である男性が一人いたが、部屋の端っこでうずくまっている。

テラスの方からビリビリとエーテルの波動を感じる。

戦闘状態に近い圧力を感じるエーテルだ。

どうやら先ほどの男はこの圧にまいってしまっているようだ。

「ちょっと、セラ！落ち着きなさい！」

「何故止める！？あれは訓練といえどやりすぎだ！！」

焦りの声と怒りの声。

テラスに出てみるとセラがテラスの柵握りつぶし今にも飛び出していそうな状態であった。

ルーリアは止めるようにセラの服をつかんでいる。

訓練場を見るとレンに異界人がボコボコにされている。  
レンの攻撃は時々、霞んで見える。

おそらく鳳流忍体術の秘伝『錯線』を使っている。  
並みの者には見切れない。

異界人も見切れていない。今のところは・・・

異界人は順応性が極めて高いことは、以前の異界人を見て知っている。  
る。

前回の異界人であった彼女は、その順応性からあらゆる技、秘伝や  
奥義と呼ばれているものであっても教えられればすべて会得した。

そして最強と呼ばれていた竜宮凶一郎を唯一打ち負かした。  
すさまじいカリスマを持って亡霊騎士団初代団長となった。  
ファンタムナイッ

彼女のことがあるから凶一郎は、この異界人をかわいがっているの  
だろう。

自分の技を教え、戦いから遠ざけようとしたのだろう。  
彼女の死は凶一郎のトラウマになっているはずだから。

今はそのことはいい。セラを止めるためミスは背後からセラの膝  
裏を蹴った。

「うわっ!?!」

いきなりの衝撃でセラは尻もちをついた。

「お嬢様、訓練の時間です」

こかしたことなど無かったかのようにミリスは声をかける。

「な、何だミリスか……ってそんなことよりも……」

「そんなことですか？私との訓練がそんなこと……私は悲しい」

「そんな無表情で悲しいと言われても、信じられん。とにかく今はこの訓練をとめないと……」

「お嬢様」

ミリスの少し口調が強くなった。

「な、なんだ？」

「お嬢様は知らないのです。異界人の怖さを……。ほら」

ミリスが訓練場を指差す。

セラは大慌てで立ち上がる。

「あ……」

~~~~~

頭が痛い。

さっきの投げ技が効いた。

レンの打撃と爪による斬撃で軽装甲服はところどころ破れ、ぼろぼろだ。

装甲板も吹き飛んでしまっている。

どうにか転がって距離をとる。

「ハア……ハア……ゲエ……」

息が苦しい。

体中が痛い。

右手の刀が重い。

頭部からの血が流れて右目が見えにくい。

ダメだ……まったく見切れない。

『錯線』を見切ることができない。

レンの姿がまた掻き消えた。

『不知火』だ。

すでに刀の間合いの内側。

人狼化によって強化された膂力による掌底が腹部に叩きこまれる。

「ゲフツ!？」

分かっている。くるのは分かっているのに捌けない。

たまらず膝をつくど、顎めがけて蹴りが来た。

ガッ!!

脳が揺れる。

体が中に浮く。
地面に仰向けに倒れた。
もう・・・動けない。

レンは空中で一回転し踵を斧のように振り下ろそうとしている。

ああ・・・ダメなのか。

結局僕は何もできない。セラのお母さんを見つけることも、元の世界に帰ることも・・・

『見る』

おっさんの言葉。どういうことなんだよ・・・
最後までその意味が分から・・・

あ？

エーテルの流れ。それはすべての力の流れ。
意志の流れ。

エーテルの粒子一つ一つにあらゆるものが詰まっている。

見る。

レンの体内のエーテル。技を使うために体内で練り上げられたエーテル。その流れ。

ああ・・・そうか。僕は知っている。この世界に来てはじめてのころは、この流れを見ていた。
いつの間にか忘れていた・・・

第49話：虚構の技

鳳流忍体術 『斧嶽』ふがく

前方に回転し、踵により両断する。
首を狙う。

直撃すれば胴と首が離れるだろう。

イブの眷属といえど首を切り落とされて生きてはいない。
殺す。その意思を込めて踵を振り下ろす。

その瞬間、レンは見た。

ユウの目が紅く輝くのを。

ぞっとした。

体に寒気が伝播する。

だが、攻撃は止まらない。

ユウは地面を転がって紙一重で避けた。

ドンッ

踵が地面を砕く。

ユウは逆手に持ちかえた刀で首筋を狙ってきた。
のけぞって避ける。

ヒュッ

かすった。少し血が出る。

ユウの攻撃が当たったのはこれが初めてだ。

(今のは確実に避けたはず。ずらされた?)

のけぞった勢いそのままバック転。

ユウは刀を地面に突き刺し、振りぬいた。

地面を衝撃波が伝う。

これは竜宮流刀剣術『地雷刃』

やはり凶一郎は竜宮の技も教えている。

横っ跳びで攻撃の軸線を外す。

!?

ユウが近い!?

この速度とタイミング・・・『不知火』を使った!?

刀を袈裟切りに振り下ろしてくる。

刀身が一瞬霞んだ。

ずれた!

やはりユウはすでに『錯線』見取っている。

その顔は無表情で何を考えているのか読ませない。

瞳は相変わらず紅く輝いている。

惑わしを見通し、刀を軌道を正確に読む。

『錯線』を使うからにはその回避法も知っている。

『錯線』は『錯線』によつて打ち破る。

ぎりぎりで回避。

そのまま刀を持つ右手を掴みひねり上げる

ユウの手から刀がこぼれ落ちた。

刀の落ちた先にはユウの足があつた。

ヒュッ

「な!?!?.....クッ」

ユウは刀の柄を足に乗せるようにして、こちらに蹴り上げてきた。

すんでのところまで体をひねったが、下から突き出された刀身にわき腹をえぐられた。

刀はわざと落としたのか!?

だが、刀は後方に飛んで行った。

これで無手対無手。

まだ、私の有利は変わらない。

~~~~~

刀を蹴り飛ばしてしまった。  
もう無手で戦うしかない。

意識はクリアだ。

レンが右腕を掴もうとする。

こちらに伸びてくる右腕が霞む。

『錯線』によるタイミング外し。

こちらも『錯線』を使い、強制的にずれを修正。

捌く。

こちらが手を伸ばす。  
捌かれる。

ガガガガガッ！！

一瞬のうちにこのやり取りが数十回。

いける。見えている。

もうそちらのペースにはさせない！

かつての記憶を思い出す。

セラと魔物と初めて戦った時のこと。  
セラの動き。使った技を思い出し、再現する。  
あの時、あの瞬間を己のエーテルで模倣する。

『技喰らい』でセラの龍式拳殺術を吸収、再現。

コピードラゴン  
虚構龍技 剛竜翔霊打

僕は龍族ではない。だから龍族の技を使ったところで、劣化した威力でしかない。  
だが、それをうまいタイミングで使えばそれは相応の威力を発揮する。

踏み込みの足が地面を踏みぬく。  
拳を打ち上げる。螺旋の動きをするエーテルをまといアップー。

空気を切り裂き、レンの顎に向け拳が弾丸のごとく発射される。

レンは首を捻り、拳の打点から逃げる。  
技の余波が頬を削るり、レンのきれいな顔から血霧がたつ  
大したダメージではない。

だがこれでは終わらない！！

ルーリアの翼<sup>ウィンドウォーカー</sup>脚甲を思い出す。  
エーテル反射による加速装置。  
加速する蹴りを再現する。

『技喰らい』でルーリアの蹴り技を吸収、再現。

コピージェアナイト  
虚構空戦技 豪嵐脚

足裏から体内エーテルを射出。  
蹴りを加速させる。

側頭部を狙う高速のハイキック。

さらに『錯線』による惑わしを織り交ぜる。

レンは見切れていない

僕の蹴りを捉えきれていない

バキヤツ！！

レンの側頭部に直撃した。

レンの体は真横に吹き飛び、訓練場にあつた岩に衝突。  
地面に倒れこんだ。

勝った……

はは……何とかなつたな……

「おめでとう、ユウ。あなたはまた一つ階段をのぼつたわ。」

イヴ。

いつの間にか僕の横に白い少女が現れていた。

「かい・・・だん・・・？」

意識が遠のく。

地面に仰向けに倒れこんだ。

「そう。あなたはもう自分の意志だけで昇華<sup>フースト</sup>ができるはず。今はじめて自身のエーテルを完全に支配下においたんだよ。」

意識が徐々に暗闇に引きずられていく感覚を感じながらイヴの言葉を聞く。

その喜びにあふれた声を・・・

「今のあなたならアダムに対抗できる。これでやっと本来の目的を達成できる・・・」

~~~~~

な、なんだ・・・今のは・・・

結果としてはユウが勝った。

今ユウが使った技は、あれはまさか・・・

「これが『技喰らい』の恐ろしさです、お嬢様。」

「じゃあ、あれはやっぱり『剛式 竜翔拳』を盗んだのか？」

信じられない。

確かにユウ何度か手合わせをした時、この技を使ったかもしれない。

「その通りです。かつて見た技を模倣し、己のものとする、『技喰らい』の真の力。それゆえにあらゆる気闘士ファイターから疎まれる存在」

疎まれる・・・？

「当然です。始祖達が何十年、何百年の長きにわたり苦勞して生み出してきた技を、たった数回見られただけで、奪われてしまう。これほど屈辱的なことはありません。」

なるほど。たしかに苦勞して覚えた技をかすめ取れるというのは、気分が悪いだろう。

「さて、それでは我々も訓練を開始します。いきますよお嬢様」

「え・・・？いや、ユウたちを医務室に連れて行くのかと・・・」

「その必要はありません。この訓練場の管理者が、ちゃんとしてくれるはずですよ」

そう言って、ミスはセラの首辺りを掴んで引きずって連れて行った。

「ミスっ、ちょ、ちょっと待て！自分で歩くから！ルーリアじゃあ、ユウの様子見といってくれ」

「ええ、分かりましたわ」

ルーリアはそう言って引きずられていくセラを見送った。

「ふう……それにしても……」

ルーリアは過去に『技喰らい』の話聞いたことがあるが、実際に戦っている姿を見るのは初めてだ。

話を聞いたときにも思ったことだが、異常さ感じてしまう。竜宮凶一郎はかろうじて納得できる。

だが、ユウのあの強さはなんだ？

ユウはこの世界にきてまだ数年と聞いた。

凶一郎さんを師事していたとしても、たった数年であのレベルに到達するのは不自然だ。

異界人だからなのか？それとも素質があつたのか？
素質だけで到達できるレベルとは思えないが……

何か別の、何か大きな力が、ユウをあのレベルに到達させているように思える。

異界人を『イヴの眷族』と呼ぶ。

イヴとは何者なのか。その姿は数回ほど見たことがある。

ユウのそばに寄り添うように浮かぶ半透明の人影。
白い少女。

その正体は分からない。

彼女はユウに何を望んでいるのだろうか？

~~~~~

帝国ラファエロ機関 本部  
機関長室

「そろそろやるか……」

機関長の革張りゴージャス椅子に座り、くるくると回転しながらいきなり竜宮天次郎はそう言った。

「やる……とは？」

この上官が突然話を切り出すのはいつものことだ。デュラハンも冷静に聞き返す。

「そろそろザガルバフをおとす」

「ザガルバフを？あの要塞都市をどうやって？」

歴史上一度として陥落したことがない砂漠と鉾山に囲まれた難攻不落の都市。

あそこには亡霊騎士団が潜伏しているはずだ。

「例の制御術式が完成したのよ。共和国との戦いの前にデータを取っておきたいの」

白衣をきた金髪の女性が部屋の入り口から言った。確かカーラという名の研究員だ。

ラファエロ機関の研究員の中でも、天次郎が特に目をかけている研究員だ。

天次郎に対する言葉使いがぞんざいであることも目立つ理由の一つだが、デュラハンとしてはもう一つこの女に対して不審に思う点がある。

この女は確実に強い。それも竜宮凶一郎クラスの化け物だ。ただの研究員ではない。

現にいつから入口にいたのかデュラハンにも分からなかった。

デュラハンの眉がピクリとあがる。

彼女の研究は龍族の生態と大量破壊兵器の開発だ。例の術式が完成したということは・・・

「なるほど・・・ならば」

「ああ・・・お前の部隊も参加してもらおう。ふふ・・・この戦いは歴史に残る戦いになりそうだな」

天次郎が椅子から立ち上がり、部屋の奥へ進む。

部屋の奥は壁がガラスのように透明で、向こう側が見える。

ガラスの向こうは広大な空間だ。

そこには何か白いものが整然と並んでいる。

『魔物』

そう呼ばれている存在が何百という。

王の命令を待っている。

「さあここからだ……世界の改編を始めよう……なあ、  
アダム」

「ああ……そうだね」

竜宮天次郎とその横にたたずむ半透明の白い少年が不敵に笑った。

## 第50話：決意と役目

「いた・・・いたたたた・・・」

頭痛がする。

レンのあの投げ技・・・地面に叩きつけられたのが効いた。頭に触れてみると包帯が巻かれている。

なんか最近、怪我して運び込まれるのが多い気がする。

ここは訓練場に近い診療所のようなのだ。

しばらくボーっとしていたが、さっきの訓練を思い出し、意識がすつきりした。

神の視界

エーテルの流れとそれに込められた魂とも呼べるもの。

エーテルの記憶を読む。

そして虚構の技として再現する。

今回の訓練で改めて疑問に思った。

エーテルとは何なのか？

今回の訓練でエーテルというものが一体何なのか分からなくなった。いままでは、いわゆる気や魔力的な力だと思っていたけれどどうやら違うようだ。

あの感覚・・・他人の魂に触れる感覚。

おっさんがかつて言っていた。

「エーテルとは粒だ」

と。

「人の記憶、魂、とかいろんなものを記録した粒。それを読むことができれば、お前も俺様とタメはれるかもなあ」

ずっと昔に言われたことだ。

タメはれる、か・・・

今の自分が本当におっさんと同等の力といえるのか？

正直まだおっさんの存在は、はるか遠くであるように思える。

『錯線』を見取った時のあの感覚。

技を編み出したその人物の意志までのぞくことができたあの感覚を忘れないようにしなければ・・・

ふとベットの横に気配を感じた。

「ユウ・・・調子はどお？」

いつの間にかベットのそばに白い少女が立っていた。びっくりするくらいニコニコしている。

「ああ・・・イヴか・・・調子はまあまあ・・・ってそっちはご機嫌みたいだな？」

「んん？わかる？わかつちゃうか〜うへへへ」

わかるよ・・・そこまでにやけてたら。

「で・・・何なの？」

「え？・・・こっちのこと。気にしないで」

気にするわ。

変なの・・・

「ううっん、さて真面目な話をします。」

イヴは咳払いをして、ゆるんでいた顔をちよつと引き締めた。

「もうすぐこのザガルバフを魔物の大群が攻めます。仕組んだのは当然、竜宮天次郎。帝国の特殊部隊も参加してくるわ。ユウを叩きのめしたあいつもね。」

は・・・？

思考が停止した。魔物が攻めてくる・・・？

「な、何言つてんだ？そんなのなんでわかるんだ？」

「私は伝えるべきことは伝えたわ。ユウこの戦いを乗り越えなさい。本来の目的を遂げるためには、この程度の危機は乗り越えていかなければならない。」

イヴは笑みを浮かべたまま重要なことを言う。

その内容とイヴの表情の違いに余計に混乱する。

「ちょ、ちょっと待て。何でそんな急に・・・本来の目的だつて？何言つてんだ？」

何で急にそんな重要な話を・・・

「戦争はもう止まらない。世界の敵はもう手の届くところにいる。猶予はあと2週間ほど。」

「おい！？ちゃんと説明しろよ。意味わかんないって！」

あせった。急にこんな話をされても困る。

「ユウ、この世界に連れてきた異界人の役目をそろそろ果たしてもらうわ。じゃあ、がんばって。」

「お、おい・・・」

そう言つてイヴはうつすらとほほ笑んだ後、姿を消した。

しばらく考えがまとまらなかった。

何度かイヴを呼んだが、出てくる様子はなかった。

魔物が攻めてくるって、本当なのか？

でも、今までイヴの言葉に間違いはなかった。

そして、重要なこと・・・

イヴは本当に味方なのか？

今までずっと考えないようにしてきた。

いろんな情報を知っていることも、魔物の出現を教えてくれること

も、イヴが自分のことを『管理者』だの『神様』だの言うので、知ってて当然のことなんだろうと思っていた。いや、そう自分に言い聞かせていた。

僕をこの世界に連れてきた少女。今まで何度も助けてくれた。

でもいままでのことがもし仕組みられたものなら……？

僕がこういつた思考をしていることもイヴには筒抜けなのかもしれない。

でもそう考えられずにはいらなかった……

「えーい！悩んでいても仕様がなない！」

うじうじ悩むのは嫌いだ。

とにかくイヴの情報をあの皇太子やザガルバフの人に伝えないと……

ベットから這い出し、着せられていた薄い入院着のようなものを脱いで、置いてあった服に着替える。

どうやら僕の持ち物なかの一つのようなのだ。

着替えてから外に出てみると、ぱったりセラと出くわした。

と言うより病室に入ろうとしていたようだ。

「おっ……セラ」

「……はあ……もう大丈夫なのか？」

最初驚いた顔で僕を上から下まで見ていたが、異常がなさそうなの

を感じ取り、ため息をついた。

「えーと、なんのため息？」

「ユウは周りにどんだけ心配をかければ気が済むんだと、呆れて  
いると」

「あー……ごめん」

最近病室で目を覚ます機会が多いことは自覚している。

「おおっと、そうだ。セラ、皇太子とかはどうしてる？ちょっと  
伝えたいことがあるんだけど」

当初の目的を思い出して聞いてみる。

「ん？ラブリフ殿下なら先ほどドン　フォイスに呼ばれていたぞ」

「誰、それ？」

「ザガルバフの長だ。砂狼族の長でもある。」

「その人どこにいるの？」

この件は皇太子にもザガルバフの長にも、イヴの話伝えておかな  
ければならない。

「この首領塔の最上階だ。……ユウどうかしたのか？何を急  
いでいる？」

「え・・・？まあいろいろあつて・・・」

どう説明したらいいものか迷う。

正直に言ってもいい。

セラはイヴのことを知っている。

そこで思い至った。

どうやって皇太子とザガルバフの長にこの事を伝える？

イヴの言ったことを信用してもらえるのか？

「どうした？まだやっぱり調子が悪いんじゃないか？」

急に僕が黙り込んだので、セラが心配そうに僕の顔を覗き込んだ。碧の瞳が心配そうな色を宿している。

「いや、ちょっと衝撃的なことをイヴから聞いたんから・・・」

「私に話せ。私もユウに話したいことがあった。」

セラがずいっと近づいてきた。

一人で考えていても仕方ないか・・・

セラの話ってのも何なのか気になる。

「そうだな・・・一人で悩んでも解決しないか・・・」

~~~~~

廊下から近くにあったテラスに移動した。

テラスからはザガルバフを一望できる。

赤茶色の岩とそびえたつ山。

過酷な環境であるにもかかわらず、ザガルバフは活気に満ちている。エレメント鉱石とそれを精製する技術。そして豊富な地下水がこの活気を実現している。

「で……イヴの話っていつのは？」

「ん……ああ。それは……」

セラにすべて説明した。イヴから聞いたことをすべて。

「だからセラはすぐここを出た方がいい。戦争に巻き込まれることになる。そうなってしまったらお母さんのことも……」

「いや……私が話したかったこともそのことだ。私はこの戦いに参加する。」

「……は？なんで！？お母さん探すんだろ！？」

セラは母親を探すためここまで来たはずだ。なんで戦争に……

「この前の戦いとき、私に攻撃してきた龍族の者がいただろう？」

「ああ……いたな。銀髪の人でしょ？」

ドラゴンソング 龍声ドラゴンソングを使っていたし、雰囲気ドラゴンソングがセラに似ていた。

「あの男の狙いは私だ。そして銀龍一族は竜宮天次郎に荷担して

いる。」

「銀龍が・・・？龍族ってあんまり外部に出てこないんじゃないのか？」

それにセラを狙っている？聞き捨てならないな。

「いまの銀龍宗主は私の叔父に当る人だ。その人は銀龍の力を使い、外への侵略を望んでいる。龍族の郷では己の支配欲を満たせない人だ。だから竜宮天次郎と手を組んでいたとしても不思議じゃない。」

「じゃあなおさら戦争に参加するべきじゃないだろ！狙われてんだろ！？」

「私が銀龍の一族だからだ。死んだ父上も銀龍が世に災いをもたらすことを望みはしない。だから私が止める。そう決めた。」

セラは強い意志を秘めた瞳でこちらを見た。

無理だ。その瞳をみて、説得するのは無理だと理解した。

セラ頑固だもんなあ・・・

「はあ・・・わかった。で、なんでセラが狙われんの？」

「それは私が銀龍前宗主の娘で、銀龍とは政治的に対立関係である金龍の次期宗主と婚約関係にあるからだ・・・あ！？べ、べつに婚約といっても、だいぶ昔に会っただけだし、私は龍族の郷から抜け出てきているから無効だぞ！！」

説明の途中で顔を真っ赤にしてセラが何やら焦りだした。なにごと？

政治的な対立か・・・セラを面倒なことに巻き込みやがって。

「ふーん・・・そういうことか」

「・・・えーっと・・・それだけか？」

「え？何が？」

「ふ、ふん！別になんでもない！！」

いや、何かあるだろ。セラがなんか不機嫌になった。

「よし！だいたい事情はわかった。セラが戦争に参加するという決意も理解した。だから、戦うなどは言わない。その代わり絶対に僕がセラのことを守るよ」

「ぬ・・・え、・・・何だ急に！？ま、守るってそんなの・・・むしろ私が守ってやるっというか・・・えーと・・・何でそんなこと急に言うんだ！」

セラが顔を真っ赤にしてわめいた。

そこまで恥ずかしがられると、こっちも恥ずかしくなる。

「え、いや、なんとなく・・・」

セラのこういうかわいい反応を見るのは久しぶりの気がする。

「・・・と、とにかくイヴの言葉を伝えるときには私も同席する。ユウの言葉が間違いでないことを証明する。」

「ありがと。ま、悩むよりも進めだな。当たって砕けるだ。ダメもとで言ってみるよ。」

強い味方を得て、首領塔の最上階に向かうことにした。

くくくく

首領塔はドーナツを何個も上に重ねたような構造をしている。中央の吹き抜けを浮遊リフトに乗り、上下移動する仕組みだ。

リフトの浮遊感エレベーターに近いものがある。

最上階の大きな両開きの赤色の扉。狼を象った豪華な装飾がある。

扉の前には二人の屈強な男が2人。

「何か御用か？」

威圧感いっぱいだ。

「えーと、首領さんに話が・・・」

「現在会議中ですので、しばらくお待ちを・・・」

その時、扉が内側から開いた。

「あ、ホントだ。ユウさん起きてたんですね。」

顔を出したのは、チコだった。

「レンさんが、ユウさんとセラさんの足音がするって言ったら、当たり前でした」

部屋の中から足音を聞きとるって、すごい地獄耳だ。

「さあ、入ってください。ちょうどよかったです。お二人にも伝えるべきことを話し合っていましたので。」

そう言つてチコは、僕とセラを部屋の中に招き入れた。
伝えるべき事つて何だろう？

セラと顔を見合わせ、首をかしげる。

室内中央奥には大きな椅子があり、そこには大柄で白くなった髭をたくわえた老人。

その瞳には外見以上に力が宿っており、この都市の指導者であることを感じさせる。

その椅子の前には亡霊騎士団の面々が集まっていた。

^{エンジェル}有翼人のローラさん、犬上レンなど僕が知っている人もいるが、知らない顔ぶれも多い。

メイドさんが混じっていることを、とても問い詰めたい。

アルとチコとルーリア、ラブリフ皇太子もいる。

ほぼ全員が一斉にこちらを見た。

「あー……お邪魔でしたか？」

視線が集まりひるんでしまう。

「いや、良いタイミングだ。体は大丈夫か？」

ラブリフ皇太子が、さわやか男前フェイスで尋ねてきた。

「ええ、まあ。で、どうしたんです？みんなで集まって。」

「ああ……悪い知らせだ。」

ラブリフ皇太子は顔を引き締め言った。

「帝国が全世界にむけて宣戦布告した。」

「え……？」

イヴの言葉を思い出した。

『世界の敵は手の届くところにいる』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0872f/>

異界の旅路

2011年7月31日01時10分発行